

詭弁ですよ！ヤオヨロ
ちゃん！

名は体を表す

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

混乱してグルグル目のヤオヨロツパイは最高でおじやるな。

目次

- 週に何回してんの！ヤオヨロちゃん！
1
- 何センチですか！ヤオヨロちゃん！
10
- 男にセクハラする趣味はないですよ！
17
- テーマパークに来たみたいだぜー！
テ
ンション上がるなー！
27
- 祭りですよ！ヤオヨロちゃん！
32
- トーナメントですよ！ヤオヨロちゃん！
38
- 容赦ないですよ！ヤオヨロちゃん！
38
- だつてたまにはカッコいいところ見せたい
じゃん！
43
- 祭りは終わりですよ！ヤオヨロちゃん！
57
- 俺は一途を止めるぞージヨジョー！
71
- おつすお願いします！んで何で俺を指名
したんすか！
87
- 生存競争ですよ！ミルコさん！
99
- お泊まりですか!?ミルコさん！
107
- 初日以外は快速運転ですよ！ミルコさん
!
122

バスからの急転直下ですよ！ヤオヨロ

ちゃん！助けてー!!

フルマラソンぐらいよゆうーなんだが

!?

詫び投稿

お、怖い話？これは実際にあった話なの

ですが、ある日風呂場で意識を失ったと

思ったら次の日の朝布団で起きた。怖い

!

これは違うんですよ！ヤオヨロちゃん！

おねむです！

肝試しですよ！ヤオヨロちゃん！

180

襲撃ですよ！ヤオヨロちゃん！

ここはどこですか！

もしも詭弁くんヤオヨロちゃんがヴィラ

ンだったら

監禁生活ですよ！トガちゃん！

詭弁くんが最初から悪の道ルートだった

ら

悪の道ですよ！トガちゃん！

おい監禁生活ってなんなんだ！

平和ではないですが日常ですよ！トガ

ちゃん！

急転直下ですよ！

175

160

154

144

137

130

265

255

250

242

226

221

214

206

193

記者会見ですよ！

273

バレンタインデーですよ！ヤオヨロちゃん！

282

悪夢ですよ！

292

伝説が終わりを迎えましたよ！

302

全寮制ですよ！ヤオヨロちゃん！

310

キャラクター資料的なサムシングですよ

！モモちゃん！

317

テスト対策ですよ！みっちゃん！

328

写真撮影ですよ！とーちゃん！

339

TSしたカツちゃんをメスに墮とそうと

する話

351

あっ、はじめまして。あなたエリちゃんっていうのね。

370

雄英一のモテ男！詭弁大先生が語るモテる秘訣!!!

384

俺はチープなラブソングしか歌わない

ぞー!!

397

お正月特別編・異世界からコンニチワ！

あなた詭弁って言うのね！俺もソーナノ

！

407

お正月特別編・異世界からコンニチワ！

君の名は？『詭弁答弁です！』私達、入れ

替わってえくないッ！

425

お正月特別編・異世界からコンニチワ！
ぶっちやけタイトルのネタ切れ気味なん
だよねユルシテ！

439

お正月特別編・異世界からコンニチワ！
奇跡も魔法もあるんだよ！人喰い妖怪も
悪魔も死神も居るけど！

455

週に何回してんの！ヤオヨロちゃん！

俺の発言で放課後のクラス全体が凍りつく。

「……はい？今、なんと仰いました？」

凍りついた世界の中で一番始めに動き出したのは、俺のパートナー（会話相手のな意味で）の八百万百ちゃん。同年代と比較しておっぱいが目立つお嬢様可愛い女の子。

「だから、週に何回オナニーしてんの？」

「貴方は何を言ってますの？」

「えっ、聞こえなかつた？じゃあ大きい声で……モモちゃんはあ！週にい！何回「そういう意味ではありません!!」ぎゃふん！非暴力不服従!!」

思い切り（優しく）ビンタされて机に倒れ込む。愛が……痛い……！

「変な事言わないで下さい！あ、愛だなんて……」

「そんな!?俺とモモちゃんの仲じゃないか！互いの身体をむさぼり合うほど深い仲じゃないか!!」

「誤解を招く言い方しないでもらえませんか!」

クラスがざわめく。まさかあの副委員長がそんなぼっと出の男と爛れた仲だなんて

予想だにしなかっただろう。さつきからクラス一のオチビがすごい目で俺を睨み付けてきている。

「そんな言い方ではまるで私達が、ふ、ふ、不埒な交際をしているようじゃないですか!!」
「不埒な交際って? 具体的に教えて!」

「うるさい!」

「痛い! それでも僕はやっていない!」

本日二度目のビンタ。かの有名な宗教で右の頬を打たれたら左の頬を差し出せって言うし、まだまだセーフ。

「とにかく、私達はそんな不健全な関係ではありませんから! クラスの皆様に変な誤解を与えないで下さい!」

「そうだね! 俺達はお互い清い身体だもんね!」

「な、何か気に障る言い方ですわ……」

そう、俺達はヴァージン。

互いの身体をむさぼり合うというのも、ただ俺が昔弁当を忘れたときにヤオヨロちゃんの『個性』由来の食べ物を食ってただけだし。

……ちなみに、ヤオヨロちゃんの『個性』は自分の脂肪を様々な物質に変える事が出来る超有能個性だ。ぶっちゃけ宝石や貴金属類を産み出せば巨万の富が得られるだろ

うに。そんな『個性』なのに昼飯を忘れた俺に食わせるために『個性』を使ってくれるヤオヨロちゃんマジ天使。

ヤオヨロちゃん『個性』は脂肪を使う、そしておっぱいは脂肪。つまり俺はヤオヨロちゃんのおっぱいをお昼ごはんにしていた？なんだ俺は勝ち組じゃないか。

「うっ……何故か寒気がしますわ……」

「大丈夫かモモちゃん！裸で暖め合えば寒さを凌げるらしいぜ！」

「服を脱いで近づいてこないで下さいませんこと!？」

「えっ……じゃあ服着たまま抱きつけて？」

「どうしてそこで心底不思議そうなお顔をするんですか？」

「逆に聞くけど、服着たまま抱きつくのっておかしくないの？」

「えっ……？えっ……その……」

「服着て抱きつくなんて変態行為だよ！エッチ！」

「えっ？えっ？私が悪いのですか……？」

「深く傷つきました！責任とってください！」

「えっ、あ……、ごめん……なさい……」

「んーヤオヨロちゃんのかわいさに免じて許す！」

「ありがとうございます……？」

「ヤオモモ、良いように騙され過ぎ」

俺達の会話にジロちゃんが口を挟む。

「落ち着いてよく考えてヤオモモ。服を着たまま抱きついたらセクハラだけど、服を脱いで抱きついたらただの犯罪行為だよ?」

「……………また騙しましたわね詭弁さん!!」

「はあい!貴方だけの詭弁ですよ!ヤオヨロちゃん!」

ヤオヨロちゃんの混乱グルグル目可愛い。好き。

閑話休題。

「で!だ!よ!!モモちゃんは週に何回オナニーを——」

「ですから!アナタは!どうして!そんな!おはなししか!出来ないんですか!?!」

「痛い!痛い!往復ビンタは痛い!」

ヤオヨロちゃんの両頬が真っ赤に染まる。そして俺の両頬が真っ赤に腫れあがる。

この違いはなんだ。可愛さか。なら仕方ない。

「そんな変な話かなあ?」

「どう考えましても変でしょう!?!」

痛みでじんじんする頬を抑えながら、極力真面目な顔でヤオヨロちゃんの眼を見る

「モモちゃん。じゃあ聞くけど、友達に好きな食べ物を聞かれたら普通に答えるだろ?」

「うっ……（じつと見つめられると恥ずかしいですわ……）それは、まあ……」

「例えば友達が寝不足で、寝ようにも寝られないような不眠症に悩んでたら、寝る前にこの音楽を聴いた方がいい、この枕が寝やすくてオススメ、みたいな事を言うだろ？」

「そう、です、ね……」

「友達と普通に食欲、睡眠欲の話をするなら、最後の三大欲求の性欲のはなしだつて普通にするだろ！」

「そ、そうなんです、か……?」

「いや、んなわけ「そうだよ！それが庶民一般人の会話つてもんだよ!!」

「ジロちゃんの口を塞ぎながら大きな声を出す。余計なことを言われる前に畳み掛け
るんだよホラホラ。」

「『あの女の子可愛いよな!!』とか、『やつぱ男は顔よね!』とか話すだろう！男が数人集まれば女の子のおっぱいやお尻の話しかないし、女が数人集まれば彼氏の性癖の話しかない！違うか!？」

「そ、そうなんですか!?!」

「そんなわけ無いじゃん」

「お前バンド仲間とファックしてるだけだもん」ン”ン”ン”!!?」

「ジロちゃん、心臓に耳をぶつ刺すのは止めよう。俺、死ぬよ?」

「死ね」

「死なん!とにかく同性集えばシモ話しかしないのは天地開闢自明の理!何故ならそれが手っ取り早く自分と相手のハートをぶつけ合って仲良くなるこぬゆみゆけーしよんだからだ!」

「今噛んだ「噛んでない!」噛んだよね「噛んでない!」」

「そ、そういうことですか……」

「そうだよ!俺はもつとモモちゃんと仲良くなりたいたいんだ!互いを知っていききたいんだ!」

「詭弁さん……!」

「おい、良い話に持つていこうとすんな!ヤオモモ、コイツただの馬鹿だからね!」

「今良い雰囲気なんだから、空気読めよジロちゃん」ンンンンンン」

「いいかげんに怒るよ?」

心臓が破れそう。

「ど、とにかく、だ……仲良くなるなら、おハーブティーの話じゃなくてもつと下世話な話が良い……。そう、俺と練習しよう!」

「もう復活したし」

「詭弁さん……ありがとうございます!私、もつとクラスメイトの方々と仲良くなりま

すわ!」

「その意気だぜモモちゃん!早速会話トレーニングだ!さあモモちゃん、リピートアフターミー!『へいYou!君、デイリー任務何回ヤッてるの?』」

「へ、へいゆー、きみでいりーにんむなんかいやってんの……あの、デイリー任務とは一体?」

「隠語だよ隠語!何回オナってるのってドストレートに聞くのは恥ずかしいだろ?」
「お前最初のやり取り覚えてる?」

ちと黙れジロちゃん。

「そ、それは隠語と淫語をかけていらっしやいます、の……?」

「えっ」

「えっ」

「……………あ、うん。あ、あくなるほどね、あー、ええ、ん……えっ、マジで言ってるの?ド天然かよ」

「聞かなかった事にしてくださいましッツツ!!!」

耳まで真っ赤にして教室から逃走したヤオヨロちゃん。やだあ……可愛すぎて萌え死しそうだよお……。

「ちなみに俺はウィークリー任務で10回以上かな」

「聞いてないし……一日一回以上してんのかよ」

「やだ、すぐ分かっちゃうなんてジロちゃんエツチ」

「死にたいのね?」

「最近のトレンドはイヤホンコキかな!とある可愛い子を思いながらするとめっちゃ濃く出るんだよね!」

「だから聞いてないって言ってるでしょ!!!」

「ん〃目〃がツ〃」

ジロちゃん、目はダメよ……。

後日の話。

「あ、あの、アシドさん……! デイリー任務は何回行っているんでしょうか……!」

「……へっ?」

「あ、あ、あの、その、すみません何でもありません! 忘れてくださいませッ!!!!」

「えっ、あっ……行っちゃった。で、デイリー任務……?」

「
.....
は
へ
あ
→

????!?!?!?!?!??

／
／
／
／
／

何センチですか!ヤオヨロちゃん!

「……詭弁さん。ここが食堂で、周りに多くの方が居ると承知の上での発言でしょうか?」

「気になったことは何でも聞いてください!……って言ってたモモチちゃんはどこにいたのでしょうね」

「それは勉強の話です!!決して私の身体についての質問に答えると言う意味ではありませんわ!!」

ヤオヨロちゃんと一緒に食堂で昼飯を食べながら、前から気になっていた胸の大きさについて質問したらこれだよ。

「……あのなあモモチちゃん。例えばここでリツちゃんが筋肉晒して『最近筋肉の付きが悪くなってきたよー』って言っても別に違和感ないだろ?あつリツちゃんってのは砂糖の事な」

「それは分かっていますが……男性の筋肉のお話と女性の胸のお話は全く違いますわ!」

「男女差別は良くないぞモモチちゃん!!」

「こういうことは男女差別とは言いませんわ!」

「分かってないなあ。公共の場で、男は良いけど女はダメ……なんて男女差別そのものじゃないか」

「うっ……い、いえ、今日という今日は騙されませんわ!」

「騙すもなにも、例えば『ヤオモモちゃん髪キレー! シャンプー何使ってるの?』って聞いてきても普通にこたえるだろ?」

「それは勿論ですわ」

「『あーそのミサンガかぁいいー!』って話も普通にするだろる」

「え、ええ……まあ、しますわね」

「『爪キレーだね!』とか大きい声で話してる奴だつて居るだろ?」

「確かに居ますが……」

「なら『おっぱい何センチ?』だけがダメな理由を教えてくださいよ!」

「それはっ……!と、とにかくダメですわ!!」

「……ほー。』とにかくダメ』と。なるほどなるほど。まるでそれが一般常識かのように言うんだね?」

「かのようにって、普通に一般常識ですわ!!」

「ん、言いたいことは分かった。ならここで俺が『おっぱい何センチ?』に類する言葉をモモちゃん以外に聞いて、怒られなければそれは普通の一般常識ではないと認めてくれ

るね?」

「つ……いいでしょう! 詭弁さんが他の方におつ……その、胸部の大きさを聞いて、怒られたのなら一般常識とお認め頂けますわね!」

「あい分かった。じゃあ早速聞いてこようじゃないか。じゃとりあえずお先にー」

「つて、いつの間にお食事を終えられてましたの詭弁さん!」

食堂の中は混雑しているというのに不思議と周りに誰もいなかった席から少し離れ、お目当ての人物に早速聞いてみる。

「リツちゃん! 大胸筋何センチ?」

「はっ? え、90くらい……だと思っぞ?」

「それはあまりにも卑怯ではありませんか詭弁さん!!」

ヤオヨロちゃんがわざわざメガホンを使って声を届けにきたので、しぶしぶヤオヨロちゃんの席まで戻る。

「ちゃんとモモちゃんの言う通りに『胸部の大きさ』を聞いてるだけじゃん!」

「ズルいですわ! それはズルいですわ!!」

「何がズルいのか言ってみろ! 俺はちゃーんとモモちゃんの言う通り『胸部の大きさ』を聞いてきただけじゃん! 言わないと分からないよ! ちゃんと『おっぱい』の大きさを聞いてこいつて言わないと、ちゃんと『おっぱい』の大きさを聞いてこいつて言わないと

「！」

「そ、そんなはしたない事を言えるわけがないですわ!？」

「何がはしたないって?」

「そ、その……おっぱい……などと……」

「きーこーえーまーせーんー!!」

「君たちイチャつくなら余所でやろうね」

「はい先生!すみませんでしたツ!!」

食堂からダツシユで（歩いて）出る俺とヤオヨロちゃん。教室に戻る道すがらもヤオヨロちゃんをからかうのを止めない。

「俺達が怒られたのは食堂という公共の場で大声を出していた所為であるからして、『おっぱいの大きさを聞くこと』なんかよりも遥かに普遍的な一般常識であると認めてくれるね?」

「それとこれとはまた違う話ですわ!」

「違わないさ!公共の場で大声を出すのは周りの人に迷惑なだけだけど、おっぱいの大きさを聞くことなんてありきたりな話題の一つだからね!」

「おっ、ぱい……の話題がありきたりな話題な訳ありませんわ!」

「なんでもかんでも否定するのは良くないぜモモちゃん!胸の内をさらけ出すのはこ

みゆぬけーしよんの真髄だぜ? セレブリティなお嬢様にそんな経験なんてなくても、自分の身体的特徴を笑いに変えられる奴はいつだってクラスの人気者さー! オールマイトも言ってるだろ? 『ユーモアは力だ』って。デカイおっぱいの一つや二つで相手が笑ってくれるんなら、ヒーロー冥利に尽きるってもんだろ?」

「えっ、えっ? そ、そういうものなのでしょうか……?」

「そういうもんだ! 恥ずかしいとか、みつともないとか全部捨て置け! おっぱいのサイズくらい大声で言えるくらいの気概を持とうぜ!」

「えっ、その……わ、分かりましたわ……?」

そんなこんな話してたらA組のドアの前に着いていた。

「さあ、善は急げ! セレブリティなモモちゃんに庶民ユーモアってのを実際にみてもらおうか! じゃあモモちゃん、一旦教壇の前に立つてておくれ!」

「えっ、あ、はい」

素直なヤオヨロちゃんは、言う通りに教壇の前に立つて不安げにこちらを見ている。教室の空気は『またあいつらか……』と冷え気味。ヒーローは挫けない。

バン、と教室の扉を開けて高速ステップでヤオヨロちゃんに近づく。誰かが「ヒエツ」と短い悲鳴をあげるが気にしない。

ガツ! と足が纏れてヤオヨロちゃんの前で激しく転倒……する直前にヤオヨロちゃ

んが「危ないですわっ!」と豊満な胸で受け止めてくれる。優しい、好き。

「……あの、詭弁さ「歩行者用エアバッグ!!」……えっ?」

「万が一の時でも安全、驚異胸の歩行者用エアバッグ!!」

「……ええ……」

教室の空気が氷点下だがヒーローは挫けない! (涙目)

ヤオヨロちゃんを支点に飛び、背中側から回ってヤオヨロちゃんの股下を潜り持ち上げる。所謂肩車状態になる。

「ちよ!?! 詭弁さん!?!」

「八百万モモ肉!!」

肩車しながらヤオヨロちゃんの太ももを強調するように屈んで立つ。腰がヤバイが重いなどとは死んでも言わない。教室の空気は死んでいるが。

「……詭弁さん?」

ビキツ、ビキツ、と上から謎の音が聞こえる。ヤオヨロちゃんの顔が見れないぜ……。
ヒーローは挫けない (震え声)

「八百万バラ肉!」

「えっ、ひゃん!!」

肩車したままヤオヨロちゃんのお腹回りの肉を掴む。……嘘だろ毎日あれだけ食っ

て贅肉の類がほぼ無い……だと……?」

しかし教室の空気は相変わらずマイナスケルビン。これはもう最終手段を切るしかない!

「八百万むねに」っ」

長い舌のような物がポグツと俺の顎あごを掠め撃ち、一瞬で意識を奪う。半強制的に床とヤオヨロちゃんにサンドイッチされるが、完全に意識を手離す直前に感じた八百万ぼんじりの幸せな重さを忘れない。

「(アカン、思わず吹き出してまう所やったっ……!あの空気わろで笑てたら批難囂々やった……)」

「お茶子ちゃん?」

「ん」っ!何でもない!何でもあらへんよ!!」

男にセクハラする趣味はないですよ！

「レッツ・ゴー！バクゴー！まだまだファイトおー！ゴー・ファイト！行ける！ウイアー・ゴーナーメイクイツト！」

「さつきからうっせえんだよクソ口!!!」

現在は雄英の実技入試試験の最中。持ち込んだ小道具の笛を吹きながら、たまたま近くにいたボンボコうるさい個性の持ち主を応援しながら近づいてきた仮想敵を蹴り壊す。

なんでわざわざ競争相手を応援しているかというところ、こいつの個性がこれまたド派手で次から次へと仮想敵を呼び寄せるから、こいつの近くに居るだけでポイントを稼ぎやすいからだ。

俺の個性も使って大音量の即席ライブを開催してると何処からか次々と仮想敵がやってくる。

「右！後ろ！来たぞ3ポイント！飛ばしていこー！」

「黙れや!!!」

個性も頭も暴言も爆発している男の名前は爆豪。試験始まりと比べて更に火力を増

し増し、一撃で仮想敵を爆殺している。しかも多少の距離をもものもしない個性による投擲で3ポイントを難なく獲得していく。

「いーぞ!いーぞ!カ・ツ・ちゃん!魂!燃やせ!カ・ツ・ちゃん!」

「かつちやかつちや黙れやア!!!」

「カツちゃん!後ろー!」

「っ!死ねやあ!!!」

「ひゅー!ないっすー!」

「やめろやア!!!」

カツちゃんの後ろから飛び込んできた2ポイントの存在を教えただけでこの罵倒。お前ヒーロー志望ちゃうんか?

そうしてカツちゃんが大量に得点を重ねていく合間に掠めとるように点を集めていくと、大量のロボットと共に他の受験生も集まってきた。

「何故ここだけこれ程の残骸が!」

「なんか髪形キリシタンな奴来た!」

「ん」

「なんか……なんか来た!」

髪が緑色で刺々したおっぱいの大きめな女の子と、黒髪で普通のボブヘアのおっぱ

いの大きめな女の子が来る。やったぜ……いやいや、俺はヤオヨロちゃん一筋……いや、ハーレム路線もありやな！（クス）

大量のロボットが集まってきて、カツちゃんの点数が90点を越えたくらいで地面が大きく揺れだした。

「きやつ!?!」

「ん!?!」

「あぶなーい」

バランスを崩した女の子二人を支えるように抱える。やわこくてかるーい。

「ど、何処を触っているのですか不埒者!?!」

「んん!?!」

「緊急事態だからしかたない”っだい!”」

救助の際に偶々胸と尻に触れてしまっただけだというのに両頬を挟まれるようにシバかれた。

俺がシバかれている間にも揺れは更に大きくなり、少し離れた地面からクツソデカイロボットが出てくる。

「でかつ」

「お、大きいですね」

「男を挟んでお前らでかいだの大きいだの……もつと言つて!」

クソでかロボットが暴れ始め、辺りの建物が破壊される。

崩れた破片が飛んでくるから女子二人担いで避難すれば、可愛い声ででかいとか大きいとか囁かれて、んもうセクハラかと。狙ってるのかと。

ポオン!ポオン!と音が鳴って、その方向を見ればマジもんのヴィランみてーな顔つきでクソでかロボットを睨み付けるカッチちゃんが。

「おいカッチちゃん!幾らなんでもそりややべえぞ!」

「あ”あ” つ!?黙れやビビリクソ口野郎!!敵相手に逃げるザコがヒーロー名乗んなカス!!!」

「暴論んう!!でもそういうの……不思議と嫌いじゃないぜ!!」

「……私も、そこまで言われたら奮い立たねば」

「ん」

肩の女子二人もやる気ムンムンな感じ。肩から下ろしながら軽く自己紹介をする。

「俺は詭弁答弁、個性は言葉で色々出来る。よろしくな」

「私は塩崎茨、個性は髪をつるを伸ばして操ることが出来ます」

「小大唯。生き物以外小さくしたり大きくしたり出来る」

「ンよろしく!あそこの爆発頭は爆豪、手のひらと暴言が爆発する個性だ」

「誰が爆発頭だザコクソ口野郎!!」

「ダイちゃん、あのデカロボ触れて小さく出来る?」

「……ん」

「よし、ならいつちゃんがつるを伸ばして足止め、ダイちゃんはその隙に触れ続けて、小さくなった所をカツちゃんが爆殺して終了!」

「い、いつちゃん……?」

「ちなみに俺は戦闘力クソザコナメクジだから気にするな!!俺ら全員雄英受験者でライバルだが、皆学校一の優秀な奴らだ!俺らが纏まれば、どんな奴でも倒せる!気合い!入れて!行くぞ!!」

「んー」

「は、はい!!」

「勝手に仕切んなカス!!!」

暴れまわるロボットに向かって、腹の底から押し出したデカイ声を上げる。

「スウウウ……やいこのポンコツテクノボー!!ノロマで無能なAI搭載して恥ずかしくないのかー!!」

俺の声に反応したのか俺の罵倒に反応したのかは分からないが、ロボの顔が俺の方を向き、その腕を振り下ろしてきた。

大きな地響きが起きるが、悠々と回避した俺はいつちゃん担いで駆け回る。

「何処を狙ってんだあ!?! テメエのカメラ曇ってんのかあ!?! モーター回転ト口過ぎんじゃないのー!?!」

「どつちが悪役だか分からないですね」

チヨロチヨロと駆け回り、相手のヘイトを稼ぎながら更に挑発を重ねる。そろそろ良
いかな?

「ツてなわけで、そろそろよろしくう!」

「承りました」

笛を鳴らしながらいつちゃんを応援し、能力の強化を施す。

「ゴーゴー! し・お・ぎ・きー! レッツツツゴー! い・ば・ら!! 太く強靱! 正義の一撃! 必殺
のおー、ジャッジメントヴエイン!!」

「勝手に変な技名をつけないで下さい! ……っ?!?」

いつちゃんの個性によるつるが巨大なロボに絡み付き、僅かの間拘束に成功する。

「(普段よりも速く……何より凄く強靱! 応援パワー……なんと強力なんでしょう)」

「今だ! ダイちゃん! 信念貫け! ゴー! ゴー! ダイちゃん! 決めろー! スモールスケール!!」

「ん……………ん?」

ダイちゃんがすかさずロボの足に触れて、ビル並みにでかかったロボがすごい速さで縮んでいく。

「(明らかにいつもより早く小さくなってく……凄……) ……ん」

「トドメだカツちゃん！弾けろソ・ウ・ル!! 決めろ！必・殺！ニトロお、クラッシュ!!!」
「指図すんなクソが!! 『ニトロ・クラッシュ』!!!」

既に一軒家程度の大きさにまで縮んだロボの顔に向かって飛び、今まで聞いてきた中で最も大きな爆音と共にロボが粉碎された。ひえー怖。でも咄嗟のノリで名付けた必殺技の名前が即採用されて、ひよっとして爆豪って面倒なツンデレではと思う。

「んっ!?!」

「危なっ!?!」

ロボ(故)の足元に残っていたダイちゃんが爆発の勢いに押されてしりもちを付きそうだったので素早く抱き止める。咄嗟に抱き止めてしまったので、今の俺達の状況はお姫様抱っこする俺と、お姫様抱っこされるダイちゃん。やだ……ガチ恋距離……

「……………」

「…………大丈夫か?」

抱える少女の胸の辺りからドクドクと強い鼓動が感じられる。

…………あの、何か反応を返して欲しいのですが。

「……………ん」

何故貴方は目を閉じているのでせうか。

そうこうしている内に、試験終了の音が響く。お、終わったか……。

「お、おう。試験終わったぞ?」

「……………ん」

何故貴方はそない残念そうな顔をするのでせうか。(無表情)

「大丈夫ですか? 怪我はありませんか?」

「ダメエクソ口野郎!!最後の技のアレはノーカンだゴラア!!!」

「大丈夫大丈夫!分かってるって!友達に必殺技の名前貰うとかザラだし!俺とカッ

ちゃんの仲じゃなかー!」

「黙れや殺すぞ!!!」

「なんて野蛮な」

「ん」

「あそうそう、お三方。ちよつとお願いがあるんですけども」

「ん?」

「如何なさいました?試験はもう終了いたしましたが……」

「んだクソ口野郎!!」

こんなんでも一応聞く気になってるカツちゃんマジ天使。

「いや、ね。ちよつとこの後俺死にかける予定が有るから……助けてくれ」

「ん?」

「は?」

「アア?」

試験が始まる前に自分の身体の限界を越えて力が出せるように自己暗示を行った。要するに火事場のバカ力を出し続けていた。だって一応鍛えてるって言っても俺の身体は一般的な男子中学生の域を超えない普通の肉体だ。それでロボットを破壊する程の攻撃が出来るだろうか?

まあ、要するに……

「脳内物質ドバドバで今痛みとか無いけど、大暴れした反動で全身ボロボロなんだよね俺! だから助ゲボツツツ!!」

「ん!?!」

「詭弁さん!?!」

口から想像以上に吐血し、全身の骨がバッキバキに折れる。いや、正確には既に骨が折れていて、その事によやく身体が気がついたとも言うべきか。痛い!

「もうマジムリ……フリスク食お……手動かないけど……」

「詭弁さんがお壊れになりました!？」

「ん!」

「クソアホかテメえはア!!!」

そうして気を失い、俺の雄英受験は終了したのだった。

因みに三人はちゃんと俺をリカバリーガールの元に連れていったそうです。ありがとう!

結果? お察し!

テーマパークに来たみたいだぜー！ テンション上がるなー！

救助訓練に向かうバスの中。ヤオヨロちゃんはバスの一番後ろ、五人掛けの席の窓側に座っている。俺は当然のごとくヤオヨロちゃんの横に座り、ヤオヨロちゃんの頭をなでりこなでりこ。

「……詭弁さん？今度はどういっておつもりですか？」

「やー、俺個人で救助活動するのってかなり厳しいじゃん？だからせめて知識面だけでもしつかりしないと不味いでしょ？」

「……まあ、確かに詭弁さんが直接救助活動を行うよりも、他に適した方に任せた方が合理的ではありますね」

「んでっしよー？だからヤオヨロちゃんの頭の良さにあやかろうと思っただけ。まあ庶民風のおまじないよおまじない！」

「そ、そうですか……まあそう言うことなら……」

「いや、そいつヤオモモにセクハラしたいだけだからね？」

「いいなあ……あんな風に女子と直接触れ合えて……」

「やはり男は顔か……！」

中々にカオスな状況の中でバスは進む。流石に先生の目の前で露骨なセクハラはしませんよーだ!!

「ねーねー！ 詭弁とヤオモモって付き合ってるのー!?!」

俺の隣には透明人間が座り、一見するとホラーチックだが中々にコミカルな女の子。名前は……なんだっけ！

「葉隠透！ 自己紹介三回目だよ！」

「ゴメンとーちゃん！」

「とーちゃんはやめろー！」

と、まあ愉快な女の子である。基本的に気に入った相手の名前の頭文字を取って○○ちゃんと呼ぶのが俺のじやすです。時々名字からも取ったりしなくもない。まあ好きに呼んでるだけだわな!!

ちなみに、下手な呼び方をすると拳が飛んでくるので……気を付けようね！

「それで？ 付き合ってるの？」

「そりやもうこうして言葉を交わし軽いボディタッチを交わし、休日にデートに行ったり親公認だったり家の中ではとても口には出来ないようなアーンな事やソーンな事を

している……仲になりたーい！」

「いや、まだやってないんかーい！」

「紛らわしいわ」

俺とヤオヨロちゃんの恋バナが気になるのか近くの女子ーズがジロジロこつち見る。俺はイケメンスマイル（当社比5倍）で迎え撃つ。いわゆるニコポと言うやつだが、下手に使うと野郎にソツチのケが出てくるので控えよう！

「っ……」

ほらー！今黒いカラスの男が顔を思いっきり背けたー！夜道と尻には気を付けろつてね！つらい。

「で！どこまでが本当なの!?!」

「親公認つて所までかな！まあちよくちよく家にお邪魔してるけど、何故か二人きりにしてくれないんだよねーヤオヨロちゃん！」

「当然だと思えますわ。……私だけだと詭弁さんを拒みきれませんし……」

「それつてつまり二人きりなら色々イケるつてこと!?!」

「ヤオモモ大胆！もう付き合っちゃえよ！」

「なっ、違……！そういう意味ではありませんわ!!」

「ねえ、休日にデートつて何処に行つてるの？」

「ん？まあ映画見に行ったり紅茶飲みに行ったり色々買いに行ったり、あ、後近くのホ
「き、詭弁さん！」ん、あ、あー……まあ色々」

「えっ、近くのホ？」

「ちよつとそこ詳しく」

どうしたものとヤオヨロちゃんの顔を見ると、必死に首を横に振っている。まあ、
確かにバレたらヤバい事してたからなあ……。

女子ーズの方を見ると皆ニヤニヤしながらこつちを見ている。二人程表情変わんな
いけど。ここで何でもないですは通用せんなこれ。

「えーと、ねえ……」

「何々？ナニを何処でしたの?？」

めっちゃ圧がすごいとーちゃん。顔を反らそうにも両手で俺の頬を挟むもんだから
逃げられない。多分これ透明人間だからアレだけど、仮に普通の人だったらこれガチ恋
距離よ？

「ちよつと詳しく言えないんだけどお……」

「うんうん！」

「結論から言うとは避妊はしてる!!」「ちようえ!?!き、き、き、詭弁さん!!!」

バスの中の時間が俺とヤオヨロちゃん以外止まった。

無常にもブロロロロとバスのエンジン音が響く。

「詭弁。後で話がある」

「あつ、はい」

先生の一声でバスの中の時間が動き出す。頬を抑えてたとーちゃんは、頬を放してゆつくりと席につく。みーちゃんつーちゃんちやこちゃん三人はスツとバスの外を見て、ジロちゃんはすごい眼で俺とヤオヨロちゃんを交互に見ている。

ヤオヨロちゃんは両手で顔を隠し、うー、だのあー、だの言っている。

その他男共はざわついたり前屈みになったりと忙しそうだった。

い、いやー……まあ狙い通りかな?

その後、例のUSJ事件が起きた後の最初のHRの後に先生に一人呼び出されたのはまた違う話……うそ、同じ話でした。

祭りですよ!ヤオヨロちゃん!

体育祭が迫った日の放課後の教室での事。

「ソつというわけで体育祭、やるぞー!」

「おぉーつ!!」

俺の掛け声に返してくれたのは麗日お茶子ちゃん、通称ちやこちゃんのみだった。
ぐん!と拳を握って空につき出すちやこちゃん可愛い。

「なんかキヤラ変わったわねお茶子ちゃん」

「て言うか、詭弁ってそんな祭大好きキヤラだっけ?」

「ご褒美目当てだばかやろう!」

「はあ?」

〈回想〉

「詭弁さん!雄英体育祭と言えばプロヒーローも見る最高のアピールの場ですわ!」

「あー……みたいねー……」

「だというのに何ですかそのやる気の無さは!!」

「いやいや。ヤオヨロちゃんや、この前ヴィランに襲撃されたばかりやないか。それを撃退したA組……それだけで話題性は十分じゃない?」

「プロの方々に実際の実力を見て貰える機会ですのに!」

「やー、そういうけどもさー。俺としてはヤオヨロちゃんのサイドキック目標にしてるわけで、それ以外の所とかわりとどうでもいいのよねえ」

「そ、それは嬉しいですが……それでも選択肢は多いに越したことはないですわ!プロヒーローの指名が、将来何かしらの役に立つ時が来るはずです!」

「まあ、ヤオヨロちゃんのことでも分かるけどもさ。んー……じゃ、こうしよう。体育祭の順位がヤオヨロちゃんよりも高かったら何か一つご褒美ってのは?」

「なっ……またそんな即物的な……」

「んで、ヤオヨロちゃんの方が高かったら俺から何でも一つご褒美を」

「やりますわ!」プリプリ

「(急にプリプリし出すヤオヨロちゃん可愛い)おーし、じゃー俺の方が順位高かったらヤオヨロちゃんとおせっせつてので良い?」

「お、おせっせ……?」

「ちよつとした(火)遊びと言うか(大人の)こむにけーしよんだよ!それで良い!?良い

よね!」

「わ、分かりましたわ……!では、私が勝ったら……その……名前で呼んで下さい……」

「歴史的可愛いかよ」ガバツ

「えっ、ひやあつ?!」

「はああああ!もつと欲張れよ!愛しさの権化か貴様あ!今日からお前は詭弁姓だこのやろー!」

「あつ、ちよつと!?!き、詭弁さん!?!お、落ち着いて下さいまし!ひやつ!?!急に抱き締めるのは、ああ……」

〜回想終了〜

「うん、俺あそこで手を出さなかったのは奇跡だね!」

「急に何言い出してんの?」

「いやあ、負けられない戦いがここにあるって思ってたね」

「頭打ったのかテメエ」

「はっはっは、頭爆発してるカツちゃんに言われたくないわ」

「喧嘩売ってんのか殺すぞクソ口!!」

「はははこやつめ、選手宣誓の文言代わりに考えてやろーか?」

「要らんわボケクソ!!」

「語彙力64ビットかよ」

「どういう意味だあ”あ”あ”ん!!?」

「かつちゃんがおちよくられてる……!」

「ヤオモモー、アレ止めなくて良いの?」

「私が詭弁さんのストツパー役になれると?」

「……ゴメン」

「つーか詭弁止められる奴とか居んの?」

ガラツとA組のドアが開けられ、外から誰かが入ってくる。

「おーい詭弁!お前来るの遅いから呼びに来たよ!」

「んおー悪い悪い、その口内ボンバーマンを弄るのが楽しくてな」

「ブツ殺す!!」

「わー!かつちゃん教室で暴れんのは不味いよ!!」

「……な?」

「な、じゃねーよ!」

鋭い手刀が詭弁の首に当たり、一撃で床に崩れ落ちる。

「じゃ、こいつ借りてくから」

そしてそのまま引きずるようにして詭弁を連れていった女の子と、後に残されるA組の皆。

「……今の誰？」

「あー、確かB組の奴だった気がする」

「マジで!?可愛くね? LINEやってるかな？」

「……てか、何でB組が詭弁を連れていくんだよ」

「それは……個性関連か？」

「普通にB組に口説きに行つてたりして」

「コミュ力お化けイケメンめ……」

「な、なんか凄いことになってきたね。……ね、ヤオモモ……う？」

「……………」

「……ヤオモモ？」

「私というものがあいながらまた他の女性にまで手を出すのですね詭弁さんまあ詭弁さんは魅力的ですから誰もが放つておかないですし詭弁さんも拒絶をしませんから思わ

せ振りな態度をとりますがやはり一番である私を通すのがスジと言うものではありませんかこれではそのうち勘違いした可哀想な子が増えるだけですのにそんなこと許されませんかやはり詭弁さんには今一度分からせてあげなければなりませんね私だけが彼の本当の理解者ですし彼もそう望んでいますし近い内にじつくりとおはなししましょうその時は特別なお紅茶を用意しませんとうふふふふふふ」

「ぎゃー!? ヤオモモから闇が! 闇が!」

「あら芦戸さん? いかがなさいました? なんのおはなしでしたっけ? お紅茶のおはなしでしたっけ?」

「だれかー!? ちよ、助けてー!」

ああ体育祭が近いなあ。と現実逃避をする耳郎響香だった。

トーナメントですよ!ヤオヨロちゃん!

「……やー、なんだかんだでここまで来たぜ」

「……詭弁さん。幾つか質問をしても宜しいでしょうか?」

「んおーう、俺といっちゃん仲じやん。遠慮すんな!」

雄英体育祭、決勝トーナメントの選手用控え室の中。そこに俺といっちゃんことB組の塩崎茨が居た。同じ椅子に並ぶように座って、互いの距離は拳一つ分だけ開いていた。

「詭弁さん、貴方は……少し前まであまり体育祭に乗り気ではなかったように思えます。ですが実際にはこうして決勝トーナメントまで勝ち残る程に全力を尽くして、貴方のお体もボロボロでしょう?何故……そこまでして頑張るのですか?」

「ははは、言うほどボロボロでもないさ。俺ってずる賢いからうまいく人を使って楽しんでたし」

「騎馬戦中、ほぼ常に貴方のお声が響いていましたか?」

「それしか取り柄ないしねー」

「そんなことはありません!!」

突然、いっちゃんが大きな声を出して面食らう。キミそんな大声出るんか。

「詭弁さんは……常に周りを見渡して状況を把握し、そこから最善を狙う戦術眼に長けています。少しの間でしたが、貴方と一緒に訓練しただけでも分かる貴方の長所です。直接戦うのが苦手と仰ってますが、相手の意表を突いて戦ったり、時間を稼ぐような戦い方も優れています」

「……はは、まー良く見てるね」

「当たり前です。優れた人を観察し、自分の糧とするのも優秀なヒーローになる為ですから」

「照れるぜ」

「……その軽薄な口は治した方が良いと思いますが」

「そりや無理だわ。なんせ詭弁家は口から産まれたような奴ばかりだからな!」

HAHAHA

「……それで、何故貴方は突然本気を出してこられたのでしょうか」

「ん、まあ大したことじゃねえ……好きな女の子に良いところ見せたくなっただけ
「さ」

「っ……。やはり……。そう……。ですか……」

「ん、後その子より順位が高かったらご褒美貰えるんだよね!そりや男なら目指さないと嘘っぱちじゃん!」

「んなつ……!!ま、まさか不埒なことではありませんか!」

「はっはっはー」

「笑つてごまかさないでください!!」

いつちゃんの顔が少し赤くなり、プンプンと怒る。可愛い。

あまりの可愛さにニコニコと見ていると、ふつ、と顔を反らし、無表情を作つて会話を再開しようとしてた。それもまた良し。

「……では次の試合、私が勝利したら……私に、何かご、ご褒美をいただけますか……?」

「……ん、良いよ。ハグで良いかね?」

「っ……はい」

いつちゃんの耳まで赤く染まり、小刻みにふるふると震える。それは武者震いか、それともただの羞恥心からか。それは分からない。

「じゃあ俺が勝つたらハグするね!後ろから!」

「は、はいっ!」

「その時イロイロ触っちゃうけど良いよね!事故だよ事故!!」

「な、な、何故に!」

「いっちゃんだけ勝ったら何か貰えるとか不公平だろ？なら俺も同じ条件じゃないと！」

「いや、確かにそうかもしれないけど……!!と言うか何故後ろからなのですか!？」

「えっ？そりゃハグした時に回した腕がイロイロ当たる予定だからだけど？」

「ふ、不埒者！不埒者！」

ポコポコと両の拳で叩かれる。地味に痛い。

そのまま気のすむまで叩かれ続けると、不意にピタッと止まる。

「わ、私が勝てば良いのです。私が勝てば……」

「ま、そう言うことだね。ハグハグするのを楽しみにしてるよ」

「余裕綽々でいられるのも今のうちだけです」

ニツと不敵に笑えば、同じようにニツと不敵に笑ういっちゃん。やだ、キュンと来た。

そんな表情出来るのね貴方。

「……それで、聞きたい事って幾つか有るんじゃないの？」

「あ……そうでした。……色々と衝撃があつてほとんど忘れてしまいました」

「なんだそりゃ」

「あ、一つだけ……」

「んう？」

「何故に詭弁さんは控え室Aにいらつしやつたのでしょうか? 詭弁さんの控え室は恐らくBの方だと思うのですが……」

「ウツソだろ!?! 控え室って二つあつたの!?!」

「気がつかなかったのですか……」

「戦う前の談話時間だと思つてた……い、今から向かつて間に合うかな?」

「試合開始予定の1分前ですが……」

「……よし、こうなつたら同じ場所から出よう! なんかもうそつちの方がインパクトあるしー!」

「……まあ、致し方無いですね」

そうしてグダグダのまま試合場に二人で向かつた。

プレゼントマイクにめつちや野次られた。

容赦ないですよ！ヤオヨロちゃん！

「危なげなく勝利を納めたぜ！」

「全身ズタボロだったじゃねえか」

男には、意地でも立たねばならん時があるんですわ。

皆さん客席からこんにちは！一回戦無事突破しました詭弁ですつ！なんか血が足りなくて変なテンションだけで気合い！入れて！行きます!!

「あつ、やつぱしんどい……」

「あーもー無理すんなっての。ほら、肩貸したげる」

「肩より膝を……」

「調子のんな馬鹿」

今日もジロちゃんは平常運転。こういう時ヤオヨロちゃんなら膝を貸してくれるんだろーな。

「刺されたいの？」

「堪忍してつかあさい」

物凄いい目で睨まれた。こわっ。タシケてっーちゃん。

「つゆちゃんと呼んで」

「……っうゆちゃん」

「ケロ、詭弁ちゃんって言葉の個性持つてるのに時折滑舌悪いのね」

「深く傷つきました、訴訟も辞さない」

「膝なら貸してあげるわよ」

「っうちゃんだいきー」

颯爽と膝枕に借りるが、なんかネットって感触がする。流石カエル。

「ウオーターベッドみたいで独特ですね」

「ケロケロ、家族にも好評なのよ」

そしてずっと凄いい目を向けてくるクラス最小がいるが、さっきのジロちゃんの足元にも及ばないので無視する。

「……っゆちゃんって、よくまあそんなの相手に出来るね」

「背の大きい弟みたいなのよ、ケロケロ」

「聞いたか非モテ男子共。これが俺流モテテク、相手の弱点を突く!一回懐に潜り込んだらこっちのものよククク……ちゅうゆちゃん、俺の首はそっち方向にもう回らないですわ。待って、待って!まわ、回らないから!!回らないから待って!!!」

「そろそろヤオモモちゃんと轟ちゃんの試合が始まるからしつかりとしなさい？」
「あーい」

ほんまつーちゃん姉みが強い。可愛い。太もものもちもち感を楽しみながら中央のフィールドを見る。前がとーちゃんで助かってるよほんと。

うん、なんとかとーちゃんから視線を感じる気がするけど気のせいね！

『さーあ皆さんお待ちかね！次の試合はなんとA組の推薦組対決!!!騎馬戦では同じ仲間だったがトーナメントの非情な組み合わせが牙を向く!!フィールドを一気に凍らせ
た大出力!轟焦凍!!VSあらゆる物質を生み出すA組のクイーン!八百万百!!』

「……お前相手に手加減は出来ねえ。悪いな」

「もう勝った気にいるのですか轟さん。貴方の……その半分の力だけに負けるほど私は弱くないですし、負ける気もないですわ」

「つ……テメエに何が分かる……!オレは、氷の力だけで勝つ……!」

「そうですか。……まあ、貴方の事を気に掛けて欲しいという詭弁さんの願いは聞けそうにありませんわね」

「……………あのお節介野郎になんの関係がある。氷の力だけで一位を獲る……………」

「……………そうですか」

『お互い気合い万端!レディイイイ……………スタートツ!!』

試合開始直後、観客席を越えてスタジアムの外まで出るような大氷結が観客のほぼ全ての視線を集める。

「お” つ!?嘘だろ!?!なんだあの威力!!ヤオモモ死んだんじゃねえか!?!」

「勝手にヤオヨロちゃん殺すな。いやー、一瞬の勝負でしたね……………ど、どうしたちゅーちゃん」

「か、カエルは寒いのが苦手なの……………」

ぺつとりと俺に抱きついてくるつーちゃん。密かにおつきな弾頭が俺を包む。んー
ベネー!

「ま、マジかあ……………ヤオモモ気合い入ってたのに一回戦負けかあ……………」

「んなあに言ってるんだみーちゃん。負けたのはショーちゃんだぜ?」

「……………んえ?」

「……………あ?何が……………」

「開始直後、貴方が氷結で決めに掛かるのは予測出来てましたわ。……少々ズルいですが、試合開始前からジャージの下で防寒着を作っていました。そして開始後、貴方の攻撃に合わせてこちらも攻撃させていただきましたわ」

「ヤオヨロちゃんなら腕を銃身に見立て、そこから銃弾を飛ばすなんてお茶の子さいさいサイゼリアな訳よ。後は弾丸はゴム弾なり麻酔弾なりにすれば、大抵の相手は一撃でノックアウト。A組最強は轟？爆豪？馬鹿言っちゃいけないねえ、最強はヤオヨロちゃんだよ。その気になれば、音速を越える攻撃が出来るんだ……誰が避けられる？」

いや、もう本当にヤオヨロちゃんがヒーロー志望で良かったよ。もしヴィラン堕ちな
んてしたら、どんな嚴重な警備態勢の中でも楽々要人暗殺できるんだもん。おー怖い怖い。
い。

「でも何より怖いのが、ヤオヨロちゃんに次当たるとの俺ってことなんだよね!!! いづく
ちやん！なんか対策練って!!! お願いします!!!」

「ええええ!!」

だってたまにはカッコいいと見せたいじゃん!

いやーもー参ったねーこりや。どうやって銃撃を回避しようか。

……と、今度こそ自分の控え室に座って、ヤオヨロちゃん対策を練る。勝ったらヤオヨロちゃんとおせっせという煩惱に満ちた頭で勝てるかいな。

と、突然控え室の扉がノックされる。誰か応援に来てくれたかな?とと思って扉を開けるとニコニコ笑顔のヤオヨロちゃんが立っていた。

閉めた。

トン、トン、トン。

待つて待つて待つて!今これ下手なホラーゲームより怖い状況なんですけどお!?誰か助けて!

トン、トン、トン。

出ますからノックやめえ！

がちやりと扉を開けると、やっぱりニコニコ笑顔のヤオヨロちゃんが立っていた。

「どしたんヤオヨロちゃん」

「私を名前で呼ぶ心の準備は出来ましたか？」

「んおう、もう勝った気でいやがるんですかね」

「はい」

なんていい笑顔で言い切りよるん？あーたそんな性格でしたっけ？

控室の長椅子に拳一つ分空けて座る。ニコニコ笑顔のままのヤオヨロちゃんが俺の頭を押さえ、いつそ強引なまでに自身の太ももに押し付ける。

「……ヤオヨロちゃんや」

「蛙水さんのやりとり、見えてないと思ってましたか？」

怖い。いや、嬉しいんだけどね？肝心なのは何で皆の前でも同じような態度を取らないのって事。

強引な膝枕と、頭ナデナデのコンボにK・O・寸前。あくダメになるんじやあく。

「……………ここに来る時に、塩崎さんに会いましたわ」

「ん……………」

「『負けません』と、一言。……………さて、何のことでしょうね？」

「…………おー」

「いっちゃんは一回戦で俺が倒した。それでもヤオヨロちゃんに『負けません』ってのは…………まあ、そういう事なんだろう。俺としては色んな女の子にちよつかい掛けるのはライフワークというか因果というか業というか、そういうアレなんだが。」

「『また泣かせることになるなあ』ですか?」

「ははは、面白い冗談だ。今更もうそんな事思わんさね」

「まあロクな死に方しないだろうとは思ってるが。」

「…………詭弁さん。私は、強くなりましたか?」

「んう。強く、そして強したたかになつたな」

「昔に比べりや、本当に成長した。…………いや、別人のように変わった。俺が変えてしまった。」

「後悔しないでください。私は貴方に救われ、自分の意志で此処に居るのですから」

「んな大げさな。俺が居なくてもヤオヨロちゃんは此処に居ただろうよ。ヤオヨロちゃんは優しいし、正しいと思つた事に全力を尽くすのは前からだつたんだから」

「…………今日、貴方を超えていきますわ」

「俺の前を歩かせるんにやあまだ早いなあ」

「悪い方向に変えてしまったのなら、最後まで責任を取らなきゃあ…………嘘うそつぱちになつ

ちまうよなあ。

「……さあ、そろそろ時間だ。ヤオヨロちゃんも自分の控室に戻りな。一回戦の二番煎じは観客も飽きちやうぜ」

「はい。……全力で行かせてもらいますわ」

ばたん、と扉を閉めて行つた。

……さて、俺も全力でいこうか。

『決勝トーナメント！最初の試合を勝ちあがった二人の登場だ!!一回戦を血だらけになりながらも女の子相手に怪我をさせる事無く場外に叩き出した意外な紳士！詭弁！V S 大氷結を受けた上で相手を一撃K.O.！無限の可能性を見せつける！八百万！両者準備は良いかアア!!レディイイイ……スタートツ!!』

「左いいいいいい!!」 ドンツ!!

銃声の直前に会場全体が震えるほどの大声で叫ぶ詭弁。亜音速で放たれたゴム弾は正確な狙いで詭弁の眉間に直撃……することは無く外れた。

「よ、避けた!?!」

「違う、狙いを外させたんだ……!言葉で……!」

「……やはり一筋縄では倒れてくれませんか」

「んったりめえだろうが」

「でしたら催涙ガスは如何でしょうか！」

八百万の両手から大量のガスが散布され、一気にフィールドを覆い尽くす。

「ふ、ふあ、ふえつくちゅん!!」

(((ミッドナイトのくしゃみ可愛い))))

観客の心が一つになった瞬間、再び会場全体が震えるような大声が響く。

「俺は怪力！俺の両腕は岩よりも硬い！」

ドガン！と大きく硬い物が碎かれる音が鳴り、フィールドの中心から暴風が巻き起こって催涙ガスが会場全体に散らされる。

会場のあちこちから大きなくしゃみや咳が響き、観客は試合を見る事が出来なくなるがそれでも状況は移り変わっていく。

「相変わらず何でも出来ますのね!!」

「出来る事しか出来ねえよ！」

詭弁はセメントスが作ったステージを大きく割り、その巨大な破片を担いで振り回し

て催涙ガスを吹き飛ばした。更に小さい破片を足で蹴り飛ばし、八百万が催涙ガスを散布すると同時に着けてたガスマスクの装着ベルトを的確に撃ち抜いて切り落とした。

八百万の個性：創造は生物以外なら何でも作ることが出来るが、無尽蔵に作ることは出来ない。初撃とガス散布で既に自身の許容量の半分近くを使っている。だが、逆に言えばまだ半分残っているのだ。

地面に転がすように閃光弾を創造し、同時に遮光グラスを作ってかける。

シュボツ！

閃光弾が炸裂し、強烈な光が放たれる。

八百万はすぐさま無反動砲を創造し、対ヴィラン用の捕獲ネット弾を装填して詭弁に向けて発射した。

詭弁は担いでいたステージの破片を盾に閃光弾を回避し、そのまま破片を捕獲ネット弾に投げつける。

バアンと弾がハジけ、ネットが広がるがその先に既に詭弁はいない。

詭弁は自身の足からミシミシと骨が悲鳴を上げる音を聞きながら高速歩法で八百万に接近、勢いそのままに腹部に掌底を叩き込む。

八百万は敢えてその一撃を見逃す。掌底は狙い通り鳩尾に入るが、そこにピンポイントで防ぐように鋼鉄の盾が創造されていた。

「一手ツッ！」

伸びた八百万の左手から手錠が創造され、ガシヤリと詭弁の右手に繋がった。

「それは悪手だろお！」

怪力そのままに、手錠ごと八百万を振り回して意識を奪おうとする。筋繊維がブチブチと音を立てるが、その音が聞こえないかのようには詭弁は振る舞う。

強力に振り回された八百万は、強いGによつて頭から血の気が引いていく。なんとか気を強く保つて気絶しないように耐えるが、ミシミシと全身が悲鳴を上げる。何かを創造しようにも、創造のためには思考が必要だ。思考に割くだけの血が圧倒的に足りない。

筋繊維が断裂していく詭弁と、頭から血が引いていく八百万。我慢比べはギリギリで八百万に軍配が上がった。ほんの僅か、回転速度が緩まった瞬間に繋がっていた手錠を破壊し離脱した。

ふらふらと足取りがもつれるが、仕切り直しと言わんばかりにもう一度対ヴィラン用捕獲ネットの射出をしようとした瞬間、巨大なステージの破片が飛んで来た。

「っ!?!」

転ぶ様に避ければ、避けた先にも礫が飛んでくる。自身の身を隠せる程度の大きさの強化プラスチック盾を作り、礫の飛ぶ方向に対して斜めになるように防ぐ。まだ頭に血

が戻ってきてないのか、ふらつく身体を抑えた瞬間、車に轢かれた様な衝撃が八百万の身体を走る。

受け身を取りながら見れば、体重を乗せた前蹴りの姿勢で立っている詭弁の姿が見えた。

八百万が場外ギリギリのラインで立ち直れば、詭弁は再度ステージの破片を担いで飛びかかる様にして突進してくる。詭弁は既に誰が見ても満身創痍で、立っているのもやつとな筈だというのに一切弱さを見せない。

「ハハハハハハ!!」

大きな声で嗤いながら大きな破片を投げる。八百万に避ける場所は無く、すぐ後ろは場外。受ければその質量によって後ろに叩き出されるだろう。なら、受けなければ良い。八百万は腕を砲身に見立て、無反動砲を放つ。放たれた砲弾とステージの破片がぶつかり合い、互いに弾かれる。

今度は八百万の方から詭弁に接近する。詭弁は握り拳で迎え撃とうとしたが、ビクリと身体を震わせて止まった。

「つ……すみません!」

八百万は手に創造したスタンガンを持って詭弁に押し当てる。バチツと電撃が流れ、詭弁はそのまま意識を失った。

「ふえつくちゅん!しよ、勝者!八百万さん!!」
くしやみや咳混じりの歓声が会場を包む。

「……次は、次こそは……貴方の優しさにつけこんだ勝利ではなく実力で勝利をもぎ取ってみせますわ」

祭りは終わりですよ！ヤオヨロちゃん！

「……知らない天井だ」

「ハイハイ嘘おつしやい。一回戦の後でも見たでしょうに」

「言われてみれば一回だけ見た天井だ」

ここは多分リカバリーガールの出張保健室だろう。視界が霞んでいてよく分かんないが。

そして全身が動かない。まるで石で固められているかのように……いや、マジでコレ石で固められてるな？

「へえいリカバーちゃん」

「ちゃんとリカバリーガールと呼びな！」

「リカバリーガール。何で俺こんな拷問服みたいにガチガチ固められてるん？」

「アンタが自分に『嘘』をついて無理矢理動かこうとしてるからだよ。全く、一日で二回も全身の筋肉ぶっちぎる奴が何処に居るんだい！」

「多分リカバーちゃんの目の前」

「トイレくらいなら行かせてあげようと思ったけどその気づかいも不要そうだね」

「この若さで尿瓶は辛いつ!? スンマセンツシタア!!」

背中が痒い。

「……リカバリーガール。俺、どんくらい寝てました?」

「大体3時間って所だね。もうとつくに体育祭は終わってるよ」

「……優勝は」

「アンタの彼女さ」

「いやあまだ彼女じゃないんですけどねえ〜! やっぱ周りから彼女に見えますか〜!」

「なら名実共にさっさとくつつきな」

「……ま、俺はそれでもいいんですけどねー。ほら、ヤオヨロちゃんって意外と男らしい所あるのよさ」

「知らないよそんな事。まったく……セメントス! 四肢の固定だけ残してあと外してやりな〜!」

「おや、もう大丈夫なんですか?」

「こんだけベラベラくつつちゃべる程元気なら大丈夫だよ! 詭弁、分かっているとは思うけど無理に動かそうとするんじゃないよ! 関節がバラバラになりたくなきゃね!」

「そこまでヤバいの俺!?!」

「冗談無しに死ぬ一歩手前だったよアンタ。どんだけ元気余ってるんだか……」

「ハハハ、人間死ぬ気になれば何でも出来るってね」

「……詭弁、アンタはまだ若いんだ。簡単に命を捨てようとするんじゃないよ」

「……簡単じゃないよ、命を捨てるのは。俺の代わりに、俺の命を拾おうとしてくれる人が居るんだからさ」

「なら、せめてその子に余計な心配かけさせんじやないよ。全く……さあ、もう帰りな。アンタは明日休みだけど、アタシらは明日も忙しいんだ！」

「……あー……なんか、スンマセン」

「いいからさっさと帰りな！」

「へい。治療ありがとうございます」

「……はあく。難儀なモンだねえ」

「そうですねえ」

学校の中から校門に向かう最中、松葉杖を突きながら日が沈んでゆく世界をえつちらおつちら歩いて行く。

「いて、て……んお、凄いLINE通知」

『無事?』

『生きてる?』

『死ねカス』

「名前を見なくても誰か分かるLINE通知。『黄泉の国からこんにちは』つと」

『オレがブツ殺すまで勝手に死ぬんじやねえクソ口野郎』

『生きてた』

『後遺症とか大丈夫!?!』

「既読速度マツハかよ。やっぱアイツ面倒なツンデレだわ。『明日休みつてマ?』」

『マ』

『体育祭の打ち上げやるけど来るよな?』

『詭弁は安静にさせてやれよ……』

『体育祭で唯一死にかけた男』

『家族がテレビでみてたけど詭弁の試合だけ放送事故レベルだったみたいね』

『寝てたから知らんけどいづくちやんの試合は?』

『お前の試合よりマシ』

『比較する時点で……』

『今行きます』

『んで体育祭の打ち上げって何処でやるん？』

『駅近の広いカラオケ』

「詭弁さん」

「んう？おお」

スマホから視線を上げれば、いっちゃんこと塩崎茨が薄い微笑みを浮かべ校門の前に立っていた。

「……歩きスマホはいけませんね」

スツと自然な流れで俺のスマホが取られた。まあ確かに歩きスマホしてた俺が悪いな、うん。

「怪我は……大丈夫でしょうか？」

「んんく……まあ歩ける程に回復してもらったし大丈夫だろう」

「そうですか。良かった……。試合後すぐに様子を見に行ったのですが意識不明の面会謝絶と……」

「寝てただけで大袈裟だぜ。……ま、心配掛けたね」

「ええ本当に」

「そこはとんでもないとか言うところよ？……つつ」

「詭弁さんっ」

腕の痛みで松葉杖を落としたら、すぐに支えに来てくれるいっちゃん本当に優しい。唯一固定されていない指先でさりげなくばいたつち。

「まったく、無理をしないで下さい」

困ったように眉を下げて笑いかけるいっちゃん。ヤバいなんか罪悪感。

「……仕方ありませんね。詭弁さんのお家まで一緒についていきましょう」

「ははは、気持ちは嬉しいが駅前までいいよ。体育祭の打ち上げやつてるみたいだし」「貴方そんな身体で参加するつもりですか?」

スン、といきなり無表情にならないで?ムニムニと指で頬を突つつく。

「……あの?」

「ははは、病は気からと言うだろ!こんな怪我でも笑い飛ばせばなんてこと無いさ!明日しつかり休んで気力を回復して、明後日またリカバリーガールに治療して貰えばいい!」

「……はあ、聞き分けの悪いお方……」

「それに約束、忘れてないからな?」

「つ……!ほ、本当に行うのですね……」

「おー、両手のコレ外せるようになったらすぐにでもハグハグしようぜえ!」

「う、す、すぐにはちよつと……せめて1日ほど猶予を……」

「ん?……ああ!大丈夫大丈夫!午後には戦闘訓練とかある日を狙って、放課後に汗の匂いむんむんのいっちゃんを抱きしめるから!」

「な、何が大丈夫なのですか?!」

「はっはっはっはっ」

「ほ、本当にやめてくださいね!」

駅に向かって歩きだしたら、肩を支えるように隣を歩くいっちゃん。既にいい感じに汗の匂いが漂っていることにはまだ気がついてない。いいねしました。

ふ、と気がつけば、正面に凄いニコニコ笑顔のヤオヨロちやんが立っていた。

「……無事なように安心しましたわ。ええ、本当に無事なように」

「んおう、心配かけたね。優勝おめでとう」

「……はい、頑張りましたわ!約束、覚えてますでしょうか?」

「ん、勿論。強くなつたな……モモちやん」

「はい、貴方のお陰ですわ!……それでは塩崎さん?私と詭弁さんは家が同じ方向です
ので代わりますわ」

「いえいえ、八百万さんも連戦でお疲れでしょう。一回戦で負けて、体力が余っている私
にお任せください」

「大丈夫ですわ、既に近くまで執事が迎えに来てますもの。車で詭弁さんの家まで送り

届けますわ」

「車でしたら私も一緒に乗れそうですね。私が詭弁さんの看護を致します。こう見えて何度もボランティアで経験していますから慣れたものですよ」

「うふふ、それこそ大丈夫ですわ。家の執事はそういった事のプロフェツショナル揃いですから、素人よりも質の良い看護が出来ますわ」

「えー、折角ならナース服着たいっちゃんとももちやん見たいなー!」

「詭弁さんは少し黙っていてください!」

「だがが断る!病は気からって言っただろ?多分ナース服着た二人見たら一発で治る気がするなー!見たいなー見たいなー!!……つつ」

「つーああもう急に大声を出すから……仕方ない人ですわ本当に」

「いっちゃんとは反対側を支えてくれるヤオヨロちゃん。おっきいおっぱいが当ててんのよ状態で俺の詭弁さんが起立しそう。」

「い」つつつ……はあ、流石にコレで打ち上げ会に参加は無理か……」

「さ、参加するつもりでしたのね……」

「おう、常に楽しくが Mottoーなもんで」

「初めて聞きましたわ」

「今考えたからな」

そのまま二人に支えられ、本当に迎えに来た黒塗りの高級車の中に押し込められる。そのまま両隣を抑えられたまま車は発進する。

「……つてか、ノリでそのまま付いてきてるけどいつちゃん、家族に連絡とか大丈夫？ 仮にも男の家に行くのに連絡無しはまずくない？」

「お氣遣いありがとうございます。それでは少し連絡させていただきますね」

そのまま小さい声で電話し始めたいつちゃん。……なんかしつかり『男性の家に泊まる』だとか『彼氏か』とか『まだそうではない』とか聞こえるんですけどー。

「詭弁さん、私のお父様が詭弁さんとお話をしたいようですよ」

「えー」

いや、もう本当にえーだわこの状況。そのままいつちゃんに携帯を支えて貰って電話に代わる。

「えーもしもし、お電話代わりしました詭弁です」

「娘を傷物にした責任は取って貰いますからね」

物凄い丁寧な口調なのに怒り全振りなのが分かる声色でしたとさ。

「えーと、傷物も何も、体育祭でも怪我しないように丁寧に場外に叩き出しましたし、それ以外でも娘さんに手を出すような事はしてないのですが」

軽いオサワリは手を出すの範囲外です。

『なっ……貴様、娘が可愛くないと言うつもりか!!!』

うわーお色んな意味で面倒なタイプのお父様ですね。

『ここで決めて貰います。娘を娶るか腹に穴が開くかの二択です』

「電話口でまさかのシヨットガンマリツジ!」

『黙れ小僧!丹精を込めて育て上げ、今まで男に興味を持たなかった娘がいきなり男の話題を出したんです!!これで何もない訳が無いでしょう!!』

「いやあ、高校に上がり周囲の環境の変化で男性に興味を抱く事なんて普通の事では……?むしろ同じ女性に興味を持つより一般的だと思うのですが」

『ならば何故いきなり男の家に泊まりに行くことになるのです!!男の家に泊まって、そういうことが起こらない訳が無い!!』

「偏見がすごい」

流石にこの両手脚で間違いは起こらないんだよなあ……もし完治してたら間違いは起こるかもだが、多分ヤオヨロちゃん以外に家に連れ込んでそういうことを起こそうとしたらヤオヨロちゃん家の執事に消される。多分というか、絶対。

『茨も昔はお父様と結婚しますわとそれはもう目に入れても痛くない可愛さでした』
「いつちゃんが小さい時でもそんなこと言うとは思えないのですけど」

小さい時から『汝隣人を愛せよ』を体現してたと思います。偏見だけ。

『反抗期らしい反抗期も無く、小学校でも自ら進んで学級委員に立候補したり、生徒会長となり学内の不正を正したり、学校で行われてた不祥事を摘発したりとそれはもう立派な人間でした』

「小学生で!？」

俺が小学生の頃はヤオヨロちゃんのおっぱいを触ることしか頭になかったぞ。いや、それもどうかと思うけど。

『ともかく！貴様のような何処の馬の骨とも知れぬヤカラに大事な娘はやれん!!』
電話の声が聞こえてたのか、携帯を支えていたいつちゃんがまた代わって話す。

「何処の馬の骨ではなく、詭弁答弁さんはかの有名な弁護士の一人息子ですよ、お父様」
『ええい茨！男の大事な話に割って入るんじや……何、詭弁と言いましたか?』

「はい。叩き上げの弁護士、詭弁勉強先生の一人息子です」

『……さっきの男に代わってください』

「……えー、代わりました、詭弁です」

『娘をよろしく願います』

「いや待って」

素晴らしい手のひらくるるに感心するがそれはそれでまた話がややこしくなる。

『家の娘は何処に出しても恥ずかしくない娘です！詭弁先生の一人息子なら、これ以上

のお相手も居ない!どうか、娘を幸せにしてやってください……!おい、茨について彼氏が出来たぞ!本当ですか!?ああ……あの茨に彼氏が出来るなんて……!」

「凄い勢いで外堀が埋められていく!だからいつちゃん……茨さんとはまだそういった関係ではなくてですね!」

『娘も本気でプロヒーローを目指している身!高校を卒業したら、すぐにでも貴方に相応しい立派なレディになるでしょう!』

「いや、あの、俺もプロヒーロー目指してますんで……」

『お電話代わりました、茨の母です。茨にはもしもの時のためにゴム製のお守りを持たせております。……万が一の時は、家で育てる準備も出来ていますので遠慮無くご相談ください』

「信頼度凄いなっ!!親父は塩崎家に何した!!?や、だから茨さんとはそういった関係ではなくて……マジか切れやがった!」

「ふふ、お父様もお母様も大はしやぎでしたね」

「なんとと言うか、話の聞かなさが娘に遺伝しなくて良かったな……ところで、ゴム製のお守りがどうかか言ってたけど……」

するとその言葉でいつちゃんもピタッと停止し、見る見るうちに顔が真っ赤に染まる。耳も首もとも赤く染まった。

「使ったことはありませんが、使用方法は勉強しましたので大丈夫です……」

「使わねえよ!!」

「つ、使わないんですか!？」

「ごめんそういう意味じゃない!!」

「そ、その……今日は危険な日ですので使用して頂けると……でも詭弁さんがどうしてもと仰るなら……」

「んゝんゝゝ遺伝してるじゃあゝん!」

頭を抱えて悶絶していると、横からふうー、と風船が膨らむような音が聞こえた。

思わずそつちを確認すると、バナナ型の細長いゴム風船を膨らませているヤオヨロちゃんがニコニコ笑顔でこつちを見ていた。

「私が居る限り物資不足はありませんわ」

「うん、分かったからソレしまつてくれない?使わないから。使うような状況にならないから」

「うふふ。ところで詭弁さん、勝負のお話覚えてますか?」

「いや、まあ覚えてるけど……」

「その時詭弁さんは、『俺が勝つたらヤオヨロちゃんとおせつせ』って言っていましたね」

「ん、んゝ?そんな事言ったかなあゝ?」

「私、調べたんですよ。『おせっせ』の意味を」

はい死んだー。俺は今日死にましたー。HDDは全消去しておいてください。

「詭弁さん。溜まっているというやつでしたら、素直にそう仰っていただければ良いのに」

「い、いやあその、ね……いわゆるジョークって奴でしてえ……」

「そんな事を冗談でも言ってしまう方の家に、女性が寝泊まりする? うふふ……それで本当に何も起きなかったら、それこそ冗談というものでしょう?」

「……助けて運転手の方!」

「責任とってお嬢様と結ばれてください」

「四面楚歌ア!!」

「そ、その。こういう事は初めてですが色々ご指導お願いします……」

「詭弁さん。私たちが直々に看護してあげますからね?」

「待つて!マジで待つて!ウツソだろこういうのって俺のキャラじゃない!!?」

暴走する女子二人に囲まれながら四苦八苦していたが、俺の家に到着した後一悶着あり、親父の言葉によって何とか事態は沈静化した。

その後、普通に三人でお泊り会した。俺の純潔と二人の純潔は守られた。

俺は一途を止めるぞージヨジヨー！

自分のヒーローネームを考える時間が過ぎ、放課後に職場体験の行き先を考えながらリカバーちゃんの治療を受けた。

「ハイ、体育祭の時の傷はこれで完治だよ。全くアタの体力はどうなってんのかね」

「肺活量メタクソ鍛えてるけど関係ありますかねえ」

「肺活量だけで体力がつくか」

今の俺ならどこぞの死刑囚の如く5分間潜水できるだろう。やった事無いけど。つてか泳げないけど……。泳げないのはヒーローとして致命的ではないかと思つたがヤオヨロちゃんに手取り足取り教えてもらえばいいよと脳内会議で即決採用されました。

♪

俺のスマホが鳴る。やっぱバイブモードにしてなかった。

「んいモシモシ。たつた今保健室で治療完了、どーぞ」

『はあ？いきなりどうした……。まあいいや、今日は訓練室αが使えるからそつちに来てな』

「おーい了解。すぐに向かう……。じゃ後で、あーい。あーい、はーい……。」

「引く手数多の様だね」

「ええそりや、B組全員にガンガンアピールした甲斐があるってもんで」

放課後になると、事前に予約した訓練室及びトレーニングルームが使えるようになる。その事を知って俺はすぐさまA組B組全員に俺の個性の有用性をアピールした。俺の個性によって応援され、強化される事で個性の伸びが違ってきたり、習熟度が格段に違ってくる。

んまあ、他の奴等を出し抜く様で若干気が引けるが、俺も一秒でも長く個性トレーニングをしたい。だから俺自身が訓練室を予約するだけじゃなく、他の人に便乗する形で訓練室に入り浸るようになった。

無論、強化されるのは個性だけじゃなく筋肉や身体捌き等も強化されるので、何かにつけて訓練室に俺を呼ぶのがセットになっている。俺的には大変良い結果に繋がっていると思う。

「つてなわけで訓練室αに行つてきますんで！」

「完治したとはいえ、また無理に身体をブツ壊すんじゃないよ！」

「分かつてるつてえー！」

訓練室αは確かここから結構近かったな。

購買で買ったカツサンドを食いながら早歩きで向かう。

「はあいお待ちませえー！ヒーローを支えるヒーロー『チャツティエイド』のお出まじよ！」

「……ああ、ヒーロー名か。チャツティエイド……まあまあいいんじゃない？」
「ん」

「詭弁さんらしくて良いと思います」

「そうか、良かったか。……じゃあこれを第一候補にしよう」

「決まってるのかい！」

「いつかちゃんの鋭いつつこみが額を貫く。割と痛い。」

「いやあ、だつてヒーロー名とか全然考えて無かつたんでさ。最初『トウベン』で良いと思つただけだサいつて言われて……俺の名前だサいつて言われて……」

「ん」

「んう、スマンのダイちゃん。んまあ色々考えてる最中な訳」

「ふーん……ところで詭弁、職場体験は何処にするか決めた？体育祭の時かなり大立ち回りしてたし、やつぱ結構来てた？」

「んまあ割と。A組の中では多い方だったな。でも何処にするか決めてないんだよねえ……やつぱランカーのミルコの所かなあ」

「……ミルコさんは美人な方ですからね」

「うえーいいっちゃん、俺が顔だけで職場体験の行き先を決めるような奴だと思いですか?」

「ん」

「思います」

「……いつかちゃん?」

「否定できる材料無くない?」

「揃いも揃ってひでえや。んまゝあ確かにオツサンの所行くより女性の居る所の方が良
いけどさ」

「はいはい。折角訓練室借りられたんだからお話もここまでにしよう!じゃ詭弁!いつ
も通り頼んだよ!」

「うい」

そうして始まる、個性を使った組手。俺はとにかく相手を鼓舞し、褒めて伸ばしながら相手の攻撃を避け続ける事で戦闘勘を養う。相手は調子のよい状態で個性を使い、自分の限界を伸ばす。

飛んだり跳ねたり、当然相手の胸部装甲も跳ねまくるから大変眼福……いやいや、これは動体視力のトレーニングなだけでして。

そうして一人息が上がってきたらすぐに次の人と交代。休みながらも伸びた個性を使い続けて鍛える。

そんなトレーニングの中、唯一ひとりだけ一切息が上がらず、延々と動き続けられる奴が居た。そう、俺だ。笛を吹いて全員の鼓舞をしながら、迫りくる拳や脚を避け、視線は揺れまくる胸を捕らえ、個性を鍛え続ける。火事場の馬鹿力ではなく素の身体能力を鍛えて、いざという時の伸びしろにする。

「ゴー！ファイト！穿て！大拳！レッツゴー！」

「はっ、はっ、く……マジでスタミナお化けだな……！」

「はぁー、はぁー、……やはり流石……詭弁さんです……はぁー」

「ふう、ふう、ん……」

はあはあ喘ぐ美少女三人に囲まれる俺。なんてご褒美！

……まあ、今日みたいな日は珍しいが。これが普段だったらはあはあ喘ぐ野郎三人に囲まれる俺ってなるし……精神的にキツイわ。

そしてただ応援して伸ばすだけじゃない。時には発破をかけて、尻を叩いてプルスウルトラさせる事もある。……本当に尻を叩いている訳ではない。

「さあどうしたどうしたー!?そんなんじや混戦時に役に立てないぞー！」

「くっ……素早いですねっ……！」

「ぜえー、ぜえー、腕が上がらない……」

「ん……」

更には言葉で威圧することで、相手の行動や個性を抑制したりも出来るようになってきた。抑制された中でも個性を使う事で、今度は個性の底上げになるようだ。

「弱い！弱い！弱すぎる!!もつと早く！速く！疾く!!最小から最大になるまでが遅すぎて掠りもしないぜー!」

「はあつ、はあつ、ん!!」

「はー、はー、……また目に見えて変化したね……」

「この中では小大さんの個性が一番変化が分かり易いですから……。個性を鼓舞して強化したり、逆に抑制できたりと、本当に色々できますね……」

そうして四人が部屋の中を動き回り、俺以外の全員がへばった所で俺も休憩する。息が上がらないとはいえ汗は掻く。スポドリを飲みながら俺なりに今日の動きを反省する。

揺れる乳を見続けた所為か動体視力が向上し、避ける事がかなり出来るようになってきた。だが避けて反撃するまでのラグがまだまだ課題か。まあそもそもそんなに接近しないように立ち回るのが一番なんだが。うーんおっぱい使ってそんなトレーニング出来ないかな？

そうして椅子に座って一息ついていると、隣にダイちゃんが座ってスポドリを飲む。この子もヤオヨロちゃん程ではないがいいおっぱいだ。

「はあ、はあ……ん？」

「何で女の子って汗かいてもいい匂いするんだ？」

「んっ?!」

ゲホゲホとむせるダイちゃんの中をさする。背中も柔らかいとか狡くない？何が狡いのか俺も知らんけど。

「またセクハラしてる……」

「違うぜいつかちゃん。これは長年疑問に思ってたことがつい口からこぼれ出てしまっただけだ」

「アンタがどう思ってるかじゃなくて相手はどう思ってるかが重要なの！相手がセクハラと思えばセクハラだよ！」

「ははは、それならコレはただの友達同士のこゆみにけーしよんだから問題ないな！」
「女の子に汗の匂いの話を振るな！」

「俺は男女差別はしないんだ！女の子の汗の匂いの話はこの前も物間と話したぞ！」
「意外すぎるヤツとなんてこと話してるんだ！」

「なーダイちゃんなー、セクハラじゃなくて普通の友達同士の会話だよなー」

ダイちゃんと肩を組んで仲良しアピールする。なーかよーしアピール。

「……………」

「ほらダイちゃんもそうだってき！」

「あーもーこのアホ！汗臭い状態で女の子に抱きつくな！」

「えっ、嘘、俺汗臭い……………」

「……………」

スンスンと匂いを嗅ぐダイちゃん。今まで汗かいてもそんな臭いとか言われたこと無いから、もし臭いとか言われたらかなーりショックなんですけど……………」

「……………」スンスン

「……………」臭くないよね……………」

「……………」スンスン

「……………」小太さん？」

「クンカクンカクンカクンカ」

「うおおおお!!?なんかダイちゃんバグった!!?」

「ちよ、唯！落ち着きなって！」

ダイちゃんに押し倒されて脇に顔を突っ込まれる。あまりにも予想外過ぎて身体に

力が入らないままされるがまま。いーつかちちゃん、これこそセクハラではないでーすかー？

わちやわちやしてるといつかちちゃんがダイちゃんを引き剥がしに掛かるが、凄い力で抵抗する。お前何処にそんな力が……とか思っていると不幸な事故が起きた。

「あつ」

床に落ちた汗によって滑ったいつかちちゃんが俺に覆い被さるように倒れ、俺といつかちゃんの顔の距離が僅か数センチまで近づく。

いつかちちゃんの瞳に俺が反射しているのが見えるほどに近い。

「……」

「……いつかちちゃんってリップ塗ってる？」

「つつつ!!」

顔を真っ赤にしながらバツタのように跳ねて離れるいつかちちゃん。その反応は結構傷つくですよ？

ちなみに支えるため、つい咄嗟に出した手はいつかちちゃんのお胸をキャッチハート(物理)してしまってたが気付かれてはなかったもよう。すっごい柔らかかったです(言葉消失)。いつかちちゃんが凄いジト目をしてるからそっちにはバレてると思うけど。

それとダイちゃんだが、いつかちちゃんが咄嗟に出した腕の下敷きになった為気絶しま

した。

「あつ……ご、ごめん唯!!」

気絶したダイちゃんを担いで、保健室に向かういつかちゃん。ほんま男前やでえ。

そして訓練室に残される俺と、凄じ目目のいつちゃん。

「詭弁さん」

なんだろう。言葉に感情が感じられないよ。

内心震えていると、ため息混じりに隣に座られた。

「八百万さんの気持ち少し理解出来ました」

「今回は俺悪くない?」

「今回は?」

「今回も!!」

あぶねー口が滑つ……なんでもない。

凄じ目目だが、ふいと視線が外され『まあ詭弁さんですし』みたいな顔すんのやめ

なはれや?

「そ、そういえばいつちゃんはヒーローネーム決めてある?」

「私ですか? 私も特に良い名が思い付かなくて……『マリア』などどうか、と言われたりしたので……」

「『マリア』……慈愛の聖母……それ自分で名乗って恥ずかしくない？」

「少し……」

「……んまあ、プロヒーローってキャラも大事だし、しつかり考えな」

「詭弁さんが仰ると説得力が違いますね」

「そりゃあ歩く説得力と呼ばれているからな」

「歩く色欲の間違いでは？」

「はははこやつめははは」

何も言えないとはこの事か。いきなりぶつ込んでくるいつちゃんも好きよ。

「あ、そうだ。体育祭のご褒美、今やっていい？」

「今!?じ、事前にお伝え下さいと申したではないですか!!」

「聞いたが、承諾した覚えは無いなあ!敗者に権利など無いのだよ!!」

椅子から飛び上がるように距離を取るいつちゃんだが、俺もまた追いかけるように椅子から飛び上がる。

訓練室はそこそこ広いとは言え、追い駆けっこをするには少々狭い。あつという間に部屋の隅っこに追い詰めて、ジリジリにじり寄る。

「お、お待ちください!今は汗も引いておりませんし、それに匂いが……ふ、不衛生ですから!」

「ははは！分かってないなあ！ハグハグは五感で楽しむもんだ！折角の匂いを洗い流すなんて勿体ない！」

「ご、五感で楽しむ!?私は何をされるのでございましょうか!?!」

「そりやあ勿論誰にも見せられないような事さ！さあハグハグしやうぜえ！」

「御無体な！お、お止めください！」

「やーめない！」

ぱつと抱きつき、俺を支点にくるりといっちゃんを回し、改めて後ろから抱きつく。いっちゃんの髪がチクチクする。

「ああ……」

「ははは、いっちゃんも誘い受けが上手いなあ。その気になれば個性を使って俺を拘束する事も部屋から逃げ出すことも簡単だったくせにー」

「うう……だつ、だつて本当に嫌な訳がないじゃないですか……」

後ろから抱きついていてから表情は見えないが、長い髪から覗く耳が真っ赤に染まっている。

「てえてえなあ！」

「あつ……！」

うなじに顔を突つ込みいっちゃん匂いを嗅ぐ。雨上がりの自然公園の匂いと女の子の匂いが混ざつてもう凄い（語彙消失）

「うはあ、いっちゃんの腰細いなあ。ちゃんと食べてる？」

「ふあう……か、身体は資本ですから……」

「腰細いけどおっぱい中々大きいよね。何カップ？」

「そ、それは……お許してください……」

「おへそはこころ辺かなあ？」

「は、ひあ……くすぐりたいです……」

「いっちゃんって週に何回オナニーしてんの？」

「っ!?!、してません!!」

「ほんとにー???」

「ほ、本当にですう……」

「……ふうーん？」

「あつ、詭弁さん、な、何をなさ……ひあああつ」

「嘘はイケナイなあお嬢さん。俺の前で嘘八百はあエンマサマに舌を抜かれるぞ？」

「ひあ、ひやめへふやひやい……」

「なら、正直に答えてごらん？何回オナニーしているかを……」

「ふあ……う、つ、月に二回程……っ!」

「いつからオナニーし始めたの?」

「うう……ち、中学一、年生の頃から……です……」

「ふうん?じゃあオナニーのオカズは?」

「はう……それは……お許しください……ひうつ」

「ちゃんとやってくれないともっとおへそをイジメるよ?」

「ふう、ふう、う……その……お、男の人に、縛られるのを……ふあうつ」

「ふうん、マゾなんだ。じゃあもつと強く締め付ける様に抱き着いたほうがいい?」

「あつ……は、はい……」

いつちゃんの耳元で息を吹きかけるように言葉で攻めながらぎゅつ、ぎゅつ、と抱き締める。その度にいつちゃんもゾクゾクと震え、更に俺の心を悪い方向に倒していく。

いつちゃんのジャージを捲り上げ、くびれた腰の中心にあるおへそを直に弄る。ぐり、ぐり、ゆっくり円を描く様に。指を動かす度に、後ろから抱きついている俺にもたれかかる様に全身の力が抜けてゆく。

いつちゃんはトロオと溶けたような顔で虚空を見上げている。俺の中の悪い心が、更にいつちゃんを溶かそうと悪魔のような天啓を授けた。

いつちゃんを強く締め付ける様に抱え、訓練室αに備え付けられた全身鏡の前に移動

する。

蕩けたいつちゃんが、鏡に写る自分の顔を見た瞬間に顔を赤くさせながら血の気が引いた。

「あつ……！ああつ……！そんな……止めてください……っ」

「ほら、鏡に写った自分をよく見なよ。男に締め上げられながらも恍惚とした表情を浮かべる自分をさ」

「い、嫌あ……こんな、嘘です……、あんまりです……」

「いつちゃんは本当にやらしいなあ」

「ひあ、ふ、はああ……」

いつちゃんにも見やすいように両手を使ってへその穴を広げ、指を入れて掻き回す。くにくにと形を変えるへそは、なんだかとても淫靡だった。

「ああ……悪魔あ、詭弁さんは悪魔ですっ……」

「可愛い女の子にイタズラしたいだけさ」

「何やってんの……？」

ゾツ。

背中に感じたことの無い程に冷たい針が刺さったような感覚が走る。

ぱつといっちゃんから離れて声のした方向を見れば、瞳に闇を携えたいつかちやんが個性を発動していた。

俺が離れた瞬間、いっちゃんがぐにやつと床に倒れ込んだが気にしてられない。俺は此処まで濃密な気配を感じたことが無かった。中学生の頃行っていたヴィジランテ行為の最中に出会ったヴィラン共やU S Jに現れたヴィラン共なんて、所詮チンピラに毛が生えた程度の物でしか無かったと思いきらされた。

俺は、今日、死ぬ。

「ねえ、もう一回聞けど……」

何、やってたの？」

意識を失う直前に見えたのは、人よりも遥かに大きな拳が迫ってくる光景だった。

おっすお願いします！んで何で俺を指名したんすか！

「コスチューム持ったな。本来なら公共の場じゃ着用厳禁の身だ。落としたりするな」

「はーい！」

「わーい！」

「返事は伸ばすな、『はい』だ芦戸」

俺は!?

「一々反応しない。成程、相澤先生は合理的だな」

「どういう意味だめっちゃん」

「自分で分かってるだろう」

思わず（・ω・）となった。お前、まるで聞き分けの無い子を叱るかのような……。

「モモちゃんは何処に行くんだっけ？」

「リ्यूキユウ事務所ですわ！色々考えたのですが、やはり受けた指名の中で一番トツプに近い方が学べることが多いと思いまして！」

職場体験に気合が入ってるのか、さつきからずっとプリプリしてる。皆がヤオヨロちゃんを見る目が心なしか優しい。

「……ところで、結局詭弁さんは何処に行くのかを言ってくれませんでしたね……」

「ん? ああ。俺も何処に行けばいいのか分かんねえから」

「はい?」

「だから俺はこの駅から何処に行けばいいのか分かんないって事」

「……えー、と。冗談の類ではなくてですか?」

「おう。なんせ俺の職場体験先は『居たアーー!!』声でつか」

改札の内側から特徴的な耳を携えた、小麦色の肌で白髪ロング、赤眼の女性がズンズンと歩み寄って来た。

「よオ! お前が詭弁答弁か! テレビで見たよりタツパあるなア」

「どうもミルコさん。テレビで見た時より脚ムツチムチですね。モモちゃんのくびれより太くない?」

そう、彼女こそが俺を指名した中で最も強いヒーロー。『ミルコ』だ。俺と並んでると頭一つ分小さいな。

「き、詭弁お前ラビッツヒーロー『ミルコ』から指名受けてたのかよ!!」

「ラビッツヒーロー『ミルコ』! 単独でのヒーロー活動でビルボードチャートTOP10入りしてる、名実ともにNO.1女性ヒーローだ! 詭弁君そんなところから指名貰えたなんて凄い!」

「意外とちいせエ」

「……詭弁さんは、やはり褐色肌がお好みですの……？」

「ヤオモモがまた闇を噴き出してゐる!？」

「……やはり?」

「あ、あく、ミルコさん。何で俺に指名入れたんですか?」

「ああ!?!お前が鍛え甲斐のありそうなサンドバッグっぽいからだ!」

ミルコの周囲の時間が止まる。

「はい?さんど……?」

「テメエのオヤジには前に辛酸舐めさせられてなあ……!今思い出しても腹が立って来た!」

俺の親父は若きミルコに何をした。……いや、今も十分若いのだが。

「……いや、私怨なら親父に直接行けえい」

「もう行つた!アイツ枯れ枝みたいにすぐ折れやがるから蹴り甲斐ねえんだ!その点お前は中々に頑丈そうだからなあ……楽しみだ♥」

ニタアと口を歪めるミルコ。俺は何をさせられるのでしょうか。

「ヒエ……あの、相澤先生、俺体調不良で休んでいいですか」

「腐った性根叩き治されて来い」

「教職者が暴力推進するなよ!!」

「ヒーローになるなら必要な事だ。さっさと行け」

シツシツ、と手を振られMマジでキレる5秒前K 5

「なあと、足腰立たなくなるまで一週間ミツチリ私が鍛えてやる……!さあ行くぞ!!」

「職場体験とは!!!というか何処に行くの!?!ねえ!?!」

そのままミルコに首根っこひっ捕まえられ、引きずられるように何処かに連れていかれた。

おい誰だ今ドナドナ歌った奴。でんちゃんか。覚悟しとけよ……

「……嵐みたいな奴が台風に連れてかれた」

「一週間後生きてるかなあ」

* * * * *

「はははっ!結局お前も乗り気じゃねえか」

「ミルコさんに引きずられたままにいるより一万倍マシです」

あの後何とか立ち上がって普通に歩き出した。

歩きだしたはいいけど何処に行くんです？

「お前、私の活動体系は知ってるか？」

「事務所もサイドキックも持たないフリーランスってヤツですかね」

「そうだ。基本的に私は要請があれば全国何処にでも向かう、要請が無い時も勘で色々なところに向かう」

「勘」

「勘だ。私らプロヒーローの給料は歩合制だな。まあ英雄ならそこらもしつかり教えてるだろ。私が一から全部教える意味もないな」

「はあ……で、何処に向かっているんですかね」

「プロヒーローつつつてもヴィラン退治でもないのに街中で個性を使った訓練なんて出来ねえからな。存分に身体を動かせる場所がある」

そうして連れてこられたのは、小さな体育館のような場所だった。

「ここはプロヒーロー用の訓練室みたいなもんだ！喜べ今日は貸しきりだぞ！」

「……それって一日中ポコポコにするという宣言ですか？」

「そうだ！気合い入れないとすぐ死ぬぞ！」

「ヒーローに殺されるん俺?」

中に入ると思ったより広く、何より頑強に作られているのが分かった。

そっかー、そうだよなー。普通この手の施設って有料だよなー。予約制とはいえ、雄英が訓練室やトレーニングルームを無料開放してんのがおかしいよなー。

「さあ、さつさとコスチュームに着替えろ!」

「え、あつはい。……更衣室は?」

「時間がもつたいねえ!別に見られて困るような身体してないだろこの場で着替えろ!」

「うっそーん」

まあ、普通に鍛えているから見られて困ることは無いと言えば無いですけども。

渋々その場でサツと着替えた。俺のコスチュームは言うなれば応援団長!!ってな感じで、黒の長ランに白いハチマキ、首から笛を下げて白い手袋をはめれば着替え終了。丈夫な事と見た目以上に動きやすい事、後長い袖に対ヴィラン用捕獲ネットを仕込んでいる以外に機能は無いのだよ。

「よし!さあやるぞー!」

「うーんミルコも早速病かあ」

雄英の教師陣を中心に流行している早速病、まさかのプロヒーロー共通だった件。

んニッ！とミルコが笑ったと思った瞬間、ミルコの姿が消えた。

「嘘でしょ？」

と言いきる間もなく、顔を触られたと思った瞬間勢いよく突き飛ばされた。

「どうしたオラァ！まだ準備運動にもなっちゃいねえぞ！」

んもー本当に流石トツプクラスのヒーロー。全く影も見えやしなかった。これでもし今のが腕の押し出しじやなくて本気の蹴りだったら今頃この体育館の壁に汚いオブジェが出来上がってたところだ。

「ん、痛くない。効かない。俺は強い。俺は速い。俺は、最強だ」

「何ブツブツ言ってるんだア!？」

勝ち気なバニーことミルコは、なんと言うか体術特化のカツちゃんレベル90くらいに思っておこう。なにそれ無理ゲー。

「オラァ次行くぞ！今度は反応してみろ!!」

っだあん！と床を蹴り抜くミルコ。さっきの一撃より少し早くなっていたが、今度はしっかり見えている！

「ミルコやっぱ乳揺れプツ」

「つらあ!!ああ!!?今なんか言ったか!？」

しっかり見えているけど身体が反応出来るとは言っていない!!勢いよくバルンと揺れ

る胸は見えた!

その後、何度も何度も突き飛ばされながらも揺れまくる乳や尻を見て、何とか反応しようと思っても俺の身体は思考速度についてこなかった。

「タッチ!これじゃあ本当にサンドバッグと変わんねえな。おい!少しは個性を使つて反撃でもしてみろ!!」

「うっぷ……むちゃやくちや言いよるで……」

何度も突き飛ばされた影響で絶賛気持ち悪い。胃の中身をリバーズしてないのは、単に朝飯を食ってないだけだ。

「ヴェ、はあ、マジでさあ、酷いわあ。こちとらまだ高一やぞ、それなのに良い大人が転がしにくるとか、ないわあー」

「ああ!?!」

「無理ゲーだぜ、あー無理無理、無理無理無理のかたつむり。やあつてらんねえー」

「っチ!体育祭で見たときは多少見所があるつて思ったが見込み違いだったぜ!」

「そーそー、俺みたいなのがさあ……何も馬鹿正直に正面から突つ込むのは、それこそキャラじゃないんで!」

「っ!?!」

例え相手がプロヒーローだとは言え、やられっぱなしは性に合わない。

やる気ダウナーツイート亡キき眩キき

受けた相手は身体中の戦意や気力等、いわゆる『やる気』を奪われる。ダラダラと動き、楽な方楽な方に転げやすい。

全く酷いデバフだが、このまま良いようにやられっぱなしは男としてあり得ない。少なくとも突き飛ばされた回数分は乳や尻を揉ませてもらう気で攻める。

「くっ!? 中々生意気な個性だ面白エー!」

「面白い? 恐ろしいの間違いだろ! おれの個性はただ聞くだけで効果を発揮する! 耳の良いミルコは特に俺の声に過敏に反応するのさ! ほうら、耳元で囁かれるのはどんな気分だ?」

「っ! 離れろ!!」

ミルコが両腕を突きだし、空を打つがそこに俺は居ませんよ。

「ははは、俺はずっとここに立ってるよ! 今、ミルコはどんな音も聞き逃さない程に聴覚が敏感になってる。足が床を蹴る音、建物の外で子供たちが遊んでいる笑い声、おつと! 今、遠くで誰かがくしゃみやみをしたな。衣擦れの音や、呼吸する音、心臓の音がどんどん大きく聞こえる。すると今度は不思議な音が聞こえてくる。小さく、小さく囁くような子供の声。笑っているようで、泣いているようで、怒っているようで、それでいて何の感情も届かない程に暗い声。ミルコ、ミルコ、どうして、どうして。子供の声は一

人、また一人と増えていき、終にはミルコを取り囲むほどに大勢の子供がミルコに囁き掛ける。ミルコ、ミルコ、どうして、どうして……」

ミルコの顔色が一気に青ざめていく。俺の言葉を引き金として、今ミルコには本当に子供の声が聞こえている。それがミルコ以外に聞こえない幻聴だとしても、そこに、居る。

嘘うそはちミリオン八百万

俺が話した内容を実際に起きていることが如く深く思い込む。無論、あまりにも荒唐無稽な事を思い込ませる事は出来ないが、言葉を重ねればそれに似た事が出来る。

子供の声をチョイスしたのは、ミルコは小さな子供に人気のヒーローだから。沢山の子供に囲まれるような経験はしたこともあるだろうし、何よりミルコが想像しやすそうだったから。

ジワジワと毒のように効いてくるダウナーツイートやる気亡き眩きと嘘うそはちミリオン八百万のコンボによつてフラリとよろめくミルコ。相手はプロヒーローのランカーなんだ。手段を選んで勝てる程俺は強くなければ、ミルコは弱くない。

「耳を塞ぎたいか? 塞いでも無駄だ。その声は小さくても、心の底の叫び声なのだから。『ミルコ、ねえどうして、どうして……』」

「くそっ! 今まで出会ったことのねエタイプだ! テメエがヒーロー志望で良かったよチ

クシヨウが！」

罵声を出すことで必死に気力を絞り出してるようだが……もう、遅い。錯乱して前が見えていないミルコに近づくのは容易かった。

『ミルコ、ミルコ、どうして、ねえどうして……』

どうしてウサギの尻尾は真ん丸なおおおお!!!
「びゃあああああっ!!!?」

「あつ……その……お、思ったより可愛い叫び声でしたね」

「死ねエ!!!」

「お”ぜふ”ん!?”」

ミルコの本気のソバットによって壁までぶっ飛んで行き、俺は勢いそのままに壁のきたねえオブジェになった。

灰かに香るアンモニア臭と共に俺は意識を失った。

生存競争ですよ！・ミルコさん！

気がつけば、いつの間にやら私服に着替えてるミルコが匂うだち……もとい仁王立ちしていた。

「起きたか。まあテメエの力量はだいたい理解した。これからは多少マトモなサンドバッグにしてやるから覚悟しとけ」

「サンドバッグになるのは確定っすか」

「まず、テメエの弱点は即効性が無い！基本的に二人以上で組んで動くことが前提だろうが、ソロ活動出来ないヤツに現場で発言力はねえぞ！」

「……はい！」

「よし！いい返事だ！私とテメエとはタイプが違う！戦いで教えられることは全然ねエからとにかく実践だ！いいか、テメエは私の攻撃を全て避けて、私に触る事を意識しろ！」

「避けて、触る……ですか」

「そうだ。お前、人を本気で殴った事無いだろ」

「……はい。分かるんですか？」

「ツたりめえだ。それで体育祭負けただろお前」

やっぱ分かる人には分かるか。俺は誰かを本気で殴った経験はない。少なくとも、脳のリミッターを外している時に誰かの身体を直接殴った事はない。

「本気で殴った経験が無ければ、手加減が出来ない。手加減出来ないから、殴れない。だからまずはリミッター外した状態で、相手に触る事から始めろ」

「うーん流石プロ」

正直、サンドバッグにするって聞かされた時はなんて脳筋なと思ったが、実際にはすっかり考えてあるんだな。

「テメエ今すげエ失礼な事を考えてるな?」

「ははは、ミルコって見た目以上に考えて動いてるんですねえー」

「よしおしテメエそこを動かすなよ」

「お断りします!」

ミルコの飛び膝蹴りが顔面に飛んでくるが、しゃがんで避ける。やはりまだ調子が戻ってないのか動きにキレが無い。

そのまま潜るようにミルコを遣り過ごし、後ろから抱きつくように触れ……

「そう易々触らせるかよ!」

ミルコが空中で縦回転し、伸ばした脚で俺を踏みつけるように再度跳躍する。そして

少し離れた場所に着地したと思ったら、すぐに俺に向かって跳躍する。

「っ！ウサギだけに跳ねるのがすブツッ!!」

「はっはア！くつつちゃべらなきや発動しねえなら喋る間無く攻めりや良い！私がヴィランなら喉を潰してやるところだ！」

「怖い」と言うの止めて!!」

んまあー確かにミルコの言う通りだ。個性が強力なら、発動自体を抑えりやいい。実際ヤオヨロちやんとのヴィジランテデートの時も、無力化する際に個性に関係ありそうなのはガツチリ縛ってたし。俺の場合口を抑えられたらそこまでだ。

ンだからって履いてた靴投げる!? 凄い芳しい匂いでむせそう。

「オラオラア!! さっきの威勢はどこ行ったア!!?」

「口まわりばつかし狙わないでくれませんか!?!」

靴を脱いで、ムレツムレの足先が俺の口……つまり鼻先を何度も掠める。掠める度にミルコの足の匂いを嗅がされる訳だからもう色々としんどい。発狂しそう。俺の詭弁君がスタンダップトゥーザビクトリーしそう。

いやあー着ているのが長ランで良かったわー! 普通のジャージだったら詭弁君の詭弁君がピョンピョンしてるのがばれるところだったわー!

「どうした? 動きがニブくなってきてるぞ!」

「そりやニブくもなるわこんなん!」

「オラ足元隙だらけだア!!」

「さべっじ!!」

顔に飛んでくる蹴りを必死で避けていたら、思わず揃ってしまった両足が纏めてミルコの蹴りでなぎ払われる。両足を刈られ、瞬間宙に浮いた俺は重力そのままに床に仰向けて倒された。その直後ミルコの足が俺の顔に乗せられる。おい人を足蹴にするな。

「つたく、ガキの癖に口は達者で生意気なヤツだ!だが気に入った。これから一週間ガチで半殺しになるまで鍛えまくってやるよ!」

「ふむぐむむ、ふむむむぐぐむふふむむむむ!」

「ああ?何言つてつかわかんねえなア!いいか?テメエみてえなクソ生意気なガキには徹底的に上下関係を教え込んでやる!分かつたら『ミルコさん』と呼へニヤツ!???」

「よへにや?何が言いたいのか分からんなあ!」

一応年下として最低限の礼儀は弁えていたつもりだが流石に顔を踏まれるのはかなり頭にきたので、踏みつけていた足を裏から舐め、僅かに浮いた隙を突いて足の指を甘噛みする。

「ぴあっ!?!て、テメエ何してエひっ!?!」

甘噛みしながら足の指と指の間を舐め回す。

噛み噛みペロペロしているとすぐにミルコが脱力し、その隙を突いてミルコの脚を抱き締めるように捕まえ、転がる。

「はっ、わピッツ!!」

ミルコを引き倒し、うつ伏せにした状態でミルコの脚の間に俺の脚を差し込み、足を抱えたままミルコの上に跨がる。いわゆるさそり固めと呼ばれる極め技だ。

「ミイルコさんよお……俺にもプライドつてもんがあるつてのに顔を踏むとはどういう見ですかねえ」

「くっ!?クソガキテメエ私の足をな、舐めるとか気持ち悪い事をしやがって!離しやがれ!!」

まあ?分かるよ?ミルコみたいな勝ち気な気質の人は、その後の人間関係のために一度はつきりとした上下関係を決める必要があることは理解出来るよ?でもさあ、やり方つてものがあるでしょ?

「ミルコさん、知ってます?人の足裏には大量の毛細血管が通つてて、大変敏感なんですよ。そしてウサギの足は、人の足よりも更に多くの毛細血管が通つていて、足の感度は人の約100倍だとか。なんでも地面の僅かな揺れから捕食者を感知して、すぐに逃げられるようにするためだとか」

「ッだからなんだってんだア!さっさと離せ!!」

「離れたかったらどうぞ、ご自由に。極め技が完全に入っているのに振りほどけたら、ですが。さて、本題ですが……ミルコさんの足もウサギ並みに敏感何ですかねえ? 試してみましようねえ」

「ツツツ!! テメエ、まさか!? 止めろツ離せツ!!」

「感度100倍のくすぐり地獄にようこそ!」

コチョココチョココチョコ

「ピイツ!! ひゃ、ひゃひひひひひひ!! ふざけっ、ハハハハハハ!!」

小さな体育館みたいな建物の中で、一人の女性が大きな声で笑い続ける。身体全体をガクガク震わせながら、必死に両腕を振り回しながら、ゲラゲラと笑い暴れる。

「ヒヤハハハハハハ!! はっ、ハアツ! 離せツ! ひひひひひひ!! 苦しっ、ひひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!!」

常人よりも遥かに敏感な足をくすぐられ続け、身体が痙攣しだす。じたばた暴れても、完全に極った技から抜け出すには至らない。

「ひひっ!! ヒイツ! 止めツ!! もう止めへツツツ!! 死、死ぬう!! はははははははは!!」

顔は引きつり、目からはポロポロ涙がこぼれ落ちるが、それでも地獄は止まらない。「ハアツ!! あ”っ! はっ、はっ、い”ヒツツツ!! ま”っ、待てっ!! 身体ッおかしッ!!? ヒイツ、ひっ、ふあ”っ!!」

まあ、ウサギの足が人よりも敏感かどうかなんて知らないんですけどねえ—————
!!!!!!
嘘八百万

それらしい理論を用いて、相手にそれっぽいことを信じ込ませる。ウサギの足が、本当に感度100倍かどうかは重要ではなく、相手が『本当にそうだ』と思い込んだのならそれが実現する。今のミルコは足の裏だけ感度100倍という、どこぞの忍者が鼻で笑いそうなモノだが常人には想像を絶する地獄を見ている。

くすぐり始めて30秒、俺はミルコを解放して嘘八百万も解除した。健康な大人なら1分程度でも息が苦しいくらい这段时间だが、感度100倍状態だとこれ以上続けられ死にかねない。1分も続けたら重大な後遺症が残るか、もしくは発狂してしまうかもしれない。

……あ、これはヤオヨロちゃんや親父、路地裏のヴィラン相手に実験した結果であり、一応被験者全員生きていくことを伝えておく。

さて、個性を解除して、さそり固めから解放されたミルコは顔を真っ赤に染めながら血の気が失せている。顔色パープル。

一応呼吸させやすいように回復体位を取らせようと、倒れているミルコを抱えると腕

が湿って……

「…………嘘でしょ?」

白目をむいて気絶しているミルコの股間部分を中心に、アンモニア臭のする正体不明の液体が床に広がっていった。

俺、明日の朝日を拝めるかなあ。

お泊まりですか!?! ミルコさん!

「……で? 死ぬ準備は出来たか?」

「本当にマジすんませんしたあああああ!!!」

ミルコさんしーしー事故(あくまでも[!]事故)の後、俺は気絶したミルコさんを担いで訓練室に併設されているシャワールームに飛び込み、びちゃびちゃの私服のままのミルコさんを洗う。

だつて脱がすわけにもいかないだろ!?! 誰に言い訳してんだ俺は。

とにかく洗つてる最中にミルコさんが起き、そのままにシャワールームから蹴り出された。

「クソガキテメエ……ダツシユで服一式買つてこい!!!」

「畏まりました!!!」

そうして俺は大急ぎで近くにあつたブティックに入り、安く置いてあつた服を上から下、中に至るまで一式揃えて購入し、とりあえず紙袋に入れるだけでそのままダツシユで戻つていった。

いきなり汗だくで男が飛び込んできたかと思つたら、凄い勢いで女性物一式抱えてお

会計して去っていったのだからお店側も良い迷惑である。

勢いそのままに戻り、シャワールームの前でミルコさんに声をかける。

「服一式買って参りましたあ!!!」

「置いとけエ!!!」

「はい!!!」

シャワールームの更衣室から飛び出る。

「(………んだア?どつかで見たことあるような紙袋だな)」

ミルコさんがシャワールームから出てくる間、訓練室の汚れをキビキビ拭き取る。

掃除し終えたタイミングでミルコさんが着替えて出てくる。

「………テメエ、ソコソコのセンスはあるんだな。………ン」

「………ミルコさん?その手は………」

「レシート出せやア!!」

「うええええ!!!」

「テメエみてエなクソガキに服代施される程貧乏じゃねえわ!!幾らだボケエ!!!」

「ういつ?!よく覚えてないですけど大体5ケタ円程度です!!そんならいミルコさんに迷

惑かけた俺が出しま——」

ミルコさんの腕が俺の首に伸びてチョークスリーパーホールドをする。

「5ケタ円程度でイキんなバカ野郎!!レシート出せってんだ!」

「ぐええ……か、紙袋の中に入ってるはずです……」

「チツ!さつさとそう言え!」

俺を投げ放しながら紙袋をガサるミルコさん。

「いや、もう本当に安物で申し訳ないです……後日ちゃんとしたのミルコさんに贈るんで……」

「要らねえわ!ツチ、クソガキがア……あ?」

「(5ケタ円って、『一つで5ケタ円』って事かよおおおおお!!?)」

「……あの、ミルコさん?」

「(しかも一式って、よく見りやトップス、インナー、肌着、ボトムス、パンツ、ソックス、アウター、靴、ワンポイント、さらに帽子だア……!?!ガチガチのガチ一式揃えてんじゃねえよ!?!総額は……いち、じゆう、ひやく、せん、まん、じゆうまん……服だけで数十万後半……ハハ、私は何カ月生活できんだ?)」

「み、ミルコさん?や、やつぱり安物過ぎましたか……?」

「(安物って言ったかコイツ!!?)」

「すみません。ほんとならもつとしつかりした所で揃えるべきだったんですが……近く
に俺が知ってる店も無くてですね……」

「(つてかよく見たらこの紙袋クソ高級店のじゃねえかア!!?ソレ知らないつて何処の貴
族様だテメエは!!?) つ………ツツツ………ボケがア!!!奢らせてやるよ!!!」

「ひえ、すみません。今度もつとちゃんとしたのを贈らせて頂きます」

「要らねえよ!!! (これよりちゃんとしたのとか一生着る機会ねえよボケエ!!!)」

* * * * *

「……すつかり日も暮れましたねミルコさん」

「あア…… (色んな意味で疲れたわ) 腹減ったし、どつかメシ食いに行くか」

「あ、それなら近くに「テメエは黙つてろ(クソ高級レストランにでも連れてかれたら完
全に立つ瀬無くなる)」

「バーガーキングがあるつて言おうとしただけなのに」

「ンでテメエ其処だけ微妙に庶民感覚なんだよ!!!」

めっちゃハンバーガー食った。

テーブル席に向かい合うように座って、俺はアイスコーヒーを、ミルコさんは野菜ジュースを飲んでいた。

「つと、そうだ。おい、基本的にヒーローは私服の時に派手に動いちゃいけない。何でか分かるか？」

「はあ、お仕事モードじゃないからですか？」

「……まあ、そういう一面もあるがな。プロヒーローは良かれ悪かれ人気商売だ。仮にオールマイイトがまる分かりの私服でそこらへん歩いてたとしたら、どう思う？」

「危機感ねえのかと思います」

「……………」

「な、なんですかその苦虫を100匹纏めて噛み潰したみたいな顔は」

「……テメエの言いたいことはまあ、分からんでもないがそうじゃねえよ。一般人はオールマイイトだーって色紙持つて飛びつくだろうよ。ン時に場所が広い道だったらまだ良い。だがもしココみてエに狭い屋内だったら？」

「あー……次々一般人が押し掛けてくるかもですね」

「そう、人気商売だからこそ余計なトラブルの種は蒔くな」

「分かりましたMir……あー、えく……なんて呼べば？」

「ハッ！そこで私のヒーローネームを言わなかった事は評価してやる。兎山ルミだ、私服時は適当に呼べ」

「分かりましたルミみん！」

「死にてエのか」

「ユーモアツ!?!ちよつとした冗談じゃないですか……あー、じゃアルミちゃん先輩で」

「……はああ、まあ良い。一般人にバレないように、つてのはまあ平常時の話。緊急時の場合は当然この限りじゃねエ。休日でも常にコスチュームを携帯するなんてヤツはそう居ねエ。良くない事が起きた時、現場すぐ近くに居るんなら私服のままでも対応に当たるとかザラだ。普通にコスチュームが使えなくなつて他の服を着てる可能性も有る」

「今日みたいにですね……る、ルミちゃん先輩。首絞めるのはダメですつて……」

「クソツ、何で私はコイツを指名しちまつたんだ……」

その時、帽子に隠れたミルコさんの耳がピクピク動き出した。

「……詭弁、行くぞ」

「はいっ」

ゴミをゴミ箱に突っ込んで素早く店から出る。ミルコさんはそのまま路地裏に入り込み、奥へ奥へと進んでいくとそこには大男が小柄な女性に手に持ったナイフを振り下ろそうとして居る所だった。

ツダアン!!

「つらア!!」

ミルコさんが地面にヒビが入る程強く踏み込み、跳躍するように大男のナイフを蹴り飛ばした。

「詭弁、女を頼む! 敵はコイツだけじゃねエみてえだ! ヤベエ時は個性を使え!」

「了解! さあお嬢さん、ヒーローの到着だ! もう大丈夫だぜ!」

「あつ、ありがとうございます!」

「礼は後だ、完全に助かってからまた聞く! お嬢さんを狙うのは何処のどいつか分かるか?」

「つ、その……あいつらはストーカーで……少し前から私の事を付けて来た事しか……」

「んい、オーケー。全く、人をオトすのに刃物なんて無粋なモン使うんじゃないやアねえわな!」

「クソ! クソクソクソクソ!! その女が悪いんだ!! オレをその気にさせておいて!! ぶざけるな!!」

「黙ってるデカブツ! 詭弁テメエは周りに注意しながら警察呼べ!」

「もう呼んでまず姉御オ!」

「調子のんなバカ野郎!」

「ふざけるなふざけるなふざけるな!!!どいつもこいつもオレをバカにしやがってええええ!!!」

「はっ!デカイ図体して気の早いヤツだ……なっ!」

ミルコさんの蹴りが大男の意識を刈り取る。

「つち、やっぱヒラヒラした服は動きづれエな」

「す、凄い……あつという間に倒した……」

しかし、倒れた筈の大男から黒い液体のようなものが染み出し、人の形をとった。

「くそつくそつくそつ!!!てめえさえないなければああ!!」

黒い液体が小柄のオッサンになり、ミルコさんに飛びかかる。

「テメエが本体か!」

ミルコさんが蹴りで迎え撃つが、蹴りが当たる瞬間オッサンが液体化し、ミルコさんに取りつく……直前に跳躍して回避した。

「んあ、なんだありや!オッサンが黒い水になった!」

「オッサンじゃねえ!オレはまだ26だ!!」

「フアーwwwwパイセンとタメかよwwww見えなすぎwwww」

「だッ……まだダメダメ!!!てめえからブツ殺してやる!!!」

怒りで顔を真っ赤にしたオッサンが俺に向かって飛びかかる。

「だるまさんが転んだ!!」「っ!？」

俺の覇声ばせいによってオツサンが思わず止まり、大きな隙を晒した瞬間に袖に仕込んであったヴィラン用捕獲網を投げる。

「っ!?!クソ!こんな網なんてオレに効かねえんだよバカが!」

「ほう、どれどれ」

ヴィラン用捕獲網の名は伊達ではなく、網には面白い機能がついている。

網の手元側にあるスイッチを、ほいポチツとな。

バリバリバリ

「あばばばばばばば!!」

ヴィランを無力化するための機能として、スタンガン程度の電撃をお見舞いする。

電撃によって痺れてる間に、オツサンの顎を揺らす。そのまま軽い脳震盪によって

オツサンは気絶した。

「凄い……まだ若いのに、こうも簡単に……」

「ふう、大丈夫ですかお嬢さん。怪我はない?我慢しないで正直に言うんだよ」

「あ、ありがとうございます!!怪我はありません!」

「そうか。じゃあこっちのちっさいオツサンと向こうの大男は知り合いかい?」

「そ、その……私のお客でした……」

「んう、なるほど。……ここら辺は危ないし、近くまで送ってあげるよ」

「あ、ありがとうございます!?!私の家は近くなんですけど、もう怖くて怖くて……その、お恥ずかしながら……手を、握ってくださいますか?」

「ははは、いいつてことよ。じゃ、送ってあげる……警察署までな」

「……何を言っているのですか?」

「すつとぼけんなよお嬢さん。君からは嘘の臭いがプンプンする、悪臭だ。普段から嘘をつきまくつてなきやこうはならねえな。身体に仕込んである刃物を何とかしてから弱みを見せるんだな」

「……………あは♪」

すると次の瞬間女が溶けて、俺と同年代くらい金の髪少女に姿を変えた。全裸で。

「凄いです!?!私、同年代の人に見破られたの初めてです!?!」

「……ミルコさん!?!この子スタイルやべえ!!」

「バカ野郎集中しろ!?!」

「詭弁くん、詭弁くん!!良い名前だねえ!?!私、トガです!?!渡我被身子!?!体育祭、見ました!?!スゴクカッコよかったです!?!」

「ははは、可愛い子にそう言われるのはテレるなあ」

「私、可愛いですか!?!うふふ、両想いですね!?!詭弁くんの事、大好きです!?!画面の向こう

にいるのに、まるで目の前に居たみたいでした！あんなにドキドキしたのは、初恋の男の子に変身した時以来です！……もつともつとお話したいところなんです、時間みたいですね」

「つれないこと言うなよ、もつとゆつくりお話しようぜ」

「それはまた今度にします！次会う時はいっぱいドキドキしましょう!!!」

「ツ待ちやがれ!!」

「それじゃあまたね詭弁くん！おばさん！」

「誰がおばさんだツラア!!!」

ミルコさんがトガに蹴り掛かるが、直後警察が2人路地裏に駆け込んできた、ホンの僅かに意識が逸れたその瞬間にトガが路地の闇に消えた。

「ツクソ！逃げられたか！」

「……はあ……んまあじか。ずっと心臓に細い針が刺さり続けるみたいないな感覚がしてましたよ」

「……ふん、本当にヤベエヴィラン相手なら心臓に風穴空いてるぞテメエ」

「うへえ、プロの道は険しいなあ。……そうか、アレでまだ序の口なのか……はあー、同年代でアレとかキツツいなあもう！」

「はっ！んならこれからは胆力も鍛えてやるよ！警察がきたし、テメエは休んでろ！」

「おっす」

そうしてミルコさんが手慣れた様子でヒーロー免許を見せて警察に引き渡していく。

「い、意外だな。ミルコさんってあんな私服なんだ」

「それな。何処の深窓のお嬢様かと思ったよ」

「聞こえてんぞおまえら!」

「すみません!!」

楽しそうで何より。

……しかしなんというか、少しへこむ。USJ事件の時に、今までとはレベルが違うヴィランに出会ったが、その時とはまるで違う。あの時のヴィランの狙いはオールマイトだったが、トガは俺を狙っていた。たったそれだけの違いで、このザマだ。はあー。やっぱ俺、口しか取り柄ねえなあ……。

まあ、今は……それで良い。これからだ、これから。

ヤオヨロちゃんちゃんの背中を守るようなヒーローになるんだ。そんなヒーローにならななきやいけいないんだ。

出来ることから、一步一步。常に成長し続けるんだ、俺。

警察の聴取は意外と長かった。なんでもあのトガヒミコは連続失血死事件の容疑者だとか。

「んえ……眠い……」

「シャキツとしろ！夜こそヴィランが活発に動き出す時間だ！ヒーローがその調子でどうすんだー！」

「んですがミルコさん、俺は夜9時を回ると体質的に眠くなるんスヤア」

「ン寝るなア!!」

「うう……わりとしんどいつす……」

「つちーあーもー！分かった分かった！今日の活動は終了だ！近くのビジホ行くぞー！」

「うん、びじほお？」

「お前何も知らねえのか!?寝るところだよ寝るところ！」

「しらにゃい……」

「(昼と夜で性格変わりすぎだろコイツ!?ギャップ萌え狙ってんのか!!?)とりあえず近くのビジホ……チツ、一件だけか。まあねえよりマシだ) オイ、移動すつからもう少し耐えろー！」

「にゃい」

「(狙ってんのかコイツ!!)」

そうしてフラーリフラーリと倒れかけながらミルコさん先導のもと『びじねす』と書かれたホテルに連れてこられた。

「何?ダブル一室しか空いてない!?……………チイツ!!そこで良い!詭弁!まだ寝るな!」

「んやい」

エレベーターで移動してる時も、今にも倒れて眠りそうになっている。

そのまま引つ張られるように部屋に到着した。

「だアアもー!コスチューム着たまま寝るな!脱いでシャワーくらい浴びろ!」
「んうい」

「…………ハアー、マジで大丈夫かアイツ…………つーか最近のガキにしては随分とまあ規則正しい生活してんだな。…………なアんか一日が異常に長く感じたぜ……………つーか、職場体験に来たガキとはいえホテルの、しかも同じ部屋に連れ込むのはマズい…………よなあ…………クソツ、私も疲れてやがる。とりあえず今日はさっさと寝るか…………」

「いつまでシャワー浴びてんだテメエ!!!」

「…………ふオ!？」

「シャワー浴びながら寝落ちする奴があるか!! さっさと出てベッドで寝ろ!!」

既に眠気がプルスウルトラしていた俺は肌着を着て、そのまま泥のように深い眠りについでた。

「…………ダブルベッドのド真ん中で寝てんじゃねエよ。ったく、ほら、もつとつめろバカ野郎」

「すう…………すう…………」

「……………寝顔は生意気じゃねえのな」

初日以外は快速運転ですよ!ミルコさん!

「……………んっ……………んあ……………あ? (なんかとんでもねエ夢を見た気がする)」

朝、ミルコは暖かな熱によつて目が覚めて、ふと横を向いたらすやすやと寝息を立てて眠る詭弁の姿を写す。

「……………はあ。良く寝やがるぜほんとに…………………………ヤ、近過ぎねえか?」

今ミルコと詭弁の顔は約10cm程度しか離れていない。しかも顔以外の身体のパーツは、まるで抱きついているかのようにべったり密着していた。

「つつつ?!?!調子に乗んなツ!っあ?!脚が動かね……………あつ、私が抱きついていたのか……………」
詭弁の両腕ごとホールドするようにミルコの脚が詭弁の腰に絡まっていた。

むつちりとした脚と両腕で抱き枕にされていた詭弁は、眠りが深かったのか一切起きる事無くすやすや眠り続けている。

ミルコは、その姿を見られていない事にひっそり安堵しつつ、顔を赤らめながら脚を解いていった。

「おはようございますミルコさん!!」

「おう、おはよう。今日からはあちこち移動しつつ、テメエを鍛えていく。身体もそうだが、精神もヒーローの資本だ。昨日みてエにヴィラン相手にビビッて何もできませんでした、じゃあヒーローは務まんねえぞ」

「はいっ!」指導よろしくお願いします!」

「おう、よろしく(昨日と比べて犬みてえだな……)。さアて、ヒーローの仕事の一つで最も有名なのは何か。詭弁、言ってみろ」

「えっ、凶悪ヴィランの退治ですかね?」

「そうだ。私らはヴィランが現れたらそいつを退治する。大きな事故や災害が起きたんなら、一般人を保護する。そういったド派手な事をやるのがヒーローの仕事だが、ヒーローの仕事はそんな事だけじゃねえ。自分の事務所近くの地域を定期的にパトロールし、ヒーローが居るってアピールすることで起こる犯罪の抑制。困ってるヤツを助ける声かけ。それとヒヤリ・ハット案件なんかをまとめて注意喚起。まあ色々地味な仕事も多い。とは言え私みたいなフリーのヤツがあちこちパトロールしても効果は薄い。偶々見える範囲で起きた事件事故に急行出来るくらいしかメリツトは無い」

「はあ、なるほど。それでは普段は何をしているのですか?」

「主に応援要請に応えて現場に向かう。特に私は他のヒーローより遥かに機動力が高いからな。常に自分の居場所を近隣の警察やヒーロー事務所に通達してる。緊急の要請が来ても、凄く遠くに居ました、じゃ連絡取る時間が無駄になるからな」

「二分一秒を争う世界ですもんね」

「そうだ。自分の無駄な時間を削るのもそうだが、相手に無駄な時間を使わせないのも私らフリーのヒーローが気を使うところだ」

「はあー、やっぱりフリーのヒーローというのも一筋縄じゃないんですね」

「事務所を持つのも持たないのも、メリットデメリット有る。テメエがプロになったとしても、最初はサイドキックだろうからそんなときにでも学べ。ツツー訳で行くぞ」

「はいっ!……いや、何処へ!?!」

「言っただろ?無駄な時間を常に削るんだよ。フリーのヒーローは基本応援要請待ちとはいえ、それ以外暇してるだけじゃねえんだよ。近くのヒーロー事務所に行って、顔合わせも兼ねて多少揉んできてやんのさ」

「マジか」

……そうしてミルコさんと一緒に、近くのヒーロー事務所を何件か回って、そこで一緒に戦闘訓練をした。意外にもちゃんとアポイントメントは取っていたらしい。いつ

の間に。

「詭弁！昨日も言ったがテメエの個性は即効性が無い！覇声ばせいってヤツだけじゃ限界もある。更に即席のチームアップだっていくらでもある。だから相手によつて一発で効く言葉を瞬時に見極めろ！」

「はい！」

「よし！ということで頼んだぞティアドロップ！」

「わかりましたミルコ先輩。えつとー、詭弁くん、だっけ？アタシは飴玉ヒーロー『ティアドロップ』宜しくね？飴たべりゅ？」

「たべりゅー！……ん”っ、俺はおしゃべりヒーロー『トーカー』です。よろしくお願ひしますー！」

「ノリが良いわねー、よろしくねートーカー。うちに就職しない？」

「まだ就職はしません！ところでティアドロップさん、その青い髪は地毛ですか？雰囲気と合つて凄く可愛いです！コスチュームも女性ヒーローに流行つてるタイツ系じゃなくひらひらのドレス系も凄くキュート！それでいて腰周りもほっそりしてとてもアダルティですね！真つ赤なブーツも可愛さを引き立ててとても似合つてグヘえ!!」

ミルコさんに腰を蹴られた。

「一発で効く言葉を見極めろつたが、誰が口説けつて言ったア!!」

「うぎゃー……腰が……」

「や、やだわあ……そんな、可愛いだなんて……えへっ」

「ティアドロップ! テメエもガキの言葉でクネクネすんな!」

「ねえトーキー? 雄英卒業したら、やっぱりうちに来ない? おねえさんが色々教えちゃうよー?」

「お前少し前に独立したばかりだろうが!」

……といったことがあったり、次のヒーロー事務所では

「おしゃべりヒーロー『トーキー』です! よろしくお願いします!」

「おー、トーナメントで血だらけになったヤツか! いいか? ヒーローってのは、結局頼れるヤツじゃないと生き残れない! 顔は良いかもしれんが、身体が細っちくていけねえな
お前は! もっとオレみたいに身体を鍛えろ、身体を! ガハハ!」

「ミルコさんより体脂肪率高そうな良い年したおっさんが頼れるヒーローなんですか
?」

「っ……!! ツ……!!」

「バカ野郎 テメエ ヒーローを一発で黙らせてどうするんだ!」

「ミルコ姐さんオレコイツ嫌い!!」

「オメエも凶星つかれたからって、ガキっぽいこと言うんじゃないやねえ! いい年して泣くな

！」

といったこともあったりした。

そうして色々なヒーロー事務所を周りながら顔合わせと、身体を鍛えながら時折現れたヴィラン退治に参加したり、避難誘導を行ったりした。

「ほへえ、トーカーの個性つて色々な事ができるのねえ。サイドキックにいらつうと助かるわ」

「オレらを鼓舞する力もそうだが、一般人の避難誘導があそこまでスムーズだとスゲーやりやすいな」

「そうね。ヴィランが出現した時に一般人が近くに居ない事の方が少ないわ。それにヒーローが到着したらしたで、安心しちゃってその場で撮影始めちゃったりとかも多いのよねえ」

「それな。いかトーカー、ヴィランによる一般人への被害でわりと多いのが、ヒーローが現着してからの被害だ。理由はヴィランとヒーローが戦ってるすぐ近くで撮影開始たり、独断でヴィラン相手に攻撃しだしたり、まあ色々だ。よく言われるのが、ヒーローが来たことによる『危機意識の欠如』！お前がプロになったとしても、常に一般人の避難誘導を怠るなよ」

「……脳みそまで筋肉詰まってると思ってたんですけど、意外と知識豊富なんですな

おっさんー!」

「おいテメエ良い年したおっさんを泣かせて楽しいかコラ」

……と、自分の中ではとても充実した職場体験だった。

あつという間に時間は過ぎ、ミルコさんと別れる時間になった。

「大変お世話になりましたミルコさん!……あの、初日の件に関しては本当に申し——」
「蒸し返すな!!私も忘れてエんだよ……つたく、詭弁!テメエが好き勝手やるのは良いが、後悔しないように毎日死ぬ気で息をしろ。必死で息してりやア自然と笑顔になるもんだ」

「……はいっ!!!」

「あとコレやる」

「ええっ!?そんな、ミルコさんのフルヌード写真集なんて有り難うございだだだだ!!!
折れる!腕が折れる!!」

「写真集出してねえよボケが!!違エよ私の連絡先だ!」

「れ、連絡先?既にミルコさんのケー番持つてますが……?」

「バカ、そりや仕事用のだ。こっちは私の私用番号だ。困った事がありやコツチに掛ける、相談にのってやる。流出させんなよ?」

「み、ミルコさん……大変感動しましたがアームロック掛けられたままじゃ泣くに泣け

ません」

「……ツチ、男が泣くな！……マジでテメエと居ると調子が狂うぜ」

そう言つてアームロックを外す。

「いつてエ……ははは、まあ超マイペースで行かせてもらつてますんで」

「フン。……精々必死に足掻けよ詭弁。テメエがプロになったら私のサイドキックになれ。待つてるからよ」

ミルコさんは拳を俺の胸に軽く当てる。仕草イケメンかよ。

「……最後までヒーロー名で呼んでくれませんか」

「バーカ。ヒーロー名で呼ばれたかつたら早く一人前になるんだな！」

そういつてミルコさんは一番の笑顔を見せ、じゃあな、と長い髪をたなびかせて振り返つて去つていく。

惚れてまうやろ……。

「ミルコさん!!俺はおしやべりヒーロー『トーカー』!絶対に貴女以上の大活躍してやるからな!!!」

ミルコさんは振り返る事も無く、ただ片腕を振り上げて答えるだけだった。

バスからの急転直下ですよ!ヤオヨロちゃん!助けてー!!

職場体験終わった後の最初の授業の日。

「いづくちゃん、ニユース見たぜ。んなあんなヤバかったらしいなあ」

「あ、詭弁くん。本当に大変だったよ……」

「あの位置情報だけのヤツって、今そのタイミングで襲われてたって事だったわけだ」

「そう、本当に強くて……状況説明をしてる暇も無かったんだ」

「ふーん……とここでニユースであんな感じで言ってたけど、実はヒーロー殺しを捕まえたのっていづくちゃんとしょーとちゃんとてんちゃんの三人だったり——」

「そそそそんなことないよ!!? あんときはエエエエデヴァーがたまた偶々すぐに来てくれたからななななとなかっただけで、ぜぜぜんぜんそんな僕と轟くと飯田くんが捕まえたとかそそそそんなことないよ!!!?」

「お、おう…… (ちよつとしたジョークのつもりだったんだが……まさかな?)」

* * * * *

バスに揺られてゆーらゆら。バスの揺れに合わせて揺れるヤオヨロちゃんのおっぱいを横から眺めると、みっちゃんスマホ突きつけながら飛びかかってくる。

「ねえ詭弁！この動画の人って詭弁でしょ！」

なんだなんだと野次馬根性丸出しでわちゃわちゃしだしたので、みっちゃんのスマホを借りて中の写真データを

「ちよお?!?!何処見ようとしているのかなあああ!!!?」

「エロ自撮りとか無いかなどか思ってる」

「無いよ!!!」

「えっ?!?!無いの?!?彼ピッピに送る用の自撮り無いの?!?」

「無いよ!!!彼ピッピも居ないから!!!」

「えっ?!?事ある毎に俺とモモちゃんの恋バナねだるみっちゃん?!?彼氏どころか彼ピッピも居ないですと?!?野郎共喜べ、みっちゃんが今フリーだぞ!!!」

「詭弁うるさい!!!」

「詭弁ちゃん、ミナちゃんの顔が真っ赤よ?」

「だってねえ!? A組の恋愛番長のみつちゃんさんともあろうものが、動く彼ピーの一人も居ないなんて信じられな「うるしやいっ!!」黄金の右っ!!」

「動く点Pみたいに言うなよ……」

みつちゃんから右ストレートを貰い、殴られた勢いでヤオヨロちゃんの胸に軟着陸する。

「えーんモモちゃん、みつちゃんが家庭内暴力をふるってくるよー」

「は?」(威圧)

「あつ、スミマセン」

みつちゃんが家庭内暴力と聞いて何故か更に顔を赤く染めるが、モモちゃん的には許せない言葉だったらしい。思わず背筋を伸ばした。

「つていうか、そんなこと言う詭弁は自撮り写真持つてるのかー!!?」

「あるよ」

「ほらやつば……あるのかよ?!?」

バス内が更にぎわつく。

「い、いやいや、待てよ。ヤオモモの自撮りと見せかけて詭弁の自撮りつていうパターンだ。そうに決まってる。……でなきや男としての敗北感はんばねえ……」

「……いや、そのパターンやったら誰に送ってるのかが問題ちゃう?」
「誰につて……そりゃあ……」

そこで思わずヤオヨロちゃんを見るでんちゃんとかちやこちゃん。
ヤオヨロちゃんの顔は真っ赤に染まっていた。

「マジか!!」

「き、詭弁さん! お話しはもうそこまでにしましょうそうしましょう!!」

「えー? あつ、じゃあ俺の自撮り見る?」

「えっ……!?!」

「嘘よん!」

「死ねっ」

ジロちゃんのフックが俺の顎を撃ち抜く。これが世界レベル(遺言)

「き、詭弁さん!?!」

「ひえー、爆豪より強いんじゃね?」

「んだとゴラア!! クソ耳! 嘗めんじゃねえぞ!」

「なんでウチに喧嘩売ってくる!?!」

ジロちゃんも口悪くなつたなあ。ヤオヨロちゃんのおっぱいを後頭部に感じながら
一眠りすることにした。

「……………動画は?」

そしてホンの僅かに寝て起きたら、何も無いパーキングエリアに下ろされた。いやほんと……………何も無さすぎて嫌な予感しかしない。

「煌めく眼でロックオン!」

「キュートにキヤットにステインガー!」

「ワイルド・ワイルド・プッシューキヤッツ!!」

なんか、凄いのが来た。俺はすぐさまヤオヨロちゃんに猫耳を創造して着けてくれとお願ひした。断られた。

「なんで!!」

「当たり前だろバカ」

「モモちゃんの猫耳みたいみたいみたい!」

「少し黙れ詭弁」

「はい先生!!」

「元気な子だね」

「心は18!!」

「ねこねこ、可愛げのあるキティちゃんね！」

「身体はー？」

「さんじゅ……なに言わせんの!!!」

「ごんぼつっ」

本日三回目の顔面セーフ。そろそろ顔が歪むわよ？

ふらっふらになりながらヤオヨロちゃんの肩を借りてると、辺りの雰囲気スルリと変わった。

小声で個性を発動。ヤオヨロちゃんに聞こえたが、まへーきへーき。

やべえと思っただけに強化。ミルコさんの教えが今日も生きてる。

そしてその直後に背後の崖から濁流のように土砂が流れてきた。嘘過ぎない？

既に目の前まで土砂が迫っている、全員を助ける時間も力もない。ああ、クソ。俺は最低な選択をした。

「うおおん！皆ごめんよおおお!!!俺は我が儘で一人しか救わないクズだああ!!!」

「詭弁さん！皆さん生きてます！崖下で生きてますから!!」

「うーん面白いキティちゃんね」

「あれを避けちゃうかー」

「あのバカ……」

相澤先生は心底痛そうに頭を抱えた。

その後俺だけ崖から蹴り落とされた。ヒドス。

フルマラソンぐらいよゆーなーなんだが!?

「ファイト! いっぱつ! レッツゴーレッツゴーA組! 気合い爆発! 弾ける個性!!」

「う、おおお……マジで詭弁のヤツ、スタミナお化けだな……」

「いや、違う! 詭弁君も限界なんだ!」

「な、なにつ!」

「レッツゴーレッツゴー陰陽師! ドーマンセーマン! すぐに呼びましょウルトラソウ
!!」

「あれ多分本人もなに言ってるか分かってないよ!!」

「……マジで叫ぶのだけは得意なんだな……」

「詭弁君があんなにも頑張っている! オレ達も負けられないように気合いを入れよう!!」

「ママエンパパワー! いいんべーツ!! (ママエンパパワー! いいんべーツ!!) マム

ロードオオバジジイスワーツシセイイ!! (ママロードオオバジジイスワーツシセイイ!!!)「」

「おいヤベエ誰かアイツを止めろ!!! 軍隊訓練始まるぞ!!!」

「くつ、詭弁の足が早すぎる!?! 飯田、行けるか!?!」

「すまない! もう燃料が切れた!!」

「常闇イ!」

「黒影!!」
ダークシャドウ

「ヤダヨアイツナンカ怖イ!!」

「おらアー大声出せエー!! テメエらそれでも人間かア!?! シャウトイットアウト!!」

「詭弁はもうなんか色々ダメだ! 見捨てよう!!」

「バカ野郎! アイツのおかげで全員がハイペースで来れてるんだろが!!」

「最高にハイってヤツだああアアア!!!」

「っ嘘！まだ加速すんの!？」

「ケ、ロツ。あれ以上は詭弁ちゃんが壊れちゃうわ！」

「ヤオモモ！麻酔弾とか打てないの!？」

「はっ、はっ、既に脂質を、ほぼ使い果たして、銃撃、出来ないですわ！」

「僕にお任せ☆ネビルレーザー（弱）!!」

「もう何も怖くなゲボツツツ!？」

「詭弁がぶっ飛んだ!？」

「……出力間違えちゃった☆」

「キヤーツ!!?詭弁さん!!」

「やーつと来たにやん……一人死にかけてるけど」

「……詭弁の個性の代償って不運になるとかじゃないの?」

「んなバカな……って言いきれないな」

「レーザー食らってぶっ飛んだ先に魔獣の群れが居るとか不運で片付けられるか?」

「あまりにも早すぎるフラグ回収……」

「ん〜まあトラブルあれど、6時間でここまで来れたのは正直意外よ！中々優秀みたいねイレイザー」

「……まあな」



「あれ？ご飯の時間なのに……詭弁くんは？」

「腹が死んだ上揺さぶられまくって何も食う気しねえつてよ」

「だ、大丈夫なのかなあ……？」

「……」 「……」 「……」

「そんな目で僕を見ないで☆」



「生きてるって素晴らしい……」

汚れまくった身体を清めるべく一足先に風呂に入っているのだが、なんとまさかの露

天風呂である。都会の光から離れた夜空は、キラキラと星が輝いている。うん、キラキラ……

「あんのキラキラ野郎覚えてろよマジで……」

ものすごく腹が減ってるのに何も食う気がしない。こんな経験初めて。初体験だわいやん（棒読み）。

……風呂入るか。

身体についた汚れを洗い流してから露天風呂に入る。擦りまくった傷がしみる。ああ、今頃みんなメシ食ってるんだろうな。……食事の事を考えると吐き気がしてきた。マジで腹の調子がおかしい。俺、今日はメシ抜きかな……。

夜風が目には沁みず。泣いてないやい。

露天風呂の中を揺蕩うように移動する。すこし行儀が悪いが、まあ今は一人だ。多少自由形で泳いだってばれへんやろ。……俺泳げないけど。

入口から見て奥の方に大きな岩があり、その裏に回る。丁度露天風呂の入り口からは見えない位置だ。なんかこういう所って秘密基地感あつて好き。

「……はあああああ……腹減つたし、疲れて眠いし、なんもやる気が起きねえ……」

今日も十分頑張ったのでご褒美くださいい神様。なんてね。

……疲れてるな俺、ちよつとだけ寝よ。

「(……んにい?)」

ギヤーギヤーキヤーキヤーと騒がしい声によつて起こされる。頭を軽く振つて目を覚ませば、騒がしい声はA組みんなの声だった。

「(……ま、どうせみつちーが女湯覗こうとしたんだろ) くあ……ん」

そういう意味では信頼出来る男である。信頼というか、まあ残念な方向に信頼しているというか。

ヤオヨロちゃんを覗いてたらぶつ潰してやろう。ナニをととは言わないが。

そんな事を考えながら風呂からあがろうと、岩の裏から出れば

「……詭弁……さん……?」

「……あー、えう。……ドツキリ?」

わあ、なんて体を張つたドツキリなんでしょう。女子達のお身体が丸見えで御座います。はい、脳内HDDの容量がいっぱいになりました。

というか、俺の身体も丸見えで御座いました。タオル無いや。ヤバイ。もうなんか色々ヤバイ。色々ヤバイ中で何が一番ヤバイって言うともうこの状況がヤバイ。

勃起^たった。

なんというかありがとう神様。恐らく、すぐそちらに逝きます。

詫び投稿

「モモちゃん。今更だけど俺らって付き合ってるの?」

「本当に今更ですのね。……まあ、世間一般的には恋人同士と言っても過言では無い……かと……」

「そっかあ……じゃあそろそろ大人の階段のぼっちゃう?」

「ん〱?!?ちよ、詭弁さん!?それは一体どういう意味でしょうか!」

「どうもこうも、そろそろ本格的に将来の事決めなきゃじゃんか。俺達そろそろ卒業近い〱」

「そ、そういう事でしたか……(それはそれで残念に思うのは何故でしょう)」

「あ、もしかして大人の階段って聞いて、エッチな事想像しちゃった?」
「ツツツ!!!」

「モモちゃん、一旦その鉄球下ろそうか。明らかにそれ成人男性より重いですわよ?」

「……ふん!詭弁さんなんて知らないですわ!!」

「んうー、そう言うなよー。ワザとそういう言い方したんだからさあー」



「んで、真面目そうな話してたからウチも混ぜてもらおうけど……いい加減にしなよ？特に詭弁」

「俺だけ？」

「……ヒーロー科の全員どころかサポート科の子もフッておいて、その上でアレを見せつけられる身にもなれよ？」

「それはスマン」

「謝るんなら態度で示せ？」

「キスでいい？」

「頬じゃなく口なら許す」

「そりゃ勘弁。口は先約があるので」

「ンだからそういう所だつってんじやん！」

「んいい、なんか理不尽に怒られた気がする」

「詭弁さんのそういう所今でも直した方が良いと思いますわ」

「それは俺に喋るなど言ってるのと同義よ？」

「真面目に話して頂ければそれでいいじゃないですか!」

「逆に聞くけど、俺から不真面目要素除いたら何が残るジロちゃん?」

「……………クズ」

「ほらあ!だからこの軽さは必要なんだって!」

「何故100か1か0かの話をしているのでしょうか」

「知ってるか? 1の百倍は100だが、0は何を掛けても0なんだ。本当のオンリーワ
ンってのは0の事なんだぜ?」

「ONLYという言葉の意味ご存知ですか? 『無』をONLYとは呼びませんわ」

「ぐぬぬ……モモちゃんも手強くなったなあ……」

「ずっと貴方の傍に居るんですもの」

「ねえ、誰かコーヒー買って来て。ブラックね」

「あ、では私はハロツズを」

「んじや俺ドクペ。おうでんちゃん頼んだ!」

「全部雄英の自販機にねえよ!特にハロツズ!つかオレを巻き込むな!」

「なんか、あの二人も庶民慣れしてきたなあ……」

「確かに」

「話がずれたな。卒業後はどうするんだ?」

「そうですね……私の個性が個性ですし、卒業後すぐに独立したほうがトラブルが少なそうですね」

「んーウチはやつぱりサイドキックかなあ。熱心なヒーロー活動も良いけど、やつぱり音楽で誰かに手を差し伸べられる様なヒーローになりたいからさ」

「……ジロちゃんも昔はなりたいたいヒーロー像語るのにマゴついてたのに変わったなあ」

「誰の所為だ、誰の」

「さあて、ね」

「それで、詭弁さんはどうなさるおつもりですか？」

「ん？んあー、まあ俺は独立してもサイドキックになるにしても多分やる事は変わんねえなあ」

「ヒーローを援けるヒーロー、でしょ？まあ、アンタじゃオールマイトやエンデヴァーみたいなナンバーワンは無理だからね」

「ソレな。だけど俺は俺のやり方でトップになるさ。んまあ、そういう意味じゃあこれからもきつとお前達の世話になるなあ！」

「はん、ウチんここに来たらガンガンこき使つてあげる」

「私は詭弁さんに負けないようもつともつと精進しますわ！」

「はっはっは。それじゃあ結局今までの雄英生活と変わんねえわ！」

「それは言えてる」

「確かにそうですわ」

ガラツ、と教室の扉が開く。そこから現れたのは俺達の担任、相澤先生だ。

「詭弁、進路希望出してねえのはお前だけだ。早く出せ」

「先生はいつ婚姻届け出すん？」

「お前には関係ない」

「じゃあ先生の代わりにM s. ジョークに婚姻届け出してき「止めろ」食い気味イ」

「いいからさっさと進路希望出せ、以上だ」

そう言い放って教室の扉を閉めて出ていった。

「くうく要件人間ベムめ」

「要件人間……?」

「妖怪人間のシャレでしょ」

「冷静に分析するなあー」

……待て、何でジロちゃんは今のですぐ分かったんだ? まあ、ええか。

「……んじゃ、希望表出してくるわ」

「おう、サツと行ってすぐ訓練室来なよ」

「……詭弁さん!」

「んう？」

「私は、いつまでもお待ちしますわ
ん、待ってろよ」

それは俺がヒーローの本場、アメリカに渡る前の話。

「……本気か？」

「勿論。俺の『言葉』がアメリカで通用しなきゃあく本当の意味で『トップ』になれねえでしょ？」

「あ、アメリカに行くのか!?! 詭弁少年！」

「ええ、最終的には『世界』を獲るので、その足掛かりを」

「マジかお前! アメリカに行くのか!! なら英語で困ったらオレに頼りな! いつでも力になってやる！」

「ありがとうございます山田センセ！」

「お前だから『プレゼント・マイク先生』て呼べつつーの! お前のせいで今の1・2年も山田先生呼びされてるんだからな!?!」

それは俺が、『世界』のヒーローになる前の話。

「あゝの、ボケがア!!!勝ち逃げはぜってエ許さねえ!!!」

「かつちゃん落ち着いて!もう詭弁くん今頃空港だよ!!!?」

「やっぱプライベートジェットとか持ってるのかな?」

「持つてるんだろぅな」

「オレ国内線しか乗った事無い」

「……それが詭弁さんの選択なら、私は尊重します」

「本音は?」

「次会った時はもう逃がしません。フッフ……」

「うわあ、闇崎茨」

「……ん」グスツ

「詭弁さん!サポートアイテムが必要ならいつでも私に連絡ください!!ドツ可愛いベイビーをいっぱい作って待ってますから!!!」

「ツたく、この私を袖にするなんて大した根性じゃねエか。バカ野郎。……『頂点』獲る前に逃げ帰ってきたら蹴っ飛ばしてやる」

「アタシもアメリカ行こっかな」

「アンタはせめて県一のヒーローになれや」

「んうー、そんな無茶なー」

「口調移ってんぞ」

「あつ、やだ……恥ずかしっ」

そして、『宇宙』のヒーローになる。俺の前日譚だ。

「モモちゃん、トップになって迎えに来たぞ！結婚しよう！」

「……はい!!!」

お、怖い話?これは実際にあった話なのですが、ある日風呂場で意識を失ったと思つたら次の日の朝布団で起きた。怖い!

「……………えっ、朝?」

昨日はとんでもねえ事が起きて、なんか複数の個性由来の攻撃が凄い勢いで身体に向かつてきたと思つたら布団の中だった。そんなことある?

むくつと起きれば、昨日感じていた腹部の気持ち悪さも無く、周りにはぐーすかといびきをかいてるA組男子達が揃って寝ていた。

「……………夢?」

時計を見れば、短針は5時を指していた。外はそこそこ明るくなってきた、カーテンを開ければ日の光が部屋に入るだろう。ま、流石に寝ている奴等の邪魔になるから開けんけど。

「……………浴衣着てる……………」

本当に何事も無かったかのような状態だが、俺の脳内HDDはしっかりと昨日のお風呂の様子を記録している。何だったら全員のB地区の色まで覚えてる。ありがとうございませう。

「……………えっ、怖っ」

なんか特に意味は無いけどトイレに行きたくなった。

林間学校2日目、個性訓練。

俺はB組の奴等も含めて全員を見て鼓舞しまくるといってもねえ訓練だった。

「……………全員？」

「全員だ」

「……………ふっちゃん洞窟の中に居るけど？」

「ちゃんと聞こえる様に鼓舞しろ」

相澤先生。なんか俺だけおぎなりじやない？ねえ。

丸々カット!!

クソデカ大声で全員に行き届くように個性を使っていると、半日もすれば当然声がガサ
ガサになる。マジでちよつとほんま喋れへん……。

「の、のど飴ですか……分かりました。少々お待ち——」

「ん」

「おう、すまんねダイちゃん」

「ん、ん」

気にすんな。との事。のど飴舐め舐め。

「……」

「……んふ」

「っ!?!」

「そう言えば、牛乳って喉に良いって聞いたような」

「少々お待ちください!私が出します!」

「ん!?!」

そうしてヤオヨロちゃんが腕から牛乳を出した。

「はいどうぞ!!」

「ありがとね。モモちゃんの出した牛乳飲むね。モモちゃんの、乳、飲むね!!」

「……はあっ!?!や、やっぱりお待ちください!!!」

「待たない！」

……んう、普通のぬるい牛乳だ。でもなんかえつちだからよし！

「……………ん」

「唯、それはやりすぎ」

「ん……………」

今だいちちゃん服に手を掛けなかった？ねえ。なにしようとしたの？ねえ。いつかちゃん止めなかったらなにに曝け出そうとしたの？

さて、夕食の時間である。なんと夕食はカレー！ただし自分たちで作らなきゃならぬらしい。

「と言う訳でそこらは任せた！」

「おいずりーぞ！オレ達だって料理慣れてねえんだ！」

「ああ、皆さん。詭弁さんは、詭弁さんは良いんです」

「ヤオモモ、そうは言っても一応具材切るくらいは参加させないと」

「いえ、その……詭弁さんが料理に参加すると大変な事に……」

「何？詭弁って料理下手なの？」

「へえー、まあ御坊ちゃまだし。らしいっちゃらしいな」

「そうではなく……」

「人参厚く切り過ぎ!火が通らんだろうが!この人参なら厚さ1.3cm!火力が強すぎ!焦がしたいのか!!薪引け薪!玉ねぎの切る向き違う!横じゃなく縦だよ縦!」

「……と、まあ出来上がったものは何でも食べるんですが、作る段階では……」

「料理ヤクザかよ」

「意外すぎる一面なんだが」

「ヤオモモ良くアレで中学校の間詭弁の弁当作ってたね」

「ま、まあアレはつまり詭弁さんの好みの味付けと言う事ですので……」

「もう結婚しちまえお前等」

「いつの間にかA組B組対抗カレー勝負なる物が開催されていて、A組が勝ったらしい。実感わかねえなあ……」

「いやオメエだよ」

「そうして合宿二日目が終わる。」

直前の出来事であった!!

時計は8時30分を回り、風呂から上がったので男部屋でごろごろしようと思つていたら突如襟首を掴まれてとある部屋に引きずり込まれた。

「何故に俺はここにいたのでせう」

「決まってんじゃない。……そろそろ白黒つけて貰おうかなつてねー」

ニタニタと俺の顔を覗き込むせつちゃんこと取蔭切奈。

凄い神妙な顔つきで俺を取り囲むB組女子一同。

「……………」

「あ、あの……皆さん、こういった事は……神が見ておられます……」

そして座布団で祭り上げられてるだいちちゃんといつちゃん。えー……何コレ。

「で?小大と塩崎、どっちが好きなの?」

俺の耳元を舐めるような距離で囁くせつちゃん。俺は今何をされる時間なんすか。

助けてヤオヨロちやあん!!

これは違うんですよ!ヤオヨロちゃん!

「それで、小大と塩崎どっちが好きなの?」

もう俺の耳を舐めてるんじゃないかって程に近くで囁くせつちゃん。

どうしてこうなった?

「Heyキベンさん!シロクロはつきりオサメどきデス!」

「それを言うならシロクロはつきりしろ、か年貢の納め時のどっちかだぞポニーちゃん」
「こーら、話をそらすな」

ふにつと耳をつねられると同時に背中に柔らかい感触が当たる。んもーほんとなんでコイツらパーソナルスペースガン狭なの?俺は嬉しいけど!!

嬉しいついでに言うけど全員が無防備に近い寝間着で俺を囲み、部屋全体を女の子特有の良い香りが包む。これで反応しないとか逆に失礼では!?

「……邪な色欲を感じました」

ジト目で睨み付けてくるいつちゃん的眼光が怖い。俺の詭弁くんがステイした。

あれ?これ調教されてね?

「本命はどっち?あ、八百万ってのは無しだから」

せつちゃんの声色がさつきから性的で大変お困りになられるんですがあああ!!? 耳元で囁くのは止めて!

「ノコノコノコ……詭弁つてもしかして耳が弱点なノコ?」

「きーちゃん君そんなあざとい笑い方だったっけ!」

そう言うときーちゃん改め小森希乃子は顔を両手で隠した。

「や、やっぱアイドルヒーロー目指すならキャラ付けは大事ノコ……」

「ワイプシに影響されたか!」

自分の事可愛いつて思ってるヤツはこれだからよお! カワイイ!!!

周りの女子ーズも暖かい目で見ている。多感な時期ね!

「よし、今日はきーちゃんの今後の進路相談会ということぞ!」

「あつ、それはまた今度で」

いつかちゃんがあつきり止める。ちくしよう。

「ま、あんたが八百万の事が好きなのは知ってるよ。でもほんとに誰か一人選べって言われたら……即答できんの?」

「ぐっ……」

鋭い視線が俺を貫く。……いや、鋭くは無い。ただ、俺の弱い心がいつかちゃんの目を怖がっているだけだ。

……即答は、出来る。出来るはずだ。今までだってそうだったじゃないか。俺の軽い行動に釣られてしまった女の子に、絶望を叩きつけてきたじゃないか。

浮わついてた心が一気に沈んでいく。俺が、誰かを選ぶ権利なんてあるはずが無い。

「ははは。いやー難しいなあー、だって皆カワイイから甲乙付けがたいぜ!」

沈んだ心とは裏腹に口調は軽くなる。多くの人を傷つけた言葉を紡ぎ続ける。軽い言葉、軽い意思を紡いで、繋いで、積み重ねて、詭弁が出来る。

「皆違うタイプでカワイイし、一人を選ぶのは難しいって!うん、こういう時にやっぱ大事なので安心感じゃない?包み込むような母性と言うか……とにかくそう言ったのが大事だね!だから簡単に安心感を感じられるようなハグをして決めるってのは」

「ん」

すっと、頭を抱き締められた。

「うえつ、ちよ、唯!」

「Wow、ダイタン!!」

「だ、だいちゃん?あ、良い匂い」

「嘘は、だめ」

「……や、良い匂いですよ?」

「そつちじゃない」

責めるような、慰めるような、軽い俺では判別付かないような複雑な感情が小大唯の目に宿っていた。

「皆、自分に嘘は吐けない。貴方も、そう」

自分に嘘は吐けない。その言葉が俺の中に沁みていく。思わず泣きそうになる。

「嫌なら、嫌で良い。好きなら、好きで良い。正直に言つて？」

そう言つて俺に柔らかく笑いかける小大唯。

色々ともう限界だった。ポロポロと涙が零れ、本音が口から吐き出される。

「っ……好きだよ！ああ！皆好きだよ！俺はクズだから、色んな女の子が好きになっちゃうんだよ！！でもっ、俺の、俺の口が軽いせいでモモちゃんを傷つけた！！俺がっ、モモちゃんを狂わせたんだ！！なら、俺がモモちゃんを守らなきゃ、俺が守らなきゃ、それこそ嘘だろうっ！！」

小大唯の胸の内で、俺の慟哭が響く。

俺が壊してしまったモモちゃんの平和は、俺のせいで狂ってしまったモモちゃんの人
生は、俺の人生全てで償わなければいけない。モモちゃんがヒーローになると言うのなら、
全霊で支えなければいけない。弱い俺が出来ることなんて、それしかないから。



夏休み前

放課後 B組

「……何? 詭弁に昔何かあったか、知ってることを教えろって?」

「うん、物間なら何か調べてるかなって」

「あのねえ拳藤、僕が何でも知ってると思ってるのかい? ……まあ、知ってるけど」

「ほら知ってるじゃん」

「うるさいよ。……聞いてて気持ちの良い話じゃないが、それでも聞かない?」

「……うん。アイツの痛々しそうな笑顔が頭に残るんだ。……お節介かもしんないけど、何かしてあげたいって思ってる」

「惚れた弱みってヤツかい?」

「なっ!?!ち、違うよ!!ただ私は……!」

「分かってる分かってる……ハア、拳藤もかあ……」

「……も?」

「塩崎と小大はもちろん、取蔭と小森、男子なら鉄哲、黒色、庄田に同じようなことを聞かれたよ。ホントにモテモテで羨ましいよ全く」

「……後、物間にも好かれてるみたいだしね」

「う、うるさいな……アイツの強さのルーツを調べただけさ。……本当に聞くかい？拳藤の性格上、聞いたらきつと知らん振りは出来ないよ」

「……うん、聞かせて。私は、アイツの力になりたい」

「……はあ。本当にアイツはタラシだな……分かったよ。……これを見てくれ」

「ん？これは……新聞？」

「昔のスクラップをスマホで撮ったんだ。この記事を見てくれ」

「……『八百万財閥の一人娘、無事救出！』……これは？」

「これより前の記事は見つからなかったけど、小学生の時にヴィランに拉致されたそうだよ」

「なっ……！」

「財閥の一人娘だ、身代金目的だったのは間違いない。……その子の個性がバレるまでは」

「それは……まさかっ」

「『創造』、貴金属や宝石なんて作り放題だっただろうね。どんな大人でも悪用をすぐに思い付いてしまうような個性さ。そしてその時に個性をバラしてしまったのが……」

「詭弁……」

「……実際のところは、詭弁を人質にして八百万に言うことを無理やり聞かせてたんだろう。記事には『男の子を保護した』と書いてあるけど、こっちは怪我云々が書いてない。八百万の方には『無事で』と書いてあつてこれは……まあ、良い想像しないよね。……そして、記事には一切書いてないけど、八百万を救出する時に何人も死んだのは間違いない。それも恐らく、二人の前で」

「つつつつ!!」

「『喋るしか能がない』なんて、なんの自虐かと思つてたけど……当人にとつては本当にそうだったんだろう。自分は何も出来ないで、目の前で人が死んでいく。そりゃトラウマにもなるさ」

「……」

「……拳藤。僕から見てだけど、詭弁と八百万の関係はかなり歪で、複雑だ。正直、僕や鉄哲、庄田も黒色も……僕たちじゃ手におえない。たぶん、男と女のシンプルな関係でぶつた切る方が良い。無理にとは言わない。拳藤が良ければ、アイツを八百万から奪い取つていけ」

「なつ、それとこれは違うだろ!」

「違わないよ。詭弁にとつて、八百万は『自分の罪』の象徴だ。そして八百万にとつては、共に地獄を生きた『依存相手』だ。……もしかしたら、このままでも良くなるかもしれない

ない、だけど悪くなる可能性は非常に高いよ。だったら、いつそのこと関係を壊して作り直した方が良いはずだ」

「………だけど」

「拳藤、僕は同じことを塩崎と小大、取蔭、小森の四人に伝えた。……それと、影で聞いている柳とポニーにも今伝えた」

「っ!？」

「………盗み聞きする気は無かったの………ごめんなさい」

「Sorry………」

「後は、君たち次第だよ。自分がどうしたいかって思いに、正直になれよ」

「………自分が、どうしたいか………」

「………はあー、なんかギャルゲー主人公の友達役になった気分だ」

「………ギャルゲー、やるんだ」

「詭弁に会うまではやったこともやるつもりも無かったよ!なんだよアイツ初対面できなり『うわ、ギャルゲーの相談役っぽい顔』って良いやがって!そんなに僕はモブ顔かっ!？」

「モノマさんもNice guyだけど、キベンさんのほうがモアモアイケメン德斯ねー!」

「傷つくからそう言うこと思っても言わないでくれ。ポニーさんや……」

「あ、なんか今の詭弁さんっぽい」

「あゝ!!もう!何でアイツの口調はこうも感染しやすいんだ!!」



唯の胸の中でボロボロ泣く今のアイツに、普段のニヤけ面や痛みを堪えるような笑顔の面影はなく、ただの子供のような顔で泣き叫ぶ。追いかけたかった詭弁の背中が、今はどうしようもなく小さく見えた。

「俺がモモちゃんを守らなきゃいけないんだ!!俺が狂わせたからっ!!」

わんわんと泣く彼を抱き締める唯と、その横で子供をあやす様に頭を撫でる茨。

普段アイツの強さを見ていたが、その裏にある弱さを私は見ようとしなかった。本当のアイツは、あんなにも傷ついているのに。……私には、アイツを抱き締めてやる資格なんて……

「変なこと考えてるでしょ一佳」

急に耳元で切奈の声が聞こえた。振り向けば切奈の口だけが浮いていた。

「いいのかなあ?うじうじしてる内に機会、逃しちゃうよ?」

「機会……つて」

ふと見れば、切奈が詭弁の背中に自身の胸を押し付けていた。

私の顔が気恥ずかしさやら怒りやらで赤くなつていくが、切奈の口はニヤニヤと笑い続けて

「ほらほら、右隣に小森が来ちゃつた。レイ子かポニーが左隣に来るのも時間の問題かもよ？ 気が弱つてるときに優しくされるとコロツと落ちちやうのは男女一緒なんだつてさ」

心臓が跳ねた気がした。その言葉が聞こえたのか、レイ子とポニーが焦るように詭弁の左隣に向かつて動き出す。

「あーあ、埋まつちやつた。一佳は戦闘訓練だと行動が早いのに、なんでこう言つたことにはうじうじすんの？」

「だ、だって、私は、別に、詭弁の事をそう言う目で見てないしっ！」
「あくん？ 耳が遠くて聞こえないわ？ 物理的に」

ケラケラと笑うその声に、自分の感情がふつふつ、グツグツと煮え立つてくる。それが怒りなのか、悲しさなのか、悔しさなのか、自分でも判断がつかない。

「……一佳はさ、難しく考えすぎなのよ。『好き』になるのに、難しい理屈や劇的な運命なんていらないでしょ」

「……切奈は、なんで詭弁の事が好きになったの……?」

「……何の事はないよ。アタシみたいなヒネクレモノに、真つ正面から可愛いって何度も言われたから。自分でもどうかって思うけどさあ、……それで好きになっちゃったんだもん」

思わず、詭弁越しに切奈の顔を見る。そこには、見たこと無いような乙女の顔をしてる切奈がいた。

「……あー、もー恥ずかしいな……ほら一佳!みんな詭弁を慰めてんだよ、アンタも一言くらい声掛けろ!」

そう言つて、背中を押される。まだ胸の内でもよく分からない感情が煮えているが、一度そつと蓋をする。

立ち上がつて詭弁に近づき、詭弁の周りに取り付いているみんなを引き剥がす。……特に切奈は叩くように引き剥がしてやった。

「詭弁っ!!」

自分で思つた以上に大きな声が出た。だが、そのまま続ける。

「わ、私は……私は詭弁の事が好きだっ!!だからっ!好きなヤツが守りたいモンは私も一緒に守つてやる!!詭弁!お前は一人じゃないよ!!」

「いつかちゃんがイケメン過ぎて死ぬる……」

いつの間にか泣き止んでた詭弁が、そのまま後ろに倒れながら両手で顔を隠す。

……うん、私、今なんて言った？

「うーん……。焚き付けたのはアタシだけど、まさかそんなダイタンな告白するかな普通……」

「み、MEもまけないデース！ヘイキベンさん！私もI Love youデース!!!」

感情のままに口から出た言葉を思い出し、つい思わず詭弁を叩いてしまった。

「いつかちゃん、照れ隠しは良いがめっちゃ痛い」

「っ、あ、ご、ごめん!!」

「ああ、くそ……痛くてまた涙が出てきた……っ、みんな……なんでこう……本気で惚れちゃうじゃん……辛いじゃんよう……」

「ん、惚れさせた報い。甘んじて」

「だいちゃんもさつきからイケメン過ぎる……」

床に撃沈した詭弁の頭を、自身の膝に乗せる茨。そして慈愛の掌で詭弁の頭を撫でる、

「詭弁さん。私たちは貴方の力になりたいのです。貴方がどういう選択をしても、私は尊重します。ですからどうか……私たちを、拒絶しないでください」

「いっちゃん……」

「……みんな、ごめん。クズの俺を好いてくれる気持ちは、凄く嬉しいよ。……でも、やっぱり俺の一番はモモちゃんなんだ」

「そうですか……」

「ですが、一番が変わる可能性がありますよね?」

「……はへい?」

……茨?

「今の詭弁さんの心は八百万さんに向いているのかもしれない。ですが、だからと言つて私の心は諦められません。これからも全力で貴方の心を奪いにいきます」

そう言つて、普段からでは考えられないほどに、歯を見せるほどに大きく笑いかける。
茨。

「ん。……私も、獲りに行く」

「あーた達人の心を優勝旗かなんかと勘違いしてましょえんかねえ」

「同じようなものでしょう。詭弁さんの一番の座は一つしかないのですから。覚悟、しててくださいいね?」

「……うん、なんかとんでもないことになつちやつたぞ?」

……身から出た錆つてやつた。

「……さて、もう9時回つちやつてるし、消灯まで後30分も無いわね。……どうしようかなあ? 詭弁を部屋に返さず、ここで寝かしちやおうか?」

ニヤニヤと切奈が切り出し、全員に戦慄が走る。まさかの、同じ部屋でお泊まり会である。いや、頭ではみんなただの冗談だと分かっているが、それでもその光景を想像しない訳にはいかなかった。

「……………んえ、9時……………?」
たつた一人を除いては……………。

おねむです！

9時を回ると、唐突に眠くなる。頭が活動するのを拒もうとする。

大抵、9時って普通の高校生なら何かしらやってる時間だが、俺は何故か眠くなるからそのまま寝る。でも一回寝ちゃえば大丈夫なのだが、寝るとまあそのまま朝までぐっすりよ。

だから俺は夜早く寝て、朝超早く起きる習慣が染み付いてしまった。
何が言いたいかと言うと、今くっそ眠い……。

「お、おーい。もしもーし？ 詭弁、聞こえてる？」

「んこい……？」

「(子供かッ!)」

頭をくらくら揺らしながら座り込み、ぽけつ、といつかちちゃんの方を向く。

顔を向けたら鼻を抑えて顔を逸らされた。

「(普段とのギャップが……鼻血出そう……)」

「キベンさん？ Are you Okay？」

「んい……ん」

「W……WHAT!!?」

ポニーちゃんが心配そうに近寄って来る。手を伸ばしてポニーちゃんを捕まえ、頬と頬を擦り合わせる。

「んうう……ポニーちゃんは偉いよねえ……アメリカから、遠く離れた日本にきて勉強するって……偉い……好き……」

「……oh」

ほしゆん、と音を立ててポニーちゃんの顔が真っ赤に染まる。そしてそのまま倒れるように布団に潜り込んだ。

「I'm so happy……」

「ぼ、ポニー!?!」

「あつ、きやあ!?!」

近くにいたきーちゃんを引き寄せ、後ろ抱きにする。そして腕を回して、頭を撫でる。

「ふにやあつ……」

「きーちゃんは、自分に自信があつて凄いなえ……すきい……きーちゃんが可愛いのは俺が知ってるから……頑張つてアイドルヒーローになるんだよお……」

「あつ……あつ……ダメっ……詭弁さんだけのアイドルになりゆう……♡?」

「希乃子もヤられたっ!？」

「……………」

だいちちゃんが俺からきーちゃんを引き剥がすが、引き剥がした代わりにだいちちゃんが俺に捕まって正面から抱き付かれる。鼻先だけが優しいキスをするほどに近寄る。

「むにう……………だいちちゃんは影でみんなを支えてるって知ってるよ……………頑張ってるねえ……………偉い……………好き……………」

「ん……………ねう……………♥?」

ふにやつと笑いかけると、布団に優しく押し倒されて服を……………

「ちよちよちよ!!?!唯、待て!」

「小大さん!姦淫は罪です!」

「小大、服を脱がすのはやり過ぎだつて!」

いつかちゃん、いっちゃん、せつちゃんの三人がかりでだいちちゃんを取り押さえられる。

「あんな顔で誘われたら我慢できる筈がない」

「詭弁は誘うとか、そんなつもりねえよ!」

「一佳も一緒。あの顔で微笑まれたらメス堕ち不可避」

「妙なこと言うなバカ!」

「きやあんー!」

「っ?!」

レーちゃんの頭を胸に抱きしめ、ぱたぱた暴れる両腕を押さえる。

「レーちゃんが一人でこっさり特訓してるのは知ってるよお……頑張ってるねえ……好き……偉い、偉い……」

「っ、あ、ひやああ……♥?」

ぎゅって抱き締めながら頭をなでなですると、暴れていた両腕が落ち着いて、ひっそりと俺の腰に回り込んでくる。

「んもう!急にキヤラ変わりすぎでしょ!もう寝るなら寝なさいっての!」

せつちゃんの両手が身体から離れ、俺とレーちゃんを引き剥がす。そして飛んでいる手が俺の目を覆い、枕に無理やり押し付けられた。

「ったく……手のかかる奴ね……ッひや!」

目を覆ってた手を掴んで、優しく舐める。しなやかな指はすべすべとして、お肌にちゃんと気を使っていることが良く分かった。

「んひっ!?!き、詭弁!?!あんた何をツふあ!」

じゆる。じゆる。音を立ててせつちゃんの指をしゃぶる。

「あんたが舐めてんの飴玉じゃなくてあたしの指だつて!ちよ、ひやう!?!んっ、もう!返

しなさい！か、仮にも女の子の指を舐め回す普通!？」

「んにう……知ってるよお……せつちゃんは、人一倍負けず嫌いの努力家だって……ん、ひとをよく見てる……綺麗な目だねえ……」

「っ!?!あ、んまジロジロ見ないでよ……っ」

「んにえ……じゃ、かわりにペロペロ舐める……」

「だから舐めんなって……っ!くっ……やめっ……変な気分になるう……♥?」

せつちゃんの手が本体に戻っても指を舐め回すのを止めない。指先、関節、指間、そして手のひらまで舐め回す頃には、せつちゃんの抵抗も形だけとなっていた。

「あっ……ふあ……やめてよお……手え、ふやけちゃうじゃん……♥?」

「……はっ!?!何見入ってるんだ私!詭弁!寝惚けてるからってセクハラ続けんな!!」

いつかちゃんがついに個性を発動して、強引に引き剥がされる。

……ペロペロ。

「ん私の手を舐めるなっ!!」

「ぶぎゅう」

いつかちゃんの掌によって押し潰され、そのまま意識を完全に手放した。

肝試しですよ!ヤオヨロちゃん!

昨日に引き続き気がついたら男子部屋に転がされていた。おかしいな、B組女子部屋に居たのは覚えてるんだが……。

そしておかしいついでに、男子部屋の様子もおかしい。なんでカツちゃん、しよーちゃん、いずくちゃんと俺の4人しか居ないん?まだ5時前よ?

「つー訳でなんか知らないカツちゃん?」

「知るか!」

「あつ、起きてた。ダメだよカツちゃん、いずくちゃんとしよーちゃん寝てるんだから静かにしないと」

「ダメエが話しかけてきたんだろ!!」

だから起きるつつつてんだろ。寝転がってるカツちゃんの口を両手でふさいだる。

「……」

「つ……!!!」

「カツちゃんって意外と綺麗な目だよねえ」

「ふんっ!!!」

「うぐう」

カツちゃんの両拳を警戒してたら、まさかの足。みぞおちに突き刺さった蹴りに悶える。

「死ねやクソホモ野郎!!」

「誉めただけでホモは言いすぎでは?あ、めっちゃ痛い」

俺の口が軽いことは認めるけど、割りと女の子だけじゃなく男も誉めるよ?いやまあ女の子の方が9割なのは認めるけどもさあ。

ああー、カツちゃんが騒ぐからしよーちゃんといづくちゃん起きちゃったじゃーん。

その後食堂に降りてったら女子ーズが談話してたので挨拶した。B組女子ーズ全員に顔を逸らされた。悲しいなあ。

「おはようございませすわ詭弁さん。ちよつとお話が」

「おはようモモちゃん。今日も『ガチャン』かわい……あの、この手錠は?」

「うふふ」

「モモちゃん?ちよ、ご飯前ですよ?ねえ、ちよつと、どこに連れてくる気!?!」

「うふふふふ」

そのまま外に連れ出されて、昨日の夜は何時まで何処で何をしていたのかをキリキリ

吐かされた。モモちゃん、朝から拷問器具はだめですよ。

フラフラになって食堂に戻れば、同じようにフラフラの男子勢が揃っていた。

「お、おう詭弁……おはよう……」

「おはようえいちゃん……なんでそんなやつれてんの?」

「ちよつと早朝練をな……つてか、詭弁お前昨日の夜どこ行つてたんだよ!なんかピクシーボブが寝てるお前運んできてたし!」

「あとピクシーボブのおっぱいガン揉みしてたなお前エ!!感触はどうでしたか教えてくださいやがれ!!」

「うるさいみつちー。……えつ?俺がピクシーボブの胸を揉んだ?」

「詭弁さん」

「ひえつ、いつの間に真後ろに!?ち、違うですよモモちゃん!」

本日二度目の拷問器具。ああ、もう馴れちまったよ……。

「ひええ……ヤオモモ怒らせないようにしよ……」

「詭弁あれよく生きていられるな……」

結局なんで皆朝から居なかつたか聞けなかつた。……んまあいいか。



朝飯を食べたら即個性訓練。今日も今日とて声張るぞーおー。

「詭弁、ちよつと来い」

なんでしよう先生、日頃の行いを叱られるのでしようか（自業自得）

「詭弁、個性を使う時何を考えて使っている？」

「何を……ですか。一応相手に効きそうな言葉を使うことを考えてますが……」

俺の個性は、大前提として言葉の意味を理解できるだけの知能を相手を持つている必要がある。だから犬や猫といった動物には効きづらいし、一見頭悪そうな脳無相手に効いたりもする。

「なら、自分の個性の発動プロセスは理解してるか？」

「個性の発動ぶりよえす？」

「……」

ちやうねん。わざとや無いんや。そんな目で見いんといて。

「んあー、ええ〜……発動ぶりおしえしゆはですね、俺の言葉……正確に言えば喉の振動が相手の脳に色々作用して、限界を越えさせたり認識を誤魔化したり、まあ色々脳に作用するって聞いてます……個性発動ぶるおれす!!」

「プロレスになつてるじゃねえか」

「ちやうねん……」

えーいこうなつたら相澤先生も嘔み嘔みになあれ!

「個性発生ぷろえふ!」

「何が言いたいんだ……とにかく詭弁、これからの訓練は相手の感情を刺激することを意識してみる。お前の個性発動プロレ……プロレス……詭弁、お前何しやがった……!」

「おこななの?」

「お前も補習組と一緒に補習するか?」

「すんません!!!感情の刺激つすね!かあしこまつ!!!」

あー個性訓練で忙しくいくな!!!

あつ、何で感情を刺激させるのかを聞いてない!でも今のセンスには近付けねえな!

「個性発動プロフェス………治らねえ……」



さて、ついに来ましたか。……肝試しタイム!!!

「肝試エエエー!!!」

「いえー!!!」

「肝試しってそんなテンションでやるもんだっけ？」

「つーか、マジで詭弁まだ叫ぶ気力残ってるのかよ……」

「詭弁君って朝から叫び続けてなかったっけ……」

はい。まあぶつ飛んだテンション戻して、と。

「では肝試し恒例、肝を冷やすタイムです」

「肝を冷やすタイムってなんだよ。素直に怪談って言え」

「お、良く分かったねジロちゃん。護身用のお守りを一つ贈呈しよう」

「準備万端か」

ちなみに中身は俺特性の笑い袋。狂ったように笑い続けてテンション上がってくるよ。

俺の個性は電子機器通すと効果が半減するけど、無いよりましですわ？

「……さて、こういつた怪談話はマクラに『これは私の友達の話なんです』とか、『先輩から聞いた話なんです』とか、何処かの誰かの話が、んまあ常套句とでも言いますか。いわゆる『ありきたり』って奴だな」

「おお……なかなか雰囲気あるな……」

「んでも詭弁の話だぜ? ぜってえ最後に笑いに走るだろ」

「……どしたの、ヤオモモ。顔色悪いよ?」

「……いえ、何でもありませんわ……」

「今から話すのは、『誰か』の話じゃない。誰でもない『俺の』話だ。俺がまだ、小学校に上がる前の、豆粒みたいな子供の頃の話だ。舞台はそう、丁度ここいらみたいな暗い、暗あい森の中での出来事だ」

「目を閉じてみれば、ああ……聞こえる聞こえる。虫のさざめき。虫には詳しくないが、りーん、りーん、と鳴く音は鈴虫か? ざあ、ざあ、と風が木の葉を打つ音も聞こえる。少し離れた場所で、さらさらさらさら……ああ、これは川の音だ。もおっと耳を澄ませば、ひう、ひう、緩やかな風の音も聞こえて来た。俺は昔からこういう自然の音つてのが好きでね、家族で遠くにキャンプしにいったら、夜な夜な抜け出して静かな自然の音色を聞いていた。まあ自分でもマセたガキだと思うけどな」

「その日も、両親が寝静まったのを確認したらゆつくりゆつくり、音を立てないよう

に、テントから抜け出して、月明かりの中暗い森の中に身体を沈め、気を静めた。りーん、りーん、ざあ、ざあ、さらさらさらさら……ひう、ひう。ああ、なんていい音なのだろうか。目を閉じて、さらに耳を澄ませる。すると、遙か遠くで子供の無邪気な笑い声がしたんだ。ああ、きつとその声の場所で、今の俺達みたいにキャンプをしてるんだなあ……つて、その時は思った」

「月が更に昇り、真夜中。たまたまその時、明るい月に分厚い雲がかかった。月明かりに照らされた暗い森は、一気に真っ暗。闇の世界へと姿を変えた。足元すらおぼつかない闇の森でも、俺の心はまだ落ち着いていた。耳を澄ませば、自然の音が聞こえてくるから。りーん、りーん、ざあ、ざあ、さらさらさらさら……ひう、ひう。自然は、いつも味方だ。それに無邪気な子供の笑い声だって聞こえる。何にも怖くは無い」

「その時、そっ……と、俺の中の好奇心が『この笑い声の所に行ってみよう』と囁く。月はまだ厚い雲の中でも、何度も訪れたキャンプ場だ。そうそう道には迷わない。好奇心に身を委ねて、その笑い声の場所に向かっていった」

「『あははははは』『あははははは』 よくよく聞けば、どうやら複数人の子供の声がする。

そこで何やら楽し気に遊んでいるようだ。すると俺も真夜中だつていうのにウキウキしてきて、つい笑い声の場所に走つていった」

「真つ暗闇の森の中だ。何度か転びかけたが、怪我をすることなく笑い声の傍まで来れた。『あははははは』『あははははは』『あははははは』『あははははは』幼い俺は、ようやくそこで異変に気が付いた。子供の声が多すぎる。近づくにつれ、声は二人、三人、四人、五人。もつともつと増えていく。おかしい。何かが変だ。この……この茂みの一つ向こうに、この声の主が居る。俺は嫌な予感がしたが……好奇心に勝てなかった。テントから抜け出した時よりも遥かに慎重に、ゆっくり、ゆうつくり、茂みを覗いた。その時、雲が晴れて月明かりが森に差し込んだ。そこで見た声の主の姿は」

「影を固めたような、真つ黒な大男だった」

「その大男から、複数の子供の笑い声が聞こえる。『あははははは』『あははははは』『あははははは』『あははははは』『あははははは』狂つたように笑い続け

ハアツ!ハアツ!ハアツ!ハアツ!走る俺の荒い呼吸音。草や落ち葉を走り蹴る音。そして狂ったように笑う大男の声。一心不乱に笑い声から逃げる。走って、走って、走って、走って。ハアツハアツハアツハアツ!」

「逃げて逃げて逃げて逃げて、足が動かなくなるまで逃げた。地面に倒れるように転がり、息を整えた。ハア、ハア、ハア、ハア。未だに心臓はバクバク鳴り響く。滝のように汗が流れる。ハア、ハア、ハア、ハア。空を見上げれば、月が再び雲に隠れて闇夜が訪れた。ハア、ハア、ハア、ハア。未だに耳がうるさい。心臓が鳴り響く音、荒い呼吸音、ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ。違う。その呼吸音は、俺の呼吸じゃない。ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ。荒い呼吸は、後ろから聞こえてくる。ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ」

「お前の後ろからあああああ!!!」

「びッ『ワハハハハハハハハハハハハハハハ!!』くあwse d r f t g y ふじこーp:!!!」

ジロちゃんが死んだ!!この人でなし!!!

「お前の笑い袋じゃねえかああああああああ!!!」

はい。

と言う訳でジロちゃんにはビックリドツキリアシスタントになってももらいました。ことういうのによわよわなジロちゃんに予めお守りという名の笑い袋を持ってもらい、一番の盛り上がる所でジロちゃんを刺激すれば、思わずギユツとしちやった心の音を、どうぞまだ忘れられない悲鳴になるわ。

「ジロちゃん、待って。待って!」

「死ねッ!!死ねッッッ!!!」

「すけありッッッ」

今日もジロちゃんの個性はイキイキしてるじえ。

俺はジロちゃんに殺されかかっているけど。

「いやー……まじかー……」

「うむ、あの話の後でこの森は……」

ワハハハハハ……

「今なんか聞こえた!!?今なんか聞こえたあ!!?」

「気のせいよ、気のせい」

「コレさあ……怖がらせる方も怖いんだけど……」

「……はい!と言う訳でB組が驚かす側先行、A組は二人一組で組んで出発!驚かす側は直接接触禁止で、個性を存分に使って驚かせまくりなさい!」

「嘘だろ!!この流れで普通に進めただと!!?」

「止めようぜ?な?止めようぜ?」

襲撃ですよ！ヤオヨロちゃん！

んッてな訳で肝試し。当然のように俺はヤオヨロちゃんと同じチームで

「組み分けはクジよー！」

「んいい……」

はい。運ゲーきた。仮にもし、万が一、ありえないとは思いますが、男子がヤオヨロちゃんと同じ組になった場合そいつを埋める。

「（詭弁からの圧が凄い）」

「（ヤオモモもなんかプリプリしでした……）」

お願い神様！ここ一番で俺の徳ポイントを使って何とかして!!!

えっ、徳ポイント皆無？うそおう……

「はい、引いて詭弁！」

「んう………2番」

「はい詭弁2番！次！」

そうして俺のパートナーはっーちゃんになった。

「……」

「ケロっ、よろしくね詭弁ちゃん。……そんな顔しないの」

「いや、本当にゴメンちゆうちゃん……つううちちゃんは悪くないのに……」

「いいのよ」

「あとしよーちゃんはブツ〇す……」

「嫉妬」

あ、やば。ヤオヨロちゃんの隣にイケメンが立つてるって想像しただけで吐きそう。

「……詭弁、替わるか?」

「かわりゆうう」

「待て、クジの結果は絶対。故に決まったパートナーでゆけ!」

「腐れ筋肉が……」

「詭弁ちゃん、そういう事は言っちゃダメよ」

「止めないでくれちゆうちゃん。男にはやらねばならん時がある」

「少なくとも今じゃないわ」

「ぐぬぬ……おいしよーちゃん!モモチちゃんに触れたら埋めるからな!」

「おう……」

「そして各グループはパートナーと常に手を繋いでいる事!互いに交流を深めていけ

「！」

「夜道には気を付けろよテメエ……」

「今が夜よ詭弁ちゃん」

「今ならダークパワーっぽいのが使えそうな気がする……」

「止めなさい」

つーちゃんから舌ピンタを食らった。なんかもう色んな意味で泣きそう。

「……なんか、悪いな」

「いえ、まあ……詭弁さんですし」

「それもあるが、お前もアイツの方が良かったんだろ」

「……まあ、そうですね……ですが、いつまでも離れられないのも問題ですわね……よ

し、轟さん！肝試し、頑張っていきますわよ！」

「お」

そんなこんなで、俺とつーちゃんが進む番になった。

「よっしやー！俺らの番だ！行くぞつーちゃん！」

「詭弁ちゃんのその切り替えの早さ好きよ。ちゃんとつゆちゃんと呼んで」

「……ちゆゆちゃん！」

「ケロツ」

そうして暗い夜道を進んでいく。

「ねえ詭弁ちゃん。さっきの怪談だけど、あれは本当にあつた事なの?」

「んい? まあね。俺の親父がハツチャけたのが一つの要因だが、まあ夜な夜な外に飛び出してた俺も悪いからな」

「ふうん……夜は怖くなかったの?」

「んう……まあ、怖くは無かったかな。自然の音が好きつてのは本当だし、昼より夜の方が良く聞こえるんだ」

「肝が据わつてたのね」

「んまあね。まあ、アレが原因で夜出歩くのは止めたけど。……つうゆちゃんはどんなん?」

「そうね。私は、夜は怖かったわ。昔はお化けとか信じてたもの。暗い夜になると、外をお化けがウロウロしてるって本当に思ってたわ」

「ん……今は?」

「もうお化けなんて信じてないけど……でも、ちよつと夜は怖いわね」

「そつかあ。んまあ、今は俺も夜がちよつと苦手になつてんだ。夜がというか、暗い闇が」

「……それは」

「ばああ」

「……」

「……」

「……ん」

「だいちゃん、満足げに戻らないで？」

「ビックリしたわ」

「全然表情変わってない事にビックリしたわ」

「詭弁ちゃんは驚いてないのね？」

「……んうー、まあ……なんだ？なんというかこういう暗い所だとなんとなく第六感が冴えるって言うか……あ、なんか来るってのが直感でわか『ふうー』ウひん！」

「……」

「あ、やっぱ詭弁って耳弱いんだ」

「せつちゃん、耳に息吹きかけるのは有りなん？」

「さあ？でも直接接触してないからオツケーでしょ？うひん！あははは！うひん！だつて！」

「覚えてろよ……」

「……第六感が、何だつて?」

「違うのよちゆルウちゃん……本当に耳は弱いだけなのよ……」

「ふうーん」

「……なんだその意味深な視線はあ……つうちちゃんの弱い所探っちゃうぞ」

「それはダメよ詭弁ちゃん。ケロケロ」

「いいや、探っちゃうね。弱みを知られたからにはタダじゃ……」

「……どうしたの?」

「つーちゃん、なんか来る!!凄い嫌な、なんかが!!」

「えっ」

パァン

聞き慣れてしまった銃声が聞こえた。

その直後、左腕が灼けるように熱くなる。

「……えっ、詭弁……ちゃん?」

「あゝあゝ……クソツ!!痛いなあツ!!」

「……ひゃひゃひゃ、撃たれたらデカい声で痛がるフリをするクセは変わってねえよー

で何よりだあね」

「な、誰!?!」

「ひやひや、誰だお前と聞かれたら、答えてあげるが世の情け」

馬鹿々々しい名乗りを上げている間に、足元の石を銃に向かつて蹴り飛ばす。

「痛つ!! てめえこういう口上の時に攻撃しないのがお約束だろうが!」

「つーちゃん! 逃げろ!!!」

「詭弁ちゃんは?」

「俺は、逃げられねえ……つーちゃん、急いで先生を呼んできてくれ!!」

「ひやひやひや! おおれの個性を覚えててくれているとあーコーエーだあね! なあキベン

くうん! あん時の女の子、どおこにいるのかあな!」

「つーちゃん、『行けッ!!!』」

「ひやひや! 逃がすかあよ!!」

「逃がすんだあよ! 『上エエ!!!』」

パァン

放たれた弾丸は、つーちゃんに当たることなく森の中に消えていった。

「ああつ!!? んでえこの距離で外れるんだあよ!!? ちいッ! ……まあいいや。オレの目標は

まあ半分つてとこだあな」

「デメエ……刑務所にぶち込まれたはずだろうが!」

「ひやひやひや! そおだな! 確かにオレは一度ムシヨにぶち込まれた! んだが、そんな

オレを解放したモノズキがいたんだあよ!なあキベンくうん?あん時の女の子さえいれば、オレ達や億万長者だ!もう一度聞くぞお?あん時の女の子、何処に居る?」

「テメエみてえな寄生虫に教える訳ねえだろ!」

パァン

銃弾が俺の脚を貫く。

「ひゃひゃ、聞き方が悪かったなあ。いいかあ……よおーく考えろ。テメエがふざけた口利けるのは、オレがテメエのドタマに鉛弾ぶち込んでねえからだ。生きたけりゃあ、その軽い口に乗ったかつかかるーい頭で考えなあよ?金、宝石、美術品、何でも作り出せるあの女の子は何処だ。言え」

「……あの子はなあ……」

「あの子は俺みてえな奴の命より、遥かに重いんだよ。負け犬ヴィランが!」

「……ほー、そうかー。んなに頭ぶち抜かれたいかあ。おーし、んじやああの子にテメエが糞便漏らしながら死んでる様見せてやりやあ、心もへし折れるだろおよ」

「ハツ!!どうした社会の負け犬。出来もしねえ事ウダウダ言ってる暇あつたらその銃の引き金さつさと引いてみるよ。まあお前みたいなクソ不細工ゴミ人間には無理だろうがな。コバンザメみたいにデカイヤツにくつついて生きるしか能の無い寄生虫だもん

なあ！」

「……死ね」

拳銃が俺の額に向けられ、その引き金が引かれた。

『左イイイ!!!』

本当にタイミングが分かり易くて助かる。

引き金が引かれた瞬間、声を張って銃撃を妨害する。俺の耳がチリチリするが、吹き飛んでないようでもまあ何より。

「っ!?また外しただど!?」

「ははは!どうしたへたくソ!怒りで手が震えてまともに照準合つてねえぞ!てめえの目ん玉は節穴かあ?それとも酔っぱらつてんのかあ!?アルコール中毒者かあ!!!」

「テメエツ!?何をしやがった!!」

パァン

パァン

銃声が鳴るが、弾丸は俺の身体を掠めるだけに留まった。

「ははははは!何処狙つてんだあ!!俺はつつ立つたままだぞ!急に局地的な地震でも来ちゃいましたかあ!?!さつきから肩ぶるっぶるしてるぞ!!」

「クソツ!クソツ!クソがア!!!何で当たらねえ!!!当たりさえ!当たりさえすればテメエ

みてえなクソガキ一発で」

「一発で、なんだあ?」

「は、なっ!?!」

酔っぱらって幻覚でも見てたのか俺の遙か上を狙って拳銃を何度も撃つヴィラン。そんなデケエ高校生いる訳ねえだろ、バーク。

「俺はよお、口先だけしか取柄がねえから……必死で、必死で鍛えたぜ……口先を!」

今、全力で出せる握り拳をヴィランの鼻にお見舞いする。拳が鼻を潰す気持ち悪い感覚が残る。あーくそ。最悪だ。

コイツの個性は『加重』。個性を込めた物に当たった物の重量を上げるといいう個性だ。木刀とかに個性を込めりゃあ殴った相手は重くなるし、こうして銃弾に個性を込めりゃあ撃たれた相手は重くなる。

昔、俺とヤオヨロちゃんがヴィランに攫われた時に、逃げられないようにさんざつばら撃ちこまれた個性だ。

「……ああー……クソ。腕が千切れそうだ……」

重い脚を引きずって、千切れそうな程重い腕を抱えて、何とか辛うじてこのクソ野郎をブツ倒した。万が一起き上がられると困るので拳銃は分解してそこらへんに投げ捨てた。学んでよかった分解術。

……刑務所にぶち込まれた筈のヴィランを解放したモノズキ。……ああ、嫌な予感が止まらねえ。一刻も早く戻らないと。

ぞぶっ……

「……ああ？」

「こんばんは詭弁くん！会いに来ちゃいました♥」

気が付いたら、腹にナイフが突き立てられていた。

「あ……会いに来ちゃいました……じゃねえだろ……」

「血の匂いがしました！思わずそこに向かったら貴方が居ました！血だらけでカアイイねえ！」

「カアイイって言われるのはなあ……」

「……あ、そう言えば詭弁くんは殺しちやダメなんでした！どうしょー！」

「勝手に殺さないでくれないかね。『俺はこの程度じゃ死なない』」

ナイフを握っていたトガヒミコを突き飛ばす。傷口から赤黒い血が流れ出るが、気合と筋肉で塞ぎ止める。

「……わあ！凄いや！傷口が塞がっちゃいました!!」

こんな事が普通の人間に出来るかどうか、なんて知らない。出来なきや、死ぬような地獄を見たから。

「……そう、俺は、この程度じゃ『死なない』『倒れない』『負けない』」

プチ、プチ、と身体の内側が切れていく感覚がする。全身に力が漲る。辺りの景色の色が抜け落ちていく。

「っ♥凄いい!凄いい!どんだん血の匂いが濃くなってきました!詭弁くん!カッコいいです!!もっと!もっと血に染まりましょう!!」

「いいやあ……染まるんなら血のような赤よりも蒼が良い。青天の空の色は嫌な事を忘れられる……ああ、下着の色なら赤も良いなあ……」

「良いですよね赤!私も好きな色です!!」

「えっ、それは今穿いてる下着を告白してんの?」

「違います!!詭弁くんはエッチです!!」

「男は皆ココロにエッチを掲げてエロくなるのさ。H、e、r、o、合わせてヒーロー。つまり男は誰しもヒーローに憧れるのは自明の理……」

「その理論なら弔くんもステ様も皆エッチでヒーローに憧れてるじゃないですか!」

「弔くんとステ様とやらも、男なら自分のエッチを掲げてんのさ。誰にも内緒でな」

「そうだったんですか!意外です!!」

「いやいや、納得しないでよ。オジサン困惑しちゃう」

第三者の声が耳に届いたその瞬間。俺の意識は闇に吞まれた。

んもおーなんかこんなのも多くねえ？

ここはどこですか!

はっ、と気がつけば、硬いなにかに覆われたような空間に閉じ込められていた。
やあー……なあにこー。

づつ……ああ、そう言えば鉛玉二発撃たれて、腹にナイフがブツ刺さってたんだ……。
小さい声で『大丈夫』『治る』『痛くない』と自己暗示をする。痛みは収まり、傷も閉じた……気がする。

「あーあー、こちら『コンプレス』。目標の一人を回収した」

外の声が聞こえる。この声は、俺が意識を失う直前に聞こえた声の主だ。こいつが俺をここに閉じ込めているのだろうか。

……今、目標の一人つつつたか?

あー……くそ、傷を塞ぐための自己暗示は身体に相当負荷がかかる。何より精神的につらい。思い出したくもない地獄を思い出してしまおうから。

何もやる気が起きない。ヴィランに捕まっている現状は最悪だが、今は何かやる体力もない。

硬い地面に横になり、少しでも体力を回復させる。外の声が聞こえるってことは、内

側からの声も届く可能性があるのだから。
機会を、待つ。



「八百万！大丈夫か!？」

「はあっ！はあっ！まだまだ行けますわっ!!」

「ネホヒャン!!」

「くそっ……凍らせてもすぐに戻る、コイツも再生個性持ちか……!」

「くっ……致死性のある攻撃はしたくはなかったのですが……轟さん！あの脳無の脚をガチガチに凍らせて下さい!!」

「っ、何か策があるんだな!」

パキパキパキッ

脳無の下半身を完全に氷で閉じ込める轟。

「ネホヒャン!」

パキッ、パキッ、とすぐに氷が剥がれていくが、その隙に八百万が創造した大砲で氷ごと脳無の足を粉碎した。

「……容赦ねえな」

「あのままでは私たちだけでなく、他の誰かにも危険がありましたわ。……それに、怪物とはいえ誰かを殺める結果にならなそうですわ!」

「ボゴツ、ごぼつ、異音を立てながら粉々に粉砕した脳無の下半身が復活する。」

「まだ倒れねえのか!」

「ですが先程よりも脚が貧弱になつてますわ!轟さん、もう一度!今度は上半身ごとお願いしますわ!!」

「マジか、人使いの荒い……ふっ!」

「ネ、ホヒャ」

先程よりも大きな氷に包まれた脳無は、暴れるように氷を破壊しようとする、が、二発目の大砲によつて上半身も粉々に粉砕した。

それでもごぼつ、ボゴゴツ、と異音を立てて復活する脳無だが、先程よりも遥かに細い身体に変化していた。

「ホ、ヒャ」

「しづてえな……」

「ですが明らかに弱体化してますわ!今なら……!」

八百万が創造した大砲から、対ヴィラン用捕獲網が発射される。それは脳無に絡み付

き、脳無を引き倒す。畳み掛けるように鋼糸と鉄杭を創造し、倒れた脳無を地面に固定する。

「轟さん！地面ごと脳無を凍らせて完全に固定させてくださいー！」

「……容赦ねえ……」

そうして脳無を完全に拘束した直後、少し離れた場所で木々が薙ぎ倒される音が鳴り響いた。



あれから、どれくらい時間が経ったか。自分の身体が見える程度の薄闇に包まれ、どれだけ時間が経過したかはよくわからない。心臓の鼓動による時間測定方法も、今の暴れ狂う心臓じゃ無理だ。たぶんもう9時過ぎてるんだろうが、身体が辛すぎて眠気なんて欠片も無い。

がさがさ、ごそごそ、外側で何かが鳴る。何かが鳴っていたが、急に全ての音が止まった。

しん、と自分の血が流れる音しか聞こえない。

俺を捕らえた奴は、そういえば音もなく近付いてきてたな。何かを狙ってるのだろうか

「ヴィランっ!？」

「チイツ!ここは一旦退くか……」

「待てやくソヴィラン!!!」

「ダメだかつちゃん!深追いしたら……」

「オレに指図すんなクソデク!!!」

ああ、痛みがぶり返して来やがった。無理矢理閉じた傷口が熱くて狂いそうだ。頭がガンガンと騒いでうるさくて仕方ない。外で誰かが話しているのは分かるが、それが誰なのか、何を話してるのかが分からない。

あー……くそ、結局俺はまともに喋ることも出来やしねえのか……。

ああ……、くそ……ねむ……い……。

「起きろやくソ口!!!」

カツちゃんの呼ぶ声で、深く沈んでいた意識が浮上する。だが目蓋は鉛のように重く、目を開けることが難しい。

「詭弁くん!!」

いずくちやんの呼ぶ声で、今俺が首を掴まれて立たされている事を自覚した。腹の刺し傷から、じくじくと血が漏れ出る。

「詭弁!!」

しょーちゃんの呼ぶ声で、目に力が入る。俺の所に三人、ヴィランが合宿場所に襲撃しに来たんだ。ならもつとヴィランが居る可能性の方が高い。んな中でモモちゃんに怪我負わせてたら許さねえぞ。

……なんて、肝心な時に何の役にたてない俺がどうこう言う権利なんてある訳無いのにな。

「詭弁さん!!!」

モモちゃんの呼ぶ声で、ようやく目蓋が開く。モモちゃんは個性を使い過ぎたのか、直前に見た時よりもかなりやせ細っていた。だが怪我らしい怪我は無く、しょーちゃんはやちゃんと守れたって事なのだろう。

「モモ、ちゃ……無事で……良……」

「詭弁さん!!!」

視界の隅から黒い霧が覆ってくる。モモちゃんが手を伸ばしてくるが、俺に届く前に俺の身体全てを黒が覆った。

やっぱり俺じゃあ、守れないんだな。

様々な色が混ざって黒くなつた心ごと、身体は何処かへと引つ張られていった。

もしも詭弁くんヤオヨロちゃんがヴィランだったら

「ようこそ名も無きヒーロー諸君!!我が名は『ナイトメア』!これから君達に楽しいアトラクションを案内してあげよう!!」

ビルの屋上から見下ろし、眼下のヒーロー二人を出迎える。常にカメラ写りを気にしながら、手元のコントローラーでカメラドローンを操作し続ける。

「さあヒーロー諸君!君達の力、知恵、勇気を見せて貰おうか!おっと、案内には素直に従った方がいいぞ?案内用ドローンに武装を施している!それに、こんな街中で核爆弾を爆発させたくないだろう?お互い時間が限られてる身だ、遠慮無くドローンに着いてきてくれたまえ!!」

ドローンを操作すると、画面には困惑しきっているヒーロー二人の顔がよく写っていた。

一人は道着のようなコスチュームを纏った、尻尾が特徴的なヒーロー。もう一人は肌の露出が多めの、ピンク肌のヒーロー。

その2人の前でドローンを揺らすように操作し、意識を目の前のドローンに移させる。

ドローンはそのままビル内部に移動させ、ヒーロー二人がドローンを追いかけてきているのを確認した。

「……よし、作戦続行だ」

『了解ですわ』

ドローンを追いかけてきたヒーロー二人が規定のポイントに着いたのを確認して、マイクのスイッチを入れる。

「さあヒーロー！目の前にあるのは挨拶代わりの第一関門だ！張り巡らされたワイヤーをくぐり抜けて二階に上がってこれるかな？ワイヤーに触れたり、壊したりしたら容赦無いオシオキがまつてるぞ！せいぜい気を付けて焦って来たまえ！」

「た、短時間でよくこんなにも罠を張れるな……」

「うわあ！なんか面白そうだね！」

ヒーロー二人がワイヤートラップ地帯を慎重に、かつ素早くくぐり抜けていく。うーん流石、身のこなしは鍛えてあるのだろう。……だが、それでは画面映えないので、ちよつとしたアクシデントを起こして貰おう。

「んってなわけでよろしく」

『はい』

パスつ、と小さな音が鳴り、豆鉄砲がワイヤーの一つを弾いた。

その瞬間、けたたましく大きなブザーが鳴り響き、壁に仕込んだ電撃トラップが作動。ワイヤーが大きく動き、ワイヤーに触れたヒーロー二人にバチバチ電撃が走る。

「おおつと!? なんとということだ! 慎重にワイヤー地帯を進んでいったが、不覚にもワイヤーに触れてしまったあ!! そんな迂闊なヒーロー達に襲い掛かるのは、ビリビリトラップ!! 無慈悲な電流がヒーロー二人を焦げ焦げにしていくう!!」

とは言えまだまだ第一関門なので電撃はこの辺でストップ。

身体の一部が焦げ焦げになったヒーロー二人をよそに、ドローンは次の階に進んでいく。

「さあ第二の関門は立体迷路! ハズレの道にはオシオキがまつてるぞ! 自分の勘と勇気を信じて進むがいい!!」

「くっ……好き勝手して!」

「こんな壁なんて簡単に……!!」

男が尻尾を回して壁を破壊しようとする。すると衝撃を与えた部分の壁が爆発し、破片がヒーロー二人に襲い掛かる。

「ははははは! 迷路を破壊して進むなんてマナー知らずだな! そんなあんたにはコレ! 炸裂壁面! 壊した壁の内側からナニかが飛び出る! 今回は爆発が飛び出した! さあ! 迷え迷え!」

そうしてヒーロー達が必死で迷路を解くのを嘲笑いながらゴールを待つ。

「はいハズレー!! トリモチ弾の刑だ! おつとおそつちじゃないぞ? 熱湯風呂の刑! はあーい残念! チクチク毬栗の刑! そこじやないんだなあ! カプサイシンスプレーの刑だ!」

ヒーロー達がへろへろに消耗していくのを眺め、次の関門にご案内。

「はあーいよく来たヒーロー! これ最後の関門……本物の核爆弾はどれだ! ははははは! 本物の核爆弾が上の階と最上階のどちらかに隠れている! 探して、触るだけで君達の勝利だ! だがそっくりのレプリカが本物とは別にあり、間違えたほうに触れれば……『サプライズ!!』心臓が止まるほど驚くよ! これ最後のアトラクションだ、当然俺らも妨害させてもらう! さあ、時間はあと3分だ! 二手に分かれるか? それとも集中して落とすか? 好きにするといい!!」

ハイビジョン映像が、ヒーロー達の眉間に寄ったシワまでくつきり映し出す。さあ、どつちに来るかな?

そうして僅か1分弱、ヒーロー二人は最上階に現れた。

「ははは!! コツチに来たか!」

「ふざけんのもいい加減にしろ詭弁!」

「そうだよ! このドロドロねとねと取れないじゃん! どうしてくれんの!」

「ふざけているとは心外な！俺は最近はやりの『劇場型Vチューバー』を演じているだけだ！みっちちゃんの身体に白くべたつく何かをブツカケたのも偶々だよ偶々!!」

「トリモチと言つてください詭弁さん……」

「っ?!前後挟まれたか!」

最上階に俺、その下の階にヤオヨロちゃんが待機し、もし俺側に来たらこうして挟み撃ち、ヤオヨロちゃん側に来たら仕掛けたトラップを起動して時間稼ぎ、どちらに転んでも優位に立てる位置取りで待ち構えていた。そしてどちらに転んでも、へろへろに疲弊した相手に負ける程俺達はヤワじゃない。

「さあー！決戦を始めようか!!」

「行きますわ！お覚悟!」

「くっ……：芦戸さん、核に触るのを最優先に行こう!」

「了解!」

そうして始まった2分弱の攻防の末、みっちちゃんの放った強酸を壁に、まっちちゃんの尻尾が核を確保した。

「うわあくお?!グッドゲームグッドゲームG・G・G・G。お見事!一本取られたぜまったく!」

「はあつ、はあ、本当に戦いづらい……」

「よしやー!私達の勝ちいー!」

「お見事お見事、よく頑張ったぜヒーロー諸君！ズバリそっちが本物の核爆弾だ！いやー惜しかったなあー！ところで勝敗の決まり方、覚えてる？」

「えっ……ヴィラン二人の確保、或いは核に触る事……だろ？」

「んっん！正確にはヴィラン二人の確保或いは、『レプリカの核爆弾の確保』だぜ？何度も言っただろ？ソレ、『本物の核爆弾』だつてさ」

「……えっ？」

「そう！俺の大事なパートナーの紹介がまだだったな！彼女は『マジシャン』！その個性は『創造』！生物以外なら何でも作れるんだ！そう！たとえそれが大量破壊兵器の代名詞、『核爆弾』でさえも！！」

「……えっ？」

「そしてこれも言ったな！『間違えたほうに触れば、心臓が止まる程驚く』つてな！みんな、ご視聴ありがとう！『劇場型Vチューバー：ナイトメア』の最期は派手に逝こう！！ Everyone, Everybody! Goodbye!!!」

そうして手に持った拳銃をまっちゃんが確保した『核爆弾』の弾頭に向けて引き、視界が真っ白に染まった。

「……詭弁さんは趣味が悪いですわ」

「そう言うなよお！ヤオヨロちゃんだつてノリノリで作つてくれたじゃーん！」

拳銃から放たれた銃弾は弾頭を貫き、中に入つてた閃光弾を撃ち抜いた。そうして中身が弾け、閃光が俺達の視界とカメラの向こうにいたクラスメイト、あとオールマイト先生の目を焼いた。

気絶したみつちゃんとまつちゃんの腕に確保テープを巻いて、試合終了。

『……ヴィランチームWIN！だけど君達少しは自重して……』

「だくが断るうー」

監禁生活ですよ！トガちゃん！

黒い霧から引きずり出された先は、寂れたBARの様なところだった。

「……………よう、『詭弁くん』」

「お前は……………USJの手男！」

BARの回転椅子に座って、テーブルに寄りかかっている手男が此方に振り返る。

「……………お互い相手を忘れてないようで何よりだなあ。対オールマイト用の脳無が生徒一人に抑えられるってのは衝撃的だったぜ？」

「何が目的だ……………」

「目的……………か。オマエはヒーロー殺しを知ってるか？」

「……………あれだけテレビで騒がれてりやあ知ってるさ。勿論『英雄回帰』についてもな」

ヒーロー殺し、ステイン。彼の『英雄回帰』は世間に色々と衝撃を与えた。無論、俺にも。

「なら話は早い。俺達の目的は『世間への問い』だ。今の世界は、オレ達みたいなはみ出し者には呼吸もし辛い世の中だ。今のヒーローが手を差し伸べられない奴等を受け入れ、今の世界が本当に正しい状態なのかを問う」

「んあ、なるほどね。それで俺達の楽しい楽しい夏休みをぶっ潰したって訳だ」

「それは悪かったな、だが必要な事だった。ヒーロー校としてある意味天下を取っている英雄が襲撃される。メディアはこぞって取り上げるだろう……それでこそ『問い』の意味が生まれる。良い方になるのか、悪い方に転がり落ちるのか、それとも変わらぬのか……まあ、オレ達は変わるまで『問い』を続けるがな」

「ふん、じゃあ何で俺を攫ってきたんだ？襲撃したって事実があれば話題性十分だと思うけどね」

「それは「私です！私が詭弁くんを攫って来るように提案しました！」……まあ、ヒーロー科の生徒がヴィランに拉致された。そんな話題も目的の一つだが、オマエならきつとオレ達の理念に共感してくれると思ってるな？」

「ヴィラン連合の理念に？俺が？……冗談だろ？」

「体育祭、オマエの一回戦と二回戦を見て判断した。お前は誰かの為に平気で自分の身体を投げ出すヤツだ。模範的なヒーロー像……だからこそ、オレ達に協力してくれないか？オレ達はただイタズラに世界を混乱させることが目的じゃない。ヒーローじゃ救えないヤツラに希望を見せたいだけなんだ」

「……チツ、USJン時とは大違いじゃねえか。あん時の方が本音に近いんじゃないか？」

「あの時はオレも子供だったただけだ。色々あつて変わったんだよ……」

「……ふん。人の本質つてのはそうそう変わんねえだろうが……お前達ヴィラン連合に協力はしない。それが俺の答えだ」

「そうか……まあ、なんにせよ時間はまだある。ゆっくり説得する事にしよう。……トガ、マグネ、詭弁を部屋に案内してやれ」

「はい！」

「わかったわ」

そうして両腕をマグネと呼ばれた大男に掴まれて移動される。

「おっと、忘れる所だった。トウワイズ、詭弁の持ち物をチェックして、スマホや発信器の類が無いか探れ」

「はあ!? 何でオレが! 任せろ! ……お、コイツ最新式のスマホ持ちだぜ! 要らねえけど!」

そうして俺のポケットに入ってたスマホの画面が点灯する。

「あああ、待ち受けに乗ってるのは彼女さん? 可愛いわねえ……つてよく見たらこの子体育祭の優勝者じゃないの」

「人のスマホジロジロ見んなコラア!」

「詭弁くん! 詭弁くん! こっち見てピースしてください!」

「えっ、あ、ピース」

思わず指二本立てて目にあてがう様にキラツ★ピース。

トガちゃんが頬を合わせるように抱きついてきて、スマホで写真を取られる。

「はい！私もコレ待ち受けにしますね！」

「ヤダこの子凄いゴリゴリ攻めてくる！」

「おいおい、今時スマホロックもしてねえのかよ!?盗まれたら大変じゃねえか！」

「今本人が大変な目にあってるんですがあ!?!」

大変じゃねえかと言いながら俺のスマホを適当に操作しているトゥワイスと呼ばれた男。うわーエグイな！とか言うのヤメロ！

「あら、もう10時になるのね。夜更かしはお肌の天敵だから早く寝なきゃ」

「え、もう10時いい……………」

そうか、色々あってもうそんな時間か。体中あちこちが痛い、痛み以上の眠気が襲ってきて一気に俺の意識を奪っていった。

「わっ、わっ、詭弁くんが倒れ込んできました!?!お、重い……………」

「すう…………すう……………」

「はあう!?!詭弁くんの寝顔が尊すぎます……………」

「ヴィランのアジトで寝れるとか大した肝っ玉だなコイツ!ビビリが!」

「まあまあ、さつさと部屋に運んじやいませよ」

「……一気に騒がしくなったな」

「アレがおジサン達と一緒に行動してくれそうなタマかね？」

「そりゃ説得次第だ。それに……いや、今はいいか」

「？」

「（説得に応じなかったら、それはそれでいい。『先生』もアイツの個性に興味を持ってたしな……。）」

詭弁くんが最初から悪の道ルートだったら

「はあーい皆様コンニチハー！今日も笑いと悪夢をお届けに参りました『ナイトメア』です！昼間からの生配信だけでもご機嫌如何かなー？」

『この声が聞きたかった』『全裸待機余裕でした』『生リヨナ助かる』

「んい、いつもの事だけど、配信始まってから即コメント貰えるのはマジで嬉しいねえ。事前連絡もつい10分前なのに、いつもありがとうなー！」

『枕草子んい助かる』『枕草子つてなんや』『説明しよう！ナイトメアが』

「コメントでいきなり無茶振りすりゆヤツおる？枕草子は俺の口癖の『んい』とか『んえ』が枕詞とか言い出したコメに俺が草生やしたらいつの間にか枕草子とか呼ばれ出してるんだよ。誰だよ言い出したヤツ」

『あま噛み助かる』『ワイの息子がすまんな』『お前の息子になった覚えねえよ』『お前まさか……太郎か？』『親父……？』『↑ノリ良くて草』『流れ草』

「はい本題！そんな訳で今私はとある重要施設にいるんですが、さあてどこでしよーかー！」

『何処って、どう見ても草木しげる林の中やろ』『雄英除籍ワイ、見覚えのある景色で草』

『雄英現役生ワイ、ここで訓練したことあって草』

「雄英関係者まで視聴してて草ア！はあいそういうわけで今日は雄英アトラクションこと嘘の災害や事故ルーム、略してUSJに来てまーす!!!」

『その略し方は草』『嘘の災害や事故ルームとかいう完璧USJ有りきの名前』『ガチでこの名前なんだよなあ……』

「俺が此処に居るのは、まあご存知の通りただ侵入してみた系の動画を上げるだけじゃーねーんですことは、当然皆さんご存知ですよねえ！」

『知ってた』『知ってた』『ご存知を二回言っちゃうナイトメアほん萌え』

「はあいはい、勿論これからプロヒーロー達をおちよくって、辱めて、甚振るのはまあ確定事項なんあんですが……今日は更に一步踏み込んでいきましょう!!」

『更に一步?』『まさか……ついにヒーローをやる(意味深)のか?!』『動画保存する準備出来た』『おい、動画保存する方法教える』

「そう、遂にR-18を超えて、ってちやうわ！小さいお子さんも見てるんですからからね！」

『ボクの小さいお子さんも見えます』『脱いだ』『この前のMt.レディの失禁は100万回保存した』『アレで精通しました』

「だあもー無視だ無視、そう、今までは『プロの』ヒーローをおちよくってきました。ど

いつもこいつも戦闘意識高めで、画面ブレブレ高速戦闘で見づらかったですよね？」

『それな』『ナイトメアの高級カメラでも納められないとか人間止めてね？』『それでもお漏らしを逃さないカメラワークは最高です』

「はい、つまり今日重点的に狙うのはプロヒーローではなく、ヒーローの卵達!!俺と同じ年齢層だぞ喜ベシヨタロリコン！」

『k t k r』『パンツすつ飛んだ』『待てい！高校生はシヨタ、ロリじゃないゾー』『↑十分シヨタロリでは？』『何!?!中学生以下がシヨタロリではないのか!?!』『ペド乙』

「そうこうしてるうちにもうすぐヒーローエッグ共がやってくる！さあ今日のスペシャルゲストの紹介だ!!カモーン髭の人！」

「『ジェントル・クリミナル』だ！」

『またかよ』『もう見飽きた』『貴重なツツコミ属性やぞ、大事にせい』

「んい、つー訳で今日もゲストとしてジェントルに来てもらいました！なんでゲスト枠かって言うと、英雄に潜入するって聞いて直前まで心臓止まりかけてたから最悪抜きで進行出来るようにするためですね！」

『高校生より小さい肝のオジサンがいるらしい』『まじかよブラババのファンやめます』『ラブラブはよ』

「はい次！ジェントルと来たら彼女もセット！こう見えて俺より年上！キューティー・

ラブラブ!!」

「年上は余計よ!」

『癒される』『合法ロリきた、これで勝つる』『ジエントルをめぐる三角関係……良い』『↑
ああ……いい……』『髭親父をめぐる草』

「なんか俺がホモ扱いされてるけど、まあ良し!」

『現場猫助かる』

「私が良くないのだがね!?!それよりゲスト枠はまだいるだろう!」

『ナイトメアは一度ボケ始めると腹筋が家出するまで続けるからマジでツツコミ属性助かる』『分かるマン』『何なら一日腹筋が外出届出すまである』

「つまり俺とジエントルこそ真の相方……!」

「なっ……!?!」

『ラブラブの絶望顔すこ』『(分かる)』『直接脳内に……!?!』

「ラブラブ!アレはたちの悪い冗談だ!私のパートナーは君だけだ!」

「ジエントル……!」

『どう見ても事案』『警察呼ばなきや』『今呼ぶんだったら最初から呼べ定期』

「はいはい、それとお次のゲストは……この方!」

「ハイはい!画面の向こうの皆さんお久しぶりです!トガです!」

『ヒエツ』『はいR-18G』『歩く年齢制限(グロ)の方じゃないですかーやだー』『でも可愛いから許す』『それな』

「と言う訳でメインは俺等四人、あとはその辺に居たクソ生意気なモブチンピラ共を囲として雄英に襲撃かけまーす!」

『モブの人ほんと可哀想』『だがよく考えろ、延々とナイトメアの洗脳ASMRを聞かされるって考えると……?』『凄い!羨ましい!』

「ASMR!が人気な様で何より。また専用動画作っちゃおう?」

『作って!!』『警察が残業して動画削除する未来が見える見える』『これだから性的搾取ヴィラン!』『アレじゃないとイケなくなりました責任とって結婚してください』『オレもアレ!やないと射精できなくなりました』『ホモオ……』『ナイトメアが一般視聴者種付けオジサンにRTAされる同人誌はよ!』『↑言い出しっぺ』

「この動画ホモ率高いな。なんで?」

「ナイトメアが男女関わらずボディタッチ多いからじゃないですかね!」

「なら仕方ないな!」

『それ仕方ないで済ませるなし』『でもイケメンヴィランが男ヒーローをネチヨネチヨ(過小表現)にするのは大変掬る』『分かる、間に挟まって二穴攻めされたい』『↑ブス女が入るとかお前は何も分かってない』『は?男なんだが?』『えっ』『ちよつと何言ってる?』

か分からない』

「おっと！そう言ってる間に来ましたよヒーローのタマタマ達が！事前情報では男も女も美男美女揃いとこの事ですが、さあて！カメラさん、ズーム!!!」

『こいつタマとか言い出しましたよ』『なんかアホ顔多くね?』『女子キャワワ』『アレらが血みどろになるのか……(興奮)』

「うーん……これは……アレですね。なんか今あの毛モジャにばれたっぽい♪」

『はい企画倒れ』『詫び土下座はよ』『無論全裸で』『ラブラバが』『↑鬼畜ウ!!』

「はっはあー！こおのおバカさんどもめ！ラブラバヨロシクー！」

「えっ!?!ど、土下座を?!」

「チゲーよさつき話してたプランBのアレ！」

『草』『草』『はあーてえてえ』『これでこのメンバーの中で二番目に年上って誰がわかるの?』

「あ、あれね！ちよ、ちよつとまって……よし、オツケーよ！」

「はあいおつけねー！さて視聴者の方に軽く説明しましょう！あの毛モジャ、今から襲撃するヒーロー科一年A組の担任で、ヒーロー名イレイザーヘッド！個性は抹消！見られたら個性が消される激やばちゃん！」

『ググつても出ないんですが』『そんなドマイナーなヒーローが雄英の教師なん?』『あ、

出たわ、アングラ系ヒーローらしい』『メディア嫌いか』

「なんかエグイ性癖してそうだよねあの顔！猫耳コスプレとか好きそう」

『着る方？』『着る方？で草』『どう見てもあの顔は攻め』『妄想班妄想助かる』『くつ殺？』『さあ皆くつ殺希望と書いてイレイザーヘッドの股間どころか全身を小便まみれにしてやろうぜ！』

「発言がとでも高校生は思えないのだが?」

『尿ぶつ掛け……有りやな!!』『また今日も新しい性癖の開拓が行われる』『ヴィラン名』『ナイトメア』人呼んで、性癖の開拓者!!』『くそダサくて笑う』

「さて！見ての通りイレイザーヘッドがこつちに向かって突進してくるけど……『進めザコ共！お前等は壁だ！お前等は天津波だ！お前等は死を恐れぬ亡者共だ!!』……と、チンピラたちがイレイザーヘッドの足止めをしている間に、こんな事もあろうかと用意しておいた爆薬がUSJの入り口に仕掛けて有りまーす。このスイッチをポチつとな!!!』『もつと余韻に浸らせて』

「だが断る！はい*チヨドン*!!」

「わあ！入口が汚い花火です!!」

『トガちゃんJKなのに咄嗟にその言葉が出る当たりホンマにナイトメアに調教されてるでえ……』『ナイトメアがトガちゃんに調教……!?!』『撈る』『やっぱナイトメア攻めが

『真理』

「そして紹介してなかったですが、ここで某外部協力者のワープ系個性ドーン!!」

『唐突に新キャラ出すの止めて?』『脳の処理がおいつかねー』

「はい!これで今このUSJのあちこちに生徒共が散らされました!それぞれの様子は定点カメラによって撮影され、ラブラバが一晩でやってくれた後投稿されます!コツチも見てくれよな!」

『みりゆううううう!!』『やべえ洗脳だ!見なきや! (混乱)』『あつあつあつ、この洗脳掛けてくる声の感じほんとすこ……』『ネット麻薬扱いで草』

「……キミの個性は本当に、なんとというか向いてるね」

「んえ、何言ってるんですかジェントル。動画にして面白いのはジェントルの個性じゃないっすか」

「……だが、現にこうして人気が出ているのはキミの方だ。私の動画は……」

「……はあく……」

マイクのスイッチを切り、ジェントル……否、飛田弾柔郎の目を見る。

「ダンちゃんさあ、難しく考えすぎだよ。再生数だけが自身の評価じゃねえだろ? アンタに付いてきたあいちゃんの立場はどうなる? 他の誰でも無い、アンタの動画を見て、付いてきたんだろうが」

「……………だが……………」

「ダガーもナイフもねえわ。自分が『面白い』と、『良い』と、思った事を動画にすんのが俺達動画クリエイターの仕事だろうが。自分の仕事に自信を持ってえな。自分が『良い』と、思った物を形にしてくれるあいちゃんに感謝せえな。嫉妬や後悔なんて、最良の動画を作り上げてからすればいいでしょ?」

「……………」

「そんな感情論じゃ自信が持てないか?じゃあ数値にしてやろう。俺の動画の視聴回数 of データだが、『ジェントル』『ラブラバ』が出演している動画とそれ以外の動画じゃ、平均して約3割程視聴回数が違う。この意味、分かるよな?」

「な、本当か!?!」

「警察に消されても再び視聴者によって上げられる『フェニックス動画』の再生数も含めた総計だぞ?面白いデータだろ?……………なあダンちゃん。今はこうしてなかよしこよしだが、本来の俺等の関係は違うだろ?俺をバネにして、世界に名を残す有名ヴィランになつてみるよ。んじやなきやあ……………俺が、お前等を食つちまうぜ?」

「……………ふ、ふははははははは!!!私の半分程度しか生きていない子供にここまで言われて引きさがるジェントルではないっ!!いいだろう、今は後塵を拝しておくが、最後に笑うのはこのジェントル・クリミナルだと言う事を教えてやろう!!!」

ニヤリと不敵に笑うジェントル・クリミナル。ああ、そうだ。やつぱりライバルがないとつまらないじゃないか。

マイクのスイッチを入れ直す。

「んい！つてな訳でこのジェントルがあのにレーザーヘッドを足止めしている間に、俺達は生徒達を辱めに行こう!!」

「ええええ!!?ま、待てナイトメア!!?そんな話では無かっただろ!!?」

『ジェントル大慌てで草草の草』『じえんとるがんばえー』『激しい散りっぷりを見せてくれ』『とか何とか言つてこの中で一番戦闘力あるのジェントルだから順当つちやあ順当なんだよなあ……』

「んまあそういう事！ちりぢりにした生徒達は俺等に任せて、ジェントルは一番ヤベーと噂のレーザーヘッドを頼むぜ！ちなみにジェントルにはまだ説明してなかった外部協力者の方々が一緒になって戦います！ぶっつけ本番だけど頑張れ！」

「だからその話は聞いていないのだが!!?」

『ジェントルが不憫すぎて心のおちんぼが勃起しました。責任とつてください』『ジェントルの声で心のおまんまんが濡れ濡れです。責任とつてください』『↑こいつら怪文書すぎて草』『視聴者の方に（心の）お医者様はいらっしゃいませんか!?!』『↑（無言で首を振る仕草）』『匙を投げるな』

「大丈夫！ ジェントルなら出来る！ それに、ジェントルは一人じゃないだろ？」

「そうよ！ だつてジェントルには……」

『てえてえ』『オレもナイトメアに応援されたい』『がんばれ♥？ がんばれ♥？』『やめろ』『ジェントルには、私が「スーパー超人みたいな筋肉ムキムキマツチヨヴィランがついてるからな!!」……えっ？』

『草』『草』『草しか生えない』

「つてなわけの後よろしくジェントル！ ラブラバ、トガちゃん、行くぞ!!」

「えっ、ちよつと!?!じ、ジェントル！ 頑張つてね!!」

「それではまた会いましょう！ チユツ！」

『トガちゃんの投げキッズ助かる』『おいカメラ置いてくな』『オレはjkがりヨナるところが見たいの!』『戦闘シーン助かる』『イレイザーを失禁させるんだよあくしろよ』

「ここ、これは私はどうすれば……!?!」

『ナイトメアより先輩なのに進行グダグダつてマ?』

「つ！ うおっほん！ 先輩に任されてはジェントルの名折れ!! ここは私が華麗に戦うシーンをお見せしよう!! ……あつ、カンペ……『他のカメラの映像は適時編集を終え次第投稿するから、生放送終了後もお楽しみ下さいって言え』……ジェントル!!」

『カンペ棒読みで草しか生えない』『最後のところ言わなくて良いですよ』『誤魔化し方か

わいい！』『しまった！新性癖だ！隔離しろ！』『さりげにカメラさんにまでナメられてかわいそう』

「う……だ、だがジェントルは挫けない！諸君！私が華麗に戦うシーンをよく見ておけ！」

『さっき聞いた』『Vチューバーの癖にメンタルクソザコつてマ？』『ばか、そこが萌えるんだろが』『実はこっさり強いジェントル期待』『オレも』

「で、ではこのまま広場に向かつて戦闘シーンを撮ろうではないか！イレイザーヘッド、見ただけで相手の個性を封じる個性：抹消！しかも見ての通り、体術も非常に優れている！相手にとって不足無しだ！」

『全然無名の癖にくそつよ』『認知度と実力は比例しない定期』『それな』『つよつよイレイザーに即落ちするジェントル見たい……見たくない？』『別に……』『超接戦して互いに血ミドロのぐちゃぐちゃになってるの見たい』『分かる』

「ふはははは！さあ諸君、刮目しろ！！ジェントルのショータイム、まもなく開演だ！！」

『キヤージェントル！』『キヤージェントル！』『内心ガクブルしてるのに声に出さないところ、本当に好きだよ』『ジェントルのこの姿のお陰で後1年は戦えます！』『戦うのはジェントルとヒーローなんだよなあ』

「さあ、いい感じにゲストの彼らがハケたところで向かおうか！カメラさん、ついてこれ

「るかな?」

b

『カメラの人の手助かる』『カメラさんって多分女の子……だよな?』『厚手の手袋しかみえねえだろうが』『でも画面端に稀に見えるピンク髪は女の子としか思えない。思いたくない。』『カメラさん出演しないけど凄い美形って信じてる』『誰もジエントル見てなくて草』

「さあ行こう! イレイザーヘッド!!! ここ、USJに我々『Evil Brat Part y』が来た! さあ、世界に辱しめられる準備は出来たか!」

「チツ、まさかと思つたがああ悪ガキ共か……目的はなんだ」

「無論、世界を騒がせる事だ!」

「くっ……ここはいつたい……」

「いったた……ヤオモモ、上鳴、大丈夫!」

「ああ、まあ何とか……ん? んだこれ……ロープ?」

「んじやラブラバ、カメラよろしく!」

「もー本当に人使い粗いんだから！ジェントルを見習いなさい！」

「あはは！一番撮るのが上手なのはラブラブじゃないですか！」

「分かってるけど！」

「カメラスタンバイ、オーケー？よし！一発録り、放送事故、ハプニング、なんでもオツケー！嗤って笑かすEvil Brat Partyの収録、始めるよっ!!」

「な、あ、アイツら!?!」

「うっそだろ!?!」

「お二方はあの方々をご存知なのですか!?!」

「むしろなんでヤオモモは知らねえの!?!」

「あ、アイツは世界一顔の知られているヴィラン……数々のヒーローで遊んで、その動画をネットにアップし続ける悪夢『嘲笑のナイトメア』！あつちは沢山の人を刺し殺したスナツビデオの演者、『吸血鬼トガヒミコ』！あつちの小さい子はよく知らないけど……時々『ナイトメア』が撮る映像に出演するヴィランだよ……」

「……あの方が、世界一のヴィラン……!」

「んあ、自己紹介は要らないみたいだね！時間がないから巻きで行こう！今から君達にはゲームをして貰います！失敗したらあゝ……死にたくなるほど恥ずかしい目に

あつちやうかもね!!」

「えーと……あつ！ 耳郎ちゃん！ 上鳴くん！ 八百万ちゃんだね！ 私、トガです！ みんな、かあいいねえ！ ズタズタのボロボロにしたら、もおつとかあいくなるねえ!!」

「おつと！ 逃げようと思わないでね！ ゲームから逃げちやうとお……アレをみてごらん!!」

「つー！」

ラブラバがカメラで撮りながら、スイッチを起動させる。するとドオン!! と火災ゾーンが吹き飛んだ。その爆風は俺たちの場所まで届き、ヒーローの卵達を怯ませる。

「君達がそれぞれ飛ばされた各所に爆薬を仕掛けてまーす！ 火災ゾーンには誰も居なかったけど……つまらない口答えや逃走の意思を見せたらあ……分かるよねえ？」

「つ……!!」

ああ……良い、その怯えた表情がとても良い……。最高だ、ゾクゾクしてきた。もっと痛め付けて、辱しめて、ぐちゃぐちゃに犯し尽くしてあげなきゃ……!

「さて、君達の現状が理解できたところでえ……ゲームの説明、行つちやいましょう!!」
「おー!!」

「さあやってみようか、『ドキドキ引つ張り綱ゲーム』!!」

「わあー」パチパチ

ああ、楽しいなあ、嬉しいなあ！俺に静かな世界は似合わない。全部、ひっくり返して、混ぜ返して、ごちゃごちゃにして、騒いで、暴れて、楽しんで！

誰かの夢とか、誰かの願いとか、希望とか、未来とか！ぜんぶ壊して混ぜてごちゃごちゃにして丸めて固めて一つにしてしまおう。

さあ、世界に『素敵な悪夢』を見せようか！

悪の道ですよ!トガちゃん!

クラクラする頭を抱えながら起床。ああ、そう言えば俺はヴィランに拉致されたんだった……。ヴィランに拉致されることが人生に二回も起こるとは思いもしなかった。ジャラッ……と冷たい手錠の感覚が手首に感じられる。まあそりゃあ拘束の一つはしてるよなあ……。他に身体の何処かが拘束されてないか、身をよじりながら確認すると

「ん……………くう……………」

布団の中で何者かの寝息が聞こえた。恐る恐る布団を剥ぐと、なんとそこには半裸の金髪美少女が。

えっ、嘘過ぎない?

ほのかに香る鉄の匂いが頭を刺激し、再び夢の世界に誘おうとするが気合で起き上がり、ベッドから転げ出る。

ドタドタ暴れるのに気がついてか、布団の中の美少女が起き上がる。

「ん、ふああ……………おはよ、きべんくん……………」

にへっ、とふにやふにやした顔で笑いかけられ混乱していると、その声に聞き覚えがあ

るような気もした。

「……………トガヒミコ……………」

「はあい……………」

ぐしぐしと目元を擦って、ふわあ…………と両腕をあげて大きく伸びをするトガヒミコ。ヤオヨロちゃん程ではないがそれなりに主張している山二つが更に大きく主張していた。……………よく見れば透けてますねこれは。

「……………んあ……………トガちゃんや、寝る時はブラ外して髪降ろすタイプなのね」

「んん、まあ……………昔からの癖なので……………」

「だからって着るのが白い薄手のタンクトップとパンツだけなのはどうかと思うよ？うん、ましてや知り合ったばかりの異性に見せるもんじゃないね？」

「んへえ……………」

頭を軽く振って、自分の身体を見下ろすトガちゃん。そしてゆっくりこつちに顔を向ける。

「……………ジロジロ見ないでください、エッチ」

「見るなって言うのは、見ても良いって言ってるのと同義ですよ」

「嘘ですよそんなの……………」

片腕でうつすら見えてた突起を隠し、ベッドの横に腰掛けるように座る。どうすれば

いいのか分からないがとりあえずトガちゃんの横に座る事にした。

「……逃げないんですね」

「はっはっは、可愛い女の子から逃げるなんてそんなそんな」

「嘘ですね」

射貫く様な視線が俺の瞳を突き刺す。

「分かるんです、気持ち。特に詭弁くんのは。今すぐここから逃げたいと思ってます。でも、それはヴィランから逃げたいって気持ちじゃなくて、ただ何処かに消えたいって気持ちです。詭弁くんは、顔に出やすいです」

「……んだよ、それ」

「誰から逃げたいんですか？何から逃げたいんですか？私に教えてください」

心臓が矢で貫かれたかのような苦しさが俺を襲う。思わず顔を歪めてしまった。そんな俺の顔を見て、トガヒミコは俺の手を掴む。

「詭弁くんから、古くて黒く変色したような血の匂いがします。昨日の傷とは違う匂いです」

「……だから、なんだってんだよ。そんな事聞いて、何がしたいんだよ」

「好きな人の事を知りたいって思うのは、変な事ですか？」

真つすぐな視線が俺を刺す。

「詭弁くんを刺したいです。刺して、チウチウしたいです。でも、詭弁くんの事をもっともっと知りたいです。教えてくれなきや、分からないです……」

トガヒミコが、両手で俺の手を掴む。

「私がヴィランだから何も言ってくれないんですか？」

今にも泣きそうな声で、微笑まれる。

止めてくれ、そんな顔しないでくれよ……。

トガヒミコの顔を、手錠のついた手で押しえつつベッドから立ち上がる。

「わっ」

「腹が減った、流石に朝食くらい用意してくれるだろうな？」

「わっ、分かんないです！」

「……あそ。じゃあ……まあー手男に聞けばいいか、トガちゃんとはちゃんと服着てから

来るんだぞ」

「……はーい」

自分の服を見れば、昨日戦つてズタズタボロボロのジャージのままだった。……臭う

し、替えの服とかも貰えないかなあ……。

そうして寝ていた場所から退室する。……誰から逃げたい、か……逃げたいモンだら

けだよ俺の人生は……。



「……朝からハンバーガーって舐めてんの……?」

「文句あるなら食わなくていいぞ」

「ハンバーガー美味しいだろ!クソ不味いなコレ!」

「……」

「分かった、お前等ヴィランしてるのって朝一からハンバーガー食う事が当たり前な生活してっからか。オイ、ここキッチンねえのか?」

「BARなので簡単なモノですが……」

「食材は?」

「ある訳無いでしょう。普段から料理しないんですから」

「……………はああああああ……分かった、俺が食う分は俺が作る。食材買ってくるから近くのスーパーの場所教えろ」

「バカ言え、お前はオキヤクサマなんだ。そう簡単に外に出す訳ねえだろ」

「じゃあ適当に食材買って来いよオ!!朝一からジャンクフード食うやつの気が知れんわ!!」

「まーまー、偶にはジャンクフードもいいじゃない。お味噌汁も有るわよ？ インスタントだけど」

「お前等が勝手に食うなら良いけど俺は育ちが良いから朝一インスタントはヤなんだよ!!」

「(コイツ一々鼻につくな……) 黒霧、朝から騒がれても迷惑だ、なんか適当に買ってきてやれ」

「し、しかし……いえ、分かりました」

「……買ってきましたよ」

「ワープゲートの個性便利だな。さて何買ってきたのか………いや、適當ってか本当にテキトーな……まあええわ。キッチン借りるぞ」

「……マグネ、一応逃げないように監視しておけ」

「はいはい」



狭いキッチンに俺と大男の二人きり、なにも起きない訳無く……キッチンの片づけから始めてた。

「んもー本当に何なんココ! 酒の空き瓶とか片付けとけや!! マグネっていったなアンタ、コレ捨てに行つてくれ!」

「アタシあんたの監視任されてるんだけど……」

「じゃあコレ捨てに行くか俺が捨てに行つてる間キッチン片付けやるかどつちがいい!!?」

「分かつたわよ、捨てに行くわよ……もう、人使いが粗過ぎるわねえ……」

「……早く誰か助けに来てくれ……こんな生活三日も続いたら俺ストレスで死にそう……」

そうして何とかキッチンの片づけを終えてようやく朝食を作った。

「お前そんな見た目で料理出来んのかよ!?! 男らしいな!」

「……旨そうだな」

「さつきハンバーガー食べたけどオジサンこれならまだ食べられそうだ」

「お前等コレ俺の朝食だからな!?!」

「わあー! 詭弁くんお料理上手なんですな!! 一口ください!!」

「……一口だけやぞ!!」

「あ、じゃあオレも」

「オレにもくれよ！要らねえけどな！」

「アタシにも頂戴？」

「お前等はハンバーガー食つただろ!?!」

結局半分以上食われた。おいしい、これでも育ち盛りやぞ俺……。

「……これ食材買って来るのは私だけですか」

「当たり前だろ。大勢でゾロゾロ歩き回る訳に行くか」

「……はぁ……」

おい監禁生活ってなんなんだ!

監禁生活2日目にしてヴィラン連合の料理人に転職した件について。どうしてこうなった!? どうしてこうなった!?

「ラーメン作れないのか?」

「私オムライス食べたいです!!」

「おじさんサンドイッチが良いなあ」

「肉食いてえ」

「何でも良いぜ! オレ焼きそばな!」

「お前ら俺を何だと思ってる!!? 食材調達係に言えんな事!!」

昼飯はオムライスになった。

「ケチャップ大盛でお願いします!」

「好きに掛けるよ……」

「せ、せつかくなので詭弁くんにかけて貰いたいなあ……ダメ……ですか……?」

「
」

「そういうあざとい所好きになつちやうじゃん！……ハートマーク描いてやるよオ!!」

「わあ!! 凄い嬉しいです!!」

「あ、じゃあアタシにも描いて?」

「オレもオレも」

「お前らは好きに掛けるよ!!!」



「くつ……フツ……ずいぶんとまあ好かれたモンだなあ? 詭弁くん」

「いい迷惑だ……トガちゃん置いて全員さつさと捕まれ」

「酷いじゃないか、ヒーローがそんな差別しても良いのか?」

「野郎にかける情けは無いし、マグネは成人してんだろうが。自己責任だ」

「…………ふうん? マグネは一応別枠扱いなんだな?」

「カマだからナベだから、そんなんで偏見しねえよ。俺もこんな顔で友達の事ちゃん付
けで呼ぶからそういう風に言われる事もあるし」

「お前何処と無くバイっばいしな」

「お前に何が分かるんだよ」

キレそう。

「つつーか、なんで俺を引つ張り出してきたんだよ」

「なあに、一緒にテレビでも見ようかと思つてな。スマホも何も無いと退屈だろ?」

「スマホ取ったのお前らだからな?」

「だからこうして退屈しのぎを用意してやつてるんじゃないか」

そう言つて、リモコンを使ってテレビを点ける手男。…………個性の関係で器用に三本の
指で摘まんで、リモコンのスイッチを余つたうちの一本だけで操作している。

「テレビは良いよな、マスコミが何を一番大事にしてるのがよく分かる。それが真実
かどうかは置いてきぼり。ただ視聴率のために、食い付きの良さそうな情報を加工し
て、放送する。正しい情報を真つ当に視聴者に伝えるつもりなんてさらさら無いのさ」

「…………何が言いたい?」

「別に、ただの独り言さ…………」

そうニヤニヤしながらテレビを眺める手男。テレビは元芸能人がオメデタ云々のニュースを放送していた。

* * * * *

「詭弁はまだ見つからねえのか!? 先生!!」

「……学校側も手を尽くしている。いいか、お前らはじつと待機してろ」

「っ……!! オレ達には……何も……出来ないんすか……!!」

「……怪我をした奴の見舞いに行つてやれ」

「……」

「か……かつちゃん! 落ち着いてよ!」

「黙れクソデク!!! クソツ!! クソがツ!!!」

「爆豪、病院で暴れるな!」

「うるせえんだよ!! クソ口野郎、あの時オレを助けたつもりか……!! そのくせ自分だけ

扱われただア……ツ!!ふざけやがって……ふざけやがって!!!」

「……皆さんは、まだ起きないのでか」

「八百万か、……おう」

「……あの時、私が脳無を深追いせず、逃走を選択していれば……皆さんが倒れる前にガスマスクを渡す事も出来たのかもしれない……」

「……かもな。だが、アイツを放っておいたら誰かが死んだかもしれないねえ」

「いえ……今思えば、あの脳無はUSJの時のよりも遥かに弱かった。他の方達でも、きつと無事に倒すことが出来たはずです……私は、私にしか出来ないことを優先するべきでした……っ!」

「八百万、それは違う」

「違いますッ!!私は、選択を間違えたんです!また、また私は……また、間違えたんです……っ!」

「(……くそ、やっぱオレの言葉じゃ駄目だ……。詭弁、お前はいま何処に居るんだ……!)」

平和ではないですが日常ですよ！トガちゃん！

結局晩飯まで作る羽目になった。この怒りは留まるところを知らない。

「しよーがねーじゃんお前の作るメシめっちゃ美味いんだし！ゲロまずだけどな！」

「ほんとほんと、このままアタシ達の料理人として働かない？」

「ヴィラン専属料理人とかやだなあ……」

「へえ……肉じゃが……」

「詭弁くんは何でも作れて凄いです！」

「みりん使つてないボソボソ肉じゃがだけどな。食材調達係がアレだから……」

「失礼ですね。みりんなんて物何の意味があるんですか」

「アナタそれで俺より年上なんですか？常識ないですね」

「バラバラにされたいですか？」

ギャーギャー騒ぎながらの夕食。まあ、御通夜みたいな空気よりかマシか。

「スピナー君もそつちで立ってないで、一緒に食べましょう！」

「……ふん」

「ほっとけトガちゃん。アレはあーいう態度がカッコいいって思っちゃってる所謂中二

病患者って奴だ」

「えっ!? ビョーキなんですかスピナー君!」

「違う! 誰が病気で中二病だ!!」

「おいスピナー、肉じゃが冷めるぞ?」

「……もしかして肉じゃがは豚肉派だったりする? そうか……ごめんな……俺ん家じゃ肉じゃがは牛って決まってるんだ……本当に……ごめん……」

「そんなこだわりねえよ! クソ……分かった分かった!!」

「あ、スピナー君用の白米残ってねえわ」

「はああああ!!!」

「肉じゃがにご飯が無いとか、それなんて拷問? オジサン困惑しちやう」

「あら、ごめんなさい。あんまりにも美味しくてご飯すごい進んじやったわ」

「マグネか!!!」

「悪いな! オレもめっちゃ食ったわ! 全然足りねえけどな!」

「トウワイス!!!」

「……うるせえぞお前等。米くらいでゴチャゴチャ言うな」

「とか言いつつしっかり自分の分の白米確保してるじゃねえか死柄木!!」

「そんなスピナー君に朗報です! てれ[※]れ^例て^果て^音れー二つ目の炊飯器〜」

「お、お前……準備いいな……」

「なんと中身は炊き込みご飯です!!!」

「は？肉じゃがに炊き込みご飯??？」

「あらそつちも美味しそうね」

「うわ〜！具沢山です!!」

「待て、おい待て。オレの白米に対する期待感を返せ」

「え？もしかしてスピナー君肉じゃがに白米じゃないと許さない系男子？」

「おいおいスピナー！そんなワガママ言うんじゃないぜ！」

「炊き込みご飯美味しいですよ？」

「いや、肉じゃがには白米だろうが！炊き込みご飯は普通違うタイミングで出すだろ普通!」

「おう、そう思つて先に白米出してたのに、スピナー君が気取つて来ないからご飯無くなつたんだよ？カツコよさじやあお腹は膨れんよ。なあ茶毘君！」

「おう」

「ぬっ!!?ぐっ……」

「……いや、家族団らんですかココは」

「突っ込むのが遅^{おそ}えよ黒霧」



夕食が終わった後、俺はカメラ片手にトガちゃんを撮影していた。

「あーいいねーいいねーその表情いいねー!」

「こ、こうですか!?!」

「あーそれ凄いいい!いいねーハートにクル感じめっちゃいいよー!!」

「……一応聞くが、何やってんだお前等」

「え? 凄い暇だからヴィラン撮影会を……」

「マジで何やってんだお前等……っか、そのカメラ何処から持って来た」

「バーの奥に置いてあった」

「……はあ?」

「よーし次はマグネ、行ってみよー! 先ずは良い感じにキメポーズお願いしまーす!」

「えっ、あ、アタシ? まいっっちゃわあ……っか、どうかしら?」

「やるんかい」

サンングラスを掛けた巨漢がダブルピースをする。

「んーなんか違うなー。マグネ、膝立ちになって小顔ポーズしてみて！」
「え、ええ……？ どうかしら？」

「あーいいねー！ カワイキでてきたねー！」

「マグ姉かわいいです!!」

「そ、そう？」

「じゃあ今度は自然にスマイル！ 頬に指を当てて子供っぽい感じで！」

「子供っぽい!? こ、こうでいいの？」

「マグ姉かぁいい!!」

「ノってきたねー！ 今度は立ち上がって後ろむいて、振り替える感じで笑いかけてー！」

「……こうね！」

「超いいねー！ 美が舞い降りてきてるねえー！」

「……………なんだこれ」

手男は呆れてバーの奥に消えていった。

「よし、見てたなトウワイス！ 次はお前だア！」

「はあ!? 何でオレが！ 任せろ!!」

「トウワイスは体幹良さそうだしジョジョ立ちに挑戦してみようか！ 膝を曲げたままつま先立ちして、腰は斜めに真っすぐ、背筋で身体を起こして、右肘を前に突き出して左

腕を腰に添えるように立って!」

「なんかオレだけ難しくねえ!」

「頑張ってください仁くん!!」

「トウワイスなら出来るわよ!」

「そう言われちゃあやらねえわけにはいかねえな!見てろ!」

「おおー! いいねートウワイス! 今最高にイケてるねー! こりゃあ見開き一ページ待たなしだぜ!」

「あつたりまえだぜ! あつ、ちよつとまつて、これ背中へんなどこツるっ!? 余裕!」

「素晴らしいながら背中から床に倒れていったトウワイス。」

「あゝ! ツつた! 変な所ツつたあ!!」

「……まあ良い感じの写真一枚取れたからヨシツ! 次茶毘君カモン!」

「待つてオレを見捨てんな?!」

「ナイスフアイトでした仁くん!!」

「めんどくせえ」

「おっ? 写真は嫌いか? それとも怖いのか? こんなカメラが?」

「……チツ、いいだろう」

「ひゅー! んじゃあ茶毘君は強キャラ感全面に出していこうか! 先ずは両手に炎出して

みようー！」

「……………こうか？」

「……………んく……………なんか違う、茶毘くんもつと表情出して！今日の前に殺したいほど憎い奴が居るって思ってる！！」

「……………殺したいほど……………憎い……………つ！！」

「いいねえー！その表情サイコーにパスってるう！！両手の火力そのまままで自分の背中側に炎背負う感じでやってみて！！」

「……………ふっ！！」

「うおーキマってるねえ！！ガンギマリだねえ！！憎悪って感じがサイコーだねえ！！じゃあ今度はそのままアクション行ってみようか！」

「バーを燃やす気ですか」

黒霧が間に入って茶毘くんを何処かに飛ばす。

「詭弁答弁、さつきから何が目的ですか」

「目的い？そんなもんヴィランの写真撮りまくって写真集デビューさせるためだよ」

「嘘ですね。……………いや、嘘ですよね？」

「なんで？ヒーローの写真集があるんだからニッチな層にヴィラン写真集売れるかもやんけ。まだ撮ってないスピナーくんとかコンプレスとか絶対写真映えするし。あと俺

趣味が人物写真なんだよねえ。だから退屈凌ぎに今までなかったジャンル開拓とか、そ
せるじゃん?」

「……貴方本当にヒーロー志望ですか?」

「勿論ヒーロー志望さ。お前等いつかブツ倒してやるからなヴィラン連合。……ま、そ
れとこれとは話が別だから」

そういいながら黒霧をカメラでパシャリ。

「それとも、写真を撮られるのが嫌なんて子供みたいな事言うのかあい?」

「……まあ、いい。精々ゆつくり寛いでいるといい。貴方の命運を分ける選択肢は、もう
すぐそこにまで迫っているのですからね」

「べー、命運分ける選択なんていつもの事さ。本気でヒーロー目指してりやあな」

「……後悔しない選択をすることですな」

そう言つて黒霧が去つていき、いつの間にか茶毘君が戻つてきていた。

「……どうした、あいつ」

「んい、良く分からん。よし、じゃあアクション撮つていこう!」

「悪いな、もうそんな気分じゃねえ」

「……んう……じゃあコンプレス呼んできて!」

「コンプレスはどっか行つてる」

「……………じゃあスピナー君」

「オレはぜってえ写真撮らせねえからな！」

BARの壁際の椅子に座って睨み付けてくるスピナー君をパシャッと撮り、その写真データをマグネとトガちゃんと一緒に見る。

「こんな感じどう？」

「あら、なんか闇背負ってる感じ良いわねえ」

「大きい武器が良い感じです！」

「……………」

「ただなあ……………スピナー君の表情がちよっと全体のイメージとマッチしないんだよなあ……………」

「そうねえ、こういう感じなら、ニヒルに笑ってる感じかしら？」

「睨み付ける感じよりは良いですかね！」

「っ」

めつちやこつちを見て写真確認したい雰囲気出してんだけど、さつきあ言った手前確認に来れないスピナー君可愛いよ。

「でもなくスピナー君が写真嫌いじゃあなあ、撮りなおしもさせてくれないだろうなあ……………」

チラッ

「あくあく折角いい雰囲気なのになく、スピナー君が写真嫌いじゃあなあ〜!」
チラッ

「撮らせれば良いんだろ!撮らせれば!!!」

「わーい」

その後めっちゃ写真撮った。

そうこうしているうちに夜9時回ったのでさっさと寝る事にした。

急転直下ですよ！

監禁生活三日目。

「詭弁くん！チャーハン！チャーハン食べたいです！」

今日もトガちゃん元気にぴよんぴよん跳ねてる。

「えー朝からチャーハン？作れなくは無いが……多分具材足りねえわ」

「じゃあ買ってきてください！」

「おいおい……詭弁お前、トガちゃんの要望ばかりじゃねえか。おじさんの希望聞いてもバチ当たらないと思うよ？」

「じゃあなに食いたいですかねえコンプレス」

「おじさんやつぱ分厚いステーキを……」

「オーブンねえのに無理言うな。黒霧、チャーハンの材料メモするからちゃんと買ってきてね」

「これオレが悪いの？」

「ドンマイコンプレス！ざまあねえな！」

「さあ出来たぜ! 詭弁家に伝わる秘伝チャーハン!!」

「チャーハンねえ、久々に食べるわね」

「しつかし何でトガちゃんいきなりチャーハン食いたくなつたん?」

「詭弁くんが寝言ですつとチャーハンチャーハン言つたので私も食べたくなりました
!」

「んえ、うそ。恥ずかしつ……待つて、トガちゃん俺の寝言を何で聞いてたん?」

「添い寝してたので!」

「今日も!」

「おい待つて、オジサン困惑してるんだけど。お前等の会話は突っ込み所が多い……ま
ずトガちゃん、キミなんで詭弁くんに添い寝してるの?」

「詭弁くんの事が好きですから!」

「OK分かった。……んで詭弁、お前いま『今日も』つて言ったか?」

「聞こえなかつた? じゃあもつと大きい声で言うね」

「言わなくていいよ! つて事は何? 昨日も添い寝してたの君達。オジサン不純異性交遊
はゆるしませんよ!」

「何言ってんだこのヴィラン……」

「大丈夫です！ 詭弁くんとはまだそういった事してませんので！」

「んい、良かった。実はこっそり寝てる間に俺の純潔が散られてる可能性を考えてたんだよね」

「大丈夫です！ 私が見張ってるので！」

「あははははは」

「最近の子って良く分かんなくて怖いんだけど。オレだけ？」

「安心しろコンプレクス。オレも良く分かんねえ」



朝食が済み、とりあえずバーのカウンター席に座ってたら手男が新聞片手に現れた。

「よお詭弁くん、今日の朝刊見たか？」

「朝からチャーハン作ってて見てると思うか？」

「そうか、じゃあ今見ろよ。面白いことが書いてるぞ？」

そうニタニタ笑いながら新聞を投げ渡す手男。手に取ろうとしたら、横からトガちゃん伸びてきて新聞をさらっていった……と思いきや俺の膝の上に座った。猫かお前

さんは。

トガちゃん越しに新聞の一面を見る。するとそこには、デカデカと『雄英大失態』の文字が載っていた。

『雄英大失態』『問われる危機管理能力』雄英高校の林間合宿にヴィラン連合が襲撃……わあ、私達の事が載ってます!」

「重軽傷者合わせて10名を超え、意識不明者は16名、行方不明者1名を出した……まるで雄英が怪我をさせたみたいな書き方だよなあ?」

「……チツ、お前等が怪我させたんだろうが」

「ああ、そうだな。だが紙面ではどうだ?内容こそよく読めばヴィランによる被害と分かるが、まるでヒーローが無能だからここまで被害が拡大した。みたいな書き方だよなあ?オレ達の作戦開始早々に捕まったお前は知らないだろうが、此処に居るメンバー以外にも大暴れしていた奴は居た。そいつらは、まあ生徒によつてやられた訳だが、そんな事紙面には乗ってないだろ?マスコミは少しでも『仕方ない出来事だった』なんて言い訳を作らせない徹底ぶりだ……テレビも見てみるか?」

ニタニタしながら、俺の返事を待たずテレビの電源を付ける手男。映った朝のニュース番組では、男女のコメンテーターが雄英を散々に扱き下ろしていた。

「あの時のメンバーには相当血の気が多い奴も居た。それこそ生徒やプロヒーローの一

人や二人殺してくるんじゃないかってくらいにな。……まあ、結果から言って誰一人として死んではいない。オレ達からすれば詭弁くん一人攫つて来ただけ。だが世間様にとっては、誰も死ななかつた事実より、一人攫われたって事実の方が重いらしい。ヒーローも大変だなあ。違うか？」

「……今日はよく喋るじゃねえか手男」

「……ハハハ、少しお喋りしたい気分なんだ。昨日見たニュース、覚えてるか？どつかの有名人が子供を産んだって言つてたその口で、今度は雄英の態勢を扱き下ろしてるんだ。大怪我をした奴や、こうして攫われていた奴も居たつてのに、自分らは関係ないって態度で、努力した奴等を貶す事しかない」

「何が言いたいんだ手男」

「『死柄木 弔』だ。いい加減名前前で呼んでくれないだろ？……で、何が言いたのか、だっけ？最初に話しただろ？勧誘だよ。詭弁くんと、あともう一人……爆豪つて言ったな、そいつを攫つてくる予定だった。お前達二人はそれぞれ違う意味でヴィラン連合に合つてると思った。……まあ、爆豪くんは捕まえられなかつたけどな」

「だから言ってるだろ、俺はお前等に協力しないつてよ」

「くくく……まあ聞けよ。オレ達の目的は『世間への問い』だつて言ったな？新聞、テレビを見てどう思う？雄英も、お前達生徒も、あの時全員が必死にオレ達と戦つた。だつ

ていうのに、世間はお前達の行動を一切評価しない。それどころかあの時の行動のほぼ全てを批判しているだろ？本当に悪いのは、オレ達ヴィラン側なのにな。世間にとつて批判されるべきなのはヒーロー側だ。『全て守つて当たり前』『少しでも被害が出たら、ヒーロー側の責任』……それが当たり前にまかり通つている。おかしいと思わないか？」

「……だから、なんだつてんだよ」

「今の時代、ヒーローもヴィランも生き辛いと思わないか？ヴィランは、ただ『普通と少しだけ違う』だけでオレ達一括りだ。ヒーローは、常にミス一つ許されない、オールマイイトである事完璧であり続ける事が求められ続ける。そこに、『自分は要る』のか？それが本当に正しい世界なのか？……難しい話は抜きだ。オレ達は、ただ自分のままで居たいだけだ。お前は、どうだ？」

ふと気が付けば、手男……死柄木 弔の後ろにヴィラン連合の面々が揃つていた。トガちゃんは微笑みながら、俺の膝の上でじつと俺の顔を見ている。

「詭弁！お前は良い奴だ！嫌な奴だけどな！オレ達と一緒に騒ごうぜ！」

「オジサン達と一緒に世界を変えよう」

「ヴィラン生活も悪くは無いわよ？アタシが手取り足取り教えてあげるワ！」

「詭弁！お前はステインの主張に沿うかどうか、間近で見極めてやる」

「……」

「なあ詭弁くん。お前の本当にやりたい事が『ヒーロー』だって言うのなら、それでいいさ。オレ達も抑圧されてきた側だ。それを止めやしない……。だけど、本当にやりたい事が別にあるんなら、オレ達に協力してくれないか？なんも難しいことは無い。昨日や今日の朝みたく、オレ達専属の料理人になつても良い。他にやりたい事があれば、オレ達も協力しよう。ココが嫌でも、友達として時々力を貸してくれるだけでもいい」

「……俺は」

本当は、分かつてた。昔俺を監禁したクソ野郎みたいなヴィランも居れば、今俺を監禁しているとは言え気の良い奴等みたいなヴィランも居る、と。それぞれの事情があつて今がある。中には、ただ一度間違いを犯してしまっただけでヴィランと呼ばれ、世間から後ろ指を指されながらも堕ちた生活しか出来ない者もいる、と。

……俺が、生まれながらのヒーローならこんな誘いに悩む事なんて無いんだろうなあ。もしくは、もつと強い気を持つていたら、ヴィランはヴィランと断じて打ち倒すくらい出来たのかもしれない。

「詭弁くん、悩んでるんですか」

耳元でトガちゃんが囁く。

「私は昔から血が好きでした。でも、それは『普通』じゃないから、我慢させられました。

好きなモノを我慢するのは、辛いです。『普通』じゃないからと理解してもらえないのも、辛いです。詭弁くんも、我慢してるんですか?」

「……そんなに辛そうに見える? 俺」

「見えます」

「……そうかあ……」

好きなモノを我慢、してるように見えるのか。……そんなもの、俺に無いのになあ。

ホントウニ?

『緊急ニュースです! 今回の事件について、雄英が緊急記者会見を開くとの情報が入りました! 繰り返しします! 今回の事件について、雄英が緊急記者会見を開くとの情報が入りました! 準備が整い次第、記者会見を始めるとの事です!!』

この場にいる全員がテレビに視線を動かした。

記者会見ですよ！

記者会見が始まった。

先生達が揃って深くお辞儀をする。あ、流石に髭剃ってるね相澤せんせーは。

「……まるで悪者扱いだな。プロヒーローも最善を尽くしただろうに」

「……」

お前らヴィランがそれ言うのか……。

テレビでは謝罪から始まり、その後すぐ問われた質問に答えているところだ。

……雄英の基本姿勢は、体育祭の時と変わらない。『あえて開催することで強気の姿勢を見せる』だ。マスコミはその事を知りながら、再び説明させようとしている。無関係な奴らは、結果的に失敗だったなら鬼の首を取ったように騒ぎ、糾弾する。そこに過程なんて考慮されはしない。

ほんの少しぼやっとしてると記者会見は進み、新たな質問が出た。

『今回攫われた生徒である詭弁くんは、かなり問題行動の多い生徒であると伺ってます。同年代、年上下関係なく、多くの女性とお付き合いに等しい関係を結んでいるとか』『詭弁くん、本当ですか？』

怖つ。トガちゃん的首がいまグリーンって回った。そしてクレヨンで塗り潰したような真つ黒な瞳が俺の目を貫く。

「嘘だよ。俺は誰ともお付き合いしてないし」

中学生の時は多くの女の子に告白されたが、結局その全て断っているのだから。

「お付き合いに『等しい関係』とはどういう意味ですか?」

「……俺が知りたいな」

まさか日常的にセクハラしてる事……な、訳ないか。ないよね?

『失礼ですがそのような事実はありません』

『彼の同級生達からの証言があります。更に体育祭で、あれほどまでに大怪我を負ってまで暴れる精神性に目を付けられ狙われたとして、もし詭弁くんが悪の道に染まっただけで済んだら? 詭弁くんがヴィランにならないと言いつつ切れますか?』

根拠のない暴論、その言葉に酷い悪臭を感じた。

ただ先生を怒らせて、『売れる言葉』を引き出しただけのクソツタレの論理だ。

「まあ体育祭のアレで目を付けられたのは間違いじゃねえけど」

言つて、自嘲する。それこそ普通の人間なら、あの怪我で動き回ることなんて『ありえない』。そして普通じゃないヤツを糾弾することに、人は思った以上に抵抗感がない。

全身酷い傷だらけの俺を排斥するのは、至極当たり前の事だ。

今までもそうだった。これからもそうだろう。この世界は『歪』に敏感だ。姿形の話じゃない、内面の話。だから俺は……

『体育祭での彼の行動は、生徒を預かる身として許容すべきものではなかったかもしれません』

テレビの向こうで相澤先生が頭を下げる。

『しかし、あれは彼の『成長』であると我々は捉えています。彼は複雑な事情を抱え、迷いながらも尚自ら思い描いたヒーローへの道を歩んでいる。誰かを想う心があり、援けたいと願う心を持っています。皆さんに見える形がどうであれ、そこは変わりません』

『彼はヒーローに向いている。敵になることはありません』

「……昔さ、俺、友達一人と、あるヴィラン共に身代金目的で攫われたことがあってな。そんな時からヒーローに憧れてたもんだから、ヴィランなんかに負けるか、つて友達と一緒に抵抗したんだよ。そんな時にさ、ヴィランの前でポロつと友達の個性バラしちゃったんだよね。それから酷いもんでな。ヴィラン相手に子供二人で何とかなる訳が無かったんだ。友達は嚴重に拘束されて強制的にヴィラン共の資金源作りさせられて、俺は言う事を聞かせるためだけに生かされ続けた。友達が少しでも失敗すると、俺の身体に鉛玉撃たれたり、ただ虫の居所が悪いからつて鉛玉撃たれたり、んまあ散々さ。そんな生活が……結局どんだけ続いたんだ？俺自身なんでそんなんで生きてられたのかも

分かんねえけど、ある日、友達の親が雇った傭兵とプロヒーローが俺達が監禁されている場所に来たんだ。俺も、その友達も、ようやくこの地獄から抜け出せるって喜んだ。だけど……ヴィラン共は俺達の予想よりも遥かに強かった。俺達の目の前で、何人も人が殺されていった。アイツは化け物みたいな強さだった。俺達が助かったのは、あの化け物の気まぐれに過ぎないって今でも思う。そうして助かって……俺は、もう純粋な気持ちでヒーローを目指せなくなった」

テレビの向こうでは未だに謝罪会見が続いてる。

「多分、その友達も純粋な気持ちでヒーローを目指せなくなってると思う。でも、その子が、それでも『ヒーローになりたい』って言うから、俺のせいで地獄を見たのに、本気でヒーローになりたがっているから……俺が、その子を支えないと、俺が、一生を掛けてその子に償わないと、そう思ってたんだ。だから俺は俺自身より、誰かを強くする事に個性を伸ばしていった。雄英に進学したのだから、友達がそこ志望したから以上の理由なんて無かった」

ヴィラン連合の面々がじつと俺の顔を見ている。

「クラスメイトは皆が皆本気でヒーロー目指して突っ走ってるし、先生達は殺しに来てるほど厳しいし、笑って誤魔化してるのも難しいで大変だった。何が大変かって、クラスメイト達が純な目で『お前もヒーロー目指してんだろ?』じゃあライバルで仲間だな

！』つてな風に見てくるんだよ。……俺の勘違いかも知れねえけどさ。だから俺はずつと自分に言い聞かせてたんだ。『俺は本気でヒーローになる』『ヒーローを援ける最高のヒーローに』つてな……。それが、俺に吐き続けた『嘘』だ……。嘘、だった……」

相澤先生の言葉が、再び頭で響く。その言葉に呼び起こされて、職場体験で受けたミルコさんの言葉や、ティアドロップの言葉、オッサンの言葉も想起された。

「それは、『嘘』じゃあ……。なかつたんだよなあ……。俺の中で死んだ筈の、ヒーローに憧れてた俺の言葉だったんだよなあ……。相澤先生が、ミルコさんが、クラスの皆が、俺に期待してる。んなら、期待に応えなきゃだよなあ……。違うな、俺が期待に応えたいんだ……。！」

俺の中で燻り続けた黒い心は、俺の想いに応える様に晴れてゆく。

ああ、そうさ。下らない嫉妬なんてしている暇は無かった。偶々一回、モモちゃんが俺以外の誰かに守られたからってしようもない嫉妬に悩む必要は無かった。ただ、もっと強くならなければならぬ。

何故なら、俺は最高のヒーローになるのだから！

「死柄木 弔、俺はヴィラン連合に入らない。俺は、ヒーローになるんだ！」

「……そうか」

俺の言葉に、死柄木はただ目を瞑って返したただけだ。

他のヴィラン連合の面々は、それぞれが難しい顔をしていた。

いつの間にか、記者会見は終わっていたらしい。少し長く自分語りし過ぎたかな？
「詭弁くん……今の顔、さつきまでの顔よりすつごく素敵です！新鮮な血の匂いがします！」

「ありがとよ、トガちゃん。ただその褒め言葉はどうなの？」

思い返せば、トガちゃんの誰から逃げたいって言葉……いつだって逃げたかったのは、過去の俺からなんだ。もう逃げるのは止めだ。過去に、トラウマに向き合う時が来たんだ。

「交渉は、決裂だな。残念だ……黒霧」

黒い霧が伸びてくる。また何処かに連れていく気か？だが、問題ない。たぶん！

「トガちゃんの横に!!!」

「っ!？」

黒い霧に包まれて飛ばされる感覚を覚えるが、数瞬後に見える景色に大きな違いは無かった。

「黒霧のワープ個性、かなり凶悪だよな。だがそれって事前に登録したポイントに飛ぶって言うより、リアルタイムで座標を設定してるんだろ？んなら、俺にとって相手の銃口ずらす程度と変わんねえわ」

「……成程、私達はまだ貴方の事を見くびっていたようです」

「んにい……舐めんなよ？ 迷いのない詭弁さんはスーパーモードだ、負ける気しねえ」
 「んにちわー！ ピザラ神野店でーす！」 はあーい今出まーす！ んなあんかピザ来たしー
 一旦中断で」

「……誰だよピザ頼んだバカは……？」

「……っ！ マズい、トガ！ 詭弁を刺せ！」

トガちゃんが何処からかナイフを取り出して、入口に向かって駆けた俺に向かって突進する。

「『だるまさんが転んだ』!!!」

覇声ばせいをトガちゃんとその他ヴィラン連合の面々に向け、ほんの僅かだけ時間を稼ぐ。

その間に俺は扉に向かって一目散に走り抜ける。

「俺の後ろにヴィラン1名！ さらに少し離れてヴィラン7名！ ん後よろしくう!!!」

扉に向かって駆けながら飛びこむようにして地面に伏せる。その直後、轟音と共にバーの壁が吹き飛んだ。

「無事か詭弁少年!! よく頑張った!!!」

「オールライトお！ 待ってたぜコノヤロー!!」

吹き飛んだ壁からオールライト、及び実力派プロヒーローが複数人揃って壁から突入

してきた。

「先制必縛ウルシ鎖牢!」

伸びて来た樹木が、僅か止まっていたヴィラン連合全員を一気に捕縛する。

「クソツ!! 黒ぎ r——」

「忍法、千枚通し。最も厄介故に眠ってもらおう」

プロヒーロー達が暴れ出して、ヴィラン連合を一網打尽にした。

「クソツ、クソツ!! 何で此処がバレた!?!」

「……俺の『言葉』って、意外とすげー遠くまで届くんだよ。それこそクソ騒がしいコミケの中とかでも、俺の声が遠くまで届くくらい。そんな特徴的な声でヴィランの名前呼んだり、俺の名前言ったり……分の悪い賭けだったが、まあ終わりよければって奴かね?」

「なっ、お前……まさか、最初からっ!?!」

「お生憎……叫ぶことしか取柄がねえからな! 万が一攫われた時のひゅみゅれーしょんもバツチリよ!!」

「詭弁っ! チクシヨウっ! オレ達を騙したのか!?!」

「っ……」

トウワイスが暴れながら俺に言葉の矢を射る。そうだ、相手はヴィランダ。捕まえ

るって事は、そういう事なんだ。

……でも、だからといって『はいそうですか』と切り捨てられるほどあいつ等は悪い奴じゃない。

「……カメラはっ！俺が持つてる!!今度は全員で撮ろうッ!!」

「っ!!チクシヨウ!!チクシヨオオオ!!」

自惚れじゃなければ、あいつ等も俺に友情を感じていた。それなのに、俺の行動は酷い裏切り行為にも思えるだろう。

もし、あいつ等が罪を償って無事に帰ってきたら、また飯でも作って……ッ!?

「な、脳無!?!何もないとこから……!!」

「クソ、どんどん出てくるぞ!!」

なんだ、コレ……!?!喉の中で、ナニかが溢れ出る……!!

「ゴボツ!?!んだ、これは……身体が……」

「詭弁少年!?!No!!!」

黒霧のワープとも違う。引きずられるような感覚に襲われながら、口から吐き出された黒い液体に吞まれて俺は何処かに飛ばされた。

残されたのは詭弁を呼ぶオールマイトの叫びだけだった。

バレンタインデーですよ!ヤオヨロちゃん!

「……詭弁さんは受験生だということを承知の上で仰っているのでしょうか?」

「んにい、俺が受験生である事と、来週のバレンタインの事は厳密には関係ないねえヤオヨロちゃん!」

中学三年生の冬の時の話。ヤオヨロちゃんはとつくに雄英の推薦入試を突破し合格を決めているが、一般受験の俺にとっては本当に最後の最後の頑張りどころである。

まあ、普段から勉強面はヤオヨロちゃんに見て貰って万全ではあるのだが、それでも万が一ってことがある。最後まで勉強に抜かりはしない。抜かりはしないが……息抜きはほしいじゃん?

「詭弁さんは大事な時期ですから勉強に集中してください!」

「いやいや、一心不乱に勉強漬けになるより、継続的に続けて時折気分転換した方がストレス無く色々覚えられる。最近の研究でもそう言ってるし!」

「ええ、ですから勉強の合間に個性訓練を一緒にしてるではないですか!」

「違うんだよ、俺はもつと色味のある息抜きがしたいの!というわけで次の土曜日にでもデートしようデート。チョコ巡りデート!」

「しませんわ！もう、少しは危機感を持ってくださいまし！」

「えー、だってバレンタインデーは平日だけ？多分ゆっくり出来ないと思うし」

「もう！詭弁さんは勉強に集中してください！」

「んう……」

そうして今日も勉強漬けの日が終わる。

最近は本当に勉強、体力作り、個性訓練、勉強のローテーションが激しいから、あんまりヤオヨロちゃんとかゆっくりこゆみけーしよん取れてない……。

そうして一週間後のバレンタインデー当日。こういう時モテる男は事前準備を欠かさない。……んまあ、去年一昨年の経験がモノを言うのだが。

まず家を出るときはいつもの時間より10分ほど早く出る！すると家の前で待ち構えていた近所のお姉さん方からの熱烈プレゼント攻撃！

「んふふ。はい、チョコレートだよ。それ、本命だからね？」

「詭弁くん！これは私の気持ちです！」

「ありがとう、おねーさん達」

そして登校途中も気が抜けない。交差点の角から偶然を装った後輩がエントリーだ！

「き、き、詭弁先輩！雄英受験、頑張ってください！」

「ありがとう。うん、頑張るよ」

そして更に校門の前では同級生のスーパーお嬢様が乱入だあー!!

「おーほほほほ!!ごきげんよう詭弁さん!今日は親しき仲にチョココレートを送る日だそうですわね!詭弁さんに私のお手製チョココレートを送りますわ!」

「そちらはお嬢様が一週間試作に試作を続けたチョココレートで御座いますゆえ、御召しになられたら是非ともお嬢様にお味の感想をお伝えください」

「め、メイドの分際で、言わなくて良いことを言わないの!!」

「出すぎた真似をしました。申し訳御座いません」

「うん、ありがとう。食べたら、感想を伝えるよ」

と、学校についてようやく一息つける。今時下駄箱にチョコを入れる奴は居ないからな。

……ん?チョコを貰った後の女子達の反応?詭弁スマイル(当社比5倍増)でお礼を言えば大抵の子はその場でK.O.する。残りの子は……まあ、性獣(意味深)となるが……。

さて、一息ついた後だが、まだまだ油断は出来ない。上履きに履き替えたら三年の校舎に向かうのだが、その通路の間に下級生女子が揃って待っている。そしてその全員が俺の事を見るわけです。これ軽い恐怖体験なんですけど分かりますかね……。

「詭弁先輩！バレンタインのチョコです！」

「き、詭弁先輩……これ、どうぞ……」

「ん……どうぞ……」

「先輩！アタイの愛が詰まったチョコですよ！」

これでも極一部なのだが、とにかく全員キャラが濃い。熱血、ダウン、無口、ラブ全開、んもーほんと色々キャラが立っている。

まあ、勿論受け取らないなんて選択肢は無いわけですが。

「みんな、ありがとう！」

我ながらいつそ清々しいまでの会心の笑みで答え、ほぼ全員をK・O・する。わずかに残った数人は蒸発した理性で俺に飛び掛かるが、そこは鍛え上げた身体捌きで回避する。

そうしてようやく教室に到着し、俺の一日の半分が終わる。うん、ここまでで半分なんだ。既に紙袋二つにいっぱいチョコレートを貰っている。席に座り、簡単に食べられそうなものから勘で選びながら食べる。今の内から食べ進めないと食べきれないからだ。

ちなみに、一昨年のバレンタインには自分等身大のチョコレートを送ってきた某お嬢様が居たが、流石に食べるのが怖かったのでそればかりは受け取りNGを出した。それ

から小さいチョコが喜ばれると知られて、去年はチロルチョコサイズの物が多かったのは良い。

そして今年はチロルチョコサイズのチョコレイト袋詰めが多かった。違うそうじゃない。

包装を開けながら、このチョコは誰に貰った物かを頭の中で想起する。ちゃんと味の感想を伝えるためだ。モテる男は細かな努力を欠かさない。最終的に100人分にも上るが、気合いで何とかするのがモテる秘訣。ふふふ、モテモテ男子は辛いな……。

授業が始まるまでに、朝受け取った分の4分の1を食べ終わる。くくく、残り4分の3。しかも昼になつたらまだ増えるんだぜ?これ。致死量つてご存じ?

俺の個性に掛かれば、何個チョコを食べても最初の一口目の幸せ感を堪能できる。思い込みの力つてスゲー。逆に使わないと味に飽きて食べ進めることが出来ないんだけどね……。

うう……新鮮な感覚のまままでヤオヨロちゃんのチョコを食べたかった……。

「詭弁!アタシのチョコを受け取れえ!」

もーいやあー!!!



放課後、ようやく家に帰れた。朝受け取った分は何とかその日の内に食べ終え、その感想を一人一人に伝えた。そして昼以降に貰った分は、明日の朝までに食べ尽くして感想を伝えるつもりだ。

自分の部屋に戻り、メモ帳とペンを取り出す。チョコを渡してくれた相手の名前と既製品か手作りかを記入し、既製品だった場合はチョコの値段を調べて大体三倍返し、手作りだった場合は同じように手作りのモノを、ホワイトデーのお返しとして渡すために、忘れないうちにすべてメモしておく。モテる男は辛いねえ、ふふふ。

マジでしんどい……。

食べた感想はLINEで伝えられたらLINEで、そうじゃなければ明日直接伝える。

くくく、チョコレート地獄はまだ終わらねえ。『昨日渡し忘れちゃった♥?』という女子が必ず一定数は居る。何故ならバレンタイン当日に渡したがる女子は多数!だが覚えて日にちをずらして渡すことで印象に残そうっていう腹積もり!そしてなんと、今日渡しておきながら明日も渡してくる女子もまた僅かながらに居るのだ!!無論モテる俺はその全てのチョコレートを食べ、感想を伝えるのだ!

人間関係って、つらい。

* * * * *

バレンタインデーから数日後。

「詭弁さん。……詭弁さん!大丈夫ですか!」

「んう、んあー……ヤオヨロちゃん、おはよう」

大量のチョコレート地獄からようやく解放された翌日、ほんの数日とは言え、ずっと自分を騙しながらチョコを食べ続けた反動が体調に現れている。しんどい。

「詭弁さん、明日が雄英の一般受験日なんですよ、そんな調子で本当に大丈夫ですか!?!」

「んう、へーきへーき。俺の個性でいつでも絶好調になれるって知ってるでしょ?」

「それでも普段から体調を整えておくに越したことはないですわ!もう……本当に大丈夫なんですか?」

「んい、そーだなあ、ヤオヨロちゃんのおっぱい揉んだら元気になりそう……」

「でしたら絶不調のまま受験を受けてください」

「ねえ、酷くない?」

「はあ……まったく。別にチョコを食べるなど言っている訳ではないのですし、貰ったその日に無理に食べて感想を伝える必要はないでしょうに」

「んうう……でもさ、折角渡したのに、その日に感想貰えなかつたら悲しいじゃん?」

「詭弁さんがその日大量のチョコレートを貰っているのはもはや周知の事実なのでから、当日に感想貰えなくても仕方ないで済みますわ」

「うーん、そう言われればそうかもしれない」

「……詭弁さんは本当に時折おバカさんになりますわね」

「ヤオヨロちゃん、心臓に毛の生えてる俺だつて傷つく時もあるのよ?」

「うふふ、それは失礼しましたわ。お詫びと言つてはなんですけど、こちらをどうぞ」

そう言つてヤオヨロちゃんは、丁寧にラッピングされた小箱を渡してきた。

「……んにい?なあにこれ。な、なんか見た目よりちよつと重めですねえ……」

「こつてりとした甘い物はしばらく見たくもなさそうな詭弁さんにぴつたりの物ですわ」

「ふうん……?」

そうして家に帰り、明日の試験に向けて入念にストレッチを行つて体調のリセットを行う。そしてヤオヨロちゃんから貰った小箱のラッピングを丁寧に剥がし、中を見ると

……

「……大福餅?」

キチツと箱詰めされた大福餅らしき物と、箱の外にバレンタインカードが添えられていた。

カードを開いて、ヤオヨロちゃんらしい字で書かれた内容を読む。

詭弁さんへ

詭弁さんが、本当はチョコレートがあまり好みではないのに、女の子を悲しませたくないから食べているという事は知っています。

変なところで無理をしてしまうのは昔からの悪い癖ですよ?

そんな詭弁さんのために、砂糖を一切使っていないイチゴ抹茶大福を作りました。

雄英に合格したら、デートに行きましよう。待ってますよ?

八百万 百より

「愛の女神かよ」

んもくホントに好きいい!!! (語彙力消失)

というかいちご抹茶大福手作りコレ!?和菓子職人かよ。

小箱に4つ入ってたが、家族に分けずに全部俺が食べた。高級な抹茶本来の甘味と苦味、イチゴの酸味と甘味が組み合わせたってなんかもうなんか凄い美味しい。(語彙力蒸

発)

「とうわけで俺がもう待てなくなりましたデートに行こうヤオヨロちゃん!!!!!!」
「明日入試ですわよ!!?!?」

その後、ヤオヨロちゃんにぶん殴られるまでべたべたしてました。

悪夢ですよ！

「ゴホツゲホツ！くつき！なんなんだ?!」

黒い水から引きずり出され、辺りを見回すときつきまでいたバーとは違う場所に居た。

俺の第六感が、ここはヤバいと告げる。辺りを見回すと、辺りは瓦礫の山。そして何も無い所からバシヤバシヤと黒い水が湧き出し、ヴィラン連合の面々が出現した。

「な、なんだココ……」

背中から心臓にかけて冷たい針が突き刺さっている様な感覚に襲われる。

固まった身体を無理矢理動かそうとした、その時。凍えるほどに冷たい声が後ろから投げかけられる。

「やあ、詭弁くん。久しぶりだね……いや、この姿なら初めまして、かな?」

声色自体は、何処か喜色を感じられる声だ。だが俺はその声を聞いて、心臓を掴まれたかのような錯覚に陥った。

「ふふ……その臆病な所は変わっていないみたいだね」

眩暈がする。身体からあらゆる熱が奪われたかのように寒気がする。俺は、この声を

知らない筈なのに知っている。

倒れるように転がりながら声の主から離れ、その顔を見た。

そこには、顔の潰れた大男が立っていた。

「そうか、もうあれから8年になるのか。随分大きくなったなあ、あの時の傷は……残っていないようだね」

まるで親戚のおじさんの挨拶のような気軽さで俺に声を掛ける。その喋り方は、まるであの時の……

「……おや、まだ気が付かないのか？それとも忘れたいほどのトラウマになっているのかな？ふふ……なら教えてあげようか。今から8年前、君が小学1年生の頃にとあるヴィランに攫われた事を覚えているかな？」

その喋り方は、まるであの時の……化け物。

「その時に、君達の目の前で何人も叩き潰して殺した男の、まあ中身と言うか、本体とでも言えればいいか。あの時の姿は、当時僕が持っていた『憑依』という個性で入り込んでいた名も無いヴィランの姿さ。とても使いづらい個性で『憑依』している間は他の個性が使えないから、今はもう誰かにあげちゃったけどね」

呼吸が浅く、早くなる。

「おっと、昔話が長くなってしまふのは年寄りの悪い癖だった」

視界が暗く淀んでいく。目の前で何人も死んでいった光景がフラッシュバックする。吐き気がする。血の匂いがする。頭が揺れる。

「さて……やあ弔、また失敗したね」

あの化け物が死柄木に話しかける。その後何かを言っているようだったが、それを理解出来る程俺には余裕がなかった。

あの化け物が目の前に居るだけで、地獄が何度も何度もフラッシュバックする。脳と身体が離散しそうだ。呼吸もままならない程に息が浅くなる。身体が震える。目の前で、また人が死ぬ。俺は、また、何も出来ない。

「全て返してもらおうぞ！ オール・フォー・ワン!!」

上空からオールマイトが現れ、化け物に向かって殴りかかる。

「また僕を殺すか、オールマイト!」

化け物はそれを受け止めて、二人の足元がその衝撃で弾け跳んだ。

クレーターが出来るほどの衝撃波によって俺とヴィラン連合の面々は吹き飛ばされる。吹き飛んで行く視界の端に金色の何かが見え、咄嗟に手を伸ばして守るように抱えた。

「きやつ!」

「ぐへえつ……」

人二人分の衝撃を背中に受け、一瞬意識が飛びかける。ぐわんぐわん揺れる頭を押え、目を開けると視界の大半に白と肌色が映っていた。

なんかほんのり甘味と酸味のある匂いが……

「……あの、詭弁くん、守ってくれてありがとうございます。ですがあまりジロジロ見られるのはちよつと……」

「……あゝ、そういう……」

吹っ飛びながら咄嗟に抱えた所為で不自然な形で抱える事になり、着地の衝撃によって大変な『トラブル』に見舞われた。捲れたトガちゃんのスカートを戻しながら立ち上がる。

ありがとうトガちゃん。トガちゃんのお陰でトラウマモードから抜け出せました。言葉には出さないけど。

目の前で化け物の左腕が歪に膨れ上がり、オールマイトに向けられた。その直後、空気の塊が発射され、オールマイトは吹き飛ばされた。

「オールマイト!?!」

オールマイトは数百メートルほど吹き飛んでいき、その間にあるビル群を破壊していく。

「ふふ……心配しなくてもあの程度じゃ死なないよ」

化け物は俺に向けて冷静に言い放つ。そしてその後死柄木に向けて「ここは逃げろ」と言いながら右手指から赤黒い枝のような物が伸び、地面に倒れている黒霧の身体に刺さる。

『個性』強制発動。さあ、その子連れで行け」

「先生は……」

死柄木の縋るような声が聞こえた直後、オールマイトが瓦礫を砕きながら化け物のすぐ傍に降り立った。

「逃がさん!!」

「常に考えろ、弔。君はまだまだ成長出来るんだ」

化け物はそう言いながら、オールマイトの拳を受け止める。

その様子を唾然と眺める死柄木。

「行こう死柄木!あのパイプ仮面がオールマイトを食い止めている間に!」

そして、俺に目を向けた。

背中がゾワゾワと粟立つ感覚が走る。これはアレだ。所謂窮地って奴。

……だが、オールマイトに救ってもらうことは出来なさそうだ。オールマイトも、あの化け物で手一杯。だけどオールマイトはヒーローだから、俺に意識が割かれているのを感じる。つまり、俺がこの場にいる所為で、オールマイトは全力が出せない。

……んなら、やる事は一つ。俺が無事にこの場から迅速に脱出する。

さあ、腹から声を出せ。今、叫ばずに何時叫ぶ。

「オールマイトオ！俺は俺で勝手に助かってる!!だからそのパイプマスクマンは任せ
たあ!!!」

我ながらヒーローの大先輩になんて言い草だと思う。だが、オールマイトを頼ってしまえば、あの化け物にオールマイトがやられてしまう。自分を救う。オールマイトを助ける。両方出来ないで何がヒーローか。

「さあヴィラン連合諸君！楽しい楽しい鬼ごっこを始めようかあ!!」

コンプレスが、スピナーが、トウワイスが、俺に向かって攻撃を仕掛けてくる。特にコンプレスに気を付けながら攻撃を回避する。

茶毘、マグネは動きが鈍い。トガちゃんに至ってはずっと俺を見てるが、棒立ちに等しい。あいつ等はあいつ等で何を狙っているのか、何か思う事があるのか。それらに思考を割いている余裕はない。

「クソ！チクシヨウ！詭弁テメエオレ等と一緒に来やがれってんだ!!」

「詭弁！お前もステインを継ぐ者となれ！」

「行かないし継がない!!俺には俺なりの『ヒーロー像』があるんだよ！無理に押し付けんな！」

瓦礫の山々の中で攻撃を回避し続けながら、逃走経路を探す。オールマイトがああな化け物を抑えているが、安全に逃げられる場所は見当たらない。これジリープアアって奴?

……すると見覚えのある影が見えたかと思えば、「あつ」と言う間にヴィラン連合の面々に蹴りを入れて俺の傍に降り立った。特徴的な白い耳に褐色肌、そしてムキムチの太もも。そのヒーローは……

「るみみん先輩!!」

「お前も蹴っ飛ばされたいのかア!!?」

スパアン!!と尻を蹴られる。ちよつとしたジョークじゃないっすかミルクさん……。

そしてそのままミルクさんに担がれて戦線を離脱。離れていく光景には、次々ワープゲートに飛びこんでいくヴィラン連合が見えた。

「詭弁、怪我は……大したことなさそオだな。私はこの辺りにいる一般人達を避難させる。お前も手エ貸せ!」

「……他にも、プロヒーローは居るんですか?」

「ああ!?元々この辺りに居たプロや、近場に居た奴等全員引つ張つて来た!とにかく急いで避難させろ!瓦礫の下に埋まってる奴が残ってるかもしれないねエから、そつちに多くヒーローを割きたい!!」

「……分かりました！」

なら、悠長にしていられる時間は無い。ヴィラン連合は何処かに消えた。俺は助かって、オールマイトはあの化け物を倒してくれる。

……本当に？個性無しに、ヒーロー達を叩き潰していったあの化け物の本体だぞ？
オールマイトは、勝つ。勝つはずだ。勝つて……くれる……筈だ。

迷うな俺！俺は俺で出来る事をするんだ！オールマイトが心置きなく戦えるように！
！時間が無いんだ！こんな大災害の後みたいないな場所で、一人でも多く救うんだ！

だから、短く、簡潔に纏めるんだ！！

「オールマイトオ!!!後は全部俺達が救うからッ!!!」

俺の『個性の力』を、圧縮して、圧縮して、ほぼ全てをその言葉に注ぎ込むイメージで。

オールマイトに応援を送った。

無駄かもしれない。

無意味かもしれない。

オールマイトの邪魔になるかもしれない。

それでも、オールマイトが負ける姿は見たくないから。

オールマイトは一人じゃない。肩を並べる同志がいる。遠くで支える仲間が居る。

未来を託す生徒が居る。

相対する敵は、心置きなく打ち倒して!!

「その変なマスク野郎は任せたア!!!」

「ああ!!任せろ!!!」

「フフ……全部救うから任せるなんて、守れもしない事をよくもまあ言えるものだね……」

「詭弁少年は、やると言ったならやる男の子だ!」

「そうか……なら、キミの矜持ごと叩き潰してあげよう」

オール・フォー・ワンの左腕が膨れ上がり再び破壊を撒き散らそうとした直前。

『ミルクさん!オールマイトの右奥瓦礫の下!』

「任せろオ!!」

ダアン!!と踏み込む音と共にミルクコが飛びこんで瓦礫ごと蹴り飛ばし、下でうづく

まっつてた一般人を抱えて再び離れていく。

「オールマイトオ！コツチは気にすんな！」

「っ！ありがとう!!」

「……ほう」

戦闘は、更に激しくなっていく……

伝説が終わりを迎えましたよ！

「『エッジショットの直進50メートル先に複数人！虎さん！オールマイイトの後方に……たぶん一人！』」

瓦礫の山を駆ける様に移動しながら、ミルコさんから受け取った無線機を使ってプロヒーローに指示を出す。

まだ仮免も取ってない、言うなれば一般人に過ぎない俺の言葉に最初は文句に近い言葉を言われていたが、いざ其処を確認すれば要救助者が本当に居た。

そこで俺は暫定的にプロヒーローによる『個性使用許可』を受け、探知系ヒーローと共に要救助者を探し回る。

「皆さん怪我はありませんか!? 歩ける人はこのまま南東方向に向かって避難を！歩けない人に手を貸して！今、動けない人を救えるのは貴方達だけなんです！皆で助かりましょう!!」

五感が異常な程に強化されてるのがわかる。耳は僅かな呼吸音を聞き逃さない。肌は僅かな振動を感知できる。脳は異常な程の情報量でパンクしそうだが、まだ倒れる訳にはいかない。

また瓦礫の山にのぼり、更に聴覚と触覚を研ぎ澄ます。

オールマイトと化け物の居る方角から絶えず爆音のような物が轟くが、それに惑わされるな。

肌がピリつく感覚。意識的に聴覚を向ければ、僅かな呼吸音が聞こえた。

『「こちらトーキー！子供が瓦礫の下に居る！一人！」』

『了解、オレが向かう！』

頭が割れそうなほどに痛むが、我慢しろ。一人でも多く助ける。オールマイトが戦闘に専念できるように、誰も零さないように！！

「トーキー！何処だ!？」

「ココです！ここから約5メートル！この方向に！」

「よし、一気に掘り進む！山が崩れ始めたらすぐに声だせ！」

「はい！」

そうして程なくして女の子を救助した。

両腕がかなり悲惨な事になっている……だが、すぐに治療すれば命は助かりそうだ。

「トーキー、オレはこの子を連れていくから次に向かえ！」

「待つてください！キミ、お父さんやお母さんは？」

「う、うう……おか……さ……さ……」

「……トーカー、お前は早く次に向かえ」

「ですが、恐らく近くにこの子の親が居るかもっ」

「いいから向かえッ!!」

「っ」

一人でも多く助けなければならぬ現場で、居るかも分からない人間を探すのと、確実にそこで生きている人間を探すのとどちらに時間を割くべきかは、頭では分かっている。居るかもわからない、居ても、生きているかどうか……ッ!!クソっ!考えるな!今はその時じゃない!!

そうだ、余計な事を考えていられるほど俺の脳に余裕はない!切り捨てる。無駄な事を切り捨てるんだっ!

切り替える、スグに!一人でも多く助ける為にッ!!

「皆さん!大丈夫です!!ヒーローが来ました!さあ落ち着いて避難しましょう!ここから真つすぐ進んで、避難場所があります!動ける人は協力して助けを必要としている人に手を貸してください!皆さん全員で生き残るんです!」

無力な自分への怒りを表に出さない。見ている人が不安になるから。

歪みそうになる表情の上から、笑顔を張り付ける。皆を安心させるように。

「皆さん避難を!大丈夫です!ヒーローが守ってくれる安全な場所に向かいましたよ」

「！」

「安心してください！ヒーローが来ました！さあ避難しましょう！」

「大丈夫です！」

「さあ此方に！」

『そこに自分は要るのか？』

死柄木の言葉が、ふと頭をよぎった。

* * * * *

『ヴィランは……倒れたまま動かず!!勝利!!オールマイト!勝利のスタンディングです!!!』

遠くで、報道記者が叫ぶ声が聞こえる。そして歓声の声も。

「そうか……オールマイト……勝ったかあ……」

脚が千切れんばかりに駆けずり回り、耳や鼻、目からも血を流しながらぶつ倒れている俺が一人。

一人では、何も出来ない。きっとこの瓦礫の下には、俺が探知しきれなかった死体誰かがいるのだろうか。

「……よう、無事かア?」

「無事に見えます?」

「死にかけて見えるなア」

ぐつたりとただ空を眺めていると、ミルコさんがひよこつと顔を出して覗き込んできた。あー良いアングル……。

「……ミルコさん、俺、役に立ちましたかね」

「あア?」

「笑顔お頭に張り付けて、避難誘導しながら瓦礫の下に埋まった人探し回りました。……ですけど、誰も俺一人じゃ救えないんですよ……。全力以上だして探し回って、でも出来る事は要救助者の居場所を知らせる事だけ。地面を掘り抜くチカラも、瓦礫を持ち上げるチカラも、んなあんも持ってねえから……サイレンみたいにただ五月蠅く鳴り響くだけで、俺は結局誰も——」

「ふん」

ぶにゅつとミルコさんに踏みつけられる。なんかこれも懐かしく思えるなオイ。

「バカ野郎が。まだ高校生ガキの癖に何でもかんでも一人でこなせるワケがねエだろうが。

クソ生意気な事言いたけりやプロになつてから言えボケ」
「キレそう」

おいミルコさん。ただでさえ俺の頭は今いろいろ疲れてブチブチなんだからこれ以上ブチ切れさせないで？

「テメエがバカな事言つてるからだろうが。要救助者を探し出して、救助して、避難場所まで連れていく。確かに一人で出来りやア良いなア。だが現実になんな事出来る奴なんて居ねえんだよボケ。良いか、先輩からの有り難い言葉だ、よく聞け。ヒーローは神サマじゃねえ、人間なんだ。全てを救う事も、死んだヤツ蘇らせる事も出来やしねえ。だけどな、テメエ一人で何でもやる必要もねえ。脚の速い奴、力自慢の奴、頭の良い奴、人間には各々『個性』がある。『得意分野』がある。それぞれの『得意分野』で人間は戦うんだ。『戦うのが得意な奴』が敵を抑えている間に、『人を見つけるのが得意な奴』が『力自慢な奴』に場所を伝えて、『治療が得意な奴』の場所まで運ぶ。分業だ要するに。テメエはテメエの得意な事、出来る事を必死にやりやあいなんだよ。わかつたかボケ」
「……ですが、俺はある子供の親を見つけられなかった。救えなかった……」
「確かにヒーローは守れなかった物、救えなかった物を数える事も大事だ。……だが、守つた物、救つた物に目を向ける事もまた大事だ。瓦礫の下で声も出せないヤツの代わりに、テメエがサイレンみたいに五月蠅く鳴り響いたお陰で救えた命がある。テメエが騒

いでいたお陰で迅速で無事に避難場所に来れたヤツが居る。つーか、あんなド派手に暴れ回ってる中で救助活動が進んでたのがオカシイからな? テメエはそれを自覚しろバカ野郎」

「……ミルコさん。いい加減足退けてくれませんか?」

「バカ野郎には丁度いい薬だ。オラありがたがれ」

「舐め回しますよ」

「やめろ」

ようやくミルコさんが足をどけた。

「空、青いつすねえ……」

「……そうだな」

プロヒーローの増援が駆けつけ、辺りの探知や救助活動が本格的に進行した。あの化け物が暴れ回っている時から全力全開で救助活動に当たっていた俺は案の定息切れしてダウン。腕脚の筋肉がブチ切れて動けなくなった。耳もキンキンする。痒い所も搔けないぜ……。

「……詭弁、よく頑張ったな」

「んえ? なんか言いましたミルコさん?」

「なんでもねえよボケ。おし、お前も避難所ですったん治療受ける、運んでやる」

「……あー、運ぶ前にちよつと痒い所搔いてほしいんですけど……」

「あア？……つたく、しよーがねーな。何処だ？」

「チンチン……」

「シバくぞテメエ！」

「いや本当にマジで痒いんですけど……ミルコさん、脚を振り上げて何をする気ですか

? ねえ、ちよつと? 私怪我人、おーけー?」

「ふんっ!」

「お。っ」

そして気が付いたら雄英の保健室に寝ていた。そして気絶する少し前の記憶も無い。
不思議!!

……あつ、スマホ無い……。

全寮制ですよ!ヤオヨロちゃん!

「よう!なんかひさしぶえあ?!」

「詭弁(さん)!!!」

雄英の保健室で目を覚ませば、見舞いに来てくれたモモちゃん、いつかちゃんがポ
ディチャージを御見舞いしてきた。お前等、俺怪我人、OK?あ、でもおっぱいクツシヨ
ンのお陰で思ったほど痛くはないかな?

「保健室で騒ぐんじゃないよ!」

リカバーちゃんの一喝で引き剥がされる二人。興奮も落ち着いたところで近状情報
の交換をする。

「……そうか、ウイルス連合に襲われた時にガスで……」

「医者の見立てでは、皆さん身体はほぼ回復しているそうですわ。じきに皆さん目を覚
ます事でしょう。……もし、あの時……私が脳無を深追いせずに森の異変に気が付いて
いれば……」

「おいおい、そりやあいち早くウイルスに捕まった詭弁さんをデイスってんのかい?」

「い、いえっ!そんなつもりは!」

「んまあそうだろうな。みいんなそうだ。誰もモモちゃんが失敗したって思ってたねえよ。……なあモモちゃん。モモちゃんは叱責されたのか？それとも許されたのか？」

「つ……………私は……………」

「……………まあ、分かるよ。俺も神野のあの時、もつと強ければ、もつと速ければ、何でも出れば、なんて思った。何でも一人で出来れば、そりやあ良いよな。でもミルコさんに叱られたよ。『 teme 一人で何でもやる必要はねえ』ってさ。俺も、モモちゃんも、個性が万能だからついつい何でもやりたくなるよな。んでも、今は周りに色んなスペシャリストが居てくれるんだ。んなら、任せられるところはどんどん任せていくのも必要な事だよなあ……………」

「詭弁さん……………」

「モモちゃん。また一緒に、一から鍛えなおそつか」

「……………はいっ！」

「おーい、私も居るんだけど。二人の世界に突入すんな」

「おう、悪い。いつかちゃんもそうだけど、これからもB組の皆ともガンガン特訓していくからヨロシクな！」

「……………はあ、元気だよなあお前。……………お前が動けるようになったら、寝てる皆にも元気分

けに行きな

「おうよ」

「……あ、そう言えばまだ聞いてないだろ? 全寮制の話」

「全寮制?」

「そうそう、なんでも——」

* * * * *

ガスで倒れた皆が復活し、雄英の教師陣による家庭訪問も恙なく……まあ、大した問題も無く終わって入寮日。

「……相澤先生? どうしたんですその大怪我……?」

「ま、まさかまたヴィランが……!?!」

「これは大丈夫だ、気にするな」

「……んい……ほんとはマジすんません、ウチの母が……」

「いい……。元々オレが不甲斐無い所為だからな」

「……どういう事でしょう詭弁さん?」

「んまあ、俺の母さんがちよつと暴走したというか……そんな感じだ」

「ああ、そうだ。詭弁」

「はいなんでしょ先生」

「お前の荷物、もつと何とかならなかったのか……」

「……マジすんません、ほんと、うちの母が……」

「……さて気を取り直して。明日からは林間合宿の続き、『仮免』取得に向けて動いていく。……林間合宿が潰れた分、更に圧縮して個性を鍛えていく。詳しい説明は明日にするが、キツイ日々が続く。死なない程度に全力でついてくるように。……さあ、それじゃあ中に入ろう」



ハイツアライアンスの中に入り、相澤先生から簡単に説明された後女子棟、男子棟それぞれの一部屋割り表を渡された……直後の出来事だった。

「……おいおい、なんだこの部屋割り！」

「不公平だ!!」

男子棟

5階：瀬呂、轟、砂糖、詭弁

4階：爆豪、切島、障子、詭弁

3階：尾白、飯田、上鳴、口田

2階：常闇、青山、緑谷、峰田

女子棟

5階：蛙水、
、
、
八百万

4階：芦戸、
、
麗日

3階：葉隠、
、
耳郎

2階：
、
詭弁、詭弁、
、

「何で詭弁だけ二部屋?!」

「つーかよく見たら女子棟にまで部屋持つてるじゃねえか!? どういう事ですか先生!!」

「……なんでだろうな」

その時の相澤先生の目は初めて見るような、遠い色をしていた。

「んもうほんと、マジでなんかすみません……」

俺の部屋が複数あるのは、俺の母親のワガママと言うべきか、俺が不甲斐無い所為と言うべきか……まあ母さんの言い分は『雄英が不甲斐無いだけ』との事だが……。

とにかく要するに俺の部屋が計4つも有るのは、単純な話それだけ大量に物を置く必

要があるからだ。スーパーコンピューター並みにデカイ警備システム、警備システムを管理警備するシステム、そのシステムを管理警備するシステム、と完全に独立した三つの警備システムが互いに二つのシステムを監視することで強固なセキュリティを作る Separation Of Three Powers System

三権分立システム、略してSOPSを導入しているから。雄英のセキュリティシステムとは完全に別の物で、サーバーも物理的に分けられているから『ガバガバセキュリティの雄英で寝泊まりするなら必須』との事。ちよつと何言ってるかわからない。とにかくすごいデカイ物が鎮座してるからそれだけ部屋が多く使われる。

まあ警備システムは俺の部屋だけじゃなくついでに全部屋警備しているらしいからまだ良いとして、それだけじゃなく母さんが送ってきた私物もまた多い。部屋一つが足の踏み場もなくなる程に。服、本、トレーニングアイテム、パソコン、その他生活小物、もの凄い量を。

以上の点で、凄い事に警備システムの既定の時間にベッドについていなければ自動で警報が鳴る。まあ事前にスマホから設定すれば解除できるのだが、それも一日でリセットされる。

んまあ……要するに。警備システムの関係で男子寮4階、5階の俺の部屋は機械で埋め尽くされ、4階の僅かに開いたスペースに置いたベッドで寝なければならぬ。当然

そんな部屋だから『私生活』なんてモンは無い。だから比較的開いてる女子寮に部屋を持つていると言う訳だ。

うん、我ながら訳が分からん。

「と言う訳なの……迷惑かけてゴメン……」

「お、おう……まあ、ヴィランに拉致されたからな詭弁は……仕方ない、のか?」

「つていうか、寝る時は女子寮2階から男子寮4階まで移動するのか……大変だなお前」
「就寝時間から起床時間、就寝時の体温、レム・ノンレム睡眠時間の測定、寝がえりの回数、呼吸量まで完全監視されてるんだぜ?これは完全に安心しますわ(白目)」

「……そうか、お前も大変だな」

「でも堂々と女子棟に行けるんだろ!?羨ましい……!」

「ブレねえな峰田ほんと」

別に女子棟と男子棟の行き来はされてないんだがな。

女子達の反応も、『まあ詭弁なら良いか』と中々。これが日頃の行いつて奴か。

そうして各自自分の部屋に届いた荷物の整理を始める事になった。

俺等の雄英生活はまだまだ始まったばかりだ!!

キヤラクター資料的なサムシングですよ！モモちゃん！

詭弁 答弁（きべん　とうべん）

『A組一のイケメンモテ男！お喋りマン参上！』

『ウイークリー任務何回してんの？』

『だってたまにはカッコイイとこ見せたいじゃん！好きな子にはさあ！』

口八丁に相手を惑わす、お喋り上手のスーパーイケメン！

一人より二人、二人より沢山。誰かと共に今日を征く！

ヒーロー名：お喋りヒーロー『トーカー』

個性：口八百万丁

出身校：堀須磨大付属中学校（ヤオモモと一緒）

誕生日：1月19日（良い口の日）

身長：180代

血液型：A型

好きなもの：女の子、

性格：超オーブンスケベ、時々イケメン

・人物

自他共に認める整った顔と高身長。男子にしては長めの黒髪をウナジくらいの高さで纏めている。一人称は『俺』。

女子に猥談を振つたりセクハラしたり、※ただしイケメンに限る を躊躇なく実行する胆力を持っているが、基本的に臆病な性格ではある。

細かい変化に目聡く気が付き、戦闘では主に司令塔、或いは後方支援に特化している。その観察眼は日ごろでは女子の小さな変化を褒めたりするのに使われる。時折男子も褒める為、口さがない人からよくホモ、バイ扱いされる。

人をよく褒める為、色んな人の好感度が高いが徹底したアンチが一人二人は居るタイプ。ヒーロー科は良い人揃いなので全員からの好感度は高い。

色んな女の子にちよつかいを出すのが、一度として肉体関係を持ったことは無い。けど同じ男子から非童貞扱いされることもある。フシギダナー。

八百万が一番好きと公言し、八百万もまんざらではないがまだお付き合いしていると言う訳ではない。その隙を狙う女子多数。

横文字が苦手。シチュエーション、コミュニケーション、センサーシジョンとかその辺が言えない。ビックリするほど言えない。

・個性

個性は『口八百万丁』。好きな女の子の名前に肖ってこんな名前。

喉が発達し、『声』に混じる特殊な波長が自分・相手の脳に作用して様々な効果を引き起こせる。代表的な物は自分の脳に作用させて、意図的に火事場の馬鹿力を引き起こす事や、実際にはありえない事を相手に錯覚させ脳を騙す事、相手の個性を促進・抑制させる事等が出来る。

火事場の馬鹿力を引き出すとその反動で自分の身体にダメージが入るが、概ねサポート系の能力。

喉が発達している為か、詭弁の声は素でもかなり遠くまで届く。

神野区の悪夢を経験して肉体と個性が一段階成長し、自身の五感を強化したり、自分の個性効果を濃くしたり出来るようになった。

・必殺技

『覇声』ばせい 簡単な単語を大きく叫ぶことで相手の意識を一時的にずらす。銃口を反らしたり、少しの間相手の動きを止めたり、ワープ先を咄嗟に変えたりと大活躍。

『嘘八百万』うそはちミリオン 出鱈目な嘘を、本当に起こる事と相手の脳に錯覚させる。相手に幻覚、幻聴を見せたり、相手の感度を100倍にしたり出来る。技名は《嘘つぱち》+《嘘八百》

+ 《八百万》やおよぼす

『かくせい覚声』火事場の馬鹿力を引き出したり、自分の身体を岩並に硬くしたり、痛みを感じなくしたり出来る。脳内麻薬ドバドバなので使い過ぎるとキマってくる。

『やるダウナーツイート気ツキ亡キきイート眩キき』相手の戦意や気力、いわゆる『やる気』と呼ばれる物を削る。実は聞いた全員に効果が出てしまうので、使い過ぎると自分ごと周りが壊滅する。

『スライド・ワード滑ス舌』相手の言葉を封印する。かつこよく書いてるが、単に噛んで言えなくなるだけ。

・余談

作者の性癖によつてMツ気というか逆レ体質気味。

積極的に手を出してつちやうと話が続かないからね!シカタナイネ!某トラブル主人公の方とか肉食系だったら話続かないのと一緒だね!

ちよつかい掛けるだけ掛けていざという時にヘタれる分こっちの方がかなりクズいけどね!

詭弁 勉号 (きべん べんごう)

この息子にしてこの親あり!?

顔が広い叩き上げの弁護人!

職業: 弁護士

年齢：秘密

個性：口達者

・人物

詭弁の血によつてこの方もまたイケメン。顔が広く、『弁護士詭弁』はそこそこ有名。浮き名も有名？

結婚してからは妻一筋……だが、それでも色んな女性にちよつかいは出している。ミルコや塩崎家と知った仲のようだが……。

・個性

個性は『口達者』滑舌が非常に良く、頭の回転がとても速い。それだけ。

詭弁 巫女（きべん みこ）

元神職にして現一児の母！

閨属性と光属性が合わさり最強に見える！

職業：専業主婦（元御神子）

年齢：女性に年齢を聞いてはいけませんよ？

個性：呪い

・人物

とても徳の高い所の神社に生まれ、『神の声を聞く役割』を与えられた……らしい。今はなんやかんやあって実家を飛び出して勉強の元に嫁ぐ。恋のライバルは多く居たが、その全てを薙ぎ倒したという逸話がある。

夫と一人息子が大好き。

・個性

個性は『呪い』。のろいと書いてマジナイと読む。いわゆる『言霊』を操る個性。

強力な『呪い』は自身にも降り掛かる、だけど大半の不幸は跳ね除ける事が出来るパワー持ち。ちようつおい。

・余談

相澤先生とオールマイトによるお宅訪問の際に、余りにも不甲斐無い雄英に対して呪詛を吐きまくった為相澤先生が帰り道に大怪我を負う程の『不幸』に見舞われた。やっぱり呪いじゃないか。

ヒーロー

飴川 涙子 (あめかわ るいこ)

「アタシは飴玉ヒーロー『ティアドロップ』宜しくね? 飴たべりゆ?」

ヒーロー名：飴玉ヒーロー『ティアドロップ』

個性：飴の涙

誕生日：9月6日（飴の日）23歳

好きな物：飴

性格：おっとり

・人物

ゆるふわの青髪。身体のラインを見せない感じのふわふわドレスを身に纏っている。去年独立したばかり。

・個性

個性は『飴の涙』。目から飴玉をコロコロ出して投げつける。踏んだら痛いぞ！頑張れば飴の形を変えられる。飴の硬さは鋼鉄並だ！

オツサン

「おいテメエ良い年したおっさんを泣かせて楽しいかコラ」

ヒーロー名：スピードスター

個性：加速

好きな物：格闘技観戦

性格：まめな人

・人物

ヒーローを目指し、沢山勉強したオッサン。ちよつとだけ肥満体質なのを気にしている。

全国的には無名ではあるが、地域に根差すヒーローとして割と人気。

・個性

個性は『加速』。素早くなる。素早いオッサン。

・余談

あんまりヒーロー名で呼ばれていない上、詭弁の所為で更にその風潮が加速した。だけれど少しづつ人気も加速したオッサン。その事には凄い複雑な感情を抱いているオッサン。

基本的に良いオッサン。

ヴィラン

生里 重足（なまり おもたり）

幼き詭弁に多くの銃痕を与えた非道のヴィラン

ヴィラン名：レッドバレット

個性：加重

身長：180代

年齢：40代

・人物

金！金！暴力！という感じでTHE・ヴィランみたいなヤツ。ヤオモモの目の前で何度も詭弁を銃撃し、ヤオモモにトラウマを植え付けた張本人。ただ詭弁のトラウマではない模様。

一度は捕まって刑務所に入れられたが、林間合宿襲撃の際詭弁・ヤオモモに対する嫌がらせの為に解放、襲撃に参加させる。しかし成長した詭弁に負け、再び牢獄生活。ヴィラン連合に回収されなかった哀れな奴。

・個性

個性は『加重』。『個性を付与した物』に当たった物を重くすることが出来る。普段は装填した鉛玉に個性を付与している。一度に加重できる重さは自分の体重と等しい。効果は累積し、効果時間は約半日。

・余談

レッドバレット＝鉛弾

安直。

??
??

A F O の憑依先に選ばれてしまったヴィラン

ヴィラン名：シヤドウ

個性：体力回復

・人物

A F O に憑依される前は裏世界の回復屋をやっていたチンケな小悪党。

憑依された後は A F O の隠れ蓑として改造されたが、脳無としても微妙な性能だった。だが中身がアレだから結果とんでもない強さの怪物になった。

・個性

個性は『体力回復』疲労感や失った血液などを回復させることが出来るが、怪我は回復しない。A F O 曰く『期待外れの個性』。

何度も銃で撃たれたシヨタ詭弁を死なせないようにギリギリで回復させて遊んでいた。

・余談

詭弁・ヤオモモ救助の際に数多ものヒーロー・傭兵を潰したが途中で面倒になってわ

ざと負けた。その後AFOが憑依を解除し、後に残った『抜け殻』は回収される事なく
収容所で消えた。

テスト対策ですよ!みっちゃん!

「まったく勉強してねー!!体育祭やら職場体験やらでまったく勉強してねー!!」

あああああ!!!と教室内で騒ぐでんちゃん。まったくうるさいなあ。

「言っとくけど普段は詭弁ちゃんの方がうるさいわよ?」

「つうちゃん、世の中には言って良いことと悪いことがある。今のは言って良いことだ」「いや良いことなのかよ」

スパンと良い音を鳴らしてツツコミを入れるはんちゃんこと瀬呂範太。ノリの良い奴だなあ。

「そういえば詭弁って中間テスト何位だったっけ?」

「俺?俺はー」

詭弁答弁 中間テスト5位

「意外っ!頭良いの俺ってば!」

「くそあ!!詭弁はぜってえコツチ側だと思ってたのに!!」

「普段から勉強してる差よお！差!!」

「流石詭弁さんですわ。それでは週末の勉強会はもう行わなくても……」

「やりまます!!」

そう、俺はヤオヨロちゃんの協力無しに雄英の筆記試験を突破するのは無理……ではないにせよ、多分成績的にはもつと下、それこそでんちゃんこと上鳴電気や、みつちゃんこと芦戸三奈より多少マシ程度まである。

「勉強会やってるの!？」

「……あのー、是非ともオレ達も一緒に参加してもよろしいでしょうか……」

「良いんじゃない？ねえモモちゃん？」

「勿論ですわ!」

「あつ、じゃあウチも良いかな？二次関数、ちよつと応用につまづいてて……」

「悪いオレも！八百万、古文分かる？」

「古文、漢文、現代文！俺に任せろー!」

「マジか詭弁!」

「おれもいい？」

「私もー!」

まっちゃんこと尾白猿夫、とーちゃんこと葉隠透も勉強会に参加表明。ヤオヨロちゃ

んと俺合わせて、計8人の大所帯となった。

「場所どうする?」

「私の家で行いましょう!講堂の準備をしておきますわ!」

「講堂あるの!?やつぱお金持ちだわ……」

「こんな大人数だし、教えられるところは分担しようじえ」

「そうだな」



そうして放課後早速ヤオヨロちゃん家に突撃お宅訪問。

「うわ、でつか……」

「凄いいおきいね……」

「どれだけ大きいの……」

ジロちゃん、みっちゃん、とーちゃんの女子三人がとても心踊る感想を呟いた。

「……今の良いな」

「分かる……」

「えっ、お、おう……」

はんちゃんが眩き、でんちゃんとまっちゃんが反応する。

「さあ皆さん、講堂はこちらですわ！」

ヤオヨロちゃんがプリプリ気合いをいれながら講堂に案内する。その時に使用人を呼び、人数分の紅茶を淹れるように指示していた。

「ま、マジであんなメイドさん居るんだな……オレLINE交換してきていい？」

「無礼切りされたければどうぞどうぞ」

「いや詭弁が許可だすのか……無礼切り!？」

「そう。時々メイド、或いは執事に言い寄る無礼な客人がいるから、八百万家では従者の権利を守るために脇差しを持たせてるんだ。それでしつこく寄ってくる相手にはズバアっと」

「堂々と嘘を教えなくてください詭弁さん!!」

「いや嘘かよ!!ビツクリしたわ！」

「うん!表向きにはそういうことになってるね！」

「表向きもなにも、そんな事実はありませんわ!!」

「……オレ、メイドさんに声かけるの止めとこ……」

「勉強目的で来てるんだから最初っからやるな馬鹿」

そうして、勉強会自体は恙無く進行した。

「つてな感じで……もうすぐ日が沈むし、そろそろ終わろうか」

「おっ、もうそんな時間かあー。悪いなヤオモモ! 詭弁! がっつり教えてもらって」

「構いませんわ。こうして人に教えることで、知識を定着させることも大事ですから」

「ありがとねー!」

「良いつて事よ……あ、そうだ良いこと思い付いた。期末テスト、俺より成績良かったら何かご褒美をやるつてのはどうよ?」

「えっ、マジ?」

「ご褒美!?! 何々!?!」

「そうだなあ……例えば服とかどうよ?」

「服か……詭弁のセンスは中々良いし……うん、それが良い!」

「……んで、その代わり詭弁より点数低かったら何しろつて言うのよ」

「やだなあジロちゃん、そんな詐欺まがいな言葉回しなんてしないつて……や、ほんとだからあんまりジツと見ないで欲しいなあなんて……」

「ふうーん……ま、いいや。貰えるものは貰つとくわ」

「……なあヤオモモ、オレ達にも何か……」

でんちゃんの問いに対してヤオヨロちゃんはすごく良い笑顔で返した。

「あつ、その……なんでもないです……」

「モモちゃん、折角だし何か良いものでも考えたら？やる気になってテストの点数上がったら良いと思うし」

「またそうやって詭弁さんは……はあ、ではもし私より良い点数を取れたら……」教科につき一回デートというのはどうでしょう」

「えっ」

「はっ」

「なっ」

「ん!？」

「ちよっ!？」

「マジかヤオモモ」

上からでんちゃん、はんちゃん、まっちゃん、とーちゃん、みつちゃん、ジロちゃん
の順での反応である。

「えっ、ま、マジで？マジでかヤオモモ？」

「はい、二言はありませんわ」

「だっ……で、でも詭弁が」

「あら。詭弁さんからの提案なのですから、まさか否とは言いませんよね？」

「き、詭弁!? いいの!? あり得ないと思うけど、万が一……億が一上鳴がヤオモモより点数取ったらヤオモモと上鳴がデートだよ!」

「うわー! 悪女! ヤオモモ悪女だ!」

「……詭弁?」

「大変だ! 詭弁の奴息してない!!」

「!!! マジか!!?」



「はっ!? ゆ、夢か……」

「残念ですが現実ですわ」

八百万家の客室。日も沈みきって月が上り始める時間で、俺はベッドの上で飛び起きた。

「……みんなは?」

「もう帰りましたわ」

「そっか……あのさ、マジでデートに行くん?」

「勿論ですわ。私よりも高い点数を取れたのなら、ですが」
「そ、そうか……ちよつと安心した」

基本的にヤオヨロちゃんは、テストでは満点が当たり前なので満点以上なんてよつぽどの事がない限り起こり得ない。そしてヤオヨロちゃんは期末テストで手を抜くなんて事はしないから、安心である。

「……と、思つていらつしやいますか?」

「ははは……えつ、モモちゃんの個性つて読心できるん?」

「うふふ……」

「えつ、えつ、何を考えてるんです?」

「『服を選ぶという名目で二人でデートに行こう』と……目論んでますわね?」

「……」

ヤバい。何がヤバいつて、ヤオヨロちゃんの笑顔がマツハでヤバい。何?俺は今日死ぬん?

「……あの、モモちゃん……ちやうねん……これは……あれやねん……」

「詭弁さんが期末テストで全力を出すのなら、私も全力を尽くしますわ?」

「死力を尽くさせていただきます」

「はい」

これでもし成績が悪かったら……ヤオヨロちゃんが他の男とデートに行く……?
ヴオエー! (強烈な吐き気)

「……………そ、その代わりといっってはなんですが……詭弁さん、詭弁さんの点数が私の点数よりも高かったら……デートに行きましよう?」

「……………」

モモちゃんが可愛すぎて吐く。

「……………詭弁さん? 詭弁さん!? ちよ、息をしません!? 誰か、誰かー!!!」

そうして尊死した俺はまったく勉強に手がつかず、テストの点数が散々なことになってしまった。

「イエーイ、詭弁に勝ったー!!」

「ありがとねー詭弁!! めっちゃんや教えて貰った上に服まで貰っちゃって!」

「……………ねえ、あんた馬鹿なの?」

「やめろお……その言葉は俺に効く……」

なおヤオヨロちゃんはしつかり全教科満点を取ってました。

「勝てる気がしねえ……」

「くそッ！それでもワンチャンあると思ったのに……！あ、古文教えてくれてサンキューな詭弁」

「おれも数学教えてくれて助かったよ。ありがとう」

「ええんやで……」

「まあ総合成績オレより下だったけどな！」

「死ねクソ電気……」

「爆豪の口調移ってる!？」

放課後めっちゃ4人（みっちゃん、とーちゃん、ジロちゃん、ヤオヨロちゃん）の服買った。

「……ま、マジでこの服買ってくれんの？」

「男に二言はないですよ」

「（一着6桁って高校生が着る服じゃなくない!!）」

「（詭弁、財布デカ過ぎんだろ……これ一着でちよつと良いドラマ一式買えるし……）」

「みてみてー！ザ・大富豪の妻って感じの服ー！」

「とーちゃんそれが良いの？」

「これにする！」

そうしてお会計。支払いはカード一括で。

「(ねー三奈ちゃん、今のカード黒かったねー)」

「(ブラックカードってやつ?都市伝説かと思ってた……)」

「(……この服どうやって洗えばいいの?)」

写真撮影ですよ！とーちちゃん！

「写真撮りたい」

「……どうしました詭弁さん」

「いや、急にちよつと写真を撮りまくって本を作りたいた衝動に襲われてな」

「なんだよその衝動は」

ある日の放課後。ハイツアライアンスの談話室でジロちゃん達とダベってたら急にズキーンと撮りたい欲求が湧き出てきた。

「……よし、ヒーローコスチューム写真を撮ろう！というわけで協力してくれ！」

「唐突」

と言う訳でハイツアライアンスの中庭で写真撮影。とりあえずA組女子に適当に呼び掛けて、コスチュームに着替えて来てもらった。

「……ってな感じで、皆の良い所をガンガン撮っていきたいんでまずは個人撮影しようね！」

「個人撮影って響きエロいよな」

何処から聞きつけたのかみっちーこと峰田実が来て、アホなことを呟いてた。ちなみ

に分かる派。

そうしてカメラのセッティングしてると、コスチュームに着替えてきた女子達が集まってきたので撮影に入ろうね。

「よーしまずはみっちゃん!躍動感ある感じでいこうか!」

「躍動感ー!」

そう言つて飛び跳ねるみっちゃん。乳が揺れるツ!ヨシッ!い、いや、写真としてはまだまだ良くないけど。

「うん、もっと酸出していこうか!溶解度も粘度も最低の感じで!それで高く飛び跳ねて、最高点で決めポーズ!腕を上げて腰を捻つて……身体全体で『J』の字になるように思いっきり飛んでみよう!」

「む、難しいな……よし、行くよ!」

そう言つてぼいんと跳ねるみっちゃん。手から弱酸性溶解液をバツと出しながら飛んだせいか写真に撮つた時に液が顔に被つてて撮影失敗。

「うーん惜しい!元気さMAXで良い感じだったね!もう一回やってみようか!」

「もう一回ね、行くよー!」

そしてぼいんと跳ねる。乳と、若干尻が浮き上がつて超ベストショットが撮れてとてもよろしいのですが大変性的過ぎるのでNG。

「やー！可愛さバツチリだったけどもう一回行こうか！もう一回！飛んでポーズ決める時に片足だけ若干下げようか！」

「か、片足だけ!?分かった、行くよー！」

もう一回ぽいんと跳ねるみっちゃん。今度は可愛さと元気さと華麗さがMAXのベストショットが撮れた。

「流石だぜみっちゃん！ナイスP i n k y!!」

「うわー！詭弁凄い綺麗に撮れてる！」

ちなみにさつきからぽいんぽいん言ってるのはおっぱいです。ねえ、コスチュームとはいえブラ着けなくていいの？ナイスおっぱい、ヒーロー科サイコー。

次つーちゃん。と呼ぶ前に、みっちゃんがコソツと近づいてくる。

「き、詭弁……写真データ後で譲ってくれ……！」

「タダで？」

「オイラの秘蔵コレクションと交換するからさあ！」

「市販のモノと超高校生級発育JKの生写真が等価だと？去れ愚か者！」

「クソツ!!ダメかつ！」

さあつーちゃん！おいで！

と呼んだら舌ピンタを食らった。

「詭弁ちゃん。使わない写真はちゃんと処分するのよ?」

「……はい」

哀しみ。

気を取り直してつーちゃんの写真構成を考える。つーちゃんはセクシー系や元気系で行くより、迫力ある感じの一枚かな?」

「ということのでつうゆちゃんはジャンプしながら舌ピンタをカメラギリギリ狙って!」

「……ケロツ、中々難しいわよ?」

「大丈夫!ちゆうちゃんなら出来る出来る!それにこのカメラめちゃクソ頑丈に出来るから最悪当たってもへーきへーき!トラックに轆かれても無傷ってお墨付きよお!」

そんな感じでつーちゃんには跳躍力と勢い感の写真を撮る。

つーちゃんがびよんと跳ねて、叩きつけるように舌を振り下ろす。そして着地。その一連の動作の中で何度もシャッターを切った。

びっちりスーツと揺れるおっぱいの合わせ技よ……。

「ちゆうちゃん!もう一回跳ぼうか!今度は違う角度から撮るね!」

「ケロツ」

そうして今度はつーちゃんの斜め後ろから撮る。もう一度跳んでもらって……あつあつあつ、お尻良き……。

「……詭弁ちゃん」

「はい！不要なデータは削除します!!」

「なら……まあいいわ。ケロッ」

あ、良いんだ。つーちゃんの懐のでかさ半端じゃねえぜ。

まあ、最初でベストショット撮れてるから良いかな？んーこの迫力、ドキドキするぜ。

「よし、次はちゃちゃんカモーン！」

「ほ、ホンマに撮るん……？」

「プロになったらカメラ向けられるのはザラだぜちゃちゃん！ちゃちゃんは……
そうだなあ、カワイイ系で一つ撮ってみるか？つーことでアイドルになった気分で
ポーズよろしく！」

「うえっ!?!アイドルって言われてもやね!?!えっ、えーつと……こう!?!」

ちゃこちゃんは左腿を腰まで上げて、右手を鎖骨と鎖骨の間らへんに置き、左手を顔
の高さまで上げて手を広げる。そしてバチコーン★と鳴るくらい大袈裟なウインクを
して笑顔でポーズ。

「カ”ワ”イ”イ”な”あ”ち”や”こ”ち”や”ん”は!!!”」

「そ、そう!?!」

照れ顔、ヨシ！360。余すことなくカシヤカシヤ撮る。

「もう一個!もう一個ポーズおなしやす!!」

「もう一個!?えっ……こうや!」

ちやこちゃんはお辞儀をするように体を倒し、背筋を伸ばして顔をカメラに向けて満面の笑みダブルピース。

「尊ッ!」

「尊!!?」

そのポーズアレじゃない?海とかでよくカップルが見せる(知らない)アレじゃない?クソッ!なんでちやこちゃんは水着じゃねえんだ!!こんなカワイイ彼女が欲しい!!

「詭弁さん?」

「(殺気!!)」

跳ぶ様にその場から退くとほぼ同時に、ついさつきまで居た場所に何かが通り過ぎていった。

「……ヤオモモ、散弾銃はやり過ぎじゃない?」

「うふふ、詭弁さんが不埒な考えをしていたように思えましたので。それに今のはラツトシヨット……ここから当たっても『痛い』で済みますわ」

「ケロツ……幾ら何でも銃をぶつ放すのはやり過ぎよ……」

「ひええ……ヤオモモガちゃん……」

モモちゃんが怖いので次だ次！……まあ、撮れ高は十分なんだけど。

「おいでジロちゃん!!」

「……ま、流利的にウチだよね……ウチなんか撮っても面白くないでしょ」

「何言ってるの！今サイコーにロックな感じでインスピってるよ俺は！」

ジロちゃんは女性ヒーローでは珍しいスタイルのコスチュームだからやっぱカッコいい系が似合うよね！

と想ってたらジロちゃんからイヤホンジャックが伸びてきて俺の心臓にドグン

「スタイル悪くて悪かったな！」

「そういう意味じゃないの……」

心臓破れそう。だがめげない。ぴっちりスーツじゃない女性ヒーローとかマジで希少価値なのでしっかり写真に納めたい所存。

と言う訳で中庭の日陰になって居る所と日向になっている所の境界近くに座つてもらい、見上げるようなアングルから写真撮影。

「おーめっちゃ今パンクだよー！スゲー今ロック来てるよー！」

「ロック来てるって何だよ……」

「ジロちゃん！気だるげにスポドリ飲んで！」

「はあ？……（うう？）」

文句言いながらちちゃんとポーズングしてるジロちゃん好き。

ジロちゃんの正面やや遠目からハイツアライアンスに掛かる影と日の光のコントラスト&p:ジロちゃんのクールな目つきがジーマーでバイヤーな感じ(語彙消失)一枚と、舐めるような下からのアングルで青空を背に担ぐジロちゃんのパンクでロック(語彙行方不明)な一枚。

なんかCDのジャケ絵感しゅげい。

「ドチャクソカッコよすぎる……これは俺の腕が良すぎる所為だな!」

「そこはウチを褒める所でしょ!」

イヤホンのプラグが額を打ち抜く。痛いわ。

「フン……どーせウチはヤオモモみたいにスタイル良くないし……」

「何か誤解をしてるようですけども、俺はジロちゃんみたいな細い体系も大好きよ?」

「……はい?」

「腰回りキュッと締まってるし、手足もスラって伸びてモデル体型!とても良いと思います!」

そう言いながらジロちゃんの腰回りに両手をキュッと沿わす。

「ひゃふん!?!」

「……」

「……あ」

思った以上に大きい喘ぎ声が俺の耳を通り抜ける。ジロちゃんの顔は真っ赤に染まって、まるで食べごろの林檎の如く美味しそ殺気!!

チユン

地面に崩れるようにしやがめば、ついさつきまで頭部があつた高さの壁に穴が開いてるのが見えた。わあ、なんかの煙が穴からもやもやつて出てるー。

「モモちゃん! マズいつて! ソレはやバイつて!!」

「駄目よモモちゃん!!」

「ヤオモモの笑顔が怖いよ!? 落ち着いて!!」

「お離してください皆様。ええ、私は至極落ち着いておりますわ」

「どう見ても銃刀法的なアレでアカンヤツ持つてる人が言うセリフちゃうよ!!?」

「大丈夫ですわ。こちらのライフルは急所に当たらない限り殺傷度が低い事で有名ですのぞ」

「思いつきり詭弁の頭狙つてたよね!?!」

向こうでは女子5人がキャツキャウフと戯れてた。ワータノシソーダナー。

「……詭弁、悪い事は言わないから人にベタベタ触らない方が良いよ?」

「セクハラはライフワークなので」

「命賭けてまで?!」

「男はな、エロい事に命を張る生き物なのさ……」

「ヤオモモだけに命張れよ……」

モモちゃんが銃を振り回してご乱心なので落ち着けないと撮影続行できない。

と言う訳で対モモちゃん用108の必殺技! 真正面から抱き付くチエスト・ハグ!

「えい」

「なっ?!まさかアレは?!」

「知ってるのかアシデン!」

「誰だアシデンって」

「自分の首もとに相手の顔を埋めるように抱きしめる事で相手に有無を言わせない胸キュン攻撃!!これは見てるこっちもキュンキュンしてきました!解説の葉隠さん!」

「これは胸キュン ポイント Pが非常に高いですね。身長差が適度にあるカップルでないは無理なく成立しないという条件がありますが、詭弁・ヤオモモカップルはその差を難なくクリアしています。しかし怒り狂っているヤオモモには決め手に欠けますね」

「お前等のそのキャラ何だよ」

「あああく!!なんとここで詭弁選手、ヤオモモ選手に頭ナデナデをします!これは凄まじいQ キュンキュンコンボ Cです!!」

「真正面から抱き付くキユンキユンコンボ」
 「チユースト・ハグはQ Q Cの起点に成りますからね。詭弁選手はタイミングを逃さず上手くコンボを繋げました」

「謎の競技始めんな」

「ハグからのナデナデコンボは非常にタイミングが重要ですからn……なっ?」

「これは!?!」

「チューです!おでこにチューしました詭弁選手!!」

「ハグからのナデナデ、そしてトドメのD Cデコチューにより胸キユン Pポイントが最高得点を更新しました。詭弁選手試合を一気に決めましたね!」

「ヤオモモ選手、堪らずダウン!! 苛烈なQ Q Cキユンキユンコンボによりヤオモモの耐キユン力が耐えられませんでした!」

「有無を言わせない詭弁選手の横綱相撲的展開でしたね」

「……二人ともちよつとは落ち着いたら?」

「いや、その……今黙ると胸キユン死すりゆう……」

楽しそうだなみつつちゃんとーちゃん。つーちゃんは顔を反らして、ちやこちゃんは両手で自分の顔を覆ってるけど指の隙間からチラチラ見てる。ジロちゃんは顔を赤くしながらも俺を睨んでいる。

よいしょつ、と気絶したモモちゃんを抱き上げ、とりあえず俺の部屋に運ぶ。しよう

がないから撮影会は終了だなあ。

「はわわあ……お姫様だっこ……胸キュン P ポイント 凄い……」

「……あ! 詭弁私まだ撮ってもらってないよ!」

「おー……じゃあ俺の部屋で撮影の続きをしようか」

「おっけー!」

そうして女子棟の方の部屋に向かう俺 with モモチやんととーちゃんだった。

「……あいつ今さらつと女子を自室に連れ込んだな」

「ケロツ、そういう所よ詭弁ちゃん」

そんなこんなで約一週間。カツちゃんの性別は未だに女のままだった。

「爆豪さん！女性用の服を買いに行きますわよ!!」

「あゝあゝッ!!!?」でオレが女モンの服着なきやならねえんだボケ!!!」

ここはハイツアーアイアンスの談話室。今日は休日で、偶々皆インターンとかが無いのかほぼ全員揃ってダラダラしていた所に、モモちゃんの鋭い声が刺さる。

「爆豪、悪い事は言わねえ……女物はともかく、新しい服買って来い。お前の今の服、全部胸元がだな……」

えいちちゃんも苦言を呈する程の悲惨さと言わせてもらおう。みっちーなら『それもよし!』と言うが、今のカツちゃんはモモちゃんよりおっぱいがデカイ。推定Hカップだ。高校生の大ききさじゃねえよ……。

男だった時から着続けている部屋着及び制服がもう可哀想な事になっている。ぱつつぶつぶのびつちびつちだ。制服のボタンとか気を抜けば飛んで行ってるの知ってるんだからな？制服もそうだが、今の部屋着は黒のタンクトップである。男物だから……その、大変目の保養になります。

しかもカツちゃんってば男の感性持ったままだからそういう視線に非常に鈍感なのだ。これはもう歩くズリネタ提供器と言っても過言ではない」

「全部口から漏れてンぞクソ口!!!」

「うるせえお前エロ本から飛び出て来たみたいなの恰好しやがって！下着何も着けてないのまるわかりだからなこの痴女！」

「オレは男だボケがア!!!」

「冗談はクラス一デカい胸もいだから言ってくれませんか？腕振り回すたび揺れまくってそれはもう大変ありがとうございます」

両手を合わせて一礼。

「拝んじやったよ」

「と・に・か・く!!爆豪さんは今は女性の身体なのですから！女性らしさを身に着けていただかないと困りますわ!!!」

「黙れやポニーテール!!女モンの服なんか着るかボケ!!!」

「爆豪、つってもさー……いつまでも男物ばっか着る訳にはいかないじゃん？」

「引ッ込んでろクソ耳!!」

「そうだぞカツちゃん。ジロちゃんの言う通り、身体は女の子なんだから女物の服を着ないと色々不都合あるぞ？ジロちゃんとは違ッッ!!?」

「詭弁が死んだ!?!」

「大丈夫か!?!傷は浅いぞ!!」

「(どーせウチは胸の大きさは男並だよ……クソが)」

「と」っ……とにかくカツちゃんには一度『女子の気持ち』を知ってもらわなければならないでしようかと提案……」

「ケロツ。確かにそうね……このままじゃ爆豪ちゃんも皆にも良くないわ。爆豪ちゃん、なにも身も心も女の子になれって言ってるんじゃないのよ？でも今は女の子なんだから、せめて勉強しないと不幸な結果を生むわ」

「黙れや蛙!!オレはトップヒーローなんだよ!!女になりたいワケじゃねえ!!」

「んう、この強情さよ。よし、ここは一度攻める方向性を変えよう。いづくちゃん、最近のカツちゃんの動きについて気が付いたことある？」

「えっ、動き？えー……あつ！そう言えばかつちゃんの戦闘訓練の動きがどこかしなやかになった気がする！あつ、でも前みたいにパワーのある動き方も出来るし、必要な時により軽くしなやかになったというべきかな……？」

「ほう、つまり男だった時よりも強くなっていると？」

「ツ!!」

カツちゃんが分かりやすく反応する。

「へー、ただデカいおっぱいだけじゃなかったのか」

「むしろそのデカいおっぱいで動きが鈍くなりそうなんだけどな」

「それセクハラよ?」

「お前等ちよつと黙れ」

でんちゃん、はんちゃんが好き勝手言うのに対し、つーちゃんがツッコむ。

「カッチャン、こう考えるんだ。男の時のパワーはそのまま、より軽やかに、よりしなやかに強くなると。そして強くなる為には自分をより深く知らなければならぬ。それは分かるよな?」

「……チッ!」

もの凄い目つきで舌打ちされる……が、何も言わないので言葉を続ける。

「自分を知ると言う事は、色々試すのもそうだが一番手っ取り早いのは周りの目を意識する事だ。カッチャンってちっちゃい頃から天才肌だったんだろ? んなら自分がどういふ風に見られているかなんて感覚的に理解出来る筈だ。今は急に女の身体になつて戸惑つてるんだろが、カッチャンはカッチャンだろ? 中身は一緒だ、なら今の身体で出来ない訳が無い。違うか?」

「…………チッ!」

ダンツ、と床を蹴り立って階段を上つていき、あつという間にサイフと外着を着て俺の襟首を引つ掴みながら外に出ていく。

「カッチャン。会話しよ? せめて『服買いに行くぞクソ口!』ぐらい言お?」

「黙ってるボケが！ちんたらしてたら他の女共が付いてくんだろうが！」

『服買いに行くけど女の子と一緒に買いに行くのははずかしい☆』って事だな」

「ブツ殺すぞ!!」

そのままカッチちゃんに引きずられながらグループLINEで皆に『カッチちゃんとデート行ってくる(*・ε・*)ミ♥』と送る。当然カッチちゃんのスマホにも通知が来て、カッチちゃんはその内容を確認した直後にぶん殴られた。

◆
その後もの凄い勢いで吹き飛んで行くハイツアライアンス入り口の扉と、同じくらい凄い勢いですっ飛んでくるモモちゃんから一緒に逃げた。とても怖かったです(小並間)

◆
さて、買い物と言えば無難にシヨップिंगモール。俺、覚えてる。

「世の中の服は別に『男物』『女物』とくつきりはつきり分かれている訳じゃない。異形系用の服があるように、そういうった性の悩みを持つ男女用の服もある。……まあ、カッチちゃんみたいに後天的に性別が変わったってのはレアケースだろうけど。それでも無

いいことは無い」

「んな御託はいらねえんだよ。とつとと新しい服決めるボケ」

「こういうのは直感だよ直感。俺からはこれどう？みたいな事を言ったりするけど、決めるのはカツちゃんだよ。それにサイズ合うかどうかとか分からんし」

「チツ、めんどくせえ……：：：～」

「話聞いてた!? サイズ合うかは分からんって言ったじゃん!」

「測れや! オレは測り方なんて知らねえよ!」

えっ、それはなんですかね。ボディータッチOKのサイン? いいの? 俺元男とか関係なくイケるよ?」

「じゃあ遠慮なくハグ」

「遠慮しろやクソホモ野郎!!!」

「今のカツちゃんは どう見ても女の子なのでセーフですう “っ” !!」

鳩尾にいい拳が入った。コレが世界レベルか……!」

ハグしながら膝を突いた事で必然的に俺の顔の位置にカツちゃんのおっぱいが来るわけよ。良いにおいする訳よ。これで元男? うせやる。

「よし、とりあえずサイズは大体測れた」

「今のでマジで測れたのかよ……」

触れば大体分かるとは職人の言葉。少なくともモモチちゃんをずっと触ってきた上、モモチちゃんの着ている服のサイズも完璧に把握している俺にとつて『モモチちゃん基準で大きい・小さい』判別が出来る。だからハグすれば正確なスリーサイズは分からなくても大体の服のサイズは分かると言う訳よ。

「つてなわけでカッチちゃんはコレ試着してみ？」

本当に入るのかコレ？つて目をしながら更衣室に入っていくカッチちゃん。こういう、時々素直になるのホント可愛いから止めてほしい。ちゆき♥

そうして試着し終えたカッチちゃんがカーテンを開けて服を見せる。うん、サイズはぴったりですね。

「……どうかよ」

「どうもこうも、単にサイズ確認用に適当に持ってきた奴だし」

「チツ！」

えっ、何でご機嫌斜め？爆豪だけにおっぱい爆乳ですねΣb！とでも言えば良かった？ねえ？

「うっせえ！テメエはとつと次の服持つてこいやボケが!!」

あああく女の子の自覚出てきました？

と口に出せば爆殺されるのは目に見えているのでとつと新しい服を持つてくる。

さきつと色んなタイプの服を渡していく。

「どうだ」

「ひゅー、ロックとエレガントが両立してやがる！」

黒を基調に、大きな髑髏シャツにレザージャケットがカッチちゃんのイメージを体现している。『近づくと殺す！』的なかんじ。それでいて下のタイトなジーンズがとつてもえっち。

「ただやつぱおっぱいデカいから絵柄モノは伸びるな、横に」

そりやもう爆発的な大きさで。カッチちゃんの器は爆発的のみみつきさなのに。服の下から突き上げる双球が『ジエンダーレス？なにそれ？』的に大主張。えっち。

まあ絵柄モノはそれこそ異形型個性の用人に即座に改造できるから良いと言えば良いんだが。カッチちゃんのおっぱいは異形型個性。

「気に入った？」

「ああ？……フン、まあまあだな」

「じゃあそれ買いね。他にも色々合わせてこーね！」

「あゝ!?!一つ買えば終わりだろ!!」

「おいおい、馬鹿言っちゃいけないよ。女の子はお洒落さんだぞ？外行きの服は最低でもアウターインナー10着ずつは用意して、しかも様々に組み合わせるから外に出るん

だ。一個買って終了なんてナイナイ」(※個人的な意見です)

女ってクソめんんどくせえ……といった顔をしながら、じゃあ次寄越せと手を差し出してくるカッチちゃん好きよ。

そして次は赤を基調に爆発的派手派手しきで攻める。爆炎のような、赤と黄色柄のシャツに黒と赤のボレロを腰で結んだ。

「カッコいいやんけ」

「当たり前だボケ」

ドヤア……と笑うカッチちゃんはやつぱ顔はイケメンなのよね。どんな表情もイケてるとかずるいわあ……。

更に次、白と青のボーダーシャツにオーバーオールシンプルな組み合わせ。カッチちゃんのスタイルの良さがとてもよくえつちなエッチさで大変えつち。

「これも買いだな」

「チツ、荷物増えすぎだろ……」

そして最後にフリフリの赤と黒のワンピースを着て貰って、持ってきたものは終了。

「つてどう見ても女モノじゃねえかクソロイ!!!」

「ちよー似合ってる」

カッチちゃんのスタイルがばつ牛ンなのでエロさ全面広告だが、モトが良い顔立ちなの

で何処のお嬢様だと言わんばかりに似合っている。やっぱり顔が良いと何着ても良いんですねえ。中身男だけど。

「ふざけんなボケが!!! ブツ殺す!!」

「店員サーン! お会計お願いしまーす」

「聞けやア!!!」

「じゃあこうしようカツちゃん。今日1日それ着てたら今日の会計全部俺が持つよ」

「ふざけんな! 誰が!!」

「総額〇〇万円になりまゝす!」

「……」

「どうする? 自腹で買う? 諦める?」

「……奢らせてやるよボケエ!!!」

「素直じゃないんだからもー。カード一括で」

「あつ、いけねえいけねえ。カツちゃんの新しい下着買い忘れたわwww」

「クソがあ!!!」



カッチちゃんの新しい下着を一通り買って（当然俺が選んだ）、ショッピングモール内を適度にブラついている。

「あつ、そう言えば新しい靴がそろそろ欲しかったんだよね。買いに行こうぜ」

「ああ？……ツチ、好きにしろ」

「よし、じゃあ行こう行こう」

「自然に手を繋いでくんじゃねえよボケ!!!」

「奢り」

「ツ！……クソがあー！」

カッチちゃんはとてもみみっちいので、こういう借りはきつちり返してくれる。ふつ、中身アレだけど外側がカワイイので許せるぜ……。

「じゃあ俺に似合いそうなを選んで選んで！」

「ああ!?!……ツチ！これとかどうだ!?!」

「カッチちゃんはそのというのが好きなんだね！じゃあカッチちゃんが好きな靴を履くね！」
「ンでふざけた言い方すんだカス!!!」

鋭い目付きで睨んでくるが、実は満更でもないのは分かりきってるのだよハハハ。

うん、外で個性使うのはね、ダメだよ、カッチャン。そのバチバチ火花出してる手を下ろそうか。

そんな感じでカッチャンと買い物してたらお昼時。モールのフードコートは、休日だから結構混雑してる。

「カッチャンが変なやつにナンパされても困るし、外に行こうか」

「ナンパされねえわ！ふざけんな！」

いやお前、道行く人々が振り返りまくってるの気づいてた？10人中8人振り返る美少女よ君。おっぱいデカいから。

おっぱいってスゲーよな。どんなに性格クソでもおっぱいデカいだけで許せるもん。そんな事を考えながらシヨツピングモールを出て、近くのモコイチに行く。

「1辛、温玉手仕込みチキントツピング」

「5辛、パリチキトツピング」

「ご、5辛?!マジかカッチャン!」

「あ、あ?!別に良いだろボケ!!」

「いや、良いけど……5辛かあ……」

カレーは中辛派の俺にとって、5辛なんて未知の世界である。強い……。

「カッチちゃん、服汚しちゃうから女の子らしく上品に食べてね！」

「カレーぐらい好きに食わせろ！」

「でもカレーの汚れって中々落ちないぜ？汚しちゃうたらどうする？それ一着でモコイチトツピング全部のせ出来るぜ？」

「ンでんな高いモン買ったア!!？」

「可愛い子に良い服を買うのはモテる男の義務で、そんな可愛い子を横に歩かせるのは特権だからだよ」

「わかった、テメエそんなにオレを怒らせたんだな……？」

「そして可愛い子は良い服を買って貰うのが特権だけど、良い服を着こなすのが義務だからね」

「ふざけんなボケが!!こんな服要るか!!」

「良いの？今日買ったモノ全部でいくらだったかな？」

「ツ!!……ツソがつ!!」

やばい、楽しい。カッチちゃんをいじくり回すのが楽しすぎる。周りの男共の憎々しげな視線なんて気にならないくらい楽しい。カッチちゃん百面相を楽しんでるとカレーが出来上がった。

いただきます。

普通に食べてたが、ふとカツちゃんを見るとなるべく上品に食べようとする努力は見られた。そういうところ好き。

「カツちゃん、チキンカツ一切れあげる」

「ああ?……フン、貰うわ」

「んで5辛一口ちようだい」

「あつ! テメツ!」

ぱくつと一口。あー、うん、なるほどね。これが5辛の味。っ!?

「あゝっ!?! 痛い! コレ辛いと言うより口が痛い!」

「馬鹿が! 辛いのに慣れてねえのにいきなり5辛食ったらそうなるだろうが!」

「1辛イケるから一口くらい5辛イケるとおもーじゃん! 水! 水!」

「だアー! ちよつと待て……おい テメエそれオレの水だボケエ!!」

いいだろ別に水の一つくらい。と自分のコップとカツちゃんのコップの水を飲み干す。

「ばっ……おま……」

「んい……口がビリビリする……ん、どしたんそんな面白い顔して」

「ツ……死ねボケ!!」

カツちゃんから肩パンを食らった。結構痛いのだが。

「……んう、まさかと思うけど間接キス気にしてる？」

「黙れクソ口!!」

そ、そうか。カッチちゃんも意外と子供っぽいところがあるんだなあ……いや、よく考えたらカッチちゃん前から子供っぽいところだらけだったわ。

口直しの福神漬けを齧りつつ、5辛のカレーをガツガツ食べるカッチちゃんの顔を見る。鋭い三白眼に澄んだ赤い瞳が綺麗だ。あー、そういえばモモちゃんも食べる時がつつり食べるよなあ。そうか、俺はよく食べる女の子が好きなのかもしれない。

じつと見てる視線に気付いたのか、ピクツと反応して俺の視線に合わせるカッチちゃん。

「なにジロジロ見てんだボケ」

「カッチちゃん可愛いなあって思ってた」

「あ……？」

「んい、別に男の時のカッチちゃんが嫌いって訳じゃないよ。男の時はカッチちゃんは強くて、貪欲で、んでも何処か優しさが透けて見える。ダークヒーロー感って言うのかね？そーいうの、なんかカツコいいよねえ……」

俺には、持っていないモノだから。

「……」

「いつ身体が元に戻るんか分かんないけどさ、今くらい女の子満喫しても良いんじゃないかな。こんな機会、そうそう有るもんじゃないだろうしさ」

「チツ、何言うかと思えばただの説教か？」

「説教つて言うか、ただの嫉みかなあ……」

カツちゃんは俺に無いものを沢山持つてる。勘、反射神経、筋力、個性。全てが噛み合つて、天性の戦闘センスを發揮している。しかも最近では周りを使う事を覚えた。本当にストイックだ。

だから、眩しい。だから、欲しい。ずっと女の子だったら、こうして気兼ねなくちよっかい出せるんだけどなあ……。

「……ハツ馬鹿が！オレがプロヒーローになった時、テメエがサイドキックにいりやあ全部解決だボケが」

「わお」

そうしてニヤリと笑うカツちゃん。なんでこう……ヒーロー目指す女子は寧猛な笑い顔が似合うのかね。あつ、カツちゃんは元々寧猛な笑い顔が似合うわ。

「オレは色々できるテメエを評価してんだボケ。オレが前で戦つて、テメエが後ろで援護する。プロになったらテメエを雇用してやるよ、覚悟しとけ詭弁」

女の子になつても……いや、むしろ女の子になつてイケメン力増してない？大丈夫？

結婚する？

「するかカスツ!! ツチ! クソ無駄な話してたらカレー冷めちまっただろうが! テメエもさっさと……」

「じゃあ先会計してるから」

「んでテメエ先に食いおわってんだボケエ!!?」

は………本当にさあ………今のは結構キたわあ。顔赤くなつてない?

そうして会計を終えて待つてると、案外すぐにカッチちゃんが追いついた。

「カッチちゃん、目的の服はとりあえず買ったけど……カラオケ行く?」

「あ? 上等だ、歌い殺してやるよ!」

ちなみにカラオケではマウント取り続けた(点数的な意味で) 結果、その後のゲーセ
ンでボコボコにぶちのめされた(音ゲーの成績的な意味で)。

カッチちゃんとはしやぎト回テつていた光景は、なんと全裸でずっとコソコソついてきてい
た業隠透とーちちゃんによって撮影・実況されていてA組全員が知る所となっていた。

そんな事に気が付いたのは、ハイツアライアンスに戻って戦利品(服・クレーンゲー
ムの景品)をカッチちゃんの部屋で開封してた最中に部屋に突撃してきたモモちゃんに拘

束され拉致されてからだった。

「も、モモちゃん……あの、俺はこれからどうなるのでせうか……?」

「身体は女性とはいえ、精神は男性の方にまで手を出してしまふ詭弁さんを縛り付けるにはどうすればよいか、私……考えました」

「モモちゃん、一回話し合おうよ。ね?ね?」

「ええ、そうですわね詭弁さん。私達、一回腹を割って話し合うべきだと思いますわ?」

「モモちゃん!?!いやつ、待つは!も、モモちゃん!!モモちゃん!!いやああああああ

!!!!!!」

あっ、はじめまして。あなたエリちゃんっていうのね。

「A組一のイケメンモテ男、詭弁答弁とは俺の事!!愛と、勇気と、可愛い女の子が友達さ
ーよろしくねエリちゃん!!」

「……」

ポカーンと口を開けて俺を見るエリちゃん。よーし掴みは大失敗だ!

「詭弁お前そんなキャラじゃなかったろ……」

「お黙りえいちゃん!これは先輩リスpektってヤツだからせーふ!!」

「アウトだよ」

ある日の放課後の教室。いづくちゃんとミリオ先輩の二人が学校に可愛い女の子を連れてきて、何故か分かんないがいづくちゃんがその子を紹介してきた。いや、マジで何ですよ?

「……ふんふん、個性暴走?ほーほー、俺に抑制出来るかどうか……なるほどなるほど。」

「要約するとこの子を笑顔にしたいから俺に会わせてみた……と」

「んん……なんか色々飛んだけど、そうだよ。詭弁くんならこういうの得意かなって

……」

「うん、普段から俺の事どういう風に見ているか説明してくれてありがとう。覚悟しろよっ。」

「ええっ!? 違つ、そういう意味じゃ!!」

「まあまあ、詭弁が女の子に目がないのは事実だろ?」

それな——!!!

冗談はおいといて。女の子を笑顔にすると言えば俺に相談するのは間違いないじゃない。俺に任せろー!!

詭弁式五指必殺の一、イケメンスマイル超満面の笑み!! (当社比10倍)

「……」

ポカーンと口を開けて俺を見るエリちゃん。

「すまねえ、俺にできる限りの手を尽くしたがダメだったぜ……」

「笑顔浮かべただけじゃねえか!!」

バカ野郎笑顔舐めんなお前。俺くらいのイケメンになると笑顔一つで相手を倒す事が出来るんだぞ? それなのに一切反応ないとか……俺はもうどうすればいい!?

「なんでエリちゃん倒す前提!？」

「ちなみに五指必殺はニコポ、ナデポ、壁ドン、ハグ、キスの五つで構成されている」

「お前何目指してんの……?」

「どれもしつかりミッドナイトを一撃死させる威力だぞ!？」

「だからお前何目指してんの!?!しかもミッドナイトで試したのかお前!!」

俺とえいちゃんのコントを前にしても無反応のエリちゃん。無反応というより……どう反応すればいいのか分からないって所かな……?」

「んにい、よし。ならちっちゃい子には母性と相場が決まってる!行くぞエリちゃん! ついて来い野郎共!」

「えっ、ちよ、詭弁くん!？」

エリちゃんをだっこしてとある女子生徒の元まで駆ける。席はすぐ近くなのであったという間に彼女の元に到着。

「と言う訳だカッチちゃん!今すぐおっぱい出せ!」

「出すかボケエ!!!」

今日もキレ芸が絶好調。少し前から女の子になって、A組一の巨乳の持ち主となったカッチちゃんにエリちゃんを抱っこさせる。

「フカフカ……」

エリちゃんは非常に不思議そうな顔でカッチちゃんのおっぱいをフカフカしている。うーんおねロリは良いぞ。

「俺もフカフカするー!」

「お前はすんなクソ口!!」

「カツちゃん子供の前だぞ!汚い口は駄目だぞ!」

「ツツツ!!」

凄い。カツちゃんの目がとんでもなくらいに鋭角。女の子がしちやいけない顔だよそれもう。でもちゃんと子供の前では慎むカツちゃん素敵。偉いぞー。

「頭撫でんな!!」

「お、お前……本当に怖い物無しだな……」

「かつちゃんが良いように抑えられてる……!」

えいちゃんといずくちゃんが信じられない物を見る目で俺を見る。遠くで血涙を流している葡萄が見える。今にも射殺さんと絶対零度の瞳を向けるモモちゃんが見える。

……ん?何か言ってる?……『あ』『と』『で』『お』『は』『な』『し』『が』。俺は何も見なかった(冷汗)

「と言う訳でカツちゃん。エリちゃんを笑顔にする為に協力してくれ」

「あ”あ”っ?ンでオレが……」

「女の子一人笑顔に出来ないでオールマイトを超えるって?」

「ぎげんなボケゴリア!!出来るわ!!余裕で笑い殺したるわ!!」

「笑い殺すとは?」

と言う訳で場所を変えてトレーニング^D台所^Lルーム。元々申請出してた人に無理言つてちよつとばかり場所を借りる。

「と言う訳で邪魔してゴメンねチャコちゃん！ちゅうーちゃん！ねじれちゃん！」

「う、ウチは良いけど……つて、その子は！」

「ケロツ」

「わーエリちゃん！ねえねえ、もう病院から出ていいの？」

「おりよ、知り合い？まあ軽く紹介すると雄英のおっぱいビツク3の皆様方だ」

「……おっぱいビツク3？」

エリちゃんが首をかしげながら繰り返す。カワイイ。

とか思つてると首に長い舌が巻き付く。

「詭弁ちゃん、子供に変な事教えちゃダメよ」

「ちゅゆちゃん、子供の前で絞首はマズいよ……」

しかし図らずも飛行系ユニットがここに3人も揃うとは。これはエリちゃん笑顔待った無しかな？

「飛行系ユニットで。……何する気なん？」

「子供の夢と言えど何?!はい、いづくちゃん！」

「えっ?!?!?そんないきなり言われても……ヒーローになる？」

「それも良いけどもつと他に夢のある感じの奴！はいチャコちゃん！」

「うえっ?! えっ……焼肉いっぱい食べる？」

「……後で皆で食べに行こうか。はいつゆうちゃん！」

「ケロツ……空を飛ぶ……かしら？」

「はあい正解！正解者にはナデナデのご褒美を！」

BOM!!

真横で爆音が鳴る。耳がア……。

「いいからさっさと本題に入れやボケ」

「はい」

「カツちゃんの目つきが普段より三倍鋭くなっているので本題に入る。ナデナデタイムはまた今度。」

「と言う訳でね、是非ともエリちゃんに空中散歩をしてもらおうかと思つてカツちゃん連れて来たんだけど……チャコちゃんとねじれちゃんに手伝つて貰えれば済みそうだね」

「あゝあゝ?! オレの方が速く飛べるわ!!」

「エリちゃんと一緒に飛ぶんだから安全に……いや、でも意外とスピードある方が子供ウケいいかも？」

「むっ!? ねえねえ、私も鍛えてるから速さでも負けてないよ!」

「あ? ?ンなもん爆速のオレが一番速いに決まってるだろ!!」

ねじれちゃんとカツちゃん、カツちゃんがガン飛ばし合って睨みあう。

そこで困り顔のセメントス先生がのしのし現れた。

「詭弁君、訓練の邪魔をしてはいけないよ」

「んにい……あつ、良い事考えた!」

思いついた事をすぐさまセメントス先生に相談する。それはTDL内全体を使った三次元レース会場を作る事だ。

「うーん……出来ないことは無いが……」

「迅速に人を運ぶ事が出来れば、それだけ生存率も上がります! それに空中での細かい制動イコールが出来る!! 個性の訓練になるじゃないですか!」

「なるほど……」

一理ある、と納得してくれたセメントス先生が個性を使い、すぐにTDL内が変化して山あり谷あり障害物沢山の簡易的なレース場の様になった。

「ルールは簡単! ねじれちゃん、カツちゃん、チャコちゃんがレース場を飛び回って先に

三週した人の勝ち!」

「ウチも参加するん!?!」

「そりゃあ飛べるんだから、早く飛べる訓練するに越したことは無いでしょ。足場が悪い中、飛べるってアドバンテージはデカイ。伸ばせるなら伸ばしていいこう?」

「う、うーん……そう言われたら……」

「よし!じゃあ飛行レース訓練始めよう!エリちゃん、ちゅちゅちゃん、こつちカモーン!」

はいじゃーんけんぽん。

と言う訳でカッチちゃんがエリちゃんを抱え、チャコちゃんがつーちゃんを抱え、ねじれちゃんが俺を抱えて飛ぶことが決まった。

「いや何サラリと抱えられてん!」

「詭弁テメエふざけんなゴラア!!!」

「ねえねえ!ちよつと重いよー!」

「ハンデ!ハンデですねじれ先輩!大丈夫!ねじれ先輩なら俺を抱えても一位余裕ですから!先輩の意地見せてください!」

「んもー……そう言われたらなんかやる気出て来た!」

「ケロツ、詭弁ちゃんさり気なく個性使ってズルするのは良くないわ?」

「むしろこれくらいでやつと対等じゃない!?チャコちゃんはつーちゃん軽く出来るし、カッチちゃんなんて抱えてる重さ無いようなもんじゃない!?カッチちゃん、エリちゃん絶対

落とすなよー！」

「落とすかクソがア!!」

「はいじゃーよーいスタート!」

「いや合図!!」

ねじれちゃんが俺を背中に背負い飛ぶ。流石に俺を背負つての飛行は難しいのか元々の飛行速度が遅いのか、駆け足程度の速さで飛行する。

「しつかり捕まってるよガキ!爆速ターボ!!」

「きやつ!」

エリちゃんがしつかり首に抱き着いてるのを確認したカツちゃんが凄い速さで飛んで行く。

「もー!いきなりすぎひん!?つゆちゃん!」

「ケロ、いつもの事よ」

チャコちゃんがつーちゃんを無重力にし、自身も浮かして地面を蹴って空を飛んで行く。何だかんだ言ってもみんなノリが良いから助かる。

カツちゃんは障害物を上手く避けて突き進んでいき、チャコちゃんは壁や障害物を更に蹴って加速していく。

「うわー!ねえねえ、皆速いね!」

「ねじれ先輩も本気出せば追いつくでしょう！それに単純な速さだけじゃなく、技術だつて負けてないじゃないですか！頑張れねじれ先輩！頑張れ！」

「んー!! 凄い！なんかお腹らへんからぐんぐん力が湧いてくる感じする！しつかり掴まつててね、行くよ!!」

ねじれちゃんの言葉通り、しつかり掴まる。今の俺はねじれちゃんの後ろから背負われている状態、つまり……俺の両腕がねじれちゃんのおっぱいに触れるのは必然！勝つだ”あ”っ!!?

「あつゴメン！今当たっちゃったね！」

「んの”、のーぷりよぶれむ……」

思った以上に上がった出力に一瞬戸惑ったのか制御不能になって体勢を崩した際、思いつきりコンクリートの障害物に俺の頭をぶつけていったねじれパイセン。頭割れそう……。

その後何度か俺の身体だけを器用に（ワザとじやないと思いたい）障害物にぶつけながらも、コースを一周する頃には上がった出力に慣れたのか俺の身体がコンクリに擦られる事も無くなった。

「なんで俺こんなポロポロなんでしょーね……」

「い、いめんねー！」

割と命の危機を感じたのである。

さて、先頭を飛ばカツちゃん with エリちゃんとは約半周差、ここから追いつくことは出来るのかな？ 応援に更に気合が入り、応援の効果がより濃くなる。

「わっ、凄い！もつと強くなった……これなら！」

それから更に加速しながら障害物を避け続け、あっという間にチャコちゃん達を追い抜かした。

「ウソっ、速すぎひん!?!」

「ケロツ、流石3年生ね」

「ひい、さつきから顔面ストレスレにコンクリが迫ってるんですけど!?!」

「我慢して!」

情けないようだが、さつきまでそのコンクリにガンガンぶち当たってたのである。恐怖心十分だよ……。

そんな薄皮一枚の超ギリギリのコーナリングを決め続け、それでも尚減速しないお陰で既にカツちゃんの背中に手が届きそうなほどに追いついて三週目に突入。

「最終ラップです!スパートかけていきましよう!」

「うん!一年生に負けてらんないよ!」

「チッ!勝つのはオレだ!!!」

「きゃーっ!」

ちらつと見えたエリちゃんの様子は、空を駆ける感覚に怖がっているというよりもそのスリルを楽しんでそうなキラキラした目だった。スピード狂の素質十分ね!

そして俺は宙に浮く感覚と顔面スレスレに迫るコンクリの恐怖と個性を濃くした反動で身体が一気に疲れてきた。とはいえここで力を抜くと振り落とされて赤い染みになるので気合いでねじれちゃんに抱き着き続ける。ねじれちゃんも若干疲れてきたのが汗が出てきてとてもエロティック。

……あ、ヤバ、勃起^{たっ}てきた……生存本能……ッ!

「えっ? 詭弁君これ……えっ!」

「ごめんなさい!ごめんなさい!」

ねじれちゃんの背中に俺の息子が押し当たったっちやうけど事故だよこれは! だっけしっかり掴まってないと振り落とされる動きしてるんだもん!! 良いのか!? 俺が振り落とされて、すり下ろし詭弁君になるぞ?! 良いのか!?

決してねじれ先輩の汗の匂いとか腕に感じるねじれっパイとか背中にアレを押し当てている状況に興奮しているという訳ではありません故に! ほんとだよキベンウソツカナーイ!!

顔を真っ赤に染めたねじれ先輩が出力を誤って壁に激突……する直前に俺が身を捻

じってクツションになる。ねじれ先輩と壁のサンドイッチ。うーん素敵（吐血）

「ねえねえ！大丈夫!？」

「死にそう（正直）」

ただこれだけは言わせてほしい……ねじれパイセンのお尻はとももつちりとしていて最高でした……ガクツ。

「詭弁君!?!ど、どうしよう通形!？」

「珍しいね、波動さんがそこまで慌てるなんて！パツと見で命に別状は無さそうだからオレが保健室まで運ぶよ！」

そうして空中レースの結果はうやむやになった。

エリちゃんは笑顔にはならなかったものの、子供らしくもう一回もう一回！とおねだりしていたようだ。まあ、良かった良かった。

「それで、何故詭弁さんが大怪我をしているのかを詳しく教えていただけますか？」

「あー、えー……何でモモちゃんがココに……?？」

「相澤先生から連絡がありましたの」

「んい……なんで相澤先生が?？」

「エリちゃんの監視役との事でしたわ。詭弁さんが聞きたい事は以上ですか？では私の質問にもお答えください」

「えー……えーつとですねえ……」

その後モモちゃんにコツテリ絞られた。

「アンタ達、保健室で騒ぐんじゃないよ」

「はい、分かりましたわ。……では続きはお部屋で、じいつくりとしましょう……?」

「……救けてリカバーちゃん!!!」

「夫婦喧嘩は他所でしな!」

「あら嫌ですわ夫婦なんてウフフ。さあ詭弁さんリカバリーガールの邪魔になりますわお部屋に行きましようすぐ行きましよう」ガチャリ

「ねえ待つてなんで手錠なんて着けたのねえちよつとモモちゃん!モモちゃん!!?嫌ああああ!!!」

「(男の子のアレってあんな大きくなるんだ……)」

「どうしたのずつと背中擦ってるけど!まさかさつきので怪我してた!」

「んー……ねえねえ、通形のちんちんっていつもちっちゃいよね!」

「ンツ?!?!」

違う所!?!で事故が起きていたのは俺の知る所では無かった。

雄英一のモテ男! 詭弁大先生が語るモテる秘訣!!!

「……んう。つまり文化祭が近く、彼女欲しいからモテ男たる俺に秘訣を聞こうと、そういう事だな?」

「そうだ! お前ばかりモテすぎてオイラ達に全く零れてこねえじゃねえか!!」

「祭りでテンションアゲアゲ! 良い雰囲気! 一日だけのアバンチュール! そういうのに憧れてんだよこちとら!!!」

いつもの二人(葡萄と電気)が俺に頭を下げて『モテテク』を乞う姿はとても憐れみを誘い、少しくらいならいいかあ〜という気分させる……のだが――

「講堂一つ貸し切って演説させるのはやり過ぎではないかね? ん?」

この愛すべき馬鹿二人は、なんと放課後の一教室を貸し切りにして俺に教師をやれと言うのだ。その行動力を他に生かせよ……バカなの……?

「お前のせいだからな!!? お前が学校の女子達を片っ端からオトしてくから、女に餓えた男共がこうして集まっちゃったんだよ!!!」

「ほう、つまり俺がモテすぎるから学校中のモテたい男達が集まって、結果的に講堂一つ埋まる結果になったと。……そう言うんだな?」

「な、なんだよちよつと意味深に言いやがって……」

『雄英一のモテ男！ 詭弁大先生が語るモテる秘訣講座！ 受講料500円』……なあでんちゃん、このチケツトは何かかな？」

「あつ、いや……それは……」

でん^上鳴^電氣^峰がみ^田つち^実ーに目をやり、みつちーも視線を逸らす。

「下らない小遣い稼ぎに協力する気はねえよ？」

「す、すまん！ つい出来心というか……！」

「全員に金返して来い。な？」

「すんません……」



で、だ。講堂に入れば、中は犇めく男、男、男。うわ、ムサイ。

「歸りてえ」

「頼むつてマジで！ オレもここまで集まるとは思わなかったんだよ！」

「恵まらないオイラ達にも光明を見せてくれよお!!!」

でんちゃんとみつちーが脚に抱き着いてきて離れない。止めんか暑苦しい……。

はあ、分かった分かった……。

講堂のド真ん前。教壇に上がると、ザワザワしていた男達が静かになり始める。……うーん、これが教師の気持ちか。

「えー……ん”っん”っ。皆さんこんにちはは、一年A組の詭弁答弁ですヨロシクね」

軽く講堂内を見渡しながら挨拶をする。あれ、よく見たら女子も僅かに居るな？

「あー……今から話す内容は『女子からチャホヤされたい!』や『誰でもいいからお付き合いたい!』って人向けの内容だ。『特定の女子とお付き合いたい!』っていう人には若干向いてないから、そこるところヨロシク。……さて、今日皆さんは『モテる秘訣』を聞きに来たんでしょう。結論から言わせてもらおうと、『どんな男でも100万人に告白すれば必ず一人はお付き合いできる』と言いましよう」

そう言いきった瞬間、講堂中に巻き起こるブーイングの嵐。『そんな事出来たら苦労せんわボケ!!』やら『んなこと出来るか!!』やら。とても文章に書き起こせない様な言葉で罵る人も居る。あーはいはいおーけーおーけー。

『黙れ』

一声で騒がしい講堂を沈黙させる。こういう時俺の個性は便利だなあホント。

『黙っていても女の子の方から寄ってくる』『告白すれば100%成功する』なーんてぶざけた幻想を抱いてる奴は2次元の世界で彼女なり嫁なり作ってください。行動無く

してモテる事はありません。今から皆さんにお伝えする事は、100万分の1の確率を100分の1くらいまで引き上げる事です。彼女がいる男は、須らく何かしらの行動を起こしている事をキモに銘じてください」

では、本題に入りましょう。メモの準備はオーケーですか？

「まず第一に皆さんが知っておくべきことは、『彼氏彼女の関係は、単純なLOVE to LOVEの関係ではない』と言う事。色々苦情が来そうな言い方をすれば、『彼氏』『彼女』は着け外しの面倒なファッションアイテムです」

勿論それに当てはまらない様なLOVE to LOVEの恋人も居るが、それとこれとはまた別の話なので手短に纏める。

「例えば、『流行遅れ、時代遅れの小汚い服』があつたとします。休日、友達と何処か遊びに行くとして、その服を敢えて着ていく必要はありますか？他にオシャレな、今風の服があれば、そっちを着て行きませんか？……もしそれでも時代遅れの小汚い服を選ぶとすれば、その服に特別な思い入れがあるということでしょう。それがLOVE to LOVEの恋人の関係です。さて、ではアナタは『流行遅れ、時代遅れの小汚い服』じゃないと言いきれますか？もし自信もって言い切れるのなら、多分この後の話は聞く意味は無いと思いますので帰ってもらつて結構ですよ」

ほんのちよつとだけ間を開けるが、誰も立ち上がる気配はない。俺、もしかして教師

の素質有り?

「『流行遅れ、時代遅れの小汚い服』なんてのは、まあ本当に例え話として。本当に好きな人が居る人に『付き合ってください!』と言っても、貴方がその好きな人でない限り『はい喜んで!』は無いです。ですが、好きな人は居ないけど彼氏ほしいな〜って人に言ったのなら?人は、そこで付き合うか付き合わないかの判定をします。自分が求める水準以上だったのなら『喜んで!』、水準以下なら『ごめんなさい』。ここまでは、まあ体感的にわかると思います」

彼氏彼女の関係に重要なのは、相手に求める水準以上になる事。ではその水準とは? 「付き合う付き合わないの判定において一番最初に行われるポイントは、その人の中にある『ここだけは絶対譲れない!!』という点。そして次に行われるポイントは『合計点』です。どういう事が説明すると、仮にココにとある女の子と、その子に告白した男の子が居るとしましょう。その男の子は顔良し、ファッションセンス良し、サイフの大きき良し、ただ身長が108cmしかないとします」

お前の事じゃねえよみっちー。座ってる。……いや、ちよつと参考にはしたけどさ……。

「女の子は『身長は絶対自分より高い男じゃないと嫌っ!』という子なら、最初の判定で弾かれますね。仮にどれだけ男の子が性格が良くても、女の子にとってそういう対象じ

やないで終わり。世知辛いですねー」

だからお前の事じゃねえっての、座つてろ。

「ハイ、では女の子の条件を変えて『ファッションセンスのある男じゃないと嫌っ!』という場合。最初の判定を見事通った男の子は次の判定に入ります。顔よし、+40点。サイフの大ききよし、+40点。身長……イマイチ、-20点。その他性格諸々の評価も全部含めると合計点+60点。女の子の決めた水準がもし+60点以下だったら、晴れて男の子と女の子はお付き合いを始める訳です。低身長だってその子にとってチャームポイントと許容出来る訳ですね」

さて、此処までの話はモテる秘訣というより、その前提となる話。誰もあまり意識していないが、確実にそう判断しているポイントを言葉にしただけの話だ。

「最初に言った結論を覚えていきますかね。『どんな男でも100万人に告白すれば必ず一人はお付き合ひできる』。単純な話、それだけ行動力のある男は何かしらの部分が抜群に秀でているので、その部分を評価してくれる女の子は絶対に居るからこそそう言った訳です。無論、何処かしら抜群に秀でていても行動しなければモテません。100分の1でも、母数が0なら当然付き合える人数も0ですのぞ」

前振りが長かったが、御待ちかねの本题に入るぞー。

「さて肝心要の『モテる秘訣』ですが、ざっくり分けて二つのパターンがあります。『特

化』と『底上げ』。なんとなくイメージはつきますかね? 『特化』パターンは、魅力を一
点に集中してアピールする事。極端な話、アラブの石油王並にサイフがデカけりやあ大
体の女の子とお付き合いできるでしょう……長続きするかは別ですが。『底上げ』は自
身の欠点を補うように色々な魅力をアピールする事。さっきの男の子の例で言えば自
身の身長はどうしようもないので、ファッションセンスを勉強したり、日頃からアピ
ルし続ける事です。『全然知らない人』より『なんとなく知ってる人』より『良く知っ
てる人』の方が判定もしやすいですから。……おつと、言い忘れていた事がありました。
付き合う付き合わないの判定において、『よく分からない』事は非常に大きなマイナス点
になります。突然知らない人から『付き合いってください』なんて言われても不気味なだ
けですからねー」

大勢の人の前で喋り続けるのは、ヒーロー活動の時とはまた違う意味で疲れるし緊張
するなあ……。水を一口飲む。

「さて、『特化』と『底上げ』の二パターン上げておいてアレなんですが、実際にモ
テる為にはどちらも同時に狙っても構いません。サイフのデカイ人がファッションの
勉強して、性格良いアピールして、香水着けてピアス着けて……問題ありません。やれ
ることはとにかくやる。コレが鉄則。言うまでも無いですが法律と校則は守る事」

ちらつ、と時計を確認。……もう少し話す時間はありそうだな。

「さつきから散々『アピール』という言葉を使っていますが、じゃあ『アピール』とは何か？『アピール』とは簡単に言えば気を引く行動の事です。女の子の気を引けなければ、それはアピールではありません。『俺、歌メチャクチャ上手いんだぜ？カラオケとか100点出すし』『へー、そう（無関心）』となつてしまえば、折角の自身の魅力はアピール出来てませんね。でもうまい具合に話をして『俺、歌上手いんだぜ』『えーマジ？聞きたい！（興味深々）』となればこっちのモノです。女の子と話せない？そんな会話出来れば苦労は無い？行動無くしてモテる事はありえない。会話は最も手軽なアピール方法ですよ。普段から行わないでどうするんです？」

「コミュ力お化けのお前と一緒にするな。という怨嗟の視線が刺さるが気にしない。『会話の糸口は五感に関する物を選ぶと長続きしやすいでしょう。『昨日のニュース見た？』『話題のアーティストの新曲聞いた？』『駅前店の新作スイーツ食べた？』会話のタネは常に収集し続ける事。相手の興味を引く話題を次々提供出来れば、当然相手との会話も弾むでしょう。会話では相手に共感する、必要に応じて意見を聞く。間違つても一方的に話し続ける事の無いように」

「時計を見ればそろそろいい時間。『講座』と銘打たれたからにはそれなりに長く話したが、皆にとつて有意義な時間だったなら良いな。」

「さて、モテる秘訣講座はこの辺で終了としよう。モテる男は一日にして成らず。日々

自分の魅力を研究し、理解し、アピールし続ける事がモテ男の第一歩だ。以上!

パチパチパチと拍手が起こる。うーん悪い気はしない。

はーい皆かいさーん。

「いやー詭弁せんせーは流石言う事が違うぜー」

「ほんとほんと。高身長、顔良し、ファッションセンス良し、サイフデカい、全てを持つてる男は言う事が全然違うよなー」

でんちゃんが肩を組んできて、みっちーが俺の太ももを肘でつつく。

「参考にならなかつたか?」

「割と参考になりました」

「でもオイラ女子と会話とか行動力とかかなり頑張つてると思うんだけど?」

「みっちーお前……とりあえずエロ一直線なトコ治せよ……」

そうして会話しながら三人で歩いていると、前からい塩み崎ち英ちゃんが戦闘服姿コスチュームで歩いてきた。

「あつ、詭弁さん……!」

「よういつちゃん!どしたこんなところで?」

「今から演習場に向かう所ですが……詭弁さんこそ何故此処に? A組の教室からかなり離れていますか?」

「ん？まあちよつとすぐそこで講義をな……それより前から思ってたんだけど、いつちやんのその戦闘服コスチュームってコレ脇どうなってるの？」

そう言いながら白い布を巻きつけただけみたいな戦闘服コスチュームの脇部分を軽く摘み上げ、その内側から見える茨っぱいの頂点が――

「なな何を見ているのですか!!!」

「ごぼっ!!」

いつちやんの肘鉄が俺の顎にクリティカルヒット。ゴギイと鈍い音がして膝から崩れ落ちる。意識を失う直前に、大事な事を伝える。

「みっちー……でんちゃん……」

「大丈夫か詭弁!!」

「傷は浅いぞ!」

「ノーブラコスって良いよね……(死つ)」

「詭弁! バカ野郎お前だけ無茶しやがってっ!」

「テメエだけ中身確認しやがって羨ま死ねえええ!!!」

ザワザワザワザワ……

気が付けば廊下一面に棘のつるが伸びていた。

「あっ!」

「はっ!?!」

「……やはり、色欲は罪ですね。ムチで打たねば……!」

「ま、まてまてまて!! オレらは偶々一緒に居ただけ……!」

「オイラ達悪くねえよ! 詭弁だけだろ!?! おい詭弁起きろ!! この子説得してくれよお!!」

「(死)」

「『カツコ死カツコ閉じ』とか今そういうのいいから!!」

「ちよ、茨ー! ストップ! ストップ!!」

「いっちゃんがつるの鞭(極太)を生成している最中にB組の姉御こといつかち^拳ちゃん^藤が
いっちゃんを羽交い締めにして止めた。

「離してください一佳さん。断罪、断罪しなければ……!」

「落ち着けて! ここ廊下! 通行の邪魔でしょうが! つーかこんなとこで個性つかうな
!」

「くっ……確かに一佳さんの言う通りです……」

「……た、助かった……?」

「おつかねーよー!! おい詭弁テメエ! いつまで床で死んだふりしてんだ!!」

まって、今ちようどいつかちやんのキワドイチャイナ服の下が見え……見え……

「見えたツ!!黒ツ!!」

「フンツ!!」

震脚という動作をご存知だろうか?踏鳴とも言い、足で地面を強く踏みつける事で、半歩程の踏み込みでも助走をつけて殴るように十全の力を伝える事が出来る動作だ。

震脚それ自体は攻撃動作ではないのだが、仮に地面を強く踏みつける際にその脚元に何かあつたら、当然それを踏みつぶすような行動になるだろう。

要するに、うん。いつかちやんの足元に俺の頭があつた訳で……。

グシヤア!!

「少年誌ではお見せ出来ない状態に!!?」

「死んだ!!コレ死んだだろ!!」

「イキテマス……」

「……やはりムチで打たねば……」

「手え貸すよ」

その後通りかかったB組常識人達によつて救出される頃には全身ミンチになつていた三人であつた。

「……アンタ等、揃つてトラックにでも轢かれたのかい?」

「詭弁覚えてろよマジで……」

「何でオイラ達まで……」

「モテる男はつらいなーはっはっは」

「なんでお前だけ余裕そうなんだよ!!」

「慣れてるから!」

その後モモちゃんからの折檻が待っている事をまだ知らないのであった……。

俺はチープなラブソングしか歌わないぞー!!

文化祭。今年は例年に比べて規模が非常に小さくなって開催される事が決まった。まあ文化祭はサポート科や経営科がメインだし、やらないなんて事になったらヒーロー科に向いているヘイトが爆発するつても分かる。

そう言う訳でヒーロー科は文化祭において脇役になる訳だが……脇役にも脇役なりに文化祭を本気で盛り上げる義務がある。

「……と言う訳で、学校全体を盛り上げるには水着喫茶がベストだと思いますツ!!」
「峰田並に下心全開じゃねえか」

「バカめ! メイド喫茶なんぞより遥かに盛り上がる事間違いなしだぞ! ありきたりでチープなアイデアなんて置いておいて『Plus Ultra!!』しようぜ!!!」

「校則をこんな所で使うんじゃない!」
「じゃあ皆に聞きますが!?! 水着喫茶が良いと思う人挙手ツ!! おら男子共っ! 女子達の水着姿が見たいかー!!」

教室を振り返って挙手を募る。俺と同じように手を突き挙げている男子はみ^峰つち^田と^実でん^上ち^鳴ゃん^電だ^気けだ^たった。

「お前からそれでも男か!? 見たくないのか女子達のスケベボディを!？」

「詭弁、お前一回死んでおけ」

「ジロちゃんには是非ともスリングショットを着てもらいたいのですが!!」

「誰が着るか馬鹿!!」

俺がジロちゃんに殴られている間、黒板の前に立っているモモちゃんが飯田天哉がてんちゃんにこっそり耳打ちしていた。

「スリングショット……とは何でしょうか?」

「むう、すまないがオレにも分からない」

「スリングショットってのは紐みたいな水着でな、ほら、オイラのスマホの……この写真みたいなヤツだ」

「……!!? は、は、破廉恥ですわ!!」

みっちーがモモちゃんにスマホの写真を見せて引っ叩かれている。

おかしいな、スリングショット（水着）って一般知識ではないのか? チラツと周りの顔を確認してみるも、なんとなく『何それ?』みたいな顔してる奴等が多数派……あれ?

「逆にジロちゃんはスリングショットを知っていた……?」

「っ!!」

心臓にジロちゃんのビート鼓動が叩き込まれるのがもはや日常になってきた。あゝジロちゃんの心臓の音おゝゝ（瀕死）

そうして俺が瀕死になってある間になんやかんやあってバンドをやる事になった。ねえ、君達俺が瀕死になつて横で何普通に会議してるの？泣くよ？



「で、俺がボーカル……？」

放課後、寮の共用スペースでダラダラしていると隣にジロちゃんが座ってきて俺にボーカルを任命してきた。

「そーそー。何だかんだ言つてアンタがA組の中で一番歌上手いじゃん？」

「んうー……」

「ん、嫌だった？」

「嫌と言うか……俺が歌うのマズくないかなーって思った」

「なんで？」

「そりゃー——」

俺が歌えば、まあ盛り上がるだろう。ただそれは俺の『個性』によって引き起こされ

た熱狂だと後から言われたら、それを否定する事が出来ない。要するになんか『ズルい』気がするのだ。

「——という感じで演出で個性使うのならともかく歌に個性使うのは卑怯臭いし、仮に個性使わなくて盛り上がりつつも後からイチヤモンつけられても嫌じゃない?」

「んーまあ、確かに……でも気にし過ぎじゃない?それに他に誰がボーカルやるのよ」「ジロちゃんがやればいいのでは?」

「う、ウチ!?なんで!」

「なんでって、他に適任居なくね?」

男子勢でボーカルやれるほどの喉を持つてるのは……居ねえな。女子達も同じような感じだし。

「でも芦戸とか……」

「みつちゃんはダンスの指導で忙しいっしょ」

「や、ヤオモモは……」

「モモちゃんもジロちゃん推すと思うんだけど」

「ば、爆豪……」

「カツちゃんがやると思うかね?」

ジロちゃんはいや……とか、でも……とかウジウジしているので強制的に俺の膝の上

に寝かせる。

「ちよっ?!いきなりなにすんの!!」

「はいステイステイ。ジロちゃんさ、なんか小難しい事考えてるな?」

「はあ?」

ジロちゃんの頭を撫でる。

「ふふふ。これは内緒なんだが、実は俺には相手の頭を撫でれば相手の思考を読める超能力を持っているんだぜ?……ほら、今『嘘つけ』って思っただろ?」

「……」

めっちゃジト目で睨まれる。うん、まあ半分嘘なんだけど。残りの半分は……観察眼、かな。

「ジロちゃんさ、趣味にする程音楽好きなんですよ?何も悪い事じゃないじゃん」

「……」

「ふむふむ……『音楽が好きだけどヒーロー活動とあんま関わらないから続けるのに悩んでいる』と」

「っ?!?な——」

何かを叫ぼうとしたジロちゃんの口に人差し指を添える。

「今おしゃべりは無粋だぜジロちゃん。言葉は想いを伝える基本だが、言葉だけじゃ想

いを伝えきれない時もある。……なあジロちゃん。『音楽』って言葉は『音』で『楽しむ』って書くだろ? 楽しいと人は自然と笑顔になるモンだ。そしてヒーローの仕事は『皆を笑顔にする事』『皆の笑顔を守る事』だ。なら音楽で人を笑顔にさせるヒーローが居ても良いだろ?」

「……」

「『簡単に言うな』って? んまあ確かに言うのは簡単だ。前例が無い事に挑戦するのは難しい……でも、『前例が無いからやらない』なんてツマラナイじゃん? ま、アレコレ言っただけど要するにさ、ジロちゃんの歌声を聞きたいんだよ、俺は。大舞台上でジロちゃんの歌が聞きたいなあ」

ジロちゃんのサラサラ髪を優しく撫でながら笑いかける。……何故かジロちゃんに顔を殴られた。普段の爆音ビートツツコミに比べたら指先で突つつかれた程度の力加減だが。

「なに適当な事言ってるのよ、馬鹿」

「酷いわー、ジロちゃんマジ酷いわー」

「うるさい。……まあ、ウチがボーカルやれば良いんでしょ? ただし詭弁にもサブボーカルやってもらおうからね」

「えー」

「『えー』じゃない！人にやらせておいて自分は高みの見物とか許さないし！」
まあ、ジロちゃんメインで歌うんなら良いか。

俺が歌う事で起きる下らない『やつかみ』には、俺が対応すればいい。

* * * * *

A組女子棟 八百万部屋

「——って感じでウチと詭弁が歌うことになったんだよね」

「……………そう、ですか」

「……………？どうしたのヤオモモ。なんか顔色悪いけど」

「いえ……………大したことでは……………」

「……………思いつき顔に『大したこと』って書いてるけど？」

「う……………やはり隠し事は出来ませんわね……………」

「やっぱ詭弁の事？」

「ええ……正確には、『詭弁さんが公の場で歌う事』なのですが——」

——それは中学生の頃の話。学校で行われたクラス対抗の音楽祭で、当時から歌が上手だった詭弁は歌唱パートを一人で任される程にクラスから信頼されていた。そしてその信頼に応える様にしっかりと歌いきり、詭弁のクラスは音楽祭で最優秀賞を獲得した。

「……なんも悪い事無いじゃん」

「ええ、話がそこで終われば何も。問題はその後でした。詭弁さんは昔から色々な女の子にちよつかいを掛けており、それを快く思わない方もまた大勢居たのです……。そうした方々が集まり、先の音楽祭で『詭弁さんがその個性を使い不正をし、賞を奪っていった』と騒ぎだしたのです」

勿論、詭弁は不正をしていない。個性を使わず、自身の歌唱力とクラス皆の努力によつて最優秀賞を獲得したのは間違いない。しかし、騒ぐ相手にとって『そんな事』はどうでも良いのだ。

『不正をしていないというのなら証拠を出せ』。悪魔の証明ですわ。そうした騒ぎは、得てして声の大きい側の主張が通りやすい……。たとえそれが道理に反することでも。その方々の所為で最優秀賞は取り下げられ、音楽祭の思い出は苦いモノに変わりましたわ」

「……まあ、詭弁はあんなんだから敵も多そうだしね」

「ですから、今回の文化祭ももしかしたら……そうなってしまうのではないかと……」

「……あー」

耳郎は頭を搔く。

「そんな気にしなくて大丈夫よ」

「……何故、言いきれるのですか？」

「そんなの決まってるじゃん。ウチら全員で最高の文化祭にするから。詭弁一人だけに任せるような事しないし、詭弁だけの手柄にもさせない。そんな風に『騒ぐ馬鹿』を黙らせる最高の演奏をすればいいだけ……でしょ？」

「耳郎さん……そうですわね！『騒ぐ馬鹿』は皆音で殺せば良いですわね!!」プリプリ
なんかお嬢様が言っただけじゃない事を続けて言っている気がしたがプリプリしているヤオモモがかあいいのでどうでも良くなった耳郎であった。

「それと自己評価が低い耳郎さんから『全員で最高の文化祭にする』なんて聞けるとは思ってませんでしたわ……やはり詭弁さんに任せて正解でした！」

「まってヤオモモ。ウチの事なんだと思ってるの？」

「勿論、素晴らしい学友でありプロヒーローを目指すライバルですわ！」

「あ、うん……（なんか照れるな……）」

「あ、それと一つよろしいですか？」

「んう？何？」

「詭弁さんからどのようなアプローチを受けたかご説明お願いしますわ？」
「黙秘権を行使します」

後日詭弁が折檻を受けたのはまた別の話。

お正月特別編・異世界からコンニチワ！あなた詭弁つて
言うのね！俺もソーナノ！

新月の夜。

分厚い雲が星明かりを遮り、世界のあらゆる物を隠してしまった。

月さえ姿を消した夜に、とある世界に住む一人の少年が月のようにその姿を消した。
その事に、まだ誰も気が付いていない。姿を消した張本人も……………。

* * * * *

目が覚めると知らない天井だった……………なんて事も無く、いつも通りハイツアライアン
スの（機械に埋め尽くされた）自室で目を覚ます。今日も良い一日でありますように
……………。

などと思いつながらベッドから起き上がろうと横を向いたら、もの凄く見知った様な人

物が俺の横で寝ていた。どれくらい見知った人物かと言うと、鏡を見る頻度と同じくらいの見知った人物だ。

要するに、俺が寝ていた。

「どういことだっはよう!
W
T
F
!!!」

俺の喉から飛び出た叫び声によって寝ていた隣人が飛び起き、ハイツアライアンス男子寮に居た全員が何が起きたと言わんばかりに部屋から出て来た。



「俺は詭弁答弁。一応普通の人間……なんだが、最近はそれすら怪しく感じてきたお年頃。よろしくね!」

「お、おう……いや、ほんと詭弁にソツクリだな……」

「ソツクリというか、双子?」

「き、詭弁くんが増えるのかあ……」

「おいそりやどういう意味だいずくちやん?」

ハイツアライアンス一階談話室。その一角でクラスメイト全員に囲まれている人物が居た。というか俺ソツクリの俺じゃない俺……自分で思つてワケ分からなくなつてきた。

「んにい……『幻想郷』『博麗神社』か……聞いた事ないなあ。モモちゃんは？」

「うーん、残念ながら聞いた事ありませんわ」

俺じゃない俺曰く、幻想郷という場所に住む便利屋を営んでいるそうだ。どうやって雄英の敷地内に入ったのかとか聞かれても心当たりは一つしかないとの事。

「心当たりあるんじゃないか」

「正確に言えば『心当たりはあるがそれを行う理由が無い』と言つたところか。世界間を渡れる様なトンでもねえ能力を持ったヤツを知っているんだが、ソイツはかなりのものぐさと言うべきか……まあ、ともかくソイツが俺をこんな所に飛ばす理由が無いんだよな」

『世界間を渡る』つて……それはまた凄い『個性』だね。ブツブツワープ系の個性？いや、それにしたつて一度来た場所か特定の条件を満たさないと瞬間移動出来ないつていうのが普通だ詭弁くんの部屋に予め侵入して寝ている間に違う詭弁くんを飛ばしてきか？それはまずありえない雄英のセキュリティと詭弁くん所の嚴重なセキュリティの二つを越える事が出来る筈がないだろうしそもそもハイツアライアンスだつて出来た

ばかりだ侵入する機会なんて早々無い筈ならどんな個性で違う詭弁くんを連れてきたんだブツブツ」

「おいコイツ急にブツブツ言いだして怖いんだけど!？」

「あー……うん。緑谷は時々こうなるけど悪い奴じゃないから……」

「まあ……なんだ？お前も優しい目でいずくちゃんを見てくれよ」

「嫌すぎる……ん？つーか、んい……その、なんだ？『個性』って?」

「……んい?『個性』は『個性』だろ」

「言葉の意味は分かるっての。だけど、あ……緑谷って言ったか?ソイツが『世界間を渡るってまた凄い個性だ』って言っただろ?なんつーか……まるで『個性』って言葉が、個人が持つ超能力的な意味合いに聞こえるんだが……」

「んにい。だからそう言ってるだろ」

「ケロ。もしかしてだけど、ソッチの詭弁ちゃんが住んでるゲンソウキョウ?には『個性』って言葉が無いんじゃないのかしら?」

「マジかよちゆるちゃん」

「ちゃんと梅雨ちゃんと呼んで」

「そうだなあ……幻想郷ではその手の能力は大雑把に『く程度の能力』って纏めてるな。自分出来る事を大雑把に纏めて一言に表すんだ。『空を飛ぶ程度の能力』とか『人を驚

かせる程度の能力』とかそんな感じに」

『人を驚かせる程度の能力』って……それはまたどういう能力なんだ?」

「知らん。そもそも『く程度の能力』ってのは自己申告制だし」

「あ、そ……」

ふ、と談話室の壁に掛けてある時計を見れば、もうすぐで始業の時間だ。やつべのんびりし過ぎた!

「という訳で皆早く仕度しないと朝のホームルームに間に合わないぞ!」

「げっ!? おい緑谷! いつまでブツブツしてんだ早く行くぞ!」

「ブツブツ詭弁くんのコピーに全く異なる記憶を——って、もうこんな時間!」

「んあく……俺はどうすれば良いと思う?」

もの凄く間延びした様に聞いてくる俺じゃない俺。俺が知るか……とやりたい所だが、じゃあ誰がどうにかしなきゃいけないとしたらやつぱり適任は俺な訳で。

「……とりあえず!——Aの教室に行つてから考えよう! 多分先生に相談しなきゃいけない事だしな!」

「人、それを思考停止と言う」

「うっせ! とりあえず俺について来い! 走るぞ!」

「おおー」

そしてカバンを持ってハイツアライアンスから校舎まで全速力で駆けた……のだが、アイツは俺の全速力に余裕で追いついてくれた。こつそり『個性』を使ってズルしてる俺に、である。どんな鍛え方をしてんだ?

「へー君『芦戸三奈』って言うんだ。じゃあ三奈ちゃんだね!とここで三奈ちゃんスカートに埃ついてるよ取ってあげるね!」

「ちよっ?!埃は良いけどスカート捲る必要無いよね?!」

「何言ってるの埃落とすときに誤ってスカート破けちゃうかもでしょ!だから丁寧にスカートを手元に寄せるのは非常に合理的な方法と言わざるをえない!そのついでにパンツ見えるかも知れないけど誤差だよ誤差!!!」

「それは誤差って言わないし!!!詭弁!ちよ、詭弁何とかしてよ!!!」

ましてや同じように全速力で走ってるクラスメイトにちよっかいを出すまでに余裕であった。マジでどんな鍛え方をしてんだ。

「『麗日お茶子』ね、じゃあお茶子ちゃんだ!お茶子ちゃんは凄く恵体だねえ思わず触りたくなる程に!」

「触りたくなる程に言うかおもくそ触つとるやん!!!止めえや!!!」

「すげえ制服浮いてる!?!『葉隠透』だから透ちゃんね!やっぱインビシブルおっぱいも下着着けてないの?」

「どういう意味それ!? 着けてるよ!! あっちよ、触って確認取ろうとするなー!!?」

『蛙吹梅雨』で梅雨ちゃんね! 太ももムチムチかよ大丈夫割れたりしない?」

「触るのはダメよ。……貴方はちゃんと梅雨ちゃんと言えるのね、ケロ」

『爆豪勝己』でかつちゃんね! 制服のサイズ合って無いんじゃない? 採寸し直してあげようか?」

「ウルセエ近づくとブツ殺す!!!」

『『八百万百』で百ちゃんか! 大丈夫そのおっぱい重く——』

「モモちゃんにセクハラしたら殺す」

「アツハイ」

「詭弁さん……」

「ウチは?」

そうこうしてる内に教室へ到着。ミッチーが血涙流していたが無視だ無視。全員が着席した直後に予鈴が鳴り、その後に相澤先生が教室に入ってくる。

「はい皆おは——」

教卓に座ってる俺じゃない俺と目が合う相澤先生。

「……詭弁。予鈴は鳴ってるんだふざけてないでさっさと席に着け」

「だって俺の席空いてないんだモン!」

「ああ? お前の席はそこ——」

相澤先生が指差した先には着席してる俺。

相澤先生が教卓に座る俺じゃない俺と俺を交互に見る。そして直後に目薬をさした。

「……………説明しろ、詭弁」

「俺も詭弁です先生!」

「お前は黙ってろ」

相澤先生が俺じゃない俺を睨み付けながら俺に話を促す。俺は俺じゃない俺の境遇を掻い摘んで話した。何言ってるかよく分からねえと思うが俺も何言ってるか分からん。

相澤先生が俺じゃない俺を睨みながらも頭痛を抑える様に片手を額に当てた。

「つまりお前は『違う世界から来た詭弁答弁』と言う事か?」

「より正確に言えば『滅茶苦茶離れた違う世界から来た詭弁答弁』と言う事になるのかな?」

なんせ『違う世界』程度の距離なら幻想郷じゃよくある事だしなあ〜と呑気に言う俺じゃない俺。どんな魔境なんだそこは……。

そんな事が有り得るのか？と問われれば……まあ『有り得ない、なんて有り得ない』と返すしかない。世界は広いからそういう『個性』があっても、まあおかしくは無い。おかしくはないけども。

「まあともかく、そういう訳で行く当ても無いし暫くはこの世界の俺に厄介になろうかと」

「……」

相澤先生は何かを考えているのか、何も反応を返さない。ただへらりと笑っている俺じゃない俺を睨み続けているだけだ。

「……お前は、元の世界に帰ろうとは思わないのか？」

「思うさ。俺が生きる場所は、この世界此じゃ地ない。ンでも、帰るタイミングはきつと今じゃない。慌てる必要も無い。今は機を待つ時だからな」

「……」

その言葉を聞いてか、相澤先生は俺じゃない俺を睨み付けるのを止めたようだ。だが警戒自体は続けている。

「お前の事については一旦置いておこう、後で職員室に連れていく」

「ん」

「返事は『はい』だ」

「お生憎、コッチの世界の俺にとつて貴方は先生かもしれないけど俺にとつちや小汚いオツサンなんだよなあ」

ニヤニヤと笑う俺じゃない俺。なんだアイツ性格悪いな、小汚いオツサンって。

「(そりやお前に比べれば相澤先生は小汚く見えるだろうよ……)」

「(な、なんなんだアイツ。相澤先生の眼光に怯んでねえのか?)」

「(おい、どうにかしろ詭弁)」

んなあんな無言の圧力感じますねえ。俺にどうしろつての……。

そんなこんなでなんとか無事にホームルームの時間が過ぎ、俺じゃない俺は相澤先生の捕縛布に縛られて引き摺られていった。なんだったんだ……。



そうして俺じゃない俺が戻らず、何やかんや授業が進んで昼休憩も過ぎ、午後の授業。今日は午後一でヒーロー基礎学だ。

「えー……と言う訳でね、はい。今日のヒーロー基礎学始めたいと思うんだけどね」

「ドーマ。1-Aノ皆〓サン。臨時教師のマスクドニンジャです」

「二」 360度何処から見ても詭弁だコイツ!!!? 「二」

「アイサツを返さないなんてスゴイ・シツレイ！」

その時クラス全員の心がシンクロしたと思う。

何故なら俺達の目の前には変なマスクをした俺じやない俺がオールマイト先生の横に立ってお辞儀していたからだ。お前戻つて来ないと思つたら何を……。

「まあ冗談はさておき。なんで俺がこうして教師の真似事をするのか、気になる奴の方が多いだらう。ちなみに俺としてはお前達の恰好の方がめっちゃ気になるんだけど……えっ？何なのその姿？女子とかそれももう存在がセック——」

「ん〱ん〱っ！幻想くん、授業時間は限られてるんだから余計なおしやべりは禁物だからね！手短に言えば根津校長直々の御指名によつて幻想くん——幻想郷からやつてきた詭弁少年、の衣食住を保証する代わりに雄英の臨時教師としての仕事を与えたと言う訳だ！」

「呼ぶとき、コッチの世界の俺とごっちゃになると困るべ？だからこれからは俺の事は『幻想郷育ちの詭弁さん』を縮めて幻想さんと呼びたまへ」

「アイツ教師の立場になつたら急に偉そうに」

「ちなみに俺はコッチの世界の俺と同年齢という事が判明したわけだけど、俺は既に労働しているという点でもつてお前らより偉い訳だからその所ヨロシク。世界変われば常識も変わるつて訳だな」

色々突っ込みたい所もあるんだが……まあ、おいとく。

今俺達が居る場所は雄英のトレーニング施設の一つ、入試試験で使われた様なビル群の中ではなく町と言うより村と表現するのが正しいような大自然に囲まれた様な家々が並ぶ仮想戦闘空間だ。

人里みてえだなー、と呑気な様子の俺じゃない俺……幻想くん。

「えー……オールマイト先生。それでオレ達は何を……」

「うん、ズバリ!君達全員には、これから幻想くんを仮想ヴィランと思つて戦つてもらふ!如何に周囲に被害を出さずに幻想くんを倒せるかの訓練だ!!」

「え、ええ……幻想くんを仮想ヴィランと思つて……いや、まあセクハラ魔だしそこは良いとして……一応、別の世界から来たとはいえ詭弁が相手なんだろ?大丈夫なのか?」

「何の心配をしてんのか分からんけど……あー……誰だっけ?」

「切島だよ!自己紹介しただろ!!」

「あーうん、それはホントゴメン。とにかく、まあお前達が何の心配をしているのか正確には分からんが、大方俺が怪我しないかって所か?あー良い良い、言葉に出さんでもその表情でよおしく分かった……あー、百ちゃん?確か『個性』で色んなもの作れるつて言つてたね。なんか鋭い刃物を出してくれる?」

「え？ええ……はい、どうぞ」

そう言つてモモちゃんはペティナイフを創造し、持ち手の方を幻想くんに向けて渡した。

「まず、俺が怪我する事を心配するのは杞憂だと先に言つておこう」

そう言つて幻想くんは右手に持ったペティナイフを左手に向けて――

!!!??

「ひっ!!」

「ちよ!!?バカ野郎!!」

その前動作を見て幻想くんを止めようとクラスメイト全員が駆け寄る……が、それよりも早くその手に持ったペティナイフが左手に振り下ろされ、ペティナイフが粉々に砕け散つた。

「……は?」

「と、まあこの通り俺の皮膚はヘボ金属なんかより遥かに硬い訳だ。俺に血を流させたければそうだなあ……妖夢ちゃんくらいの剣の達人なら可能かな?」

妖夢ちゃんって誰だよ……

再びクラス全員の心がシンクロした。

「防御面はこれで良いな?んで次だが……『アレを見ろ!!!』『二重結界』」

そう言つて幻想くんが指差した方向を見る。何も無い。

視線を戻すと……オールマイト先生しか居ない。

「「 なっ?!! 」」

「っ、後ろだ皆!!」

障子目蔵めっちゃんの声に反応して振り向いた先にはドヤ顔ダブルピースしている幻想くんが居た。

「このように一瞬で20人近くの人数を振り切る速度を持つてる。あく言いたくないけどなあ、言いたくないけど言わなきゃいけないんだよなあ、俺教師だしなあ!ハッキリ言ってお前くらいなら何人相手でもめっちゃくそ余裕だつて言いたくないんだけどなあ!!!」

「言つとる!やろがい!」

成程、コイツは敵だ。だが、間違はなく別世界の俺だ。それは俺であつて俺ではないという意味と、俺とは全く違う強さを持っているという意味。

オールマイト先生がパンパンと手を打って注目を集める。

「はいはい皆注目!正直私も『別の世界から来た』と言われても信用してなかったけど、彼の強さを見たら納得出来た。相澤くんを彼を預けられた時はどうしたものかと思つたし、その後で聞いた彼の半生もまだ半信半疑なんだけど……ともかく、君達と比べても……否!世界中のヒーローと比べても彼の強さは規格外だ!彼の居た世界ではこれ

でもまだ弱い方とか何の冗談なのか……」

「オールマイトせんせ、話は手短かになって自分で言ったべ？」

「おっとそうだった。とにかく今日のヒーロー基礎学は『自分より遥かに強い相手にチームでどう立ち回るか』!!今から5分間!彼はこの訓練場内の何処かに姿を消し、キミ達を待つ!全身全霊で彼を捕獲し、この檻の中に入れる事がキミ達の勝利条件だ!ヴィランを確保しても、確実に捕まえるまでは油断するんじゃないぞ!」

「自信のあるヤツは俺に真つすぐ向かって来るといい!忘れるなよ、世界が変われば常識も変わる事を!!」

ふははははは!!と高笑いしながらもの凄い速さで村を抜け、森の中へ入っていった。……まだ高笑いが聞こえるし。

「クラス全員対一人……か、まるで雄英ビック3の時みたいだね」

「あの時より状況はヒデエぞ。何なんだアイツのアレは……オレとダダ被りじゃねえか……」

「違う。切島くんと一緒じゃない、と思う……」

「どういう事だよ緑谷」

「切島くんの『硬化』は、発動すれば見た目に変化が出る。でも、幻想くんのアレは一切変化が無かった。まるで元から皮膚が鋼鉄以上の硬さを持っているみたいに!」

「それってつまり……『個性』発動してないスキをつけて、ってな事ができねえってことか!」

「多分……でも、どんな『個性』でも弱点が無いって事は無い!」

流石我等がはずくちゃん。すっかり相手を『視る』事にかけて右に出る者は無いんじゃないか?

「それにあの速さも厄介だ。あんな一瞬で僕たち全員の後ろをとるなんて、絶対にタネがある筈なんだ!」

「……それなんだが緑谷。恐らくヤツは『瞬間移動』が出来ると思う」

障子目蔵めっちゃんの言葉に顔を上げるはずくちゃん。

「っ! 本当!? どうして!」

「ああ、アイツが『アレを見ろ』と言った直後、本当に小さな声だったが間違いなく『にじゅうけつかい』と言っていた」

「それに加えて恐らく……ですが、彼……幻想さん、は詭弁さんよりも声の『個性』は弱いと感じましたわ。あの時の『アレを見ろ』との言葉には詭弁さんの『個性』と同じような感覚を覚えました。私は抵抗出来ましたが、恐らく同じように抵抗出来た方が他にもいらっしやるのでは?」

モモちゃんがそう言って周りを見渡せば、『パツと消えるのを見たよ!』だの『アレを

見ろで視線誘導するのはある意味使い古された手だしな……」だの言ってる奴も居た。使い古された手に引つかかっている人も居るんですよ！

「で、でもよお……オールマイトが『世界中のヒーローと比べても規格外』だって言ってたし、『防御』『速度』以上にも『攻撃』だって相応のモンを持つてるんじゃないのか?!」
「確かに……『硬い』『速い』だけなら『世界中のヒーローと比べても規格外』なんて言わないか……」

峰田実^{ミッチー}の言葉に再び顔を地面に向けて考え込むいずくちやん。

「んにい……規格外ってんなら攻撃力はオールマイト級と見積もっておいた方が良くねえ……」

……ん? そういえばオールマイト先生、今日は全然咳とかしてねえな。

「ま、それが無難つちや無難か」

「けどどうやって攻略すんだ? 防御力は切島以上、速さは飯田以上、更に攻撃力もオールマイト並? 本当にアイツ俺らと同じ年かよ!」

「とうか本当に同じ『詭弁』なの?」

「うるしえー。コッチの詭弁君はヘナチヨコで悪かったなあ!」

「いや誰もそこまでは……」

「……防御力も、移動速度も、確かに凄いよ。あの詭弁くん……いや、幻想くんは。でも、

勝ち目が無いわけじゃない!」

そう言っつて、いづくちやんは燃える様な輝きを灯した眼を前に向ける。

「勝利の鍵は……詭弁くん!君だ!!」

「……俺?」

そうして、オールマイトの声によつて俺らA組VS仮想ヴィラン幻想くんとこの戦いの火蓋が切られた。

お正月特別編・異世界からコンニチワ！君の名は？『詭弁
答弁です！』私達、入れ替わってえくないッ！

「しつかしマジでこの辺とか人里周辺ソックリだな……本当に別の世界なのか？」

小さな村から離れた位置の森の中を軽く散策している、幻想郷からやってきた詭弁幻想くん。呑気なモノだ

が、彼はヒーロー科A組を舐めている訳でも自信過剰になっっている訳でも無い。

ただ、彼等を警戒するよりもこの辺りを散策する方が重要と思っただけで、それが正当な評価だからだ。

確かに彼らは皆強いだろう。自ら進んで荒事に対峙する事を選びヒーロー科に入り、キツイと評判の雄英の授業で今日まで脱落者無しで生き残ってきた猛者達。弱い訳が無い。

だがそれだけだ。命のやり取りを日常とし、週に一度死にかけるくらいに『死』と隣り合わせの生活を長年続けてきた幻想くんにとっては20人を超えるとは言え人間程度に負ける程弱くは無い。

……ただ幻想くんにとって唯一の誤算は、この世界には『個性』と呼ばれる超常の力があつた事だ。

突如、森がざわめきだした。

「……………んい?なんか騒がし——」

彼の言葉が終わるより早く、空から鳥の大群が押し寄せてきた。

「どういWうこTとだFってばよ?!!」

奇しくも今朝、この世界の詭弁が叫んだことと同じような事が口から飛び出す幻想くん。

奇声を上げながら鳥の大群に襲われ、隙だらけな身体を晒す。其処に高速で半透明の何かが飛んできて、幻想くんの身体に巻きついた。

「今ツ!」

「食らえ!導電接触1000万Vツ!!」
どうでんせつしよく100まんホルト

瀬呂の『テープ』によって捕捉された幻想くんに向けて、上鳴の『帯電』による逃れられない電撃が流れ込む。幻想くんを襲った鳥の大群は既に退却していた。

「はっはあー!幾ら皮膚が硬かろうとも電撃まで通さないって訳にも行かねえだろ!!」

……彼等の誤算は、幻想くんがこの世界の物理法則とは似て非なる場所から来たという事だった。

「んゝんんんツ!!」

「へっ?——のわあツ?」

幻想くんは身体に流れる電撃を意に介さず、身体に巻き付いたテープを掴み引つ張り上げる事で反対側を掴んでいた上鳴を一本釣り。飛んでくる上鳴をそのまま片手で掴み上げてしまう。

「ツツツ!? (コイツ、どんなパワーしてやがる!?)」

「刃物も通さない皮膚が、弱い電撃程度弾かねえ訳ねえだろ!!」

「いやその理屈はおかしい!!」

そして『本物の電撃を見せてやる』と、魔力を練り上げる幻想くん。

『電撃破』^{エクスプラズマ}!!!」

バチン!!と電気災害が起きた様な異音が森の中に鳴り響き、その直後上鳴は地面に倒れ込んだ。

「上鳴 (くん) !!」

「うえ……うえ……」

地面に倒れながら握り拳を作り、親指を天に向けて突き出している。俗に言う『脳がショートシアホになっている』状態だ。誰がどう見ても継戦不可能。その光景を見ていた全員が衝撃を受けていた。

「な、何だコイツ……急に顔がスゲエアホっぽくなった……」

その状態を初めて見る幻想くんも衝撃を受けていた。

「(上鳴くんの『個性』はある程度の電撃を無力化する事が出来るのに……それを越えてきた!?)」

「どうした?作戦はもう終わりなのか?……じゃあ今度はコッチから行くぞー」

「ツチー!」

地面に倒れている上鳴を跨ぐように一歩踏み出した幻想くんを警戒し、轟が『個性』の水を使つて足止め&上鳴の救出を狙う。詭弁の『応援』によつて細やかな操作も可能となり、それらを同時に行えるだけの器用さを得ていた。

そして地面ごと脚を凍らす事で幻想くんの拘束と上鳴の救出を見事に両立させた。

させたのだが。

「うへえ……ほぼノータイムで氷出すとか実質チルノじゃねえか」

バキバキツツ!!と脚に纏わりつく氷を砕きつつ、意に介さずに進む幻想くんを見て生半可な拘束は無意味と判断。今度はその全身を氷漬けにする……どころか、周囲の森ごと凍らせる様な大規模氷結によつて完全に拘束する。

「と、轟?!流石にやり過ぎだろお前!?!」

「……脚が凍つてるのに無理矢理動かしや、普通は脚ごと砕ける……なのにアイツは一

切そんな素振りを見せなかった！」

「つて事は、轟の氷まで実質無効してんのか!？」

「ああ……だが流石に全身凍らせれば——ッ!!？」

周囲の森ごと凍らせる様な大規模氷結によつて一時的に拘束されていた幻想くん。だが、それは本当に一時的でしか無かつた。

氷を裂きながら此方へ向かつて来るのを、透明な氷越しに見ているという光景。それは一体どれだけの『絶望』が押し寄せてくるのだろうか。

「まじかよ……まじかよお……あんなんに勝てる訳ねえじゃねえかあ……」

クラス一身長の低い男は震えながら掠れた声を上げる。それはヒーローの卵としては情けないようにも思えるが、その実この場に居る殆どの人間の心情を代弁している言葉だつた。

ピシッ！パキバキ……

『ヒートハンド熱人拳』!!!』

バァン!!

そうして、山と見間違えんばかりに巨大な氷を真つ二つに割り裂いた男は、両手から蒸気を噴出しながらA組の前に立つた。

「チッ、炎のエレメンタルさえあればもっと早く脱出出来たんだがな……」

彼は未だに全力ではない。本気ですらない。全力も、本気も、それを引き出す為の道具を全て自分の家幻想郷に置いてきてしまった為に、お遊び程度の力しか振るえない。

だが、彼の身体に蓄積された力、経験、意思。それらは例え身一つで異世界に放り出されても消える事は無い。

故に。

「さあどうした勇者達!!!この程度の理不尽ぐらい踏み越えてみせるオ!!!」

此方の世界の詭弁では到底出来ない様な野性的な笑みを前に。

原始的な恐怖を前に。

一体どれだけの人間が膝を屈さずに居られるだろうか。

直後、爆発音が森の中に鳴り響く。

「ツツツらあああああ!!!」

右の大振り。爆発力を推進力に変えて繰り出される一撃は、学友にとって割と見慣れた一撃。だが対峙する幻想くんにとっては初めての一撃。その一撃が幻想くんの胴体に直撃——

スカッ

する寸前に避けられ、カウンター気味に鋭い一撃が爆豪の胴体に入る。

「中々腰の入った良い攻撃だ。速さも申し分ない。そうだなあ……今の不意打ちなら大抵の妖怪をノックアウト出来るんじゃないか？」

まあ俺には当たらんけど。という意味を言外に伝える。

もにもに

「揉むなボケカス死ねア!!!」

「いやこんなピチピチスーツ＋爆乳とか逆に揉まない方が失礼ウほはッ!!」

ワキワキと爆豪ずつと性転換しっぱなしの胸を弄り、ピッチリヒーローコスチュームの上から遺伝的爆乳を揉んでいた幻想くんを超至近距離爆撃が顔面に炸裂。そのコスチュームの籠手に溜まった汗も全開放する徹底具合。

普通の人間相手なら顔面の皮が吹き飛ぶどころか首ごと粉々になっていてもおかしくない筈の一撃なのだが、幻想くんが着けていた仮面が吹き飛び鼻から血を流す程度のダメージしか負っていない。

「ぐっ……顔面に容赦なく叩き込んでくる一撃……懐かしいぜ、幻想郷じゃ顔陥没くらいまでは茶飯事だしな……」

「いやどんな修羅の国イ!!」

『前がみえねエ』くらいならよくある事という幻想郷こわ……と戦慄するが、訓練が始まって以来の初ダメージである。足元がふらついている所を全員で囲んで叩く。

「麗日さん!!」

「おっしや!」

「援護するぜ麗日!」

「応援は任せろー!」

「ナイフが刺さらないなら銃撃ですわ!」

「モモちゃんのその思い切りの良さが怖いツ!」

麗日に続いて切島、尾白、飯田が幻想くんを囲むように移動しながら各々攻撃を繰り出し、彼等の隙間を縫うように拳銃をぶつ放す八百万。更に声を張り上げる事で味方全体の強化を図る詭弁。

人一人に対して過剰と言える程の戦力で襲い掛かる。

「まず一人目ツ!」

正面に立った切島は、最も危険な位置に居ると言えよう。現に幻想くんの容赦ない一撃がその顔面に高速で迫りくる。

『砕けるなツ!折れるなツ!お前は最強の盾で、最硬の壁だ!!!』

『安無嶺過武璫^{あんぶれいかぶる}!!!』

詭弁の応援により最硬を超えた最強の『盾』。それは鋼鉄のナイフすら砕く幻想くんの皮膚を優に超えていた。

突き出された拳を砕くように突き返す盾の拳は、幻想くんの皮膚を貫き拳を砕いた。

「ツツツ痛ええええええ!!?!」

『レシプロ——』

拳を返され、大きく仰け反った幻想くんの頭部に向けて超速の重い脚が振りかぶられる。

『速さは重さ！重さは威力！クラス最速にして最強の力を解き放て!!!』

——エクステンド!!!』

「ツガああツ?!」

鍛え上げられた筋力に加算する形で与えられた『個性』による超加速の一撃は辛うじて反応して防がれたものの、防御に使った左腕ごと幻想くんの頭部を蹴り抜いて大きく体勢を崩した。

そして崩れた体勢は……武闘家にとってはカモ同然だ。

『鍛え上げた時間はクラス随一！筋力Ⅱ破壊力を見せてみる!!!』

『尾拳・沼田打破撃』

人間の身体を余裕で支えられる程の筋力から放たれる一点集中の突き技が無防備に倒れ込む幻想くんの身体に突き刺さり、確かな手ごたえと共に幻想くんの身体が吹き飛ぶ。

だが、まだ幻想くんの目は死んではいない。吹き飛んだ先に着地した瞬間にA組を狩りに行くだろう。

『G・M・A』
ガンヘッド・マイシャル・アーツ

ここで、確実に仕留める。

言葉に出さないまでも、その身に携える覇気でもって宣言する。

女の敵はブツ〇す

『断頭崩拳』ツ!!!

飛んでくる幻想くんの頭部を拳と地面で挟むように決り込んで撃ち込む。まるで頭部が粉々に砕けたかと錯覚する程に地面が抉れ飛び、その中心に沈む幻想くん。

「……はっ!?や、やりすぎてもーた!?ちよ、詭弁くんがめつちや応援するからあ!!!」

「ハイ待つて麗かガール。俺ちやこちゃんには『応援』してねエンすけど」

「俺麗日だけはキレさせないようにしよ……」

「同感……」

「とうかアレを直撃して生きているのか幻想くんは!?!」

一応辛うじて生きているらしい幻想くんを、八百万が『創造』して作ったタングステ

ン合金製のワイヤーロープでもって雁字搦めにして拘束。更にその上から瀬呂のテープと轟の水で嚴重に拘束した。

「ふう〜……マジで一時はどうなるかと思っただぜ……」

「結局オレら全然活躍してねえなあ……」

「しゃーないしゃーない。そもそも21対1つてのが無理あつたんだ。取り合えず後はコイツをオールマイト先生ん所の檻にぶち込んで……それとカツちゃんの胸の感触を聞くか」

「聞くなボケェ!!!」

「そうだよなあ、確かに21対1つてのは無理があつたわ。だから……今度は21対3つてのはどうだ？」

その声がクラス全員の耳に届いた直後、幻想くんを運んでいた砂糖、芦戸、蛙吹、葉隠の四人が吹っ飛んだ。

「ぐはあッ!？」

「いたーッ!!」

「ケロツ!?!」

「きやああ!?!あつ、詭弁っ!?!ごめつ……いや、ちよ!?!」

吹っ飛んだ葉隠の下敷きになった詭弁が実質全裸の感触をモチモチしていると、気絶した筈の幻想くんが宙に浮きあがって雁字搦めの拘束を一つ一つ砕いていった。

「う、う、嘘だろ……!?!」

「ああ、正直悪かったと思ってるよ。ぶつちやけここまでやるなんて思いもしなかった。褒めてやる」

物理的にも上から目線の言葉に対し、返答を出来るだけの余裕はA組の誰も持たなかった。

何故なら……幻想くんの身体から、ソックリさんが更に二人現れたからだ。

「ハローハローこんにちわー!俺の名前は《陽》!」

「そして俺の名は《陰》。以後良しなに」

「そして俺が本体の詭弁さん……って、あー、俺のそっくりさんがこの場に4人か。ややこしいことこの上ねえなあ」

『回復術』と一言唱えると、あれだけ頭からドクドク流れていた血が止まり元の姿に戻った。

「ンな……ゲームみたいな回復とかアリかよ……!」

「言っただろ? 世界が変われば常識が変わる。この世界的に言ったら、俺はまあ非常識な人間だろう。だからなんだ? この世界にも薄くだが『魔力』がある。呼吸すれば『気力』を得られる。魂を燃やして『霊力』を扱える。それらを扱える『技術』が俺にはある。さあ第二ラウンドだ、楽しく行こうぜ!!」

《陽》と名乗った『騒霊』は空高く飛びあがり、色とりどりの光の弾丸を大量に放つてくる。

《陰》と名乗った『亡霊』は片手に無骨で巨大な金属の塊のような剣を、反対の手には無双ゲームの武将が持つてそうな程の長大な方天画戟を持つて暴れ始める。

そして本体を名乗った『人間』は……

「ははははは! 授業の時間はまだまだ長いんだ。楽園式の弾幕格闘を教えてやるよ!!!」

懐から一枚のカードを取り出し、見せつけるように掲げた。

「さあ、手加減してやるから全力で掛かってきなア!!!」

戯曲『捻くれ詐欺師の舞台演目』

『人間』の指先から大量の魔法糸が飛び出し、その辺に落ちている石、枝葉、岩、樹木をぶっこ抜いて振り回す。

「うわあああああ!!!」

楽園式の遊びには事故が付き物である。

ヒーローの卵達は脱落者無しに乗り切る事が出来るだろうか。

授業の時間は、まだまだ長い。

お正月特別編・異世界からコンニチワ！ぶつちやけタイ
トルのネタ切れ気味なんだよねユルシテ！

「ははははは!!!!どしたどーしたあ!!!その程度の弾幕で俺を撃ち落とそうなんざ百年早いぞオ!!!」

「宙に浮くなんてモンじゃない……空を、自在に飛び回ってるヤツにどうやって攻撃当てろってんだよ!!」

「口動かしてる暇があるなら手を動かしてください瀬呂さん!!『八百万回転機関銃』!!!」
「はあつ……はあつ……うおおおおお!!『シユガーラツシユ・キャノン』!!」

「ふぐつ……『ネビルビュツフエ☆レーザー』!!」

「おらおらおらあ!!!お前等が10の弾幕を張る間に俺は100の弾幕を張れるぞ!!一方的なゲームじゃつまらねえなあ!!」

絶対的優位な空を自由自在に飛び回り、数多もの光弾が地上を這う生徒達に向かっていく。光弾一つ一つは当たっても殴られる程度のダメージしか入らないが、その数は余りにも多すぎた。

人は早々に死にはしない。だが、人は殴られただけで打ち所が悪ければ死ぬ。一度殴

られて死ななくても、殴られ続ければいずれ死ぬ。これはそういう問題であり、光弾が当たった痛みに怯んで蹲ってしまえば容赦のない追撃が襲い掛かるだろう。

無論、地に這う生徒達も黙ってやられ続ける訳ではない。『個性』を使い、空を自在に飛び回る男を拘束しようとする者。兵器を『創造』し、撃ち落とそうとする者。その怪力で地面に転がっている岩や、弾幕が当たって折れた木を投げて牽制する者。腹から異音を鳴らしながら光線を出して応戦する者。皆が未だ膝を折らず、宙を舞う『騒霊』に戦意を向けている。

だが人数差に比べて、その戦力差は余りにも大きすぎる。大量の光弾を放ちつつ、生徒達の攻撃を意識的にかすり避け^{グレ}す^{レイズ}くらいに余裕のある『騒霊』を倒すには、まだ遠かった。

「足りない……力も、速さも、何もかもが!!!」

「ごはあツ!!!」

「切島君!?!無事か!!!」

「だ……いじよおぶ……だあ!!!ぐつ、くそ……なんなんだあの馬鹿力!?!オレの『硬化』ごととブチ破つてきやがった!!」

「ケロツ、不用意に近づくのはとても危険ね……!」

「くつ、黒影！」
ダークシャドウ

『ウオオオオ!!』

『アシッドショット!』

「うわああああ!」 『GRAPE RUSH!』

『穿天氷壁!』

『巨人乃腕』

その手に持った巨大な金属の塊の様な剣を振り下ろすだけで、『個性』による攻撃全てを地面ごと塵にしてしまう程の圧倒的な暴力。それはかつてUSJに侵入してきた怪人脳無のようなパワーを想起するが、その技には力だけじゃない鋭さも兼ね揃えていた。

その巨大な剣。銘は『巨人の短剣』と言い、長さは《陰》の身長と同程度にしてその重量は優に400kgを超える。オールマイト二人を片手で持ちあげている様なモノだ。それをまるで木の棒のように気軽に振り回す事で、掠めただけで容易に四肢をもぎ取っていく事は想像に難くない。

反対の手に持った長大な方天画戟。銘は『氣天魔戟』と言い、長さは250cm程度にしてその重量は200kg近く。『巨人の短剣』よりも軽いとは言えども、その重さは重量挙げの世界記録クラス無論『個性』が発見される前の記録である。なんにせよ

片手で持って振り回してよいモノではない。

勿論それらを振り回せるにはタネがある。その二つとも、彼が元居た世界で作られた『マジックアイテム』であり、この世界の法則とは異なった法則によってその力を発揮している。

……だが、その事実が彼等生徒達に何の慰めになる? 現に今、この世界で、彼等の目の前で、圧倒的で理不尽な暴力の体現である『亡霊』に立ち向かっている彼等に。

近寄る事が出来ない。たったそれだけで人数差による有利なんて消し飛んでいた。

「さあどうしたヒーロー共オ!! 弾幕レベルはHARDどころかNORMALモードだぞ!!」

「ツチイ?! クソがツ!!」

「危なツ?! ちよ、嘘オ!!」

「タッチ! タッチツ!? ダメや! キリがない!!」

「くっ……『右』イ!! 『上』エ!! 『被害をそらす』ツ!!」

「『ハートビートドラム』ッ! くっ、次から次へと……!」

「『SMASH』! 『SMASH』!! くそお、際限がない……!」

「『小さきもの達よ! 森を荒らす不屈きものに制裁を下すのです』!」

「無駄無駄無駄ア!!!こちとら生まれた時から田舎つ子よお!羽虫が何匹集おうが気にも止まらねえ!!いや、やつばキモっ!」

指先に繋がっている糸を操り、糸の先に繋がれている岩や樹木を振り回す。空を飛ぶ『騒霊』や怪力で暴れる『亡霊』よりもどうにかしようがあるのだが、糸に繋がった岩や樹木を片っ端から粉碎しようにも、粉碎した端から何処からともなく補充されてしまい、無為に体力を削られていく結果に終わる。

飛び回る障害を縫うように小石や木片を投擲するも、彼自身の頑強さにとっては『蚊に食われた』程度のダメージにしかなっていない。

彼ら三人は、意識的か無意識にかは分からないが『三人』という利点を捨て、一切のチームプレーを見せずに各々で暴れまわっているだけだ。

ただそれだけで、ヒーロー科A組全員が壊滅的状况に陥っている。未だ誰一人として脱落してないのは日々の努力の賜物か、ただの幸運か。

『騒霊』による弾幕の雨、『亡霊』による暴力の爆撃、『人間』による大自然の嵐、それら全てが広いはずのトレーニング施設を所狭しと破壊していく姿は間違いなくヴィランと呼ぶに相応しく、それらに折れず立ち向かっていく彼らはヒーローと呼ぶに相応しい。

「(ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!!)」

暴乱の嵐の中、なんとか思考を止めずに考え続ける少年が居た。一秒経る毎に誰かの身体に小さな傷が増えていき、反撃することすら出来なくなる程に体力を消耗してしまつた者達もまた増えていく。元から有つたのか疑わしい逆転の目は、刻々と消え失せていくのを錯覚した。

視界の端から岩が飛んで来るのを認識した直後に跳んで避ける。

地面に映る影が揺らいだのを感じた直後に転がるように飛び込み、その後光弾が降り注ぐ。

大気が唸る音を耳にした直後に倒れるように伏せ、振るわれた鉄塊による暴風をやり過ごす。

「考える……考える時間が無いッ!!!」

あらゆる攻撃を直感、経験、山勘で避け続け、とにかく耐え凌ぐしか打つ手が無いことに気が付き、背中に氷のように冷たい絶望が這っているのを錯覚した。

どれもこれも『誰かを狙つた攻撃』でないが故に、未だに誰も死んでいない。それを理解できないような生徒は誰もいなかった。

「(なにか……なにか無いのか!?逆転の一手を……奇跡の一手を……あるいは、それに繋がる一手を!!!)」

奇跡は、願うだけの者には舞い降りない。縋るだけの者には訪れない。最後まで諦め

ない者、努力が結ばれるまで延々と続けてきた者、最後の最後に……自分もしくは誰かを信頼出来る者の元に、舞い降りる。

「うおおおミッドナイト先生がこんなところで水浴びをしてるうううう!!!」

「二（こんな時に何言ってるんだこの馬鹿野郎は!!?）」

それは、A組の中で最も自分以外の者を信じている者の声。

それは、A組の中で最も自分自身を知る者の声。

それは、A組の中で最も愛の多い男の声。

自らを知り尽くすが故に、異世界の自分と根が同じだと気が付いた彼の『声』は、誰も求めて止まなかった『奇跡』を引き起こす。

「おいおいおい!あのボインボインネーチャンが水浴びしてるって!!!何処!?何処よ!!!何処なのよ!!?」

「俺時折コイツが本体だっというのが恥ずかしいと思うんだけど」

「……ノーコメントで」

その声にいの一番に反応した『人間』は操っていた糸を全て投げ捨てて覗きの為に S I G E M I にいそいそと隠れ、その姿を見ていた『騒霊』は呆れたように空から降り

てきて、『亡霊』は持っていた巨大な武器を地面に一度突き刺した。

明らかに気が緩んだ三人を前に、A組全生徒達はその脳みそを全力で回転させた。

『スイッチ』!!!

フルスロットルで回りだした生徒達の思考は彼の『一言』により束ねられ、強靱な綱の様に一つに纏まった。

声を出さずとも互いの意志疎通を行うアイコンタクトにより、秒も掛からず『三人』に對する振り分けを終えた。

『コツチを見ろ』オオオオオオ
!!!!!!

詭弁の『覇声』により、思わず声のした方向を見てしまう三人。それが作戦の始まりだった。

『集光屈折ハイチーズ!!』

一切の前触れなく行われた『目眩まし』に引つ掛かった三人は目を押さえ、無防備な姿を晒してしまう。

「とっておきの合わせ技や！『コメットターボ』!!」

「ゴオツ、ぐううツ……!!? なっ……俺が浮いているだど?」

僅かな隙を突くように、飯田の『エンジン』によって強化された蹴り足から更に跳躍するように『無重力』となった麗日が捨て身の体当たりを《陰》にぶちかまし、その身体を『個性』の制御下に置く。

「うぐおおお……目が痛え……と、とりま飛んで——」

「逃がすかよツ!!峰田ア!!」

「『GRAPPE RUSH』!」

「う、ぐ、おおおおお!!?」

目が眩み、緊急避難の為に空へ飛び上がろうとしたその瞬間を瀬呂の『テープ』が捕まえ、振り投げられた先に峰田の『もぎもぎ』が大量にくつついた岩によって動きを封じられ、だめ押しとばかりに追加の『もぎもぎ』が投げられる。

「おのれこの世界の俺えええ!!! よくも騙したなアアアア!!! 騙してくれたなアアアアア!!!」

「騙される方が悪いんじゃバーカバーカ腐り落ちろ!」

「いや……うん……今ので騙される方もそうだし、騙そうと思う方も思う方だど……」

「『アシッドボール』! 弾になりそうなものは片っ端から溶かしちゃうもんね!」

地団駄を踏みながら手に持っていた『スペルカードという名のただの紙』を投げ捨て、
血涙を流す男。

形勢は一気に逆転した。

空を自在に飛ぶ『騒霊』は飛ぶ術を奪われた。怪力でもって大暴れしていた『亡霊』は宙に浮いて怪力を十全に発揮出来なくなった。自然を絡繰る『人間』は自らその糸を捨て、尚且つ辺りに武器になるだけの物は残っていないかった。

各々が巻き起こしていた大災害を止められない理由が消え、後は時間をかけて制圧していくだけ……なんて事は無く。

「空を飛ぶのは好きではないのだがな……」

「『岩に張り付けただけ』で拘束できると思うなよ!」

「怪異を祓い続けてきた人間の進歩は、この程度で立ち止まりはしない!」

ふわ……と、風に舞う木の葉のような動きでもってその手に持った『巨人の短剣』を
大気に叩きつける《陰》。

張り付けられた岩ごと浮き上がり、意地でもって光弾を放つ《陽》。

全身から黄金色のオーラを立ち上らせ、気迫で辺りを吹き飛ばす幻想くん。

A組が待ち望み、願い、紡いだ奇跡でおきた逆転劇は再び容易くひっくり返ってしまつた。

その光景を見て、揺らいでしまった。挫けそうになってしまった。屈しそうになってしまった。届かない遙か先を見て、砕けそうになってしまった。

だが、それも無理はない。

彼らは……否、幻想くんは魑魅魍魎が跋扈する世界で常に難易度 Lunatic。息をするように地雷原でタップダンスをし続け、死線を越えた先で踊り遊ぶような人生を送ってきた。

この勝負は、もはや勝ち負けを競うものでは無い。彼等A組は如何にして幻想くんの本気をどれだけ引き出せるかという勝負になっていた。戦ってきた時間が違うのだ。命を張り続けてきた年季が違うのだ。命を懸ける覚悟が違うのだ。

死を覚悟して生き延びるといふ矛盾の中に身を沈めてきた彼の本気に勝てる者は、この世界においては同じだけの狂気により長く身を委ねてきた者において他にない。故に。

彼等A組21人。全員の死ぬ気を煮詰め混ぜ合わせても――

――彼一人の死ぬ気の濃度に届かない。

もはやこれは勝負の体を成していない。勝ちと負けが既に決まっているのだから。

敗者は、どれだけ勝者から何かを引き出せるか。法則さえ異なる別世界からの来訪者

から、如何に多くのモノを吸収できるか。

成程、コレは授業である。この世のものでは無い者を見て、学び、自らの糧に出来るなんて、一生に一度あるかないかの機会だ。ああ、なんて素晴らしい体験なのだろうか。どうせ勝てないのなら、せめて満足な内心と共に負けを認める――

「――ワケが無いだろうがツツツ!!!」

泥臭くても良い。無様でも良い。だが、地に這いつくばるのは駄目だ。倒れ、立ち上がれなくなるのは駄目だ。笑顔を忘れては駄目だ。

「『俺らは、何だ!!!?』」

ウイラン
敵 相手には不敵に笑え。

「俺らは、何だ!!!?」

守るべき者には素敵に笑え。

「俺らは、何だ!!!?」

ウイラン
敵相手には拳を握れ。

「俺らは、何だ!!!?」

救うべき者には手を差し伸べろ。

「俺らは、何だ!!!?」

声を張り上げろ。

「俺らは、何だ!!!?」

拳を振り上げろ。

「俺らは、何だ!!!?」

さあ、立ち止まる暇は無い。

「俺らは、何だ!!!?」

その背に憧れたのなら。

「俺らは、何だ!!!?」

その姿になりたいと願ったのなら。

「俺らは——」

——「ヒーローだツツツ!!!」

目の前の壁敵ぐらい、ぶち壊してみろ。

さあ、『Plus 更に 向Ult_こra!!』だ。ヒーローらしく、邪魔なモンは全部薙ぎ倒して行くぞ。

詭弁のその声に触発されたことにより、諦めかけた者、挫けかけた者、折れかけた者、屈しかけた者、投げだしかけた者、倒れかけた者、その全ての者の魂が燃え上がる。

心に灯った炎が、尽きかけの炎が、再び全盛期の輝きを取り戻す。

ヒーローに死ぬ気なんてモノは要らない。守る為の愛と、敵を打ち砕く勇気さえあればいい。

異世界からの来訪者による絶望を、最も愛多き者の愛が上回る。

彼等A組21人。全員の死ぬ気を煮詰め混ぜ合わせても彼一人の死ぬ気の濃度に届かない。

だが、A組21人全員の愛と勇気を煮詰め混ぜ合わせれば——

「ははははは！お前らがヒーローならさしずめ俺は巨悪か！それもまた良し!!」

「笑いごとかよ。あー俺も折角ならヒーロー側が良かったなー」

「そもそも、ヒーローってガラでも無いだろうに」

「これで最終ラウンドだけ幻想くんよお。散々遊んだなら、きっちりカタ付けなきやなア!!!」

「さあ、愉快なお遊びはここいらで幕引きと行こうか!!!」

圧倒的な暴虐が再び繰り広げられる。光弾の雨が、破壊の風が、黄金色の鬨気いかづちの雷が。生徒達に襲い掛かる。

だが相対する皆が怯む事は無い。それらは既に経験した。対処した。なら、今回も対処出来ない道理は無い。

勝負の終わりは、刻一刻と迫ってきている。

お正月特別編・異世界からコンニチワ！奇跡も魔法もあるんだよ！人喰い妖怪も悪魔も死神も居るけど！

彼らの勝負は、ようやく『勝負』という体をなし始めた。

宙に浮かぶ《陰》はその両手に持つ重すぎる武器を十全に振り回すだけの踏ん張りを得ることが出来ず、武器を叩きつける先が気がつかない事から先ほどまでのように地面に叩きつけ、その衝撃波で『個性』による攻撃を弾く事が出来ない。

同じく空を飛ぶ《陽》だが、その身に背負った大岩ごと無理に飛んでいるせいで先ほどのように自在に空を飛び回ることが出来ず、その動きも慣性の法則に乗るように酷くゆっくりとしたものだった。

《陰》《陽》二人は大幅に弱体化した、と言っても良いだろう。放置するには厄介だが、それでも生徒2、3人で抑えることは出来そうだ。

そして、最も厄介な者が残った。

黄金色のオーラに身を包んだ彼は、その身に備えていた鋼鉄を超える強度を持つ強靱な皮膚の上から更に可視化するほど濃密な気の鎧を纏った、まさに重戦車に等しい防御力。『個性』を持つ彼らよりも多彩な『魔法』と『退魔術』を繰り出す彼に、魂を燃え上

がらせているとはいえども攻めあぐねてしまう。

「死ねやアアアア!!」

一人、必殺の意志と覚悟をもつて爆炎を燻らせ突撃する。それに対応しようとする隙を狙って氷結攻撃のタイミングを図る者、爆炎を当てる為に牽制として『音』を打ち出す者、『影』を伸ばし隙を作り出す者、酸を飛ばす者、大砲を撃つ者。彼ら全員『我』が強い者達ばかりだが、今この時においてはこれ以上ないほどに連携がとれていた。

どれか1つの攻撃だけを意識してしまえば、他の攻撃に当たってしまう絶妙なタイミングと間隔。それでいて同士討ちにはならない。全てを避けようとすれば必殺の爆炎が追従し、氷塊に襲われるだろう。

『榴弾砲着弾』オツ!!!
ハウザーインバクト

破壊力ではA組の中でもトップクラスの一撃。それも激しい動きを続けたことで籠手に溜まりに溜まった汗爆炎全てを解放する、『必ず殺す』一撃。

爆発的みみちちさの爆豪が、それでもなお本気でブツ殺す気で放った一撃は、ある意味で『それでも立ち上がってくるだろう』という一種の信頼か……敵に向けるには些か場違いにも思える感情。だがその相手は別の世界から来たとは言え、あの『詭弁』である。きつとギリギリで避けるか、防ぐかしてくる筈だ……と、自身の必殺技すら超えてくることを想定しながらも尚、全力でブツ殺す為に、今、右手に、溜まりに溜まった爆

炎が――

直撃した。

「……………あ?」

『音』が、『影』が、『酸』が、『大砲』が、そしてあらゆるものを消し飛ばす筈の『爆炎』が。

全てが全てその肉体に直撃し、耳から血を流しつつも、骨が折れつつも、皮膚が溶けつつも、肉が抉れつつも、その半身が焼け焦げ消し飛びつつも。

その黄金色のオーラには一切の陰りはなかった。

「ツツツ!! テメ――」

『魂魄悠悠 遊惰天衝拳』

ぺちっ

優しく、非常に優しく。爆豪の頬がはたかれる。ただそれだけで、爆豪の意識が身体から離れていった。



『回復魔法』、『回復術』……よし、これで元通りだ。……服以外はな』

地面に倒れるカツちゃんを後目に、皮膚が吹き飛ぶ程の大怪我をした筈の幻想くんの身体がまるで逆再生する映像のように治っていくのが見えた。

「い、今のは……!?!」

「アイツの再生力もヤベーけど……今、爆豪が一瞬増えなかつたか!?!」

一瞬増えたなんてモンじゃない。幻想くんにカツちゃんがはたかれた直後、カツちゃんの身体から半透明のカツちゃんがはじき出された!!

「女の子の顔をぶん殴る訳にもいかないしな。ちよつくら肉体と魂を分けさせてもらった。まあ10分程度で戻るし、後遺症も無いから安心しろ。……しかし案外居ないモンだなあ、『魂を視認出来る奴』は。この世界の俺と、紅白髪と、尻尾生えてるのと、梅雨ちゃん……くらいか。いや、案外靈力を扱う才能なんて外の世界でもこんなモンなのか?」

「う、わあああああ!!!」

「バツ?! いづくちやん待つ!! ああもう! 『行けデク!! お前の名は、頑張れって感じのデクだ』!!!」

カツちゃんの必殺技が真正面から受け止められ、その上で一撃で意識を奪ったのを見

て冷静さを奪われたのか無策に突進するいずくちゃん。何とか『応援』することでサポートをするが……

「女の子はともかく、野郎に手加減なんて期待すんなよ?」

『魂魄悠悠々遊惰天衝拳』!!!

いずくちゃんの『超パワー』による超速機動も一瞬で見切った幻想くんはその拳をいずくちゃんの顔面に突き刺すように殴る。

「いやカツちゃんとの落差!!」

「ンだから野郎相手に手加減するかよ!」

いずくちゃんの身体はまるで空中で撃ち落とされたかのように地面に落ちるが、その身体から叩き出された(幻想くん曰く)魂は錐揉み回転しながら森の奥へと消えていった。

直後、景色が一気に切り替わるように氷の世界に変化した。

「皆冷静になれ! さっきの攻撃が効いてたなら、攻撃を当て続けりや必ず限界がー」
『魂魄悠悠々遊惰天衝拳』!!!

森の一角を飲み込む程の大氷結攻撃を舞うように跳んで避け、空から刺すように拳が轟焦凍の顔に当たる。しよーちゃんの魂も身体から離れていった。

ほんの短い間でクラスの3トップがやられたという事実は、俺達の戦意を揺るがすに

は十分だった。

「『安無嶺過武瑠』!!」

「この技に肉体的な防御力は意味を成さない」

切島銳児郎の魂が弾き跳ばされる。

「『アシッドマン』!!」

「防ぐには霊的な防御力か、自身の魂をある程度制御出来るだけの力が必要だ」

芦戸三奈の魂が弾き跳ばされる。

「くそっ! やられる前に捕まえ——」

「『レシプロ・エクス』——」

「それに特別な才覚は要らない。『幻想郷』じゃ大抵の人妖は無意識レベルで行えるし、

そもそも霊的な防御力も高い。ま、ネタにもならない『死に技』って奴だ」

瀨呂範田、飯田天哉の魂が弾き跳ばされる。

「『黒影』——
ダークシャドウ

「『尾拳・』 沼田打——」

「まあ、こうして霊力も持たない癖に変な能力を持った『外来人』を触れるだけで倒せる

から、完全に『死に技』って訳じゃないけど」

常闇踏影、尾白猿夫の魂が弾き跳ばされる。

あつという間に6人の魂が跳ばされ、当たりに幽霊のように漂っている。全員が驚愕の表情に染められ、なんとかして自分の身体に戻ろうとしているのが見えた。

「お前達の『程度の能力』……『個性』だったか。それらには驚かされたし、ダメージも無視できない以上に食らった。故に……今、俺が出せる全力でもつてお相手してやろう!!!」

「お前のその上から視線が気に入らん! 『だるまさんが転んだ』っ!!!」

俺の『覇声』を受けて得た僅かな隙。そこに殺到する『レーザー』、『銃撃』、『投石』、そして『鳥の群れ』。

「痛たたた!!!痛いモンは痛いんだぞゴルア!! 『二重結界』ッ!」

その言葉の直後、空気に溶けるように姿を消した幻想くん。

「マズいつ!瞬間移動——」

「判断が遅いつ!」

突如後方に現れた幻想くんに殴り飛ばされる砂糖力道と口田甲司。

「ッ!皆さん、刺又ですわ!距離をとって確保を——」

「力が足りないっ!」

刺又を握り潰され、軽くはたかれる八百万百と葉隠透。

「ね、『ネビル』——」

「コツチ来るなよお!! 『GRAPE R』——」

「速さが足りないッ!!」

若干逃げ腰だった所に蹴りを入れられる青山優雅と峰田実。

ほんの僅かの間にクラスメイト達の殆どが幻想くんの凶撃によって倒れ、辺りに皆の魂が漂う。幻想くんの前にまだ立っていられているのは俺と障子目蔵、麗日お茶子、蛙吹梅雨、耳郎響香だけだった。

「……絶体絶命ね」

「諦めなければ道はある……と言いたいが……」

「台風に立ち向かうようなモンだろもうコレ……」

「よ、弱気になっちゃあかん! 私が幻想くんを浮かせられれば……!」

「ウチの『イヤホンジャック』で拘束して——」

「あー……盛り上がってるところ悪いとは思うんだが」

「俺達を忘れてもらっちゃあ困るんだがな」

光弾が炸裂する音、超重量の鉄塊が振り回される音が耳に届いた事で、俺達は思い出しました。人は災厄には勝てないことを……。

俺達は、人の姿をした災厄三人に仲良くブツ飛ばされた。

* * * * *

「いやー皆お疲れ様！早速今回の講評をしようかと思ってるんだけど……あー、幻想くん？何故皆の姿かこう……透けてるのかな？」

「やだオールナイト先生、セクハラですよ」

「いや何処が!?!というかオールナイトね！オールナイトじゃ徹夜したみたいな感じになっちゃうから！そ、それでコレ皆大丈夫なの!?!」

「皆生きてはいるってところかな。死霊は感情が薄いけど、生霊は肉体に残った感情がダイレクトに現れるから……」

「……えーつと、つまり？」

「いつかは戻るけど、いつ戻るかってのは肉体に残った感情がある程度落ち着いてからだな！早ければ2・3分、遅いと一年は掛かるかも」

「差が激しすぎる?!?!」

『『怒り』とか『悲しみ』とかなら割りと落ち着きやすいけど『恨み』や『恐れ』とかは魂にも刻まれる程の強い感情だからねえ。それらが落ち着くにはそれくらい掛かるもんさ』

「そ、そうか……その、すぐ何とかならない?」

そういつてオールマイトは辺りを軽く見回す。幻想くんの回りだけでも数人居るし、A組で唯一無事だった詭弁の回りには幻想くんの三倍近くの幽霊が取り囲んでいる、残った数人がアホになったままの上鳴の回りに浮いている。

有り体に言つて、混沌とした状況だった。

『ブツ殺す!・テムエはオレがブツ殺すツツツ!!!!』

『バカ止める爆豪!・その状態で暴れても幻想くんに一切効いてねえし、暴れる度にお前なんか薄くなつてつてんで!』

『くそつ!・すまない皆……ボクがクラス委員として不甲斐ないばかりにつつつ!』

『お、落ち着けて飯田……ありや相手が悪いだけだつて……』

『うわああん!・ごめんねえええ!・ごめんねえええ!』

『ケロツ、大丈夫よ。誰にでも失敗はあるし、今日の事は皆で反省すればいいのよ』

「うえうえーい!?!」

『……………』

『轟！轟いー!!大丈夫かお前なんか死んだ目してるぞ!!』

『すみません詭弁さん……私が不甲斐ないばかりにこのような面倒事を押し付けてしまつて……』

「い、いいつて事よ……怪我はリカバーちゃんに治してもらえるし、これも救助訓練の一環つて事で……」

ボコボコに腫れ上がった顔のまま、複数人を担いで戻つてくる詭弁。大暴れし続ける爆豪（幽霊）。大泣きする飯田（幽霊）と芹戸（幽霊）。死んだように放心し続ける轟（幽霊）。空中で這いつくばるように落ち込む八百万（幽霊）。収集がつかないとはこの事。

「……なんとかならない?」

「なるんじやないっすかね」

「そんなテキトウな……多少の怪我は想定してたけど、流石に今後の授業に大きな支障が出る程の……その、こんな状態は想定外だよ……」

「しようがないなあ。まあ皆をすぐに戻す方法はあるよ」

「おお！具体的にはどうすればいい!？」

「まず服を脱がします」

「まっつて」

「そしてケツの中に精神棒をブスツと」

「待つて待つて?! 『せいしんぼう』 って何?! ナニをするつもりだい!」

人の尻には『尻子玉』と呼ばれる目に見えない器官があり、主に人の肉体と魂、或いは精神と繋ぐ役割を持つていとされる器官である。河童が尻子玉を好物としている事は有名であり、尻子玉が抜かれた人間はフヌケになると言われている由縁は尻子玉を抜かれたことで魂、或いは精神が肉体から離れやすくなるためである。

その尻子玉を強く刺激すると、余りの痛みから死人すら魂引つ提げて現世に戻つてくると言われている。

「要するに俺の股間の精神棒精子んで○○。○する事で即座に蘇生が——」

「絶対やらせないからね!!!?」

「大丈夫だオールマイト先生。女子は俺に任せろ!」

「任せられる要素一つでもあった!!?」

その後詭弁がめつちや頑張つてクラス全員蘇生させた。

「ほう、この世界の俺は霊使いの素質があるのか」

「別の世界の俺はなんとというか色々ヤベエって事しか分かんなかったよ……」